

季語別 高澤良一全句集

目次

著者略歴	あとがき	季題索引	無季	■ 十二月	■ 十一月	■ 十月	■ 九月	■ 八月	■ 七月	■ 六月	■ 五月	■ 四月	■ 三月	■ 二月	■ 一月
------	------	------	----	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

400	399	380	377	335	321	280	243	225	155	111	94	59	41	29	3
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---

凡例

当集は左記十二の句集の全句に対して季題別に配列した。

「ねずみのこまくら」(二五八句)「ももすずめ」(四七五句)「さざなみやつこ」(七五九句)「ぱらりとせ」(八四三句)「鳩信」(六六〇句)「燕音」(九〇六句)「宿好」(一、〇一八句)「随笑」(一、三六〇句)「寒暑」(一、三二〇句)「素抱」(一、八三四句)「石鏡」(一、二三四句)「暮津」(一、四四五句)。総句数 一一二、二〇二句

集中、「ねず」は句集「ねずみのこまくら」、「もも」は句集「ももすずめ」、「さざ」は句集「さざなみやつこ」、「ぱら」は句集「ぱらりとせ」の略。

季語の分類と配列は博友社「俳句月別歳時記」の「月別」季語分類に準拠した。

前書き、註のあるものはこれを付した。前書き、註が複数句にわたる場合、第一句目のみにそれを付した。

一句に複数の季語が認められる場合、複数の季語にわたって句を収録した。

無季の句(一〇三句)は有季の句群の後に一括して掲載した。

分類された見出し季語は凡そ一、七九二語、対象総句数は凡そ一二、二〇二句である。

なお、小生の勝手で下記の措置をとった。

新季題として「一ッ火」「薄念仏会」「面掛行列」「高山宵祭」を採用。

季語「あめふらし」の項に「海牛」を含める。季語「雪溪」の項に「氷河」を含める。「蛭蝶」を秋季に入れる。「風入れ」と「虫干」、「花水木(北米原産)」と「水木の花(アジア原産)」を別扱いとする。

■一月

●一月

一月の風に飛び散る雨の粒

ばら

郊外に出て一月の風の富士

寒暑

一月の孤りごころの雲ぞ佳き

素抱

締め直す蛇口の緩み一月盡

素抱

一月の川一月の谷・・・
一月のその句を褒める向きもある

暮津

●正月 初春 新春 太郎月

燕音

初春の真珠選別御木本嬢

素抱

初春や出湯のラドン含有量

暮津

暁斎の拳骨啖ふ新春展

暮津

新春の蹴球魂激突す

暮津

鮮やかな正月物に目を止めて

ざざ

やっかいな正月の富士詠み初めに

ばら

頬被正月ものの祝突漁

鳩信

正月顔せる皮剥を賞味せり

鳩信

水槽鳥羽に正月顔のマンボウも

燕音

煮て焼いて正月料理お忙し

宿好

正月の風に当りに出で三歩

随笑

もてなしに正月舞ひの擦りさら

随笑

正月花抱え女の声掛けゆく

随笑

正月は黄泉にてと又一人逝く

寒暑

湯の里に遊ぶ正月湯三昧

寒暑

正月のもう散らかせる居間跨ぎ

素抱

正月用みかんにもあるLサイズ

石鏡

立ち読みの正月気分芸誌

石鏡

日を遍く正月の松優れたり

暮津

酢豚酸し正月料理に慣れし口

暮津

雀らも群れをつくりて正月す

暮津

末っ子の受験に励む太郎月

ざざ

句をつくるはた又授かる太郎月

鳩信

股引をもう手放せぬ太郎月

素抱

浅黄空おらが一茶の國の春

宿好

●去年今年 今年

寝台車着きぬ今年の灯をともし

ざざ

手術などそんなこんなせんとひの一年で

鳩信

心臓のポンプ順調去年今年

鳩信

泥縄の一年が又始まれり 宿好
 申し出るごとくに年の来給へり 宿好
 今年もや句作言葉の砂金堀 随笑

●新年 年立つ 年明くる 年迎ふ 年改まる 年頭

新年を迎へる櫛の瘤だらけ 鳩信

誤植訂正はやばやと載せ新年号 石鏡

こざつぱりして定年を迎ふ年 宿好

リラックスリラックスして年迎ふ 宿好

身綺麗になりて辰年迎へけり 宿好

年迎ふ空万全を期すごとし 随笑

嘴太鴉はしぶとと明日の見えない年迎ふ 随笑

鷹揚に年を迎へて送るのみ 随笑

肌着に首するりと通し迎ふ年 素抱

身勝手を通して貰ふ来る年も 宿好

せきれいの尾をうち振れば来る年か 随笑

来ん年も雑事に力削がれまじ 随笑

水底の木の葉にも年巡り来て 暮津

ピスタチオ殻割る音に年立てり ばら

抜き放つだんびらのごと年立てり 宿好

年立てる音も新たに箒川塩原行 寒暑

年立つと宣ふ鹿のやうな貌 石鏡

歯朶活けて年入れ替る坊廁 ねず

二三冊年をまたぎて本借りぬ もも

水栽培の髻根にも年改まり もも

鳥の名を少し覚ゆる年とせむ さざ

子ねの年の郡上の井水小走りに ばら

好調と云はるる年でありたかり ばら

神鈴を一つがらんと年歩ます 燕音

落柿舎の年初の苔の常みどり 燕音

平日の氣息確かな年とせん 燕音

待望の景気上向く年ならず 宿好

年男さすれば龍となり舞はん 宿好

年明けの定年といふ大海原 随笑

亀のごと気長気儘に年過ごさむ 随笑

年頭の雲一つなき美濃に入る 随笑

喜んで孫に振り回さるゝ年 素抱

年祝ぐに洒落てのむ酒ジンライム 石鏡

●元日 元朝 歳旦 おおあした 大旦

元日の肌着ひらりと手に通す もも

半月に元日の町更けにけり
 一年の始めの氣息もて起床
 お元日目許賢き鳩が来て
 元日の湯花透く日のあら尊たふと

●宵の年 初昔

こんな句が先師にありて初昔

●初三十日

完熟の蜜柑手にせる初三十日

●元旦

歳旦吟二三打出の小槌より

歳旦吟何処となく腹座らざり

宝刀の切字を頼む歳旦吟

歳旦吟誌上古風当風張り合うて

力んだりするから額縁歳旦吟

歳旦吟新年号用俳句を求められて作り今からそんな莫迦な

歳旦吟言葉飾らぬ生地の佳さ

歳旦やからかひ心大事とし

歳旦吟踏まえ所が大事なり

歳旦吟大き活字で無難なり

回顧詠ばかりに尽きぬ歳旦吟

歳旦吟それらしく詠む其処が駄目

むらぎもの据り処を歳旦吟

ザラ紙に鉛筆とりて歳旦吟

銀鼠に空の整ひ大旦

我が起てる埃の見ゆる大旦

あべこべに肌着着たるか大旦

元旦の日が降りてくる鎖樋

元朝の煙草を買ひにボテボテ着

●初鴉

近江八幡

おめでとうさんと安土の田鳥に

初鴉安土の田んぼをとんとんと

●初雀

初雀波切の路地をひゆんと抜け

初雀トコトコトツと石畳

初雀羽音を残し消えてをり

走り根と一問一答初雀

参道に見るべきものは初雀

●初声

みやうみやうと海はるかより初声す

さざ

鳩信

宿好

寒暑

燕音

素抱

さざ

さざ

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

燕音

宿好

随笑

随笑

随笑

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

ねず

暮津

燕音

燕音

燕音

宿好

随笑

随笑

暮津

もも

安房(保田) 嵯峨山(江月)
フェリー―接岸初声の飛び交へる中

寒暑

●初明り

六十年寝起きの一間初明り

宿好

●初日

高梢に寄生木昇り初日受く

もも

初日乗せベコ千両の振分け荷

さざ

淡海を初手に染め上げ大日如来さんだいにち

燕音

初日影取り込むソーラーハウスかな

暮津

●寒晴

寒晴れにああと鴉も諾ひて

宿好

寒晴れの飛行物体ジュラルミン

宿好

寒晴れの鼻梁に海の風少し

宿好

寒晴れの隣家に来意告げゐたる

宿好

寒晴れに正体晒すものばかり

暮津

●初晴

初晴や立枯松にあまねき日

もも

初晴れにひとつ体操でもせんか

暮津

●初景色

初山河

初山河大いに羽根を伸ばしけり

随笑

じつくりと厠窓より初景色

石鏡

古亀の池を見渡す初景色

暮津

●初富士

白妙の富嶽相模の風表

さざ

●初筑波

初比叡

初比叡洛中半分日当りて

燕音

あらまあこのゑに呑まるゝ初筑波

暮津

●初東風

はつこち

初東風にそらまめの茎ぐらつけり

ねず

八郎潟
やおろちのうみの初東風萱鳴らし

もも

初東風に浦波ザザと篠ザザと

さざ

初東風に伊勢の神々耳すませ

燕音

●初波

楽浪の志賀に初波立ちにけり

燕音

●淑気

踏みしめて淑気みなぎる御所畳

燕音

●乗初

初電車

乗初のディーゼル音に熟睡せり

ばら

乗初の車中キャラメルかほるなり

ばら

乗初の胴震ひせる高速艇

鳩信

石山寺詣ちんちん初電車

燕音

乗初の安房へフェリーの始動音

寒暑

乗初めのフェリーのうねり臍の浮く

寒暑

●初詣 はつやしろ 初社

頂へ道の集まる初詣

ねず

櫛にも器量のありて初社

さざ

初詣羽田航空神社かな

鳩信

初に詣でて土の宮風の宮

燕音

初詣空がずんずん進むなり

宿好

人波に旨く乗りけり初詣

宿好

初詣参道だだっぴろきかな

石鏡

こんな日がいつまで続く初詣

暮津

蘇鉄の実手にして戻る初詣

暮津

●破魔矢

浅間さん詣で破魔矢を高かかけ

ばら

破魔矢持ち膳所で降りたる夫婦かな

燕音

八幡宮破魔矢握りて五十段

素抱

段葛破魔矢と破魔矢すれ違ふ

暮津

銀髪に破魔矢いとよく映えにけり

暮津

●福達磨 十賊不動 達磨市

青空に銀嶺走るだるま市

寒暑

丹沢山系新らの雪置きだるま市

寒暑

だるま市行きが増発バスぎうぎう

寒暑

市の日が眩し目無しの達磨にも

寒暑

●歳徳神 としがみ 年神

千里眼年神霞む野に立てり

宿好

●恵方詣 えほうまいり

大蘇鉄とは大らかな恵方寺

暮津

●七福神詣

七福神巡りのバスが停まる寺

寒暑

●年賀

年賀用生菓子鶴亀しつとりと

石鏡

●御慶 賀詞

恐竜的存在として賀詞述ぶる

ばら

●年玉 お年玉

お年玉大尽と街闊歩せり

もも

●賀状 年賀状

賀状来て曰くぼちぼちやつてます

もも

大幅に賀状絞るか思案月

鳩信

ひとまわり上の辰年賀状の主
年賀状ああこの人のこの癖字
寿げる墨の光沢年賀状

燕音
宿好
随笑

賀状来ぬテレビをテレヴィと書く世代
旧賀状取り出し偲ぶその字面

石鏡
寒暑

●初刷

初刷の極彩版は妻子占む
滑つこき初刷を取り落しけり
庭に富士膝に初刷手に眼鏡
初刷を発利と車中に響かせて
寝床にて初刷バリと鳴らし読む
わが町の航空写真初刷に
手の空く妻今初刷をまとめ読み
初刷を寝床に引き込み読めるなり

ねず
もも
燕音
燕音
寒暑
素抱
素抱
暮津

●屠蘇

屠蘇の酔ひ「吉原雀」聞きながら

ばら

●年酒

舌鼓はらわた鼓打ち年酒
膝に来る日差しに年酒出来上がり
年酒して赤熊のごとく目がすわり

さざ
ばら
宿好

●雑煮

投函にぶらりと出づる雑煮腹
軸物のえびす見下ろす年の膳
箸つけて雑煮ヶ浦の煤け餅
しるこより雑煮齡といふことか

ねず
もも
ばら
暮津

●食積

食積のまづ柔らかきものつまむ

宿好

●うまめ

古女噛めば歯ぐきに当りちらしけり

さざ

●数の子

数の子を一ト度噛めば一ト昔

さざ

●門松 松飾

新橋の似たやうな路地松飾り
カーフェリー船首にいっぱい松飾

寒暑
石鏡

●飾 輪飾

輪飾も既に六日の乾びやう
船室のノブの輪飾り風に鳴り

随笑
寒暑

●飾海老 伊勢海老

伊勢海老の伊勢を向うに島泊り

鳩信

- 注連飾
石山寺郵便局の大根注連
託こじょうかる注連・松・牛蒡忘れまじ
宿好 燕音
- 鏡餅
鏡餅ことし奮発したりけり
鏡餅不景気の年重ねけり
宿泊簿記す傍ら鏡餅
寒暑 宿好
- 歯朶 裏白
歯朶活けて年入れ替る坊厠
咳こだまりヨウメンシダの林にて
木曾殿の塚に裏白侍らしめ
燕音 素抱
毛むくじやら歯朶打つ暖雨生々し
●楪ゆずりは
楪にしやきつと朝が来たりけり
燕音
- 福寿草
今年定年
福寿草自適の日々が待たれけり
宿好
- 春着 春著 春小袖
春著の子まるぼちやの手を膝の上に
さざ
屯せる春著に聳ゆ二万噸
さざ
赤べこをくるみ上手や春著の子
さざ
春小袖二人連れなる巴塚
燕音
三年坂連れ立ちのぼる春小袖
燕音
春小袖うつせる五十鈴川の水
燕音
春著着て乗合自動車内宮前
燕音
- 手毬
橘寺垣を低めに手毬唄
ねず
- 追羽子おいはね 羽子はね
本紅ほんもみの色に羽子つき了へし空
さざ
- 歌留多
掌が飛んで来るなり歌留多取
宿好
- 万歳
持ちのよきラジオより洩れ御万歳
寒暑
- 笑初
日当りに南天の実の笑初
さざ
- 泣初 初泣
笑ひ初め円空さんのナタバツリ
随笑
- 二日
初泣のわつと車中を通りけり
さざ
ピーナツつるりとむける二日かな
さざ

別嬪な鳥が来てゐる二日の木
 屑籠に二日の日差し移りけり
 二日から甲羅干しせる池の亀
 亀の首二日の空へ差し伸べて

●書初 筆始

芭蕉に「大津繪に筆の始めは何仏」の句あれば
 購へり筆の始めの追分繪

筆始め要らぬところに力入れ

●読初

読初めの今は昔の天竺部

やじぎ
 玄孫弟子亜浪序文を読初めに

血湧き肉おどるト伝読初めに

円空の出遁読み初め「畸人伝」

●使ひ初

ほうこんな本が出たかとメモ始め

●姫始め

言葉にも矯め方があり姫始め

●初漁 漁始

漁始めインターネットてふ海に

●売初 初売 初商

窯主が湯呑みまけ呉れ初商

清水
 二年坂初商の水打てり

角つこの三文駄菓子屋初商

初商円空さんのまがひもの

初商温泉まんじゅう湯気しゅっしゅ

初売のすずらん通りころりんしゃん

初商量り売りせる紹興酒

●買初

買初めの色のほのほの五色豆

●初荷

初荷積む土間凸凹のデコ屋敷

●初湯 初湯殿

初湯浴ぶ熱きは痒きことと知る

初湯して考えごとは何だっけ

初湯浴ぶからすの行水始めなり

初湯舟湯口近くに身を沈め

ほうと息大きくついて初湯舟

湯の里に遊ぶ正月湯三昧

山の温泉に骨抜きとなる三ヶ日

初湯殿ふぐりすうすうしたりけり

さざ

宿好

暮津

暮津

燕音

宿好

もも

もも

燕音

随笑

ばら

宿好

随笑

鳩信

燕音

燕音

随笑

寒暑

暮津

暮津

燕音

さざ

随笑

随笑

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

初湯舟五體の透けて捨いろ
青年が湯壺へどんと初湯波

寒暑
寒暑

初湯してうすぼんやりとおもふこと
うる覚え唱歌張り上げ初湯殿

素抱
石鏡

●初鏡

いつぼんの白長睫毛初鏡

寒暑

●初座敷

御所に来る尾長を愛でて初座敷

燕音

●弾初

弾き初めに瞽女もたらせしおけさ節

随笑

●初吟行

美濃衆と駅で落合ひ初吟行

随笑

初吟行鉛筆小坪もて指す洋上富士

暮津

●初句会

壁に杖立てかけてあり初句会

宿好

初句会確かむ紙の裏おもて

随笑

俳句莫迦ばかり集り初句会

随笑

●初燈

手探りの根本中堂初燈明

燕音

箒川べりの湯宿の初灯

寒暑

●初飛脚

膳所泊り夢に行き交ふ初飛脚

燕音

初飛脚懐旧通路も埋まる映画館

素抱

●初芝居

初芝居梅沢某の股旅もの

寒暑

初芝居苦節うん三十年の面

寒暑

●初旅 旅始

さきざきに富士を眩しむ旅始め

ばら

知多半島 篠島行
心臓の直しが利きて旅始め

鳩信

宮津昭彦さん
地図好きの方と初旅して三河

鳩信

何の生簀かんの生簀と知多初旅

鳩信

年頭の旅の誘ひの声掛かる

宿好

恒例の初旅年金取り崩し

宿好

年頭の旅はいつもの顔ぶれで

宿好

●初伊勢

初伊勢や腰の曲がるも何のその

燕音

詣で日の天気がようてお伊勢さん

燕音

初伊勢やをろがむ顔も魚のごと

燕音

をろがめる大御親神伊勢の春

燕音

初伊勢や守武ぶりの一句出来

燕音

お伊勢さま詣でのゑびす顔続々

燕音

初伊勢の玉砂利鳴らし往路帰路

燕音

お伊勢さん詣で人出のえらき道

燕音

初伊勢の点り初めたる常夜燈

燕音

春著着て乗合自動車内宮前

燕音

初伊勢や官憲筋の五六人

燕音

初伊勢や鳩のくぐもりごゑの中

燕音

●宝船

宝船ツアーといふはなかりけり

燕音

●初夢

輦れんたい台に乗れる初夢大井川

燕音

力在るものと格闘初夢に

燕音

初夢の思ひ出せずにゐる科白

燕音

死んでゆく身故の花鳥風月とよ

宿好

初夢のマンボウ何と畳大

随笑

初夢の途中駄目だと思ひけり

随笑

初夢に昔のヨイトマケの唄

随笑

お白州に詰めゐるところで初夢覚め

寒暑

だいそれた初夢をもう見ること無し

暮津

初夢は尿意に断たれ跡かた無し

暮津

●初寢覚

まあまあとゐなされてゐて初寢覚

燕音

●三日

ふだん着で通し三日も過ぎにけり

もも

川床の藻のたゆたひも三日経て

ばら

十姉妹の籠を日向に三日かな

ばら

洗ひ場に水走り込む三日かな

ばら

三日果て金海きんかい鼠色なる鳥羽の空

鳩信

三日の灯入りて男宮の常夜燈

鳩信

遊び田のうすらひつつく三日かな

寒暑

湯の町の明けて三日の川床鳴る

寒暑

雲菟うむところ三日の風の不二

暮津

●三ケ日

腫れものも湯に温もりて三ケ日

寒暑

山の温泉ゆに骨抜きとなる三ケ日

寒暑

三ケ日おだやか四日風吹いて

暮津

●四日

ひよろろんと雨の四日のとんびかな

鳩信

換氣して四日の風に生きづきぬ

素抱

紙幣出す音。四日のキャッシユデイスペンサー

暮津

三ヶ日おだやか四日風吹いて

暮津

風出入り四日の旅行代理店

暮津

● 六日祭

奥の間に花奪はい祭の花造り

ばら

● 出初 梯子乗

次なるは「帆掛」でござい梯子乗

随笑

梯子乗富士へ乗り出す膝八艘

随笑

● 寒の入

隆起せる傷跡撫づる寒の入

鳩信

さうなのよけふから寒の入なのよ

燕音

● 寒

告別の膝折る寒の百合の前

ねず

風生に「大寒と敵のごとく対したり」の句あれば

もも

風生の相手取りたる寒ン迎ふ

もも

碧梧桐忌法外な寒ンもたらせり

もも

寒芹をこづき湧水馳せゆけり

ばら

湧水の気泡びびび寒日和

ばら

湧水の川を養ふ寒日和

ばら

供花絶えず絶やさず寒ンの巴塚

燕音

でかしたる丈艸の墓つつむ寒ン

燕音

叡山の寒ンを背に阿耨多羅

燕音

寒ンの採尿咄嗟に出たりするもんか

宿好

山鳩のごとく身を揉み寒ン払ふ

宿好

鼻莫迦になるまで寒ンの通勤路

宿好

火の用心命用心寒最中

宿好

ぎっくり腰悪寒は鮎のやうにくる

寒暑

水差しに水満ちゆける音も寒

暮津

猫がまだ己押さへて寒の日々

暮津

寒中を咲き通す花物好きや

暮津

● 鏡開

新橋の飲屋の鏡開かな

寒暑

● 寒の水

寒最中廁で使ふ水の音

暮津

● 寒泳

寒泳者浪子の海を前にせり

ばら

● 寒卵

ぶつつける力が余り寒玉子

随笑

お茶碗と同質のおと寒卵

素抱

●寒鯉

寒鯉の水押し力鈍りたる

青蓮院(粟田御所)

掌を打てるどころへ寒の御所の鯉

寒鯉の叡智めぐらすごとくなり

寒鯉を封つ氷の曇りけり

寒鯉の鰭あほりたる水玄くろき

寒鯉は黎明の色つと動く

●寒釣

釣れたとも寒の鯉のこんなのが

寒釣のこつちも見ずに釣れねエト

●七種 七草

惟然も亦七種摘みけむ七器山しちぎ

七種の富士はずしろ色をして

七草の朝湯あとから利いてくる

奥塩原 新湯温泉

薺の日髭をたたいてあたりけり

●薺なすな病床空想 二句

薺の國響郡の組村

齊生ふ朝日將軍墓所御前

隣り村ペンペン草の畦往けば

なずな季田沼の通夜は泊りがけ

犬の尿ペンペン草の枯れし穂に

●人日

人日の耳搔きの塗り剥げてゐる

●鸞替

亀戸天満宮

頭上を雀ひゅんひゅん鸞替日和かな

鸞替や破格の鸞が先づ売れて

ひようきんな目をした鸞の替えらるる

懐に滑り込ませぬ木彫鸞

これみんな鸞替を待つ人の列

鸞替の列の後尾はここですか

納め鸞大小よくも並べたり

携帯の懐中鸞も売られをり

●十日戎 初戎 福笹

本覚寺

薨見え十日戎の寺はそこ

初戎乾びし風が吹きにけり

福笹に当り矢紛れなかりけり

福笹の大福帳が風に舞ひ

偽小判出回る世にして初戎

福笹に吊らるゝもののおもしろや

鳩信

燕音

燕音

随笑

素抱

暮津

石鏡

石鏡

ばら

鳩信

寒暑

素抱

ばら

燕音

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

真つ赤か十日戎の日暮れ雲

暮津

●初弁天

いやはやの島の階きざはし 初弁天

燕音

●初寅

初寅へ車村道飛ばし来ぬ

さざ

●初閻魔

閻魔詣

臨濟宗 建長寺派 円応寺
道服のだぶだぶ閻魔詣でけり

随笑

転読のこゑは肝より初閻魔

随笑

鎌倉 円応寺
初閻魔眼光通らぬところ無し

石鏡

初閻魔鼻腔より息出し入れす

石鏡

初閻魔凍みを振り切り切る大木魚

石鏡

かんばせに転読の風初閻魔

石鏡

初閻魔転読僧の夷こゑ

石鏡

●餅花

繭玉

餅花に財布の紐のゆるみがち

寒暑

コンビニの繭玉一寸つつきみぬ

暮津

●松の内

ひととほり読み通さねば松の内

ばら

地下街は何處へも通ず松の内

寒暑

●松納

松取る

朝からの雀のこゑや松とれて

さざ

松とれて太田胃散もなべて暇

素抱

●左義長

とんど どんど

おんべ

飾焚く

爆竹

三浦半島・長沢、左義長
孟宗の雄こゑおんべの火中より

ねず

ふぢづるをきりりとおんべの胴くびれ

もも

魂消たりおんべの胴の大破裂

もも

おんべの灰ゆらりと鴉立つごとし

もも

手負ひめきおんべどしりと崩れけり

もも

大とんど崩れ腹中覗かする

ねず

ぶすぶすりととんどに火の手あがりけり

さざ

とんど火のあやふく立つてをりにけり

さざ

とんど火の先づは松葉を炙る音

ばら

とんど火の爆せて肉声聴くごとし

ばら

ひょうとこ
火 男の踊れるごとくとんどの火

随笑

とんど火の最初パチパチやがてバン

寒暑

逗子消防第七分団とんど守る

暮津

顔そむけどほしとんどの火の壁に

随笑

どんど焚く中でも松の爆ぜる音

暮津

鳶口が何本も出てどんど焼き

暮津

竹鳴るは節破る音どんど焼き

暮津

左義長の煙の黄竜立ち昇り

燕音

左義長の心棒燃えて炎々たり

随笑

金沢文庫海岸

左義長の風向きをみて火付け方

寒暑

左義長の灰降り慌てて髪押さふ

寒暑

きな臭き世の左義長の大ほむら

寒暑

左義長の爆せて松・竹・樫の音

寒暑

左義長の火疲れといふ面持ちす

寒暑

左義長を渚に待てる水っ洩

暮津

眼が痒くなりて左義長果つるかな

暮津

左義長へ消防団員トビ担ぎ

暮津

左義長の火懸けの役は干支の子ら

暮津

左義長の藁灰渚に張りつきて

暮津

妻の首すくめどほしよ爆竹に

暮津

爆竹の今か今かがバンと来ぬ

暮津

福達磨燃ゆる火中に何念ず

暮津

飾焚き白くふすぼる福だるま

暮津

●松過

大津繪に散財始め松とれて

燕音

松過ぎの肉桂のにほふ五色豆

燕音

松とれて心の内に頭擡ぐ虫

燕音

松過ぎの空を鳴らして風小僧

随笑

松過ぎの少し熱めの湯の加減

素抱

松過ぎの洗濯物に差す薄日

暮津

●なまはげ

なまはげの出る夜を雪の降りしづる

もも

なまはげのくる夜家中明るうし

もも

真山神社

お祓ひの済みてなまはげ放たれし

もも

なまはげの足踏み鳴らす屋台骨

もも

なまはげの聞きしに勝るおらびごゑ

もも

なまはげのずいと茶の間に踏み込みて

もも

なまはげのもぞと酒盃に手を出しぬ

もも

なまはげの去るを呑み込むうるし闇

もも

なまはげが立去り蓑の零れ屑

寒暑

記念写真撮影場

なまはげの汗だく学生アルバイト

寒暑

●成人の日

成人の日の諸星の華やげる

暮津

●ちやつきうい

ちやつきらくよくそろひみておちよぼ口

ねず

音頭取三人かたまりちやつきらこ もも
 店も狭に緋扇舞はせちやつきらこ もも
 ●凍る 凍む 凍つ 互つ
古梅園他 六句
 採煙藏鶴の眼のごと凍てて火は ねず
 デコ木型黒びかりして凍てにけり さざ
 責台と抱石四枚凍て白州 随笑
 夕凍みの直路三十路の靴鳴らす ねず
 掃き了へて夕凍みねずみもちの実に ねず
 水仙の葉に水仙の葉影凍み ねず
 二段上の枝に凍みをりもう一羽 ねず
 夕凍みのわけても鯛の鼻柱 もも
 日陰りて張子天狗の凍みつ鼻 さざ
 延年舞黒凍みの堂鳴らしけり ばら
 肉桂玉しやぶる御城下凍みつぱれ ばら
 三井寺の夕凍み及ぶ大黒天 燕音
 運の尽きならぬ凍み鐘突かれけり 燕音
 凍みる中そもそも三井の鐘由来 燕音
 三井の鐘立ち去る耳に凍み憑きぬ 燕音
 夕凍みにはか也有の文台に 燕音
 落柿舎の夕凍みの憑く柿古木 燕音
 落柿舎の柿の蒂ほど吾も凍みて 燕音
 柿の蒂カアの一ト声凍みるなり 宿好
 堂凍みに毘沙門天のひんむく眼 宿好
 茜空凍みて東京横浜間 宿好
 凍み柿に楊枝が程の針氷柱 随笑
 円空の二寸に足らぬ凍み佛 随笑
 銀屏に蕪村の打てる凍み米点 随笑
南天棒讀「この棒に怖るゝものは極楽行」
 黒凍みの南天棒の南天棒 随笑
 冷凍みかん齧り旅路の汽車ぼっぱ 寒暑
 凍むこゑに電光石火みそさざい もも
 もくれむの凍む枝に雨のぬくとからむ もも
 オソコロコロセンダリ称へ凍むまじや もも
芸術劇場 高橋竹山 孤高の響き
 凍むや門付一から学ぶことばかり 燕音
 音色凍むほんに三味線授けもの 燕音
 凍む木にちよんと目鼻の木っ端佛 随笑
ボク
 凍みに凍む虚空蔵さんのどぜう髯 随笑
 馬面の竹山切な互てあいや 燕音
 根本中堂香炉の煙も凍らんか 燕音
朝比奈 熊野神社
 切通し磐しぼる水凍りつき 宿好
 描線の威嚇と攻撃巴里凍つる 宿好

がやがやと鴨みて池を凍らせず
羽搏ちては凍ることなき夫婦鶴
心字池隅から隅まで氷るとは

●凍滝 いけてたき

風響くなり氷瀑の大伽藍 カテドラル

ばら

●冴ゆる 冴え 冴ゆ

さえざえと紙切り裂ける肥後之守
ミシシッピー鰐の横縞雨に冴ゆ
コントラバス靴底でとるリズム冴ゆ
レーニン風唄い手の額灯に冴えて
山内の冴ゆる日に干す僧のもの
ざうざうと頭の冴え山の粗き湯に
あんこ玉薄皮冴えに冴えにけり

さざ
さざ
燕音
随笑
随笑
素抱
石鏡

●三寒四温 三寒 四温

象亀の砂に喰ひこむ四温の手
三寒の黒竹粋な一商家
雷門潜り四温の中国語
砂場の子遠く見守る四温の目

さざ

宿好

宿好

徘徊す虎は四温の毛皮被て

寒暑

奈良晒三寒の糸織りかけに

寒暑

三寒と四温のぎったんばったんこ

素抱

三寒のどつちつかずの夜半の月

素抱

●冬深し 真冬

狸々の一物突起せる真冬
好きなことばかりしてゐて深む冬

燕音

石鏡

●悴む かじか こごえる

悴める掌のかたちして枯柏

もも

露天湯へどぼんと入らねばこごえちまふ

寒暑

●霰

急霰に家鴨の雄声突つ走る

石鏡

●風花

風花に取り込み忘る男物

ばら

風花の舞い込む三塔十六谷

燕音

●雪 しづり雪 根雪 小雪 大雪 粉雪 暮雪

雪積もる 雪気 雪霰 雪明り 牡丹雪 雪景色

飛雪 吹雪 豪雪

白を剝るうしろ檜山の垂り雪

もも

本尊のうしろ辺りやしづり雪

もも

蓮如堂杉の撥ね上ぐしづり雪

燕音

しづり雪をりをりありぬ谷隣 燕音
 しづり雪躰びたりと止みにけり 随笑
 きっかけは向うの岸のしづり雪 寒暑
 流鏑馬の馬首めぐらすに冠雪富士 鳩信
 根雪道ここで転けたら百年目 寒暑
 段差また段差根雪の温泉場 寒暑
 清水の小雪おっとり店構 燕音
 ひとしきり雪混んでくる杉の空 ばら
 分け入りてにわか雪空美濃馬場ばんば ばら
 雪どころ米原過ぎてべそかき空 燕音
 降る雪に弾み付ききし夕笹子 ねず
 沁る鴨うづくまる鴨雪降れり さざ
 日本橋雪が舞ひ来てえらい降り 燕音
 泉岳寺粉雪じゃんじゃん降りにけり 宿好
 美濃紙の美濃を雪降る頃訪ふて 随笑
 高山の雪降る街の消火栓 随笑
 雪降れりくつがへらんとする鯉に 随笑
 雪大降り小降り何処まで読んだっけ 随笑
 本降りと教へられけりけさの雪 随笑
 降り甲斐のある雪巨いなる松に 随笑
 急がねばならぬ暮雪の降りやうや 随笑
 雪降れば湯気倍にして饅頭屋 寒暑
 降り出して脇目もふらぬ雪となり 暮津
 降る雪の意地を失くして水雪に 暮津
 難題をもたらせるごと宵の雪 随笑
 共同湯木目がうれし宵の雪 素抱
 雪つもる時間たつぷりありにけり さざ
 平橋に続き反橋雪積める さざ
 太注連の形に波打ち積もる雪 随笑
 屋台倉に屋台眠らせ積もる雪 随笑
 雪積んで陣屋米蔵ねずこ葺 随笑
 雪このまま積もれば音をあく庭の木々 随笑
 はやばやと旭岳より積雪報 暮津
 真昼間の山雪のうへ蜘蛛あるく 燕音
 昼過ぎて雪は本腰入れにけり 随笑
 腸はらわたが古びん昼の雪ちらちら 随笑
 昼の雪ますます粗くなりけり 随笑
 湯上りの牛乳屋の雪見つゝ 素抱
 舞へる雪津軽こぎんの花つこのやう ばら
 ふらふらと湯中りに似て舞ふ雪も 素抱

雪払ふ音のぶるぶる陣屋前
 随笑
 南天は雪に負ける木払ひやる
 随笑
 なまはげの出る夜を雪の降りしぶる
 もも
 どぶろくの上澄み雪は夜に入りて
 随笑
 夜に入りて雪はしぶとさ見せにけり
 随笑
 くらがりに変貌を遂ぐ夜の飛雪
 随笑
 簡単に了はらぬ年よ除夜も雪
 暮津
 叡山の雪気太肉締めつけぬ
 燕音
 叡山の雪気柱の朱を剥ぎに
 燕音
 顔擦って川原の雪気野天風呂
 寒暑
 野天風呂晨の雪気も何のその
 寒暑
 雪捨つる雪気に頬の鳴るごとし
 素抱
 国民休暇村一斉に雪霽
 ねず
 沙羅の枝に水晶玉の雪霽
 ばら
 向う三軒陸まじげなる雪霽
 随笑
 雪霽光を光追ふ如く
 随笑
 画狂老人真筆雪中筍狩
 燕音
北斎館
 がしと雪踏みしめ見入る水芭蕉
 燕音
雪中水芭蕉
 白樺の生の色しかと雪中に
 随笑
妙雲寺
 雪中の堂縁近く牡丹の木
 寒暑
ボク
 お白州の格子窓より雪明り
 随笑
 雪明りして岩風呂の岩の相
 寒暑
 大雪に竹たちちとなりにけり
 随笑
 二階より顔を突き出し雪といふ
 さざ
 稀の雪矢鱈せはしくなりにけり
 さざ
 葉に雪の付ける頃合ありにけり
 さざ
 何と雪ワライカワセミ渋い貌
 さざ
 目覚めては紙と木の家牡丹雪
 ばら
 目の前を大きな嘘のやうな雪
 ばら
 直ぐなるは直ぐなるままに庭木へ雪
 ばら
 白樺のいっぽん交じる雪景色
 ばら
 一飛雪ひゅうと川面をよぎりけり
塩原行
 川端の鴨の口々雪来ると
 鳩信
 暮雪の軸雪村八十二歳筆
 鳩信
 吹雪く町門付三味線剥げるまで
 燕音
 太棹に津軽が見える雪んこ見ゆ
 燕音
 藪巻に雪まじり雨比叡より
 燕音
 三年坂「雪やろ」「さうやと思ひます」
 燕音
 豪雪の爪跡芽木に残りけり
 燕音
 霰にも雪にもならず唯の雨
 宿好

宿木に飛雪張りつく峠越え
随笑

檜より檜に落つる谿の雪
随笑

奥飛驒の木々に張り付く雪の音
随笑

かさこそと陣屋の高張打てる雪
随笑

出し抜けに「雪やいっぽんつけとくれ」
随笑

先づは斑むらやがて庭面を覆ふ雪
随笑

ひたすらに落ち来る雪ともつるゝ雪
随笑

磯馴松雪がくつつき始めけり
随笑

東京湾いちめんに雪ぶちまけて
随笑

鶴鴿か雪の川原をすつ飛んで
寒暑

白鶴鴿とんと川原の雪醒まし
寒暑

雪みちを二代目高尾の墓へつけ
寒暑

塩原高尾辞世句寒風にもろくもくつる紅葉かな
寒暑

雪の上に高尾ゆかりの寺紅葉
寒暑

熊笹の雪にへこたれゐる姿
素抱

雪上をドドと車の鎖音
素抱

男山酒造
酒水は万年雪水男山
素抱

和寒わつさむの防雪林横ふきのたう
素抱

玲瓏しよかんべつと雪頂しやかんべついて暑寒別岳
素抱

つままない雪が小雨になるなんて
暮津

丹沢に雪うなばらにうねる浪
暮津

●雪野 雪の原 雪原
じゃみせんじょんから坊ぼさま様に躑はらきて雪の原
燕音

雪原庄川においてきぼりのごと一戸
随笑

●雪山 雪嶺
東海道白妙の富士皮切りに
燕音

みづうみに諸子取れ出す白伊吹
燕音

湖国ゆく始終うしろに白伊吹
燕音

雪山に浴ふてりんごの花街道
燕音

天界へ跳んで白隠雪嶽描く
随笑

画業八十年 片岡球子展
片岡球子ドカンと冠雪富士を置く
随笑

十賊不動
青空に銀嶺走るだるま市
寒暑

画家たらんおもひ雪山前道北行にして
素抱

男山酒造雪山正面に
素抱

畦青み雪嶺しざり秩父別ちつぷべつ
素抱

●雪搔 除雪
除雪車のそのけそのけお通りだい
随笑

雪搔きの真似事する子裏通り
随笑

温泉場雪搔き根雪ひっぺがし
寒暑

塩原温泉
雪搔いて橋より落とす男かな
素抱

●雪卸ゆきおろし

助っ人に山の快晴雪卸す

寒暑

●雪まろげ

雪まろげ男まさりの女の子

寒暑

●雪達磨

天気図の裏日本に雪だるま

宿好

雪だるま雪につつまれまたあした

随笑

初お目見え天気予報の雪だるま

随笑

二つ目の雪達磨あり作りかけ

素抱

●おしくらまんじゅう

おしくらまんじゅう服台無しにしてをりぬ

さざ

●スキー

スキーヤー滑空旗のやうな顔

ばら

スキー場写真真木造リフトの世

宿好

白樺の用途かつてはスキー材

素抱

力学の原理に適ふスキーせよ

暮津

●氷こおり

氷る 氷点下 結氷 氷面鏡

砕かれし氷氷の端に乘れり

さざ

青天に月は大きな氷玉

さざ

ためらひつつ氷ついたる水ならむ

ばら

鳶の鳴く水と氷の郡上かな

ばら

術後にしてこんなうまき一氷片

鳩信

航跡は氷の青さ久里浜丸

燕音

ポケットの握り拳も氷点下

宿好

北鎌倉氷について歩きけり

随笑

氷割れ現る水の生々し

随笑

寒鯉を封づ氷の曇りけり

随笑

風に張る氷紫ならんとす

随笑

結氷湖足踏みをして暖をとる

素抱

氷見て戻る他には用はなし

素抱

一切を封ず氷の初一念

素抱

氷点下四十一度てふクッキー

素抱

いまもつてご最良があり氷店

素抱

御旅所の氷の下の烏龍茶

素抱

池氷り居るといきいき申しをり

石鏡

氷らざる池半分を鴨行き来

石鏡

始祖鳥のやうな文様氷面鏡

石鏡

●氷柱つらら

さて何本ここから見ゆる崖つらら

宿好

もう一本引きずられ落つ崖つらら

宿好

凍み柿に楊枝が程の針氷柱

随笑

白川村夜陰につらら落す音

随笑

氷柱宿暇つぶしに夜更けの温泉

寒暑

身構へてその前通る軒氷柱

寒暑

隆々の鬼の金棒軒氷柱

寒暑

つららつらら隣のつららみて育つ

素抱

へし折ってみたくなるもの氷柱の意地

素抱

心情は今も氷柱のごとき人

素抱

●スケート スケートター

山蔭に村の手作りスケート場

随笑

スピードスケートカチカチバックストレッチ

石鏡

スピードスケート断トツリンクレコード出る

石鏡

チャールストン伴奏にスケート露西亜ペア

石鏡

フィギュアのリフト高々ニューヨークニューヨーク

石鏡

フィギュア解説ニコライステップとは何ぞ

石鏡

疾風また旋風ともなりスケーター

石鏡

●サッカー

行末はペレか芝生に球蹴る子

寒暑

新春の蹴球魂激突す

暮津

●避寒

踊子号避寒の客を零しゆく

ばら

避寒地に降り立ち一本目の櫻

ばら

恰好をつけて避寒の旅などと

素抱

●寒暮

暮れかかる柿の蒂みち落柿舎へ

燕音

尾の長きこの鳥去れば寒暮の木

宿好

水鳥の羽搏ちこたへのある寒暮

随笑

一遍像寒暮を歩き出すところ

素抱

●寒潮 冬潮

冬潮の透けて鮑の産卵期

燕音

明日葉に子守唄めく冬の潮

燕音

五百椿林寒潮音を断ち

随笑

●寒燈 冬燈

冬灯蟹の甲羅はキチン質

さざこ

泊船の一つ緑に冬灯

素抱

独りでに点く冬街灯世は進み

石鏡

●煮凝

煮凝の如き偏見一蹴す

燕音

煮凝の頭の方を吾に呉る
煮凝の半信半疑鯨の目

随笑
随笑

●寒蜺
寒蜺少し音を上げ煮らるるか

暮津

通り矢の鼻先昏れて寒鴉

ねず

●寒雀 ふくら雀 冬雀

寒雀隣る立木へ四散して

さざ

つられ立つふくら雀の一羽かな

さざ

ひいふつと枝を離るる寒雀

さざ

郡上のなあふくら雀も春駒を

ばら

檻抜けておこぼれ頂戴寒雀

鳩信

日延ばしにせぬこと大事冬雀

暮津

●千両 千両の実

千両の実付きのわるき年逝かす

もも

千両に祝がるる年を重ねけり

ばら

実家妻から千両貰ふを習ひとす

宿好

千両もて玄關飾り立てにけり

宿好

千両にいい値がついて街師走

石鏡

●万両

万両の向うを通る水のこと

宿好

●藪柑子

木漏れ日の間々差すことも藪柑子

ばら

●青木の実

暮れてなほ母艦遊びや青木の実

素抱

青木の実神城しんと澄みわたり

暮津

青木の実神田明神つやつや銭形平次の碑

暮津

●冬珊瑚

年金にて妻のやりくり冬珊瑚

宿好

こぢんまりした家ばかり冬珊瑚

随笑

閑日に馴れ親しみて冬珊瑚

随笑

見通せるほどに庭透け冬珊瑚

素抱

冬珊瑚鰐岳父暮らしも板につき

暮津

●寒牡丹 冬牡丹

寒牡丹こゑあたたかく讚へらる

ねず

枝ぶりに齡歴たる寒牡丹

もも

婀あだぶりも子持高尾の冬ぼたん

ばら

葉並びの間合又よき冬ぼたん

ばら

口々にこれはこれはの冬ぼたん

ばら

冬ぼたん風に正せるみどりの葉
 顎引いて冬のぼたんを撮る構え
 離れ寄りためつすがめつ冬ぼたん
 手焙そぼだに五指峙そぼだてて牡丹見る

火桶より火桶の見ゆる牡丹園

三箇所に火桶設え牡丹園

遠近の牡丹に目遣り火桶に手

●葉牡丹

葉牡丹に父逝きし夜の明けにけり

葉牡丹小ぶりなにぶん景気振はずよ

葉ぼたんの意気軒昂を買ひ来たる

●寒菊 冬菊

冬菊のいちめんそれも麴こうじ色

臍物の如き朝刊取りに冬

冬菊を前に病心に勝てるひと

剪り惜しむ冬菊にして丈長し

冬菊に佇てばすぐ来る夕べかな

冬菊をいとほしむ眼を誰もせり

●冬薔薇

バラ枯れて玉簪を遺しけり

冬そうび虚空を統べて気韻さへ

冬薔薇妥協なき色不二の白

●水仙 水仙花

水仙の初花一本目の香氣

水仙の香のつきぬけてゐる夜空

水仙の葉の尖りくる怒濤音

水仙の葉に水仙の葉影凍み

一二枚落葉挾める葉水仙

ずいと入り水仙季の瑞泉寺

水仙をぎうと鳴らして活けにけり

水仙花湊手錠の形して

水仙の袴の着付け具合かな

土管坂土管の端に水仙花

水仙の里を名乗りて旗標

水仙花泉下にあまた眠るもの

水仙を四柱に束ね花御堂

庭先に劍襖の葉水仙

水仙の避けやうもなき潮飛沫

水仙に句帖をひらく男かな

ばら

素抱

素抱

さざ

暮津

暮津

暮津

ねず

宿好

石鏡

鳩信

鳩信

鳩信

宿好

素抱

素抱

素抱

素抱

随笑

随笑

随笑

石鏡

ねず

ねず

ねず

ねず

ねず

もも

もも

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

鳩信

鳩信

燕音

宿好

随笑

随笑

寒暑

水仙は今年早くてその見頃
校庭の水仙しんと授業中

寒暑
寒暑

大風にうち負かされし水仙花

素抱

浦風にあびせ倒さる水仙花

素抱

きしきしと水仙畑を過ぐ羽音

石鏡

水仙に富士を配せる入賞作

石鏡

ぴんしゅんと背筋を立てゝ水仙花

暮津

水仙は起立国語の授業中

暮津

水仙にばったり倒れ込む波濤

暮津

●冬の草 冬草 冬青草

冬草のあをさ裏返してみても

さざ

たうたうと冬草色して川ながれ

さざ

金沢文庫 称名寺旧伽藍発掘調査
冬青草根こそぎにして発掘溝

随笑

●竜の玉 はずみ玉

足音の行き来にふとる竜の玉

さざ

竜の玉識れるは竜の玉ばかり

ばら

竜の玉なんぞ詠む季来たりけり

ばら

手を入れて見れどまだまだ竜の玉

ばら

本復はまだ先のこと龍の玉

燕音

龍の玉なんぞありそな館とも

宿好

龍の玉ここはどっこい正念場

随笑

竜の玉龍太語録が生きてをり

寒暑

籠る間も時移りをりはずみだま

素抱

●寒海苔

出刃持つて小柴の寒海苔百叩き

素抱

なまくら出刃もつて寒海苔叩くかな

素抱

寒海苔を肴に酒はまだ飲むぞ

暮津

●石蓴 あをさ

冬麗の石蓴浄土を踏みゆけり

随笑

ひとり来て冬の石蓴の海っぺた

素抱

沖を見てゆけば石蓴に足とられ

素抱

石蓴搔だぶつき気味のゴム胴着

素抱

●大寒 極寒 酷寒

大寒の底光りせる檜青葉

宿好

大寒の蛇口の水のすとすと

随笑

通り過ぐ木々が険しく見ゆ大寒

暮津

何たること大寒の酒切らすとは

暮津

大寒の夜を閉づビロード地のカーテン

暮津

●厳寒

極寒をこくと一つ醤油の音
 酷寒に打たれて覺めぬ梅の性しやう
 酷寒と蛇口ひねればさう聞こゆ

宿好
 宿好
 暮津

●初天神

大島紬でんと着込みて初天神
 菅公にゆかりの諸々初天神
 太鼓橋こそりわたれる初天神
 控えゐる巫女一並び天神花
 初天神戻りの藤いろ紙袋

暮津
 暮津
 暮津
 暮津
 暮津

●日脚伸ぶ

草龜の一投足に日脚伸ぶ

石鏡

●早梅

早梅の芳香よどんではならぬ

素抱

●臘梅

臘梅の嫌ふ日向をきらひけり
 臘梅に夫婦二組佇める
 臘梅の角ばる花の分光器
 枳殻からたちのなかも臘梅明りして
 祖師堂まで臘梅いろの雨の徑

ねず
 ねず
 さざ
 さざ
 さざ
 さざ

臘梅も了りと寔れしこゑにいふ
 臘梅のつりがね花に落ちゆく日
 替る替る臘梅に鼻持つてゆきぬ
 臘梅東慶寺の実におやおやと人の倚る
 臘梅の花くたくたになつてをり

素抱
 寒暑
 寒暑
 ばら

●寒梅 寒紅梅

とつつきの寒紅梅に足止めぬ

さざ

●探梅

もういちまい余分にはおり探梅行
 探梅の探しあてたる一二輪
 即吟派遅吟派梅を探らんと
 早過ぎることは承知の上の探梅
 探梅の手土産鳩の豆落雁
 探梅といふにはあつさり戻り来ぬ
 探梅にうつつを抜かす顔ぶれば
 探梅のはてこの道でよいのやら

さざ
 宿好
 随笑
 素抱
 石鏡
 石鏡
 石鏡
 石鏡

●冬桜 寒桜 寒緋桜

ややこしき坂の熱海の寒桜
 寒ざくらばつと咲かせてこの陽気
 すいと来て頬赭き鳥寒ざくら

さざ
 さざ
 さざ

ここ河津緋寒桜の田舎咲き

ばら

三度見て三度炎のいろ寒桜

ばら

熱海まで見にゆくことに寒桜

素抱

寒桜ほゝうと腕組みながら

素抱

彩どりは京劇の赤寒緋桜

素抱

ごはんつぶほどのあかるさ冬ざくら

もも

思はずの縁切寺の冬ざくら

さざ

冬ざくら花の漂着せる如く

さざ

冬ざくら花は直下に零れけり

さざ

冬ざくら雨にまみるる外はなく

さざ

冬桜風が間引きし花の隙

ばら

冬ざくらひとつひとつの花の向き

ばら

今着きしばかりの日差し冬桜

ばら

妻もまた気がついてをり冬ざくら

随笑

冬桜花の手薄なところかな

石鏡

青空を伝ひくる冷え冬ざくら

石鏡

ともすれば消え入りさうな冬桜

暮津

●寒椿

痛み分けてふ語がふつと寒椿

宿好

寒椿落ちねば心に落としみぬ

素抱

●侘助

侘助の自足の花とおもひみる

宿好

●寒木瓜

鮮しき切り口一つ寒木瓜に

ばら

寒木瓜咲き窯元家裏相似たり

鳩信

巴塚寒木瓜弾け一二輪

燕音

寒木瓜の一輪発句を吐くごとし

燕音

●室咲

室咲きの地味であて興そそる花

寒暑

●青々忌

思ひ及ぶところをずいと青々忌

燕音

●春待つ 待春 春遠し

燕音

春を待つ淡海に心預けんと

燕音

待春の肱付き椅子の深さかな

寒暑

袖の雲脂指で弾きぬ春遠し

素抱

●春隣 春近し

ねず

春隣向き合うて立つカンガル―

ねず

春近む音の一つにしづり雪

ばら

カテーテル検査にて入院
測温測圧検尿採血春隣

ばら

看護婦の大き叱声春隣

大部屋に一つ空き出来春隣

まんぼうはまんぼう泳ぎ春隣

じつとしてやりすごす冬もう少し

走り根にも瘤もつ櫛春近し

伸び縮む鳩の瑠璃首春隣

春そこに通草細工の鳩車

●節分

みしと来て葉欄に節分まへの雨

明日節分雨草木をうるほして

節分興行びん助一座かつぽれを

袂持ちミス鎌倉の福まねき

●追儼 鬼やらひ

鬼やらひ鬚も凜々しく武蔵丸

追儼法要転読海東法窟に

びびびびと追儼会の燭伸び縮み

法堂に太鼓どんどろ追儼寺

●豆撒 鬼の豆 年の豆 福は内

ねんねこに当つて跳ねる鬼の豆

関取の手を放れたる年の豆

赤ん坊の笑ひ初めなり福は内

僧正のそらそらそらと豆撒く手

年の豆日差しに紛れてしまひけり

大銀杏隆と曙豆を撒く

豆撒きの淡谷のり子のこゑの張り

豆撒きの赤鬼さんと青鬼くん

鬼は外はつきり言おうはつきりと

豆撒けり天下禅林天空に

群衆の隙間に落ちぬ年の豆

●厄落 厄詣

厄詣帰りの飯店古老肉食ぶ

■二月

●春 三春

春の地震白鷄百羽揺すりたる

山羊髭の人類学者春を語る

愛すべき春の櫛のその全て

蛸の木の根の遣り場なき室の春

一睡のゆめに磯長の春かもめ

半島のももいろがかる春雑木

ばら

ばら

燕音

燕音

随笑

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

宿好

石鏡

石鏡

石鏡

ばら

ばら

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

随笑

石鏡

石鏡

暮津

ねず

ねず

もも

さざ

ばら

ばら

すつかり春我等がビルも霞に入る

ばら

春を感じ来してふ朝の顔に遇ふ

ばら

醜男ぶのぶの面持ちの春不鯛ぶだう

ばら

吾ぶが病ひは僧帽あぶり弁閉鎖べん不全べんなれば
心臓しんざうの戸口この直ただし春はるにせむ

ばら

春は華はなやぐ音色ねいろ即興曲岩木

燕音

大津繪おおつの春さきどりの藤娘

燕音

春櫻はるゆとりをもつて眺めけり

宿好

俳人はい諸氏しよ口を揃えて春の詠うた

随笑

馬頭尊春は名なのみの野辺の風

随笑

春や春蕪村の武陵桃源圖

随笑

春鶉はるがやがやフェリーターミナル

寒暑

花摘み部落
房総の春の襖あはを引きにけり

寒暑

餃子リヤンコと注文入れる春の飯店

寒暑

やつと春はるやつと水黽みづくま頭あたまてる池

寒暑

銭洗せん弁べん天春てんは巳みの日の験げんあらな

寒暑

うたた寝うたたねの風太郎かぜたろうにも隅田すみだの春

寒暑

春はるの瀬戸せと原付はらづきバイクバイクでタタタタと

寒暑

渡し賃わたし七十五ななひつご円えんよ瀬戸せとの春

寒暑

瀬戸内にモデルになりし島あれば
波なみたぶたぶひよつこりひようたん島の春

寒暑

瀬戸内のおむすび大の春の島

寒暑

瀬戸内を雑貨ざっかなど積み春の船

寒暑

一茶も入りし湯なれば
道後の湯ゆ願ねがひまで浸ひたかりおらが春

寒暑

夫婦ふうふして啜すするや春のざるぶっかけ

寒暑

曇曇り空春からは何處どこかで足踏あしふみして

素抱

樹樹々にこゑ懸かけて廻まわれる春そこに

素抱

三春さんのここに始はじまる濤うしほの音

素抱

介護かいごバス来るを婆待ばまちつ春なれや

素抱

春告はるげに来る風今か今かとも

素抱

来る筈はずの春はるが何處どこかで道草みちくさす

素抱

鴨蹴かみつて水裏みづうら返る春なりし

素抱

春なれや土搏つちつ雨あめの返点

素抱

宝籤たからくじ春はるの陽気やうきに乗せられて

素抱

名ばかりの春嘯せういて反れる月

素抱

はたきなどばたばた春の楽器店

素抱

春なれや見上げてチャンチンモドキの木

素抱

まなかひに礼文らいぶん近ちかみて春かもめ

素抱

フェリー利尻島追おふ春の鷗うの数減りて

素抱

留萌川留萌本線春景色

素抱

春になり雀鳥すずめと名の付く草

素抱

翻車魚はんぐるまの肝かん和わえ春と思ふべな

素抱

春招く和菓子「きざはし」段葛

雛飾る孫二人目の春なりけり

「国芳 暁斎なんでもこいッ展だィ！」展
荒ぶ世の春をどっこい暁斎展

平潟湾

ある時は吹雪くが如く春鷗

立読みの春の園芸雑誌かな

●立春 春立つ 春来る

立春の夜を馳すバスは光の函

日まみれの梢立春過ぎてゐし

立春のいつか過ぎをる机かな

鳩の眼のくりくりけふは春立つ日

立春のリビング・ルームに鳥影さす

立春の日に当たりたく庭に出づ

立春の肉屋の前を通りけり

春立てる空に闕のあるごとし

立春の半島へ発つ踊子号

立春の一語を以て押し切られ

半島の山に春来とやって来ぬ

安房へ船立春を経て海大人し

立春の洋上に我解き放つ

立春を相変はらずの坊主山

春が来る港鷗のモニュメント

●二月

赴任告ぐ便り二月のワルシヤワより

杭打ちて二月の蚯蚓驚かす

●寒明 寒明く

大楯の幹のざらりと寒明くる

雑木山百度鳴りて寒明けぬ

寒明と探りを入れるやうな眼を

シベリヤを食せばいよいよ寒明くか

寒明けとふんぎりつけるやうに云ふ

●雨水

こんにやくのさしみふるふる雨水かな

●魚氷ういひに上る

魚氷に上りつらきめに遇ひにけり

先達の魚氷に上る句を鏡

●早春 春さき

春さきのテツポウウオの口捌き

春先の風邪こじらせてああしんど

春先の牡丹の手入れもくもくと

石鏡

石鏡

暮津

暮津

暮津

さざ

ばら

ばら

宿好

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

素抱

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

燕音

宿好

さざ

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

素抱

さざ

素抱

ばら

燕音

宿好

●春めく

えいほうと松も春めく東海道
春めくと家路半ばにして思ふ
春めくと探りを入るゝごとき日差し

ばら
宿好

腰痛の抜けず日差しは春めけど

寒暑

春めくやまんぼうの絵の防波堤

寒暑

一寸だけ春めく山の花きぶし

寒暑

クロツカス一輪春めく日も一輪

素抱

鳩日比谷公園を見て憩ふ視線も春めけり

素抱

手品にも芸風ひらひら春めく指

素抱

遠浅の海と聞くさえ春めきて

素抱

●春浅し 浅春

浅春のカクテル光線エノケンに

ばら

梢見てあゆむ乃木坂春浅し

ばら

浅春の男波女波をおっぺして

鳩信

浅春の闇のとりもつ睡りかな

鳩信

浅春の櫂に鴉のむかう向き

宿好

浅春の横にひろがる濤の音

素抱

春は未だ浅く塔婆の前のめり

素抱

玻璃に風どすんとばかり春浅き

石鏡

●睦月

信念の重み睦月の一家集

燕音

睦月に逝き世の寸法に合はぬ人

随笑

悼みごと重ねて睦月如月と

随笑

しるがねに著我は睦月の日を返し

暮津

●旧正月 旧正

旧正のはつかに拳がる沖つ波

ばら

旧正の髻を振り振り鯉寄り来

寒暑

旧正の妻の手を借りぎっくり腰

寒暑

●二月尽

手を遣りし先に首筋二月盡

石鏡

●初午 一の午 午祭

八幡宮宮司を上座午まつり

宿好

その中に新きさらの鳥居も一の午

宿好

午まつり氏子ら煎餅座布団に

宿好

●針供養 針納

貴女まあお変わり無くてと針納め

宿好

つつみ紙楚々と開きて針納め

宿好

針納む美風普く傳はりて

宿好

この道で生活たつき立て来し針供養
 まなうらにミシン踏む母針納め
 紅絹もみいろに浅草の空針納め
 鼻の上にちよこんと眼鏡針納め

●雪解

雪解山降り注ぐ日は天蚕糸
 小赤沢部落駆け抜け雪解水
 雪割れの雪を山毛櫟の根受け止めて

●残雪

残る雪

残雪秋山郷と越後訛りが耳元で

残雪の引つ掻き傷めく羅白岳
 林に雪田に雪村に残る雪
 町木はヤチダモ残雪うち敷きて
 道北の残雪退いて里青む
 隈笹に残る雪見て最北端

●雪間

畑隅の雪間の桐のつくねんと
 戸隠山の裏手雪間の露のしゅうとめ
 山毛櫟描くコンテさくさく雪間どき
 人間にくびるゝところ雪間の温泉
 家ぽんと置いて名寄の雪間かな

●薄氷

うすらひ

うすらひをつつとと鴉浄瑠璃寺
 遊び田のうすらひつつく三日かな

●冴返る

寒戻る

同じ道黙し戻れば冴え返る
 眼鏡のつる擦れし一处寒戻り

●春寒

月あるも寒さしぶとき戻り道
 利尻町春寒灯の入る赤提灯
 春寒の家押す風の音どすん

●余寒

残寒

十二神将一体修復中余寒
鎌倉を驚かしたる……
 素破こそとばかり余寒は詠むべかり
唐人お吉経営の店
 安直楼余寒車軸を流す雨
悼 下田稔さん
 祖光浄稔信士と余寒の掌になぞる

出勤の一人一人の余寒顔
 ぶらんこの下の余寒の水たまり
 川明り余寒明りと云ふべきや

宿好

ばら

燕音

宿好

燕音

燕音

寒暑

素抱

素抱

素抱

燕音

燕音

宿好

宿好

素抱

ねず

寒暑

素抱

石鏡

宿好

素抱

石鏡

もも

さざ

鳩信

燕音

宿好

寒暑

素抱

残寒の竹林に首さし入れて

素抱

●春一番 春一

春一が蒲団落としてゆきにけり

さざ

●猫の恋 恋猫

恋猫の彼奴此奴が庭通る

もも

恋猫のこゑを真似して通りけり

さざ

恋猫の何にのぼれる爪の音

さざ

恋猫の往き来にそぞろ心かな

ばら

恋猫の老嬢坐り直しけり

ばら

恋猫の香油のやうなこゑを曳き

ばら

須らく恋する顔の猫であり

ばら

恋猫は日に膨らめる瞑想家

ばら

恋猫の季節と云ふか黙らっしやい

燕音

恋の猫別誂えの声を出す

燕音

三一の弥太郎戀猫徘徊す

宿好

恋猫にうって変はれる日も近し

随笑

首筋を吹かれて恋の猫となる

随笑

あひびきのわが世とばかり恋の猫

随笑

恋猫の恨みがましきこゑ収め

寒暑

恋すてふをみな猫の富士額

寒暑

猫の恋人目なんぞにおかまいなく

素抱

●ごんずい

ゴンズイの吼ゆるが如く息継げり

ばら

●諸子魚 諸子

みづうみに諸子取れ出す白伊吹

燕音

●鱧 細魚

水切ってサヨリの鼻の尖る訳

ばら

細魚嬢看護婦寝起きの声掛けぬ

鳩信

スタイルは細魚に優る水着かな

随笑

●野焼く 野火

夕野火のうさぎの耳のやうな炎よ

ばら

●焼野 末黒野

末黒野ゆく雲のすこぶる女性的

ばら

末黒野の芒夜盗のごとくなり

ばら

●山焼 山火 焼山 山焼く

気紛れな山火すすつと山の肩

ばら

溶岩原に向かふ山火の急先鋒

ばら

山火爆ぜ爆ぜては山を呑む勢ひ

ばら

なまくらの山火道端焦がしをり

ばら

燃えさしに山火の火力そこそこや

山火果つ白きは蓬の灰ならむ

たつぷりと日を浴み山焼き前の萱

山焼きの付け火ちよんちよん小走りに

手をゆるくつなぎのぼれり山焼く火

焰ほむらほむらを呑んで大きく山焼く火

山焼きの灰のわらわら頬を打つ

山焼に煤けごころを払ひけり

焼山に月の出かかる母郷かな

焼山の段だら縞に日の新た

通り魔に遇ひし面持ち焼山は

焼山の焦げ目曼陀羅日表に

焼山は心腹の友さながらに

焼山の灰のほろりと道よぎる

山を焼く煙くすりと上りけり

山を焼く音の漣火の漣

太陽の坩堝真上に山を焼く

●猫柳

猫柳一言云ひて皆触るる

猫柳だいぶ陽気がよくなつて

●クロツカス

陰る日に臆病咲きのクロツカス

クロツカスぐらと地表を吹ける風

クロツカス一輪春めく日も一輪

●片栗の花かたくり かたかご 堅香子かたかご かたくり ほくり

橋本 かたくりの里 かたかご べんべんべんと堅香子反り返り

つんのめり咲きのかたくり風受けて

控え目になほ控え目に花かたかご

かたくりの花のまだ咲く鄙曇り

かたくりの花のむつり右衛門かな

かたくりの花の貧乏揺すりして

ほくり咲き秋田支藩の武家屋敷

●雛菊 デージー

このところデージーに凝る庭の主

●春菊

仕事かたし来て春菊のごまよごし

●菠薐草 はうれんそう

さんざんな日の食卓にほうれん草

菠薐草妻奨めればそろと箸

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ねず

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

もも

素抱

ばら

宿好

素抱

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

宿好

素抱

宿好

宿好

随笑

好き嫌ひ直らぬ齡はうれん草
 谷戸冷えてはうれん草に甘味増す
 茹であげてこれっぱかりのほうれん草

●洲浜草 雪割草

雪割草風透き通るこの辺り

●節分草

節分草節分草と尋め歩き

●蒨の臺

かたまつて仏の裾のふきのたう
 雪溪の端まで二三歩ふきのたう
 ふきのたう月例会に持ち込み
台温泉 ばっけは蒨の臺
 地酒酌むばっけの佃煮肴とし
わっさむ
 和寒の防雪林横ふきのたう
 ふきのたう全島まかなふ発電所

●クレソン

クレソンの根方素通りせる水音

●海苔

海苔拾ふ 海苔拾ふ
 海苔巻のすこし乾ける遅日かな
 海苔拾ふ海苔の如くに漂ふて
 逆光に海苔掬ふこと百万遍
 海苔育つ海は広いな大きいな
 海苔拾ひなどに精出し二月の日々
 ぞんぶんに海苔拾ひして手近な海
 流れ海苔鴉のごとく翔けるあり

●梅 梅林 白梅 野梅

早咲きも早咲き明王院の梅
 園の梅何分咲きかと確かむ風
 真向より烈風を受け咲ける梅
 梅は了り杏咲きそめ桃半ば
 曇日の目許ぼんやり梅咲けり
 五分咲きの梅と聞きしが嘘ばかり
 咲くときは一緒と梅の賑やか好き
 頃合ひを見計らひ咲く梅律義
 梅咲かせて廻る美風吹く日なり
 梅咲いて方代無心を乞ふた寺
幕山梅の里
 おてんと様通して畑の梅咲ける
 重心を移してみるや梅の花
 梅の花スケッチ型染作家かな
 をみならの眉のほとりの梅の花

素抱

石鏡

暮津

宿好

素抱

ねず

さざ

宿好

寒暑

素抱

素抱

燕音

さざ

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

もも

さざ

さざ

さざ

ばら

宿好

寒暑

素抱

石鏡

暮津

暮津

燕音

燕音

素抱

城郭の一部をなせる梅の花	石鏡
実時の文庫跡地梅早し	暮津
梅早し紅葉が谷といふところ	暮津
寄り道の官幣中社の梅早し	暮津
梅林を歩いて見むかもう少し	もも
梅林をざつと見て来ぬ鼻つ風邪	もも
梅林は蒼ばかりで素っ気なし	宿好
梅林に鋏と鋸の剪定音	宿好
梅林の剪定済めば鴉が来	宿好
一通り梅林を見て引き返す	宿好
月ヶ瀬梅林の烏梅を産す梅どころ	寒暑
梅林を一巡りして退場す	素抱
梅屋敷の歌碑に梅の風	素抱
狂歌堂真顔の歌碑に梅の風	素抱
平日の梅林に人こんなにも	素抱
梅林に吹き募る風尽きるなし	素抱
ともかくも交通不便この梅林	素抱
刮げ落とす梅林の土しぶときを	石鏡
白加賀の老来ますますかほる花	寒暑
白加賀に長居豊後に又長居	素抱
白梅の薬ばつちりと雨後の山	ねず
紅梅の上白梅をわたりし風	ねず
白梅の日向を開き呉れるごとし	ばら
白梅のはたと膝打つ明るさに	鳩信
白梅の客気類さす風の中	素抱
そっけなき彩の白梅眇に	石鏡
風邪に臥す一日梅の光りさま	ねず
巨福山梅の活潑淫地かな	ねず
清湘老人呼びに遣りたき里の梅	ねず
風の中梅の徒長枝日を恋へる	もも
つまさきだち緑萼梅を嗅ぐ男	もも
ぬかるみに嵌り其処より梅を見る	もも
鎌倉の梅がよかると連れ立ちて	さぎら
海東の法窟の梅心当て	さぎら
まんまると梅の蒼を誉むるこゑ	さぎら
梅かをるをみな引目鉤鼻に	さぎら
その梅は豊後と告ぐる破裂音	さぎら
天神の梅に祝詞の出だしかな	さぎら
かつかつと寿福金剛禅寺の梅	さぎら
事旧れど杉田の梅を偲ぶべう	さぎら
叡尊の鎌倉下向も梅の頃	さぎら

好意ありがたく綻ぶ梅のなか
建長寺 巨福山梅は五百木に先立ちて
下曾我 流鏑馬 下曾我の梅皚々の方十里

老梅の老梅たる枝苔生す枝

吉川英治邸 新平家書き継ぎし部屋梅の影

枝ぶりも宜しく古梅範を垂れ

山の梅疾うに匂ひの飛んでをり

とつつきの梅の一輪嗅ぎゐたり

酷寒に打たれて覺めぬ梅の性しよう

梅汚れ番の目白来ずなりぬ

梅ふふむ月も半ばのこゑきけば

尋めるなら何處そこの梅囲み記事

寺町の梅の遅速を見て歩かむ

妙法寺 江戸に名を取りし杉田の梅の裔

烈風もものは梅の俠気かな

強情な野梅の枝と見て過ぎし

魁の梅好き者の一団か

梅好む齢となりて佇めり

梅の上に聳ゆ富嶽も相模ぶり

建長寺 節分会 鎌倉五山一位禅林の梅固し

扁額 梅万蕾爆けて「天下禅林」に

少しもの足らぬ花数ハケの梅

梅汚れゐる頃ならむ瑞泉寺

おにぎりの包解く音梅ほとり

小松屋石材店 界限で一、二の容姿石屋の梅

亡き主の目利きのよくて石屋の梅

●梅見 観梅

梅を見て廻る歩幅となりゐたり

風すこし出できぬ梅見切り上げむ

梅見ての余生などとはとんでもない

梅見客熱海の見番うち過ぎて

観梅におもむく一団前を行く

通りすがりの人の云へる 癌といふ爆弾抱え谷戸梅見

梅を見に人出ぬうちの瑞泉寺

●紅梅

紅梅にもつとも近く女ごゑ

紅梅の上白梅をわたりし風

紅梅の中へ一步の夕ごころ

紅梅を見合のごとく見てをかし

ばら

ばら

鳩信

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

暮津

暮津

さざ

さざ

宿好

随笑

素抱

石鏡

暮津

ねず

ねず

ねず

ねず

紅梅の下土踏めばほこほこと

もも

しぶしぶと煤け紅梅咲き出せり

もも

紅梅に紅梅のとりよき間合

さざ

黒髪に吹きつける風紅梅へ

さざ

眼の馴れてつまらぬ彩の紅梅よ

さざ

紅梅に赤坂小梅あざさ顎引き

さざ

紅梅の雨滴とろりと枝をつたひ

さざ

紅梅の雪洞咲きに遍き日

ばら

紅梅の一二輪ほど好意に似て

ばら

老紅梅能う限りの花付けて

ばら

紅梅に寄りくるひとりふたりかな

ばら

紅梅は生菓子ほどの湿りもて

鳩信

紅梅のいろの飛びたる訪問着

宿好

紅梅の蒼ぼこぼこ鉛筆描

随笑

紅梅に佇めば土ふかふかと

素抱

紅梅を丹念にみる夫婦もの

素抱

紅梅に侍りて一言あるべきか

素抱

●鶯

箸置に箸鶯の幼なごゑ

ねず

うぐひすの笛方雀の囃子方

ばら

うぐひすのこゑの又せり坊隣り

燕音

久遠寺の南無妙鶯ほうほけ経

燕音

鶯の伝来のこゑ破綻なし

素抱

鶯の啼くや母音を先立てゝ

素抱

湯島天神女坂下うぐひす来

暮津

●眼白 目白

笹子来と云へば目白と正さるる

ねず

目を止めし目白の側に目白ゐて

さざ

逆しまに止まる目白を目白見て

さざ

目白捕る鸚をコツコツ叩きをり

さざ

梅汚れ番の目白来ずなりぬ

宿好

目白翔ち目にも止まらぬ一を引く

素抱

一通り見せ呉れ目白の軽業芸

素抱

●山菜黄の花

パツパツとさんしゅゆの黄を振撒ける

もも

蒼解くさんしゅゆ雨を心待ち

もも

山菜黄の黄にむらありて鄙曇

もも

さんしゅゆの鶉色に母屋没しけり

もも

さんしゅゆの葉裏に蜂の小さな巢

もも

山菜黄の一昨さきおとついで昨日より咲けるとや
 花さんしゆゆ日差しに斑まだらのありにけり
 花山菜黄いり玉子めき夕日中
 山菜黄の向ふ側より差し込む旭
 山菜黄の弾けてぼつと夕日中
 花つけてとっても寒き日の山菜黄
 さんしゆゆの炒り卵たまご咲き朝の日に
 このところ霞む記憶と山菜黄と
 山菜黄と云へば和菓子わがしの黄味しぐれ
 日に痴おぼれし山菜黄日々の眺めとし
 山菜黄の日暮れ惜しまむ片田舎
 山菜黄の黄が開け放つ朝なりき
 山菜黄が咲いて初陣めける日よ
 山菜黄咲く笙・箏すずの樂あらな
 王道は山菜黄の黄を貫きて
 山菜黄に日はまだ粗あらき洗濯物
 渋さとは恰好よさとは山菜黄咲く
 さんしゆゆの持ち味曇れば曇なる形
 さんしゆゆの花了ふ翳がよぎること
 帝王学山菜黄明り取り込んで
 どうでもよいやうに山菜黄なりにけり
 寔れもう取り繕へぬ花さんしゆゆ
 さんしゆゆの黄を振り撒くは善意に似て
 さんしゆゆ見えて思ひ当たるとは鈺かざりのいろ
 さんしゆゆの彩いろさせる芽の暮れかかり
 ●まんさく 金縷梅きんるばい 満作 万作
 まんさくのカイゼル髯の風そると
 まんさくに昼の風向きかはりけり
 まんさくに四通八達風のみち
 桃・満作咲きてとんとん拍子の春
 満作の花ろうたげな氣息かな
 満作の昼素通りの郵便夫
 満作の小出しに咲ける臆病花
 金縷梅の黄色は中華菓子ちゅうわがしのいろ
 まんさくの隙間だらけの花愛す
 支那満作風に緩みの見えにけり
 満作はお天道様のおかげ咲き
 ヒトラーの雄辯満作前にして
 満作の鉤かぎ 十字靡まかせて
 万作は微風を糧として漫ろ
 さざ さざ さざ とも さざ さざ とも さざ さざ とも さざ さざ とも さざ さざ とも さざ さざ とも さざ さざ とも さざ さざ とも

石鏡

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

さざ

さざ

とも

石鏡

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

寒暑

寒暑

随笑

随笑

宿好

宿好

ばら

さざ

さざ

さざ

● 下萌 草萌

母上に八十八度草萌えて

石鏡

● いぬふぐり

もろともに路肩と崩れ犬ふぐり

もも

大空のもとの祭典犬ふぐり

随笑

犬ふぐり一寸離れて牛はこべ

随笑

犬ふぐり浴びる旭の真新し

寒暑

犬ふぐり屯す郵便受の下

寒暑

犬ふぐり川はなめらか音立てず

素抱

犬ふぐり殊勝といふに余りある

素抱

犬陰囊あらぬ文ン字をあてがはれ

素抱

犬ふぐりひとつこひとり来ぬ山に

素抱

登り口オオイヌフグリちりばめて

素抱

犬ふぐり心許なき日影得て

素抱

犬ふぐり集落のごと点在す

素抱

● 君子蘭

遣る水をじはつと吸へり君子蘭

さざ

● 若布 若布汁

若布汁これはやっかい吸ひつく蓋

素抱

利尻メカブおじやうましよ当店は

素抱

● 実朝忌

大挙して実朝の忌の沖つ波

さざ

● 碧梧桐忌

碧梧桐忌法外な寒ンもたらせり

もも

● 鳴雪忌

孫の手が何處にも無くて鳴雪忌

暮津

■ 三月

● 三月

人參は三月のいろ煮て和えて

素抱

● 如月

きさらぎも半ばつると虚子の貌

ばら

きさらぎの鋭さを増す木々の空

燕音

悼みごと重ねて睦月如月と

随笑

きさらぎの暦を切つて落しけり

寒暑

きさらぎのどの顔も皆勝れ見ゆ

石鏡

如月の簡に過ぎたる見舞状

暮津

● 桃の節句

お節句に間に合ふやうに桃の咲く

随笑

桃どちのけふは節句と云ひ交し

素抱

- 晴天三日節句を待たず桃ひらく
素抱
- 雛 雛壇 雛飾る 雛あられ 紙雛
雛の日の入日雑木にさし込める さざ
雛かざる干潟色なる夕日中 さざ
雛段に午前の日差しさし込みぬ さざ
表具師の家の黄瀬戸の坐り雛 さざ
陶雛の肩の釉薬明りかな さざ
男つ気世帯大内雛飾る ばら
雛調度牛車ぎっしやより誰が降りにつむ ばら
内裏雛目の付くところに骨董屋 随笑
雛壇に享保男雛のしゃちこぼる 随笑
雛飾る日より日差しのやはらぎて 随笑
独りごちつゝ置きゆける雛道具 随笑
玄関に飾られ小物雛ばかり 随笑
雛見つむ雛より細き目つきして 随笑
箸置きさしの陶のひひなも飾りけり 寒暑
雛飾る妻は件の手付きして 寒暑
さしあたり雛の調度を並べみん 寒暑
もう一彩むらさき欲しき雛あられ 素抱
紙雛に倒れ易くて金屏風 素抱
小物いろいろ殖えし雛を飾るかな 素抱
略式も略式雛飾りけり 素抱
雛壇のありし辺りをかい撫でぬ 素抱
只横に竝べてひひな飾りけり 石鏡
雛飾る孫二人目の春なりけり 石鏡
お茶の間を彩どるものに雛あられ 暮津
- 流し雛 雛流す
三浦半島 芦名 淡島様
雛流しぼつんと来たる鹹き雨 素抱
雛流し催す宮の五百椿 素抱
雛流し椿の宮の直下より 素抱
細れ波ひひな流されゆくわいな 素抱
- 闘牛 牛角力 牛合せ 牛の角突き
虫亀闘牛場
山古志の牛の角突き一番手 寒暑
横綱牛幸左衛門に祝儀花 寒暑
横綱牛藤七相手をじろと睨め 寒暑
其の上の牛の角突き二十ヶ村 寒暑
豆虎の怪力見せん牛角力 寒暑
つっかけてごつんと受けて牛角力 寒暑
赤牛が一枚上手牛合せ 寒暑

牛合せ勝者の赤毛引き回され
 牛合はせ三才牛の尾にリボン
 牛合はせ済めば田植が待ちゐたり

●春の雪 春雪

きつぱりと春雪あがる挿木畑
 小競り合ひしながら春の雪落ち来

●春の雹

半島の椎楯打ちて春の雹

●春雷 春の雷

質されて子の口ごもる春の雷
 念を押すごとくに春の雷鳴れり
 春の雷先づは太鼓の小手しらべ

●啓蟄 地虫

啓蟄の足のぶつかる古机
 掘り出され団子決め込む団子虫
 啓蟄やずいと近寄るぶちの鯉
 啓蟄の茶鼠のコピー再製紙
 啓蟄や消炭いろの鯉直進

啓蟄の水蹴破りてドイツ鯉
 啓蟄の石押し退けて何ぞをる
 そつとして置いてくれよとだんご虫
 啓蟄の好きな活字と嫌いな活字
 足出して生けるしをだんご虫

啓蟄の三脚を取り敢えず置く
 雑兵のごとく駆け出すわらじ虫
 啓蟄や元の地番を覚えぬて
 啓蟄や耳掻き棒の塗剥げて
 啓蟄の亀現る苔のにはひして
 穴出づる虫の裡なるだんご虫
 啓蟄のかさぶた剥がす男の子
 でも好きとだんご虫掌に這はせぬる

●蟻穴を出づ

穴出でし蟻目をこする祠の辺
 穴出づる蟻を石もて塞ぐ孫

●鷹化して鳩と為る

鷹化して鳩となるとは莫迦げたる

●東風こち

強東風や焦げ目の残る芦の節
 梅東風に弁財天の膝吹かれ

寒暑
寒暑
寒暑

ばら

随笑

ばら

ねず

燕音

随笑

もも

もも

もも

もも

さざ

さざ

さざ

鳩信

燕音

宿好

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

石鏡

石鏡

寒暑

寒暑

素抱

随笑

ねず

もも

蚕豆まごちの正東風に吹かれ勁き茎
東風吹いてちりめんじゃこの水揚場
行く方を定めず東風の吹ける道

さざ
鳩信

江ノ島の裸弁天東風吹けり

寒暑

●納税期

納税期鴨は汽水に遊びをり

随笑

●春の服

春服に鶴のマークのクルー嬢

寒暑

●春シヨール

連れ立ちて仲見世をゆく春シヨール

宿好

●春の山

澁油こしあぶら採りにそろそろ春の山

随笑

●山笑ふ

もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木

ねず

●水温む

だいぶ水ぬるんで来たりすつぽん 亀塚

もも

山椒魚の手足を置ける水温む

さざ

伝説の人魚(海牛目海牛科)
マナテイの身じろげる水ぬるみそむ

さざ

アロワナの腹部をくぐりぬるむ水

ばら

定年がもう目の前に水温む

宿好

水温む池に棒切れ浮いてをり

宿好

水温む水面に顔を持ってゆく

宿好

耳たぶに岸辺の日差し水ぬるむ

寒暑

そんなことしなくても水温みけり

素抱

●春の水 春水

ひかりつゝくびれてながる春の水

さざ

草の中鳴りをひそめて春の水

ばら

鳴る處見つけて春の水鳴れり

ばら

ちよろちよるとちよろつと春の水ながる

ばら

さきざきに鳴りてことごと春の水

ばら

川いっぱい使って春の水ながる

鳩信

春の水黙ってゐても春の水

燕音

春水といふ輝きに不足なし

寒暑

水音みおとまたおろそかにせず春の水

寒暑

小さき段差ありて水鳴る春うたた

寒暑

春の水鳴るか鳴らぬか身を屈め

寒暑

春水に河馬のうたた寝四六時中

寒暑

庭土に滲み込むまでの春の水

素抱

かりそめに春水の翳生れては消ゆ

素抱

春水といふこゑ大きめにでて
春水に小鷺の臍の惚れ惚れと

石鏡
石鏡

●春椎茸 春子

春子盗る猿は「さうさな十五頭」

ばら

●蝮にな 蝮の道

判じ物めくなり蝮のけふの道

随笑

蝮の道筋書き見えぬコントに似

随笑

御天道様蝮の道たること證す

寒暑

行先の皆目判らぬ蝮の道

寒暑

蝮の道思へば遠くへ来たもんだ

素抱

蝮の道当てありさうで無ささうで

素抱

●田螺

ひつじ田を田螺のあるく鬼無里晴れ

ねず

泡吐いて能事終れり大田螺

ばら

ボヘミアン田螺の唄が聞こえ来ぬ

ばら

日の下に田螺の大愚どちやうの愚

ばら

水面這ふ虫に田螺の大雁塔

随笑

●蜺

はげちよろの蜺の尻のすまし汁

宿好

蜺は朝鰻は午後と漁仕分け

随笑

●春休み

ジャンボ機の胴にミッキー春休

寒暑

ドラエもん映画ねだられ春休

石鏡

●入学試験 受験

末つ子の受験に励む太郎月

さざ

●水草生みずくさふ

湧水にミシマバイカモ波打てり

随笑

ががああと家鴨が鳴いて水草生ふ

素抱

●畦青む

横柄な遠野鴉に畦青む

宿好

田起しの小田の畦草なまなまと

宿好

畦青み雪嶺しざり秩父別

素抱

●春の川

春の川渡りとよもす東横線

石鏡

●御水取 水取

仏都奈良馬酔木が咲けばお水取

寒暑

お水取近づく空を風の行

寒暑

水取に少し間のあり鹿せんべい

寒暑

お水取ホカロン売り込む茶屋親爺

寒暑

お水取諸注意を先づ奈良県警
水取待つ人の頭かしらのぐらぐらと

寒暑

お水取肩の火の粉を払ひ呉れ

寒暑

水取といふ営みのとこしなへ

寒暑

劫初の火劫初の水のお水取

寒暑

声つぶる僧の声明お水取

寒暑

くらやみのなかの相伝お水取

寒暑

お水取矢来を焦がす粗火の粉

寒暑

千年の口伝が生きてお水取

寒暑

行僧のいっしょうけんめいお水取

寒暑

お水取上堂松明天華とす

寒暑

お水取耳で観みること覚えけり

寒暑

●春場所

春場所の土を噛んだるはたき込み

素抱

春場所のとんだ所ではりま投げ

素抱

●涅槃

涅槃圖を二人がかりで懸けたへぬ

もも

伊東若冲 野菜涅槃図
二股のすずしろ涅槃し給へる

ばら

野菜涅槃図葱の高足侍りけり

燕音

お涅槃の日の青空を鳶ながす

随笑

建長寺ご坊雲集お涅槃会

随笑

涅槃会の杳音巡る御仏殿

随笑

涅槃会の腹の底より楞嚴神呪りょうごんしゅう

随笑

常磐木の青勝る日の涅槃講

随笑

涅槃図に坐り直して魅入る人

随笑

横たはる様は涅槃の自然生じねんじょう

随笑

涅槃図にたるむ処無し増上寺

素抱

●涅槃西風

浦浪の頭をもたげくる涅槃吹

さざ

粗樫の葉に吹きつゝのる涅槃西風

宿好

さんしゅゆの古木ぐらつく涅槃吹

随笑

●春嵐

春荒れにとんび揉まれてひようと鳴く

さざ

大風のドンと家搏ち春一途

随笑

佐野美智さん
春荒れに転倒せらるかお大事に

素抱

春荒れの吹っかけ来たる真夜の雨

石鏡

春荒れの叩きつけてはひっぺがす

石鏡

春荒れがつつかけ来りて家が鳴る

石鏡

春疾風聞きゐる我が身がらんどう

石鏡

春疾風それに倍する花吹雪

暮津

●春塵 春の埃

杉本寺

春塵の分厚く赤茶け煤仁王

鳩信

子規堂の電燈の笠春の埃

寒暑

●霧

つちかゝる

身勝手な戦の行方つちふれり

素抱

●鳥帰る 鳥雲に

鳥雲にインターネット日和かな

ばら

鳥雲に年金のこと生活のこと

宿好

「解体新書」挿絵画家小野田直武
鳥雲に直武描きし人體圖

宿好

鳥帰る電気自動車走る世も

随笑

足型に三種類あり鳥雲に

寒暑

鳥雲に性懲りもなく戦すか

素抱

鳥雲に人は葬り葬られ

素抱

些少の借り皆持ち合はせ鳥雲に

石鏡

●春の鴨 残る鴨

のほほんとしてゐし鴨の残されし

素抱

●帰る雁 雁帰る

雁引くや荒布色なる島の子ら

ねず

雁ゆかせ津軽よされの高調子

燕音

●彼岸 彼岸入

倒れたるまゝの一杖彼岸講

ねず

雨闇に紛れ降るなり入彼岸

随笑

●彼岸詣 彼岸団子

預けおく彼岸団子を帰るさに

さざ

●枝垂桜 糸桜 紅支垂

いとたやすく花の抜け落つ糸ざくら

さざ

いのちなが
寿 身延詣での紅支垂

燕音

糸桜糸よりかけて身延山

燕音

白妙の昇竜となり糸櫻

燕音

腕によりかけてこれより糸桜

宿好

角館郵便局の糸桜

宿好

●開帳 出開帳 御開帳

善光寺

出開帳力む仁王の脇抜けて

ばら

香煙を掬ふ手ぬつと御開帳

ばら

人混みよりわが身抜き取る出開帳

ばら

開帳寺門前臨時郵便局

ばら

出開帳頭つむじの間のご本尊

ばら

●修二会 小松明

ばら

板東者我ら修二会に参じたり

寒暑

修二会見物茶屋の親爺が先導す

寒暑

チヨロ松明が三本上がる二月堂

寒暑

修二会僧大松明をぶん廻し

寒暑

老若の目鼻ふすぼるお松明

寒暑

お松明拝火教徒にあらねども

寒暑

お松明招福火の粉撒き散らし

寒暑

火の粉浴び修二会警護のおまわりさん

寒暑

●暖か

膠釜あたたかく年送るかな

ねず

これ食うて茶をのめとまるあたたかや

ねず

暖雨去りうぐひす餅のやうな島

ねず

三椶の暖雨まみれに岐るゝ枝

さざ

ダチュラ咲き当地至つて温暖な

さざ

やまもの巨木なるほど温暖な

さざ

あたたかや寺門に並める通用門

さざ

来し闇もドアのノブも暖かく

さざ

浜に出てほんわかあつたかさうな雲

ばら

海渡りさくら咲かせに一暖雨

ばら

七抱大楠たつぷり暖雨吸ふ

ばら

*河津七抱七楠の唯一の現存木

ばら

恰幅よき蘇鉄に朝の一暖雨

ばら

暖くなりて砂場の砂いじり

宿好

心臓の温み掌移し賓頭廬さま

素抱

毛むくじやら齒朶打つ暖雨生々し

素抱

訛り暖かガイドは礼文高校出

素抱

●初蝶

初蝶をエイゼンシュタイン流に撮れ

ばら

●雉

雉のこゑ天気予報をくつがへし

さざ

雉子の目のやうな水輪を冬泉

ばら

三浦勲氏一周忌 富士岳麓 本門寺

随笑

うらうらと雉子歩まんか汝の忌日

随笑

三浦夫妻同墳にねむれば

随笑

●雲雀

雲雀落ち尽し河口の高曇り

ねず

隔たりて同じ雲雀を見てゐたり

さざ

昼過ぎの雲雀のこゑの中弛み

さざ

田雲雀の揚りどうしに喉乾く

随笑

天空へ喉のすりへるまで雲雀

寒暑

● 燕 つばめ 乙鳥 つばくろ つばくろ つばくら 初燕 燕来る

つばくらめこゑの徹れる看護婦来て

ねず

路面電車ひよいと除けゆくつばくらめ

寒暑

つばくらの眼を借り天橋立図

寒暑

つばくらめカレーの市民の頭上越え
西洋美術館

寒暑

巫浪生家跡つばくろの真かがやき

ねず

かすめゆきしものつばくろでありにけり

さざ

つばくろは鰻絵の速さ内子町

寒暑

内子座の前でつばくろとんぼきる

寒暑

甲斐駒岳を前にのけぞる乙鳥
かいこま

さざ

乙鳥に乙鳥いろの朝鮮人参小屋
塩田平 かんじん

ばら

長良川朝風乙鳥吹き上げて

ばら

乙鳥飛び海道筋の大社
三嶋大社

随笑

燕来ぬ海の玄関横浜に

さざ

大潮の日と聞く燕ふりあふぎ

ばら

泥運ぶ燕律儀に栢山村
尊徳生地

鳩信

燕くる畑毛温泉湯はぬるめ

随笑

燕来と先に云はれてしまひけり

随笑

ようこそと宿の燕がとんぼ切る

随笑

峡燕群れていちにち暮れにけり

随笑

燕の糞掃きて湯宿の番頭さん

随笑

旅の衆朝が来たよと峡燕

随笑

金比羅参り燕出入りの一服茶屋

寒暑

出雲崎燕街道貫けり

寒暑

其の上の金の荷揚げ路燕抜け
かみ

寒暑

観音の胸元よぎる初燕

素抱

遠刈田郵便局に入る燕

素抱

大道芸立見燕が頭を掠め
野毛大道祭

石鏡

逗子駅前ああやっぱりと燕見き
湯本

石鏡

弥次喜多の湯とや燕に軒を貸し

石鏡

夕燕揚げて時報は「箱根山」

石鏡

後生掛の燕挙げをり地獄谷

石鏡

燕ゆく方が海なり逗子銀座

暮津

● 海豹 あざらしあざらしの腹の上なる春入日
宗谷岬

素抱

● 春雨 春の雨 春驟雨

春雨のほろつと零るゝところをみる

ばら

総領事ハリス出府圖春の雨

鳩信

春雨に濡るる石手寺石手川

寒暑

土佐鶴に鱻の湯晒し春の雨
春驟雨船端叩く川蝦漁

寒暑
寒暑

四万十の橋四万十の春の雨

寒暑

春雨にぐにやりと曲る土讃線

寒暑

突き立てしシャベルにしとど春の雨

素抱

●春泥

春泥をぬぐひて詣づばたもち寺

ねず

春泥をぶつぶつ云ひつ脱しけり

ばら

●ものの芽

ものの芽に大きくなりぬ雨の音

さざ

家々の立つる物音ものの芽に

ばら

ものの芽どきその辺歩いてくるといふ

燕音

ものの芽も盛岡弁ももそもそと

宿好

面白うなりて社の万よろずの芽

随笑

豆の芽のどれも万歳してゐたる

石鏡

●芍薬の芽

目立ちたがる芍薬赤芽雨催ひ

ねず

●蔦の芽

蔦若芽爬虫類館蔽ひけり

ねず

蔦の芽のあかあかおつつけ降り出さむ

もも

●春の土

ワラビーの前脚春の土突きて

さざ

鉢小物持出し春の土いじり

宿好

すってんと転んで掴む春の土

宿好

蟻喰いのそはそは春の土を嗅ぎ

寒暑

●種物 種袋

箱蒔きの花種うんともすんともや

ばら

種袋振り回しつゝ喋々と

ばら

種袋裏に記しある発芽率

暮津

アサガオと鉛筆書きの種袋

暮津

●花種蒔く

ぐりぐりの夕顔の種蒔きにけり

もも

蒔きものを烏ほじくる正受庵

燕音

コスモスの種を蒔きをり細目して

石鏡

●馬鈴薯植う

馬鈴薯を植え了へはたく手がかさかさ

暮津

●球根植う

球根を植え込みし掌の皺みゐて

暮津

球根を姿勢正しく植えて遣り

暮津

●菊根分 菊植う

食う菊もありてよきもの一株植う

暮津

●菊の苗

買手つく菊の苗より虻立たせ

ばら

●挿木

きつぱりと春雪あがる挿木樹

ばら

●苗札

苗札もびしよびしよに水遣りにけり

宿好

●木の芽 芽吹く 芽木 芽立ち 木の芽風

木の芽山

警策音飛んで瑞鹿山芽吹き

もも

生島足島神社
起請文累々芽吹く杜にて

ばら

色合ひも野暮な櫟の芽吹きかな

ばら

付け足しにそこらの小木も芽吹山

ばら

芽吹かんと樹皮を寄る辺の洞櫟

ばら

柿芽吹き蟹の缺のやうな芽を

ばら

庭木芽吹く頃となりをり下女詰所

鳩信

凡庸な芽吹きの色でありにけり

燕音

朴芽吹き谷川の水段為して

燕音

白樺の芽吹き朝日に眩くごと

燕音

芽吹くなら櫟パッとパッと

宿好

芽吹く山見てみて画法朦朧体

宿好

漫然と櫟は芽吹き初めにけり

宿好

似通った彩して芽吹くみな雑木

随笑

木々芽吹きトビケラも羽化忙しき

随笑

榛の木の子吹きまだまだ天塩川

素抱

榛芽吹き神居古潭かむいこたんの川景色

素抱

里山の見馴れたる景芽吹けるか

石鏡

いつ見ても櫟の芽吹きへんてこりん

石鏡

先づこんなところ櫟の芽吹きとは

暮津

匂ひ立つ芽木突風の過ぎし闇

ねず

豪雪の爪跡芽木に残りけり

燕音

羽ばたいて桜の芽立ち促せる

鳩信

木の芽風吹きつさらしに猿の面つら

もも

先つばに多羅の若木の芽がひとつ

もも

にはとこのふためき出づる木の芽道

さざ

見習ひのガイド訥々木の芽どき

ばら

接骨木の芽と手を添へて申さるる

鳩信

襟立てて越後湯沢の木の芽どき

燕音

- 金沢八景 野島山
 山巻いて有象無象の雑木の芽
 随笑
 接骨木の芽のもし囁くなら平語
 石鏡
 横須賀の海に張り出す木の芽山
 石鏡
 とろとろと木の芽明りの甘茶仏
 石鏡
 つつかけに銭湯を出づ芽出し雨
 ねず
 黒ずめる連翹の芽に雨つめた
 もも
 にはとこの出臍のごとき芽の並び
 さざ
 未完なる塔にしぶけり櫂の芽
 ばら
 馥郁ともくれんの芽のかぶり物
 随笑
 ●芽柳 柳の芽
 随笑
 濠柳芽吹く向うに新聞社
 随笑
 二重橋交番脇の柳の芽
 素抱
 素抱
 ここに来て天気足踏み柳の芽
 素抱
 ●榎の芽 たららの芽
 ばら
 厳しく鹿爪らしくたららんの芽
 宿好
 まんずまんず寄つてたんせとタラの芽売る
 宿好
 ●山椒の芽
 燕音
 山椒の芽午後から降らなきやいいのにねえ
 宿好
 しぐれ聞きちりめん山椒一トつまみ
 素抱
 笹正宗鯉山椒にすすみけり
 石鏡
 酒酌むや鯉山椒に会津っぽ
 素抱
 ●青饅 あをぬた
 さざ
 青饅にはつと気付ける親不孝
 ●菜飯
 ねず
 菜飯食ぶ子にまづまづの志望校
 ●白子干 しろすぼし 白子
 ねず
 大マスクとつて白子の味見せり
 ●干鱈
 寒暑
 炎昼の干鱈の茶漬かつ込めり
 素抱
 干鱈など水に戻してとる昼餉
 ●蒸鱈 むしかれい
 随笑
 貴人のごとく箸付け蒸鱈
 ●鮎並 あてびと
 素抱
 鮎並でありし覗かせ貰ふ魚籠
 ●ほっけ 葉山行
 素抱
 礼文沖ほっけを追ふか木っ葉舟
 素抱
 須古頓の風に揉まれてほっけ干す
 素抱
 父ちゃんと母ちゃん居酒屋焼ほっけ
 素抱
 活ホタテ開きほっけに地酒酌む
 素抱

●海松みる

干潟現る順序がありて海松の海

素抱

●椿 山椿 落椿 藪椿 紅椿 玉椿 赤椿 白椿
椿咲く

一飛鳥椿林をすり抜けて

さざ

喋々と鳥語椿の林なす

宿好

五百椿林寒潮音を断ち

随笑

咏へ性足らぬ椿のまた墮つる

もも

弥次馬のやうに転がる椿見て

もも

法窟の椿ころがる其処彼処

さざ

あほむくもうつつむくもよし山椿

宿好

階きざはし攀はしず足許を見て椿見て

宿好

乗ひさんは椿落つるを篤と見て

随笑

落椿展観幕府滅亡史

素抱

椿落つ小坪の蟹の横這い径

暮津

椿落ち載り損ねたる石畳

暮津

藪つばき他所者を見る目付して

ねず

岬なればこそその日溜り藪つばき

鳩信

これと云ひ見るもの無き中藪椿

素抱

藪椿こんなところで径途切れ

素抱

盗み見をしてゐるやうな藪椿

石鏡

五ツ六ツいやもうひとつつばき咲く男鹿 椿

もも

パツと明るくショウタイムてふ紅椿椿展

さざ

しつとりとリップステイクてふ椿

さざ

この坂道これあるかなの玉椿

燕音

茅ヶ崎 氷室椿庭園
洋椿和椿椿園巡る

宿好

鳥ごゑのときに絶えたり椿園

宿好

早咲きの椿椿と口揃え

宿好

毛糸帽椿の花粉付けて来し

宿好

日月のあかあか椿白椿

宿好

鳶のこゑ島の椿を真つ赤にす

宿好

自生して太平洋に向く椿

随笑

建長寺裏のぼたぼた椿かな

素抱

山椿人目があればはばかられ

石鏡

●茎立くぐたち

鍵一つ掛けて出づ家茎立てり

さざ

茎立や妙にあかるきゆふまぐれ

さざ

茎立や素なる生活たつきにいつか慣れ

暮津

●独活うど

曳売のぶつきらぼうに独活を見せ
獅子独活の藪から棒に恐山

ねず
随笑

● 慈姑くわい

慈姑食ふ似合ひの齡よほひありぬべし
豆も煮て慈姑も湯掻き了へてさて
慈姑食ひもう一波瀾ある世かも

さざ

さざ

随笑

● アス。パラガス

アス。パラガス長けて緑の棒畠

もも

● 分葱わけぎ

分葱買ふ弘明寺観音お膝元

素抱

● 野蒜のびる

野蒜摘む

野蒜摘ちよいちよい摘み処変へにけり

もも

ぶつつりと切れて南無三のびる玉

さざ

蝌蚪探す野蒜摘みには飽きたと見え

寒暑

甘んじて小さき野蒜も引きにけり

石鏡

● 蒜にんにく

にんにくと煙草の話文化の日

随笑

体調を崩してどうする焼蒜

暮津

疎開地静岡 島田
疎開して生にんにくを虫下し

暮津

● 剪定

梅林に鋏のこと鋸の剪定音

宿好

梅林の剪定済めば鴉が来

宿好

剪定の音の小さくはつきりと

素抱

剪定の枝荒括りして段畠

素抱

● 接木

柿接木居坐る雲の雨ぶくみ

ねず

● 苗木植う

ユリの木植え街もモダンに人もモダンに

石鏡

● 苗木市 植木市 苗木売

増上寺総門前の植木市

宿好

苗木売る市立つ即ち散財す

暮津

植木市立つや神社を間借りして

暮津

植木市薔薇前にして施肥講釈

暮津

● 伊予柑

伊予柑を横目八朔買ひにけり

さざ

伊予柑の皮の脂をとばしけり

ばら

伊予柑を凹ます力聚めけり

素抱

伊予柑に手の脂ぎる五十代

素抱

● ネーブル

宇和島のネーブルほとばしりにけり

ばら

●垣繕ふ

垣繕うことも根気の続くうち

寒暑

●屋根替 葺替

葺替職人上と下とで押し問答

寒暑

●卒業

卒業期の渾名キューピーてふ先生

随笑

●霞 春霞 霞立つ

霞立つふるさどに入る遠忌かな

ねず

俳壇の六十余州横霞

さざ

すつかり春我等がビルも霞に入る

ばら

福島は桃桃の花霞

宿好

春霞富士はうたたね決め込めり

随笑

渡り来ししまなみ十橋昼霞

寒暑

紫雲出山瀬戸に霞をもたらせり

寒暑

雪舟の水と霞の勝景図

寒暑

野寒布と宗谷の間の昼がすみ

素抱

利尻島霞もやもや引き出せり

素抱

突き進む船首礼文は霞みづめ

素抱

海上に利尻全容霞切れ

素抱

海上に霞める利尻その内着く

素抱

昼霞天然ガス積む船の影

石鏡

●陽炎

団子虫団子いびつに陽炎へり

ばら

のらくらと陽炎主宰月旦評

燕音

陽炎を搔き分け搔き分け釜石線

宿好

大道芸なべて陽炎ふ自由席

寒暑

●佐保姫

先達てお目に掛かれり佐保姫に

さざ

●春意

水輪生み継ぐ雨以て春意とす

素抱

青き踏む一遍遊行の地なりけり

ねず

心臓にも運動療法青き踏む

鳩信

踏青の三時となれば風冷え来

宿好

相模野の青きを踏み来て手ぶらかな

宿好

●野遊

野遊びにクロワッサンのやうな雲

ばら

野遊びの服を叩いて起ち上がり

ばら

野遊びに女はあてにせずにおこ
野遊びの帰り支度か服叩き

素抱
石鏡

●摘草

摘草の人のくつつき離れたり
摘草の籠はとみれば野かんぞう

素抱
石鏡

●嫁菜

坂がかり円空堂へ嫁菜みち

素抱

●蓬

蓬萌え太鼓の胴のやうな道

ばら

●土筆 土筆摘む

爪弾くつくしの頭よりばと煙
土筆打ちたたき出したる青煙
土筆摘む音のつくづく真昼かな

もも

燕音

燕音

土筆土筆ガウデイの塔ここに建つ

宿好

土筆ぼかんとしてゐるうちに命日過ぐ

宿好

呆けをる土筆と待てる釜石線

宿好

土筆生えコンセイサマの石ほとり

宿好

●蕨 わらび

干しわらび乗りて会津のわっぱ飯

素抱

真清水に蕨の塩抜き湯治宿

素抱

●薇 せんまい

ゼンマイと云ひかけコゴミと云ひ直す

石鏡

●芹 芹摘む 芹田 田芹 芹の水 根芹

手つかずの芹の森あり川向ふ

もも

摘むのは芹ですかえまあたんぼも

さざ

寒芹をこづき湧水馳せゆけり

ばら

水くびれひろがり流れ芹の森

随笑

足許を先づは築きて田芹摘

随笑

芹摘む婆一つ大きく伸びをして

随笑

芹摘める二人話の届く距離

随笑

柿田川根芹に直にあたる水

随笑

春光を芹に振り撒きゆける水

随笑

芹の水女のそれと跳ぶ声す

寒暑

芹摘みにこゑ掛け遣れば佳い返事

寒暑

芹の水干上がる窪地に蝌蚪蝸集

寒暑

ぼちよぼちよと水の流るる芹田かな

素抱

芹摘の中腰に耐え切れずして起つ

素抱

芹の水覗き込むにも先づ足場

石鏡

芹引けばたらたらたらと水一縷

石鏡

晚酌に摘む芹これだけあれば佳し
芹摘の一人ひよっこり頭を擡げ

石鏡
石鏡

●防風

半島のかかと辺りの防風摘む

ばら

●葶 葶草

針通神の薄目にすみれぐさ

もも

門前の小僧のタチツボスミレかな

燕音

幼子に葶のいろを言はせをり

宿好

年々にたちつぼすみれ淡きかな

宿好

庭の土瘦せて葶のいぢけ咲き

随笑

●蒲公英

摘むのは芹ですかえゝまあたんぼぼも

さざ

たんぼぼに村内放送よく通る

宿好

絮たんぼぼ肺活量は人並み以下

宿好

云うてみてトウカイタンポポ佳き名なり

随笑

たんぼぼの絮の一つを壊しみる

随笑

●紫雲英

見そめたるごとくげんげの辺に踞む

随笑

●苜蓿 クローバー 白詰草

クローバを分けるダックスフンドかな

さざ

白詰草いちめん水上バス乗り場

燕音

赤詰草白詰草に勝る丘

寒暑

苜蓿に憩へるハーレーダヴィトソン

寒暑

白詰草真つこと冷たかりけるよ

素抱

八景島 シーパラダイス
蜜月の真つ只中の白詰草

素抱

若者の手をとりあるく白詰草

素抱

遊船の波切り進む白詰草

素抱

うまごやしスキーヒュッテを取り囲み

素抱

●藜 藜

土いじりするりと抜けてはこべの根

宿好

八十路の母はこべら提げて立話

随笑

犬ふぐり一寸離れて牛はこべ

随笑

大地より温泉の湧く鼓動はこべ草

寒暑

●薺の花 三味線草 ペんぺん草

咲きさうな処に咲きぬ三味線草

鳩信

小粋とは物は云ひやうペんぺん草

燕音

田の隅にペんぺん草の丈を得て

燕音

合いの手に潮騒浜の三味線草

宿好

退屈でペんぺん草の撥こづく

随笑

鉛筆でつついて示すペンペン草
 ペンペン草奏づる風が出て来たり
 花なづなペンペン草の名を厭ひ

●酸葉 すかんぽ

遠野の子手っこつないですかんぽ道
 午報告ぐ酸葉に雀の鉄砲に

すかんぽや女はとかくがやがやと

●虎杖

山麓の溶岩隠り虎杖摘

虎杖をへし折りゆけり鬼無里の子

湯治小屋錆び虎杖のその向う

後生掛の湯治棟見ゆ虎杖越し

●茅花

茅花咲き自由乗降区間なり

茅花どき旅の一つもせよと云ふ

茅花茅花と茅花の戦ぐやうに云ふ

●喇叭水仙

喇叭秘め喇叭水仙答めるよ

湯ぼてりの顔はいびつかダツフオデイル

アポロンのラツパ手喇叭水仙は

●土佐みづき 日向水木

黄は黄でも日向水木の薄黄好き

土佐水木枝は木臘の光グ持ちて

日向水木連翹の黄を眨めて

●木五倍子の花 花木五倍子

修験道生五倍子の連珠飛び散れり

九十九折木五倍子の上に人のこゑ

糠雨に垂るゝ木五倍子の寸足らず

木五倍子咲く道を大仏方面へ

突然の雨に木五倍子の華やげる

雨脚の忽ち千筋花きぶし

せせらぎに木五倍子そろそろ花を垂れ

木五倍子咲く時分の山と分入りぬ

花木五倍子簪に似て「よーいやさ」

これも咲く裡かと見上ぐ花きぶし

一寸だけ春めく山の花きぶし

こどもごゑ生々木五倍子生ふ山に

●ミモザの花 花ミモザ

花ミモザライオン色に太陽は

寒暑

素抱

素抱

宿好

随笑

石鏡

さざ

燕音

寒暑

石鏡

ばら

寒暑

暮津

もも

ばら

ばら

ばら

宿好

寒暑

ねず

もも

もも

さざ

さざ

燕音

燕音

随笑

随笑

随笑

寒暑

石鏡

ばら

花ミモザ黄み掻き立てて咲けるなり
花ミモザ羅馬軍団現れよ

宿好
寒暑

行きずりのこれある哉の花ミモザ
結構なミモザと云ひて仰ぎをり

石鏡
石鏡

●貝母の花 花貝母

何と手の混める貝母の花の裡

さざ

判らぬはこの手の花よ花貝母

随笑

女共とやかく云へる花貝母

随笑

づけづけどもの云ふひとや花貝母

素抱

老人の指図けむたし花貝母

素抱

●山葵 山葵田 山葵漬

わさび田をはすかひに馳す水ありぬ

さざ

わさび田を素通る水の垣間見ゆ

ばら

音もなく葉わさび潜る水の暮れ

ばら

わさび田の小流れ夕日返しけり

ばら

わさび田の水を束ねる處あり

ばら

山葵の旬水入れ替はり立ち替はり

ばら

山葵田の小石に当る水の音

ばら

わさび沢わさび養ふ水鳴れり

燕音

土産さて静岡駅の山葵漬

石鏡

青竜の如き山葵の擦り下ろし

石鏡

●其角忌

俳諧の腕力振るへ其角の忌

ばら

■四月

●春の日 春日

双眼鏡あたたむ海の春日差

さざ

血色よき児童が通る春日中

宿好

春の日のぼかばか山陽自動車道

寒暑

春日中寄り来る鳩の遠慮がち

素抱

あざらしの腹の上なる春入日

素抱

●日永 永日 永き日 日永し 日永人

永き日の郵便受に余るもの

さざ

永き日の寺に石工の手弁当

素抱

永日のマイクにあうあうアシカショー

ばら

永日のそもそも何でこの病ひ

鳩信

永日の馬体に鞭を一の射手

鳩信

永日の一机据えあり絵島の間

鳩信

永日の欠伸百度して待たされ

鳩信

永日の河童に逢ひにカップ淵

宿好

永日の袋イソメに逃げられし
永日の亀の正字に窮しけり

素抱
素抱

空つぼの檻も覗きて日の永き
小布施 高山鴻山記念館
日の永く一つ目妖怪囲碁打図

ねず
燕音

泳ぎ来る亀を亀見て日の永し

宿好

好きな時好きな事して日の永し

素抱

日の永しラジオは禿げを話題にし

暮津

園児等に鼻振り上手日永象

ねず

日永鰐夢む手足の置きどころ

さざ

かたわれの函を探せる日永かな

さざ

日永の亀首伸ばす方何ぞある

宿好

こんなにも亀がゐるとは日永の池

宿好

帰るさも日永の亀の甲羅干し

宿好

唇の分厚き日永の磨崖仏

宿好

砂浜に足投げ出して日永人

宿好

岩登りかけてその儘日永亀

随笑

日永亀干割れ危ぶむその甲羅

随笑

日永なる仙崖の猫いや虎圖

随笑

甲羅干す亀見て日永いや気長

随笑

弁財天日永巳の日の銭洗ふ

寒暑

日永の土佐路面電車はリスボン製

寒暑

ご老體前はばかり日永の湯

寒暑

日永の湯人足風の男ゐて

寒暑

皇居前東西南北日永人

素抱

皇居前手を振り歩く日永人

素抱

折り鶴にひとり遊びの日永妻

素抱

巻きゆるく日永の遺伝子・滑り台

素抱

●遅日

海苔巻のすこし乾ける遅日かな

さざ

膝を詰め遅日の遠野物語

宿好

カップ淵遅日の祠一つ置き

宿好

ぎっくり腰遅日の電話鳴らせおく

寒暑

●穀雨

睡るとは不覚穀雨の散髪屋

寒暑

●春の雲

張りぼての岩のやうなる春の雲

さざ

ビスケット色の三つ四つ春の雲

ばら

のんのんと海上に出る春の雲

宿好

春の雲見てゐる我も押し移る

石鏡

海へ出てよりの俊足春の雲

石鏡

●麗か うらら 麗日 うらら

動物園

麗日のワラビー母子の餌の持ちやう

さざ

野毛大道芸

スキヤキソングうららにワンマンバンドかな

寒暑

●長閑 のどか のどけし

長閑な昼煙草はラッキーストライク

寒暑

古老懐古

一銭貰うて湯銭五厘の湯の長閑けし

寒暑

子規堂

子規筆記幾何学の本のどけしや

寒暑

のどけさは五家宝噛みしあとの兒

素抱

何でも綴ず孫のホチキス音長閑

素抱

長閑なる日和と顔に画いてあり

素抱

のどけしや平たく生きて平たき句

素抱

●四月馬鹿 エープリルフール 万愚節

句集序文賜はる

エイプリルフールと序文締めくくられ

もも

カテーター検査入院

食器には皆蓋のあり万愚節

鳩信

四月馬鹿達者と云へる褒め言葉

鳩信

●遍路

石手寺に花は散るのみ徒遍路

寒暑

宇和島

潮臭き宿毛の雨に徒遍路

寒暑

海鳥啼きお遍路マップ備ふ宿

寒暑

●初桜

皇居の櫻

一滴の雨にも遇はず初ざくら

鳩信

初桜先師に向ひ合ふごとく

燕音

初桜風来れば又そはそはと

宿好

彼の若木よくぞここまで初桜

随笑

●新社員

新社員交へて今朝の昇降機

もも

新社員夢あらばこそ「王将」を

寒暑

新社員世渡り吉良の仁吉たれ

寒暑

●山葵の花 わさび

二年ものわさびの花に穂高の日

ばら

蝶追うてわさびの花も飛びさうに

ばら

●春大根 はるだいこん

目に見えて体力戻る春大根

鳩信

●鶯餅

おもたせの鶯餅に雨の客

ねず

暖雨去りうぐひす餅のやうな島

ねず

ひよいひよいと鶯餅を包み呉れ

さざ

それではとうぐひす餅に手をつけぬ

さざ

鶯餅つまむに作法あるごとし
うぐひす餅それでと話促せり

ばら
宿好

●桜餅

桜餅芳香うれしき限りかな

随笑

●椿餅

ほんたうの処濁して椿餅

随笑

●三鬼忌

矮鶏が木に上手に登り三鬼の忌

ねず

●義士祭

高張を要所要所に義士祭

鳩信

●桃の花

花桃 花桃 緋桃 桃の村 桃畑

花桃のやいのやいのと日表に

ばら

花桃は田舎娘の器量佳し

宿好

花桃のおたふく美人笑ひづめ

素抱

ぶつかり合ひふとる仔豚や桃ひらく

ねず

冷つこき雨にいきなり桃咲ける

もも

雨ながら桃は咲きたい時に咲き

さざ

梅は了り杏咲きそめ桃半ば

さざ

二三日降ればその内桃咲いて

ばら

桃の咲くほかばか陽気ここ両日

ばら

お節句に間に合ふやうに桃の咲く

随笑

郷土史家愉しむ桃の源平咲き

随笑

指菜車窓に桃の咲くを見て

素抱

桃の咲く畑の縁に道付いて

石鏡

気安く咲き気安く散りし桃なりき

石鏡

枝いっぱい賑やか好きな桃の花

さざ

桃の花時間どんどん経ちにけり

さざ

桃の花想ひ凝らさばボッティチェリ

ばら

からからに乾く畑土桃の花

ばら

阿呆陀羅經極意は桃の花に聞け

ばら

その場でふ空気が大事桃の花

燕音

もめごとも一段落し桃の花

宿好

福島は桃桃桃の花霞

宿好

桃の花噂話に終止して

随笑

直に聞くことは佳きこと桃の花

素抱

桃の花鄙びごころを大切に

石鏡

緋桃の緋畑の空にぶちまけて

ばら

緋の桃に近寄り過ぎぬ心拍音

燕音

他所者のほえられぬたり桃の村

ねず

土器出づる山を拓きて桃畠
杏は桃に一足先にと云うて散る
春や春蕪村の武陵桃源圖

ねず
宿好
随笑

●杏あんずの花

偶にくる鳥があんずの花散らす
昼日中あんずつまらなさうに散り
梅は了り杏咲きそめ桃半ば
杏咲く情に溺るるごとくなり
杏は桃に一足先にと云うて散る

もも
さざ
さざ
さざ
宿好
宿好

●李すももの花

べんべんと昼のすももの花散るも
津南 飯山線しなのしちどり
すもも咲く信濃白鳥たもとほる

さざ
燕音

●林檎の花 花林檎

誰もよく撮れてりんごの花の前
山麓に日色を湧かせ花りんご
同齡のりんご若木の花連ね
原木のあかとき色の花りんご
りんごの飛花あれよあれよと千曲川
サイクリングりんごの花の高さゆく
月くりくりりんごの花の薄闇に
あっぱれなりりんごの花の八分咲き
雪山に沿ふてりんごの花街道

もも
もも
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら

●三みつ極またの花 花三極

みつまたのやうに時間を使ひたし
三極の花の空うけに日の闌うくる
みつまたの荅おつとり日の射せる
薄ら日に三極密語交しをり
みつまたの夕づく荅思慮深げ
三極と見しがまさしくさうであり
日の差せば浮き上がり来る花三極
三極に日照時間伸びて来し

●沈ちん丁ちやう花 丁字

今もある文房具店丁字の香

素抱

●辛こ夷がし 花辛夷

はくれむに似たれど辛夷で押し通す
花こぶし花混み合ふてうるさかり
花辛夷はたきづかれし思ひかな
花こぶし少し荒んで吹かれをり
辛夷散りひつちらかつてをりにけり

ねず
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら
ばら

辛夷より翔ち損ねしや残り花 ばら
 辛夷吹き天地の間を抜ける風 宿好
 花辛夷飛び込んでくる田沢湖線 宿好
 一花だに咲きためらへる辛夷無し 随笑
 花辛夷風納まって物足らず 随笑
 青空に辛夷ととんび大揺れに 随笑
 いい加減咲いて辛夷の花散らす 随笑
 はためける辛夷に千軍万馬の風 寒暑
 耳聾す風天空に花こぶし 素抱
 辛夷の芽躍らす風のひっきりなし 石鏡
 ●木蓮 紫木蓮 白木蓮 はくれん
 月高みはくれむ浮力のつくごとし ねず
 はくれむに似たれど辛夷で押し通す ねず
 花仕度了へてはくれむ待機せり さざ
 はくれむに吹いて一層強き風 さざ
 こんもりとはくれむ咲かす家殖えて さざ
 はくれむに放送衛星巡るかな さざ
 はくれむをほぐしにかかる朝の雨 さざ
 はくれむに雨吹っかけて来たりけり さざ
 月浴びて夜叉のはくれん突っ立てる 随笑
 夜気帯びてはくれん百羽発たんとす 随笑
 もくれむの散り下手堀の内と外 ねず
 もくれむの凍む枝に雨のぬくとからむ もも
 もくれんの蠢立つ冬芽こんなにも 素抱
 だらしなご小児に同じ紫木蓮 燕音
江ノ島周辺
 紫木蓮酣なりしがそれも散り 宿好
 紫木蓮滝ノ口にも腰越にも 宿好
 紫木蓮もくもくと日を送るのみ 石鏡
 吹き降りの白木蓮を横なぐり もも
 おてだまを抛りあぐごと白木蓮 さざ
 快活に道問ふ青年白木蓮 宿好
 白木蓮すつくと晴夜疑はず 随笑
 夕冷えの白木蓮に翅音絶え 随笑
 月交え白木蓮の夜の宴 随笑
 東横線すれすれに咲く白もくれん 寒暑
 近寄る程白木蓮の生の色 寒暑
 拾ひあぐ木蓮一片雨くさき もも
 ●連翹 いたちはぜ
 忘れもの妻の追ひくる連翹垣 ねず

連翹のハハハと又ハハハと

ねず

連翹の枝の跳ね出せる道普請

ねず

連翹の葉がちとなりぬ投票日

もも

れんげうに笑ひかけらる日も近し

もも

れんげうの葉をもこと解く天気雨

もも

連翹の今を盛りに誰も来ず

さざ

れんげうのざつくばらんな枝を四方に

さざ

ほころびて垣の連翹味噌つ歯めく

さざ

やみくもに連翹の芽をつけたがる

宿好

連翹も微苦笑年金にも課税

宿好

つかぬこと伺ひますかと連翹越し

宿好

日向水木連翹の黄を貶めて

寒暑

灼かれても青葉が綺麗いたちはぜ

暮津

●木瓜の花 花木瓜

飛びつ切り上等の旭が花木瓜に

ねず

木瓜みんな咲いてしまへり馬鹿陽気

もも

てうちてうちあはゝと緋木瓜咲きにけり

さざ

更紗木瓜三弦商の庭さきに

さざ

木瓜の花もってまはらぬ俳句好し

素抱

●郁李の花 にはうめ

郁李の咲けば出がけに立寄りて

さざ

是しきの雨に郁李散れるなり

さざ

郁李は見る人に見ゆそんな花

寒暑

郁李や早め早めとなる起居

暮津

●紫荊 はなすはう 蘇枋の花

喪の知らせまたありさうよ紫荊

ねず

独りごつ男蘇枋の花を過ぐ

ねず

おづおづと寄りまじまじと蘇枋見る

もも

悪相の紫荊雨まみれなる

もも

ぱつとせぬ天気つづけり紫荊

もも

このところ変な陽気に蘇枋咲く

さざ

紫荊噴ける苔の筥棒な

さざ

紫荊己を通す色見たり

燕音

不景気をぼやいてみても紫荊

随笑

紫荊不景気づらをする勿れ

随笑

指圧師の家の蘇枋の花盛り

随笑

だうもかうも天気外れて紫荊

素抱

紫荊嘘で固めた戦して

素抱

紫荊一方的に非を難じ

素抱

紫荊戦はアラ一の思し召し

素抱

住職は頑固なお人紫荊

暮津

● 枸橘の花

花からたちこころ疎にしてそこは密

さざ

● 接骨木の花

接骨木のこんな花かときささるる

さざ

接骨木のおおどじ踏んで咲きにけり

ばら

接骨木の花まぎれんとしてゐたり

燕音

接骨木の芽の付き方は唯杜撰

宿好

既にして接骨木の芽の出臍程

随笑

接骨木のこちらに少し増しな花

随笑

接骨木咲くぼつぼつ旅に出るのもよき

寒暑

● 黄楊の花

黄楊の花小雨あかるく降りにけり

もも

● 春暁 春の曙

春暁の川波びよんとびよんと立つ

ばら

この齢になりて春暁てふものを

素抱

春は曙けふあれすべくこれすべく

石鏡

● 春昼 春の昼

患者食済みし春昼箸洗ふ

鳩信

春昼をきうと年取る魔法瓶

素抱

裁ち物の音のぞりぞり春の昼

石鏡

ゲートボール春昼をなほ単調に

石鏡

● 春の暮

戒名をノートに控え春の暮

石鏡

● 春の宵

春宵の胸撫でおろすやうな灯よ

随笑

● 春の夜 春夜

春の夜のまなぶた閉じて患者たり

鳩信

体温計鳴り出す春の夜のとばり

鳩信

春の夜の手術痕撫で寝入るまへ

鳩信

春の夜を看護婦消灯触れ廻る

鳩信

春夜尿りて体外へ出す造影剤

鳩信

野毛山の春の夜浅く辻楽士

素抱

販売機春夜連なる灯の區劃

素抱

● 春燈 春灯

大部屋の消灯までの春灯

鳩信

熱川の宿てふ宿の春灯

鳩信

春宵の胸撫でおろすやうな灯よ

随笑

●春の夕焼

遠景の暮れてゐるなり退紅空あらしぞめ

石鏡

●春の星 春星

枝々にうるみ初めたる春の星

ばら

春星の間合を一つ一つ見て

素抱

洗濯物掲げ出づれば春の星

石鏡

●春の月 春月

大いなる春月母子寄る方に

ねず

幹照らす春月チャンチンモドキの木

ばら

良性の雲のはらわた春の月

ばら

●朧 朧夜

ビルと云ふ直方體の夕おぼろ

もも

鳥好きの人と聞きゐる家朧

さざ

夕おぼろ入湯十訓声にして

ばら

三亀松のようはあよりの朧にて

ばら

大部屋の患者寢息の朧なる

鳩信

点滴の終りを告ぐる朧ごゑ

鳩信

悪路王籠りし達谷窟おぼろ

宿好

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

おぼろ夜のしば天踊り余興の座

寒暑

●春陰

春陰の大明竹に噎びゆくたいみんちやく

宿好

●亀鳴く

句の誤植推量せよと亀鳴けり

もも

石と玉取り違へては亀の鳴く

ばら

この術例三百ほどと亀鳴けり

鳩信

亀鳴けり医術日進月歩の世

鳩信

亀鳴かす程でなくともこの俳味

鳩信

亀鳴くを聴くとておかしからぬ齡奥津宮

宿好

抱一の亀に鳴かれて島巡り

宿好

ヒトゲノム解説せよと亀鳴けり

宿好

亀鳴くに間ある古池巡りけり

随笑

亀鳴くややうやう主旨が伝はりて

素抱

再生紙裏も使えと亀鳴けり

素抱

●蝌蚪 小玉杓子

ふるぶると顔を震はせ蝌蚪浮上

もも

蝌蚪に見る定年といふピリオッド

宿好

棒切れをずると滑り蝌蚪の紐

宿好

水中の蝌蚪の紐揺り止まぬ風

随笑

蝸蚪探す野蒜摘みには飽きたと見え
子と探すおたまじゃくしの密集地

寒暑
寒暑

芹の水干上がる窪地に蝸蚪蝟集
金澤文庫 称名寺 裏山

寒暑
素抱

ペント屋におたまじゃくしの御玉哉

素抱

金魚掬ひおたまじゃくしも入り交り

素抱

田の底の朽葉に蝸蚪の身を寄せて

石鏡

●柳

ユスリ蚊の柳を好む別派かな

ばら

風流倉敷の始め柳に佇むは

寒暑

大道芸川端柳吹かる辺に

石鏡

二重橋柳丸々松亭々

石鏡

●花 花の山 花の昼 花の鳥 花堤 花の風

花明り

他愛なく花を見てゐる旅ごころ

燕音

花なんぞ見向きもせざる畑鴉

石鏡

花見むと来しリハビりに気散じに

暮津

花咲くと鳥もすっかりその気になり

燕音

早咲きの花のいたづら心かな

寒暑

勘違いして咲く花に相違なき

寒暑

花ほつほつ咲き出す山に悪路なし

寒暑

可借あたふ花散らしその形大き鳥

もも

鴨飛来花散るからに散るからに

鳩信

花散らす風の無理強ひしたりけり

素抱

酔どれのそれぞれそれと散る花を

暮津

花の間千鳥ヶ淵鴨広がりて広がりて

随笑

花の間を何処まで飛翔長き鳥

随笑

花の間尾長が通り過ぎしのみ

寒暑

鳥ごゑに奥行き深き花の山

ばら

だっこしてまたおんぶして花の山

随笑

花の山絶えず子供のこゑがして

寒暑

上からも下からも人花の山

素抱

見通して奥行のある花の山

素抱

禽ごゑのひろがりすぼまり花の山

素抱

花の山騒がしにくる目白かな

素抱

鳥よりも人よく遊ぶ花の山

素抱

精米所横よりのぼる花の山

素抱

いぶりがっこキサミがっこに花の昼

宿好

花の昼人を焼く間の腹ごしらえ

石鏡

垂直に上枝に移る花の鳥 燕音
 来年も又来ておくれ花の鳥 燕音
 花の鳥あれこれいふを聞き遣りぬ 燕音
 間近に来目許くりくり花の鳥 随笑
 枝移りして花の鳥こゑ大きく 素抱
 すいと来てこんどは小柄花の鳥 素抱
 何事かまくし立てたり花の鳥 素抱
 桧木内川高堤いま花堤 宿好
 花堤方の薙を敷き詰めて 宿好
 花堤さてとこらで折り返そ 寒暑
 飛来せる一羽花間へもぐり込む もも
 花房に縫れる鳥の紡錘形 もも
 首伸ばしすくめつ鴨の花食める もも
 鳥の尾の上下頻々花隠り もも
 花を発つ鳥の胴より翼出で もも
 木を替へて花ついでばめる鳥営々 もも
 雨に風加はり花を駄目にする もも
 花このまゝ仏生会までもたせし さま
 一体に海岸ぶちの花早し さま
 ときめける花に湿りをくれに雨 さま
 花乏し降られづめなる鴨に さま
 ほころぶと告ぐる言葉の花より浮く ばら
 花の風鯉の背鰭を吹きにけり ばら
 鉛筆を走らす花鳥諷詠漢 ばら
 言語野に射して言の葉花明り ばら
 当たりゐし山の日を花逸したり ばら
 雨ありし上野の山の花の首尾 ばら
 花揺るゝは船酔に似て昼日中 ばら
 何もって本復巻は花の頃 鳩信
 花に浮かれ来たる奴に高遠城 高遠花祭り 鳩信
 藩校の教場抜けて花の風 鳩信
 一雨に花崩れたり北の丸 鳩信
 真っ白な花に群がる風一目 鳩信
 その説に服しぬ花よ鳥よと詠む 燕音
 折角の花が霞んで仕舞ひけり 燕音
 ゆとりより生るゝものに花の風 燕音
 藤右衛門さんのはちまき花談義 燕音
 花も又花を了へたら一服す 燕音
 花噴いてぼこんぼこんの桜の幹 燕音
 花開くまでいろいろな事があり 燕音

花愛でて今様本田平八郎

花啄まむと鴨身をひねり

かるめ焼きなど賞味して花の人

花の蜜くすねに来たる大き鳥

しばし居る木椅子は花のつめたさに

花の日々御飯ふつくら炊きあがり

写生の眼花と画帖を往き来して

花奪ふ風に尻尾のあるごとし

日曜画家絵筆に含ます花のいろ

花の下ベルのよく鳴る三輪車

十日程花遅れたり建長寺

沿線の花に急かされゆくごとし

いちにち雨心に烟る花を観て

空耳に盈ち盈つ花のせりふかな

●花時 桜時

祖師身延山さまの山へのぼらん桜どき

この人のかうゆう句が好きさくら時

さくら時堤ゆく人豆粒大

銭湯の熱くて痒し桜どき

花どきの鴨のうわまえはね雀

花どきの乳首の脇へ聴診器

里山の下り口三つさくら季

●花冷

花冷の河馬の図体ただよへる

花冷増上寺えの此の鐘撞かば木更津まで

花冷えの青天井に及びをり

身延山花冷からかね灯籠に

もくもくと花冷えどきの権細工

花冷動物園えのコンドル無垢の襟卷す

達磨圖にべたと花冷え花押かな

花冷えの坊ちゃん列車待機せる

花冷えのしんしん山鳥黙すとき

花冷えの底出棺の釘打たる

●花守 桜守

わからんと云ひて笑へり櫻守

●桜 朝桜 夕桜 夜桜 大桜

鳥入れてさくらのうつらうつらかな

追ひ追ひに池の廻りのさくら咲く

野毛山横浜絵のさくら馬上おろしやに魯西亜人

素抱

素抱

素抱

素抱

石鏡

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

燕音

宿好

宿好

随笑

随笑

寒暑

石鏡

ねず

ねず

もも

ばら

燕音

宿好

随笑

随笑

随笑

寒暑

石鏡

石鏡

燕音

ねず

ねず

さざ

さざ

さざ

曙のさくら一鳥抱へをり
 ばら
 幹に花咲かせてさくらはちきれさう
 ばら
 海渡りさくら咲かせに一暖雨
 ばら
 宿毎に伊那路のさくら愛でゆくも
 鳩信
 怪童の腕かいなのやうなさくらの枝
 鳩信
 夫婦して見にゆくさくらありにけり
 鳩信
 戻りてさくらに彩の戻るなり
 鳩信
 名庭園ならんとさくらの木も努める
 燕音
ソメイヨシノ
 人間が構つてやつて咲くさくら
 燕音
俳句仲間へ
 もう十年程ご一緒なさくらの世
 燕音
 奥山のさくらは白く春づける
 燕音
 つくづくとさくら花満ち日に重る
 宿好
 北国の餅肌いろのさくら咲く
 宿好
 をととひのさくらがふつと泛かびくる
 素抱
ひとけ
 人気なきときをさくらの旺んなり
 素抱
 人ごゑが近みさくらがそはそはす
 素抱
 平日の山のさくらを一人占め
 石鏡
 大石の昼行燈にさくらは似
 暮津
 枝張りも根張りも石割大桜
 宿好
 山中に達者なりけり大桜
 随笑
 山中に何時かは亡ぶ大桜
 寒暑
 根っこより見上げ端山の太桜
 石鏡
 朝の気の漲る石割桜是
 宿好
 北上川の朝の水勢さくら満つ
 宿好
 この静寂しじま破るものなく朝さくら
 素抱
 墨堤の浮浪者に湧く朝さくら
 石鏡
 蛇口より水送り朝さくら
 石鏡
 朝桜禽搔い潜り搔い潜り
 暮津
 夜桜にあがる焰の二夕柱
 さざ
 夜桜に誘つてみてはと付け足せり
 鳩信
 夜桜にしこたま冷えて戻りけり
 鳩信
 夜桜もぼんぼりの灯もほたほたと
 宿好
 夜桜の雪洞尽きるところまで
 宿好
 夜桜の人に混じりて華やがん
 寒暑
道後公園
 貸し練炭貸し莫産夜桜真つ盛り
 寒暑
 夜桜の冷え込み上着一枚分
 寒暑
 夜さくらを口あんぐりと開けみる児
 暮津
 夜桜の雪洞高くここ低く
 暮津
 たんたんと咲く夜さくらに飛行音
 暮津
 夜さくらに酔ふて地に置く紙コップ
 暮津

夕桜すつと色調落しけり 宿好
 夕風に揉まるる桜ここから帰路 暮津
 人の出も日増しにソメイヨシノかな ばら
 ひよひよと大島桜吹かれをり ばら
 鳥らいそいそ河津桜の原木へ ばら
 幹ずんと押し出しのよき里桜 ばら
 行水所コヒガンザクラ明りして 鳩信
横須賀安浦 旧鎮守府長官官舎
 長官愛づ櫻なりきと顎引く 鳩信
 鎮守府の櫻の上に海展け 鳩信
 なかなかの櫻と幹に手を掛けて 鳩信
 満開の心を一に濠桜 鳩信
 このとほり櫻は場所を選ばない 燕音
 櫻の幹叩き鼓舞せる男あり 燕音
 大櫻之ある哉の裁判所 燕音
 日本の櫻を他国に植う話 燕音
 雨ありてあとは櫻の花次第 燕音
 振り返る桜がそこにあればなり 燕音
 沿線の桜見ながら汽車ぼっぼ 燕音
 曙の桜どの木も気を張りて 燕音
 年寄ったなりの咲き方桜もす 燕音
 咲く桜暦代りの世も絶へて 燕音
 思ひも見よ山の桜の根の張り方 燕音
 桜には桜の営みそを通す 燕音
 野暮天のソメイヨシノといふ勿れ 燕音
いづくにて死に候とも墓を身延の沢にさせ候べく候
 一わたり歩き身延の沢櫻 燕音
日蓮
 風はたと絶えし桜の日に重る 宿好
石割桜
 石割のえらい桜を一目見ん 宿好
 あれまあと石ぶち割って咲く桜 宿好
 野毛の桜昭和の戦見て来しと 随笑
 先手取ることく咲き出すこの桜 随笑
 桜眷むこゑもいろいろ女衆 随笑
 奢るとはめっそうもなき家桜 随笑
 鳥がゐて写真家がゐて桜の木 寒暑
 お天道様山の桜に花授け 寒暑
 一雨のあと立ち直る桜かな 寒暑
 瀬戸内の桜見え来て機は下降 寒暑
 都内にしてもう咲く大島桜かな 素抱
 失敬す大島桜の花房を 素抱
 ひとびとは立ち去り櫻は残りけり 素抱
 この山の一押し桜咲きにけり 素抱

枝のさきまだ咲く余地のある桜
散りしきる桜に欲しき越天楽

模糊と見て桜のなかに末期の眼

スタジオに持ち込む河津の初桜

平日の桜の中を通りけり

水道で洗ふ掌赤し初ざくら

馬の背みち山の桜はまばらが佳し

横須賀海軍鎮守府
鎮守府の苔むす桜何見て来し

●山桜

山ざくら吹き割る風のいくそたび

いつときは光帯びけり山桜

揺れ出して息呑むほどの山ざくら

本来の彩は斯くなる山ざくら

日本語乱れ初めても山桜

山桜さう山櫻葉の臍脂

好きな木を一つ挙げれば山櫻

地味ありて枝隆々の山櫻

ぼんぽんと山桜置き遠山並み

法燈の山櫻いろ夕づきぬ

野毛山の十日も早き山ざくら

尾根辿れば当り籤めく山ざくら

山ざくら遽か下界といふものあり

一行に飛花ふるまへり山ざくら

山桜天を伝ひて風響き

山ざくら散るとき音色あらまほし

烈風にどうするどうする山桜

●八重桜

かるがろと昼月上げて八重桜

八重桜大社を巫女の往き交へる

八重桜臉重たくなりけり

日は闌けに闌けて悶々八重桜

八重桜足懈く道戻りけり

●遅桜

山腹に鳥を下ろせし遅桜

●桜薬降る

さくら薬降る制服の紺の肩

桜薬ばかりの楮き木となれり

桜薬降らすや三嶋大明神

樹下にゐて雀もさくら薬浴めり

素抱

素抱

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

もも

ばら

ばら

ばら

ばら

鳩信

燕音

燕音

燕音

燕音

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

石鏡

もも

随笑

随笑

暮津

暮津

もも

ねず

ねず

ばら

随笑

随笑

寒暑

良寛像足許埋む桜しべ

桜葉降らせて雨の粗くなる

寒暑
暮津

●花見 花見客 桜狩 桜見に 花筵

昼下り自転車に来てさくら狩

燕音

当山の門徒ならねど桜狩

燕音

桜狩たふんと水筒背に鳴りて

石鏡

地下街で稲荷購ひ桜狩

石鏡

花を見る心ええならええ花見

燕音

花見客杖を忘れし身延線

燕音

ネクタイをして花見とは上野山

宿好

出来れば近場妻との花見何處にせん

宿好

川沿ひにセスナ機飛んで花見時

宿好

東京の花見がてらの通院日

寒暑

花見支度し居れば雨や肩すかし

寒暑

お花見のおあづけとなる朝の雨

寒暑

腰どんと地べたに据えて花見かな

寒暑

濠端の花見に夏目金之助

寒暑

花見客もう百段に顔見合はせ

寒暑

称名寺鴨も花見と洒落にけり

素抱

その頃となれば花見に徒心

素抱

花見弁当ひらけば鳩の優しく寄る

石鏡

沿線の花見切符を撫しながら

石鏡

米寿母の云へるまで生きたついでの花見せむ

石鏡

花見衆持ち込む小ぶりの瓦斯ボンベ

暮津

花見客に喰る屋台のバッテリー

暮津

かわず掛け河津が郷のさくら見に

ばら

楽しんでやるひるさくらあさざくら

燕音

夜ざくらを見にゆく元氣既になし

燕音

花は佳し桜しべまで見尽して

燕音

まどろんで先師が花に遊べる図

燕音

人間の勝手放題花を見る

燕音

根っからの浜っ子野毛の桜見に

燕音

花巡りホテル今日の泊りは武蔵坊

宿好

花筵抱え挨拶交しをり

随笑

花を見る目配りにさへお人柄

寒暑

花を見て花の生み継ぐ風を見て

寒暑

沿線の桜見ながら羽田まで

寒暑

花筵てふ大仰なもの持たず

素抱

靴脱げる処が玄關花筵

暮津

走り根の出っ張り避けて花筵

暮津

●春落葉

磊落な榊の落とせる春落葉

宿好

●花人はなびと

墨堤に花人となる足慢ろ

寒暑

一人にはいごめんよと上り駕籠

寒暑

花人の足腰問はる象頭山

寒暑

明日雨の予報に繰り出す花の人

石鏡

●花疲

大仏を割愛したる花疲れ

随笑

花疲れまくりしシャツの袖おろす

石鏡

●落花 花散る 散る花 花吹雪 花屑 花の塵

飛花 花筏

散るさくらタイムカプセル埋めし地に

ねず

称名寺殿の頭に花散れり

さざ

*北条実時銅像。重時は極楽寺殿、時頼は最明寺殿と称されれば

一卷の終りの花の水に散る

燕音

海浜の雨は曲者花散らす

燕音

堤より花の散り込む遊び舟

宿好

あとは散るばかりの花にふむ酒

随笑

けふあたり出向きおかねば散る花ぞ

寒暑

朝風に流離流離と花散るも

寒暑

石手寺に花は散るのみ徒むち遍路

寒暑

山鳥の呂律に合はせ花の散る

石鏡

日曜の花散らす雨罪作り

石鏡

登り詰め櫻吹雪の別天地

燕音

横目にて象は吹雪ける花を見ぬ

随笑

花吹雪次の一ト吹き待ちある眼

随笑

花吹雪そびらに駈け出したくなりぬ

随笑

花吹雪く度に両掌をひらく人

随笑

立ちつくしそのまま浴びぬ花吹雪

随笑

花吹雪人の話の腰折りて

随笑

吹雪くたびこれはこれはの山ざくら

随笑

こんな日が三日続けば花吹雪

寒暑

林間を真一文字に花吹雪

寒暑

花吹雪こりやまたなんと佳き風情

寒暑

花吹雪ぱっぱと金比羅大権現

寒暑

花吹雪雪洞にまだ吹き足らず

素抱

花吹雪小公園を突っ切りて

素抱

谷戸住みの醍醐味は是花吹雪

石鏡

花吹雪易者は八卦うち振りて
 石鏡
 春疾風それに倍する花吹雪
 暮津
 唐破風をつゝと花屑奔りけり
 ばら
 花屑こつむじに小旋毛風立ちぬ愛宕山
 燕音
 走り根に花屑の風堰かれけり
 燕音
 蹠のたわたわ花屑踏みつけに
 燕音
 シーソーの花屑吹いて跨りぬ
 随笑
 花屑の犇めき合へる轍あり
 随笑
 花屑の中のひとひら返す風
 随笑
 夕雀花屑蹴つて発ちにけり
 随笑
 花屑に風そろそるとたちつてと
 素抱
 青空へ一二三と飛花発ちて
 燕音
 本山の飛花つきあたる堂障子
 燕音
 身延山ひたすら空を亘る飛花
 燕音
 飛花よぎりけり北之坊岸之坊
 燕音
 繽紛と飛花の舞ふ方衣川
 宿好
 溪底の甌穴に飛花あやまたず
 宿好
 オオヘビガイ出土貝塚飛花よぎり
 随笑
 杖を突く音のぱったり飛花あふぐ
 随笑
 石畳飛花着地して石のいろ
 随笑
 風太郎よこぎる飛花に眼を上げて
 寒暑
 鼻先をよぎりて飛花の舞踏団
 寒暑
 一行に飛花ふるまへり山ざくら
 寒暑
 腰下ろすところへ飛花の次から次
 素抱
 てのひらに飛花を掬へば浮き立つ彩
 素抱
弘明寺観音 観桜
 赤塗りのひょうげた仁王飛花よぎり
 素抱
 飛花の風辺りが透けて見えにけり
 素抱
 飛花当る雪洞舟和の芋ようかん
 石鏡
おわがね
 洪鐘に飛花の当たりてはたと落つ
 暮津
 エナメルの靴先に飛花舞ひ込める
 暮津
 とびつきり遠くへとべる飛花一つ
 暮津
 飛花舞はず風の一変フォルテツシモ
 暮津
 只管になること落花には如かず
 鳩信
 階に池に落花の選り好み
 宿好
 落花ひとひら二本松少年隊
 宿好
 落花踏み歩む堤よ北上よ
 宿好
 高館の落花しづしづ静の舞
 宿好
 外人墓地ツル十字架の間を落花抜け
 随笑
 上枝より落花飛脚の発つごとし
 随笑
 落花受く地べた凹凸ありにけり
 随笑

落花嗅ぎ年寄る象の浜子さん

町雀雨の落花を足蹴にす

赤銅いろ陸上トラック落花馳せ

鷺掴み落花放してみせにけり

花筏などとはとても云へぬもの

花降れる地べたに雀色動く

川原石の隙を見つけて花の塵

花筵山の夕冷え払ひけり

花筏日を経し彩を泛かべをり

石組の石を押すなり花筏

●花曇 養花天

鈍器もて物を割る音花曇り

嘴のずんと重たき花曇り

養花天選挙合戦空ヲ響き

●桜 鮫 桜うぐひ

国栖人に腹赤魚の瀬をのぼる

●春の海

大あくび春の海より貰ひけり

春望の甲板三百六十度

●春潮 春の潮

春潮に一艇一艇打たれ鳴る

春潮にをりをり差せる風の翳

内海へ春は潮目もくきやかに

春の潮上げてゐるやら退いてゐるやら

●春の波 春濤

根詰めて汀を打てる春の濤

東京湾横断フェリー春濤切り

南房の花摘み濤色スターチス

●種痘

茱萸をもぐ女の腕の種痘跡

六十余年あつといふ間や種痘痕

●磯遊び

くるぶしの風に乾ける磯遊び

磯遊び馬穴覗きにくる子かな

剣崎当りが適當磯あそび

●汐干 干潟 汐干狩

降り出して干潟を蟹のわらわらと

なまぬるき風を展げて大千潟

貝ほじくり返し干潟を汚せるも

寒暑

寒暑

素抱

素抱

燕音

燕音

寒暑

暮津

石鏡

暮津

燕音

燕音

素抱

素抱

ばら

ばら

もも

石鏡

もも

さざ

さざ

ばら

ばら

素抱

ばら

ばら

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

暮津

ねず

ねず

寒暑

暮津

もも

もも

さざ

さざ

駆け廻り蟹は干潟のプロデューサー

ばら

干潟踏みすつくと健康さうな脚

鳩信

干潟踏む素足の白くさみしけれ

燕音

浅蜷掘吾れは干潟の南端を

寒暑

ぼかと生れ干潟のひよっこりひょうたん島

素抱

干潟現る順序がありて海松の海

素抱

しいしいする孫に干潟の広かりき

素抱

試し掘り干潟のあちらこちらかな

素抱

小網代湾蟹の棲み分け聞く干潟

石鏡

ロンパリの蟹の目干潟観察会

石鏡

汐干狩時間を暫し棚あづけ

素抱

脂っ気抜かれ戻れり汐干狩

素抱

汐干狩擡ぐ尿意を如何にせん

素抱

●蛤

盛り売りの蛤ちゅうちゅうたこかいな

ばら

蛤江ノ嶋に舌も納得島遊山

随笑

●浅蜷 浅蜷搔く 浅蜷掘

ジーパンをたくしあげては浅蜷搔く

さざ

潮に先づ足を浸して浅蜷掘

随笑

武州金沢八景 乙鱸海岸 黙々と手を運ぶのみ浅蜷掘

寒暑

浅蜷掘吾れは干潟の南端を

寒暑

浅蜷掘腰を伸ばして一くぎり

寒暑

浅蜷らの小田原評定鍋の底

寒暑

搔き当ててゴツと鳴れるや鬼浅蜷

寒暑

浅蜷掘る大潮小潮小潮の日乙鱸海岸

素抱

雛あさりぼちよんと波間に擲てり

素抱

浅蜷居る證しそここ砂ゑくぼ

素抱

浅蜷掘りし手がからからになりみたり

素抱

二三箇所試し掘りして浅蜷掘

素抱

浅蜷掘めぼしきものは乏しくて

素抱

手つかずの浅蜷掘り場の無きものか

素抱

浅蜷縞流行りの縞もありぬべし

素抱

浅蜷掘道具倒れと云うがあり

素抱

人様おかしの馬穴あな覗くは浅蜷の多寡

素抱

厨房に浅蜷のぞめきうしみつ時

素抱

海牛の頭上を跨ぎ浅蜷掘

素抱

浅蜷椀押さえつ地震の止むを待つ

暮津

●常節とこしよぶし

もう一艘殖えて常節採る舟が

もも

常節を突き磯風のやうな息

ばら

●馬鹿貝 馬珂貝

馬珂貝の尻の辺りが剥げゐたる

もも

潮吹に親方風を吹かす馬鹿貝

素抱

指挟まれ大馬鹿貝の糞力

素抱

馬鹿貝の舌雀の舌に酷似して

素抱

馬鹿貝の舌を使ひてのけぞれる

素抱

馬鹿貝の塗り剥げたるはもう齡よ

素抱

この感触大馬鹿貝に他ならぬ

素抱

●馬刀貝 馬刀

馬刀貝を挙げし海辺に住み古るも

さざ

馬刀貝の素っ頓狂を驚掴み

鳩信

馬刀突きといふ捕物に似たるもの

宿好

潮吹く馬刀天に唾する如くなり

寒暑

ぼんくら馬刀掘り返されてしまひけり

素抱

馬刀貝の堅穴住居密集地

素抱

砂抱いてか黝き馬刀の虚せ貝

素抱

●潮吹

抛り投ぐ潮吹潮吹にぞ当る

鳩信

潮吹のほの明るさを掌にしたり

燕音

潮吹を邪慳に退けて鏝シャベル

素抱

莫迦げたる潮吹を又掘り当てぬ

素抱

潮吹に親方風を吹かす馬鹿貝

素抱

潮吹が鳴いて潮時告げてをり

素抱

●栄螺

半島の出鼻さざ多の水硯突漁

ばら

ふなばたに鬼殻さざ多揚げられし

ばら

近海もの今は不鯛とさざ多が旬

ばら

栄螺の蓋裏返しみてひとり酒

随笑

栄螺の蓋卸によからむなどと酔ひ

随笑

栄螺の腸良葉にして弾む酒

随笑

烏賊と海胆さざ多ちりばむ半島絵図

随笑

門前のさざえあわびの岩場かな

寒暑

さざ多漁仁右衛門島の岩隠り

石鏡

直言こそ待たるものや栄螺の腸

暮津

●壺焼

壺焼やリストラの風吹ける世の

随笑

●寄居虫

うらうらとごうなのあるく漁休み

ねず

やどかりも帰り支度の日を浴びて
荒崎の雨にがうなの濡れあるく
やどかりの新しがりや宿替へて
やどかりの新しがり屋宿替えぬ
礁攀づごうなの六根清浄と

●海胆うに 雲丹

烏賊と海胆さぎ多ちりばむ半島絵図
佐井人の海胆突棒の甲斐甲斐し
潮青む礼文を皮切り雲丹採漁

●鹿尾菜ひじき

鹿尾菜干す手の影鹿尾菜よりも濃く
引く波に鹿尾菜被きて礁現る
揚げられて鹿尾菜天草一緒くた
滴れりみみずのやうな鹿尾菜の茎
鹿尾菜生ふ礁ラッコの背のやうに

●海髪うしじ

拾ひ来て海髪より造る美顔水

●二輪草

二輪草ふたば雑草一つ交へずに
二輪草暗緑浄土広がれり
この谿の落葉に肥ゆる二輪草
飛んでくる虻真つ黒け二輪草
私語一つ洩らさぬ二輪草の群れ

●翁草おきなぐさ

徒然なるままにけふ過ぐ翁草

●桜草

さくらさう二つ返事で咲きにけり
さくらさう貯金ちよっぴり利子ついて
耐寒性さくら草にて花果敢
桜草植う家いやに殖えにけり
桜草殖やせり妻の名は陽子

●霞草

それはそれで趣ありぬ霞草

●チューリップ

八方塞の一方展けチューリップ
一列にちやんと並べりチューリップ
並び立ちステロタイプのチューリップ
大如雨露ぐうるりぐるりチューリップ
チューリップ散りて吹かるゝ茎二三

ねず
もも
ばら
宿好
石鏡

随笑
随笑
素抱

もも
もも
さざ
さざ
さざ
ばら

素抱

燕音
随笑
随笑
随笑
随笑
随笑
寒暑

暮津

さざ
さざ
さざ
鳩信
随笑
素抱

鳩信

ねず
さざ
さざ
さざ
さざ
さざ

チューリップ奉書めく葉を先づ立てぬ
 チューリップの芽立ち囀り初むやうに
 歩く会雨天決行チューリップ
 散りざまの何たることかチューリップ
 チューリップ植えた通りに芽を出せり
 御首みしろしを風に撲たれしチューリップ

●ヒヤシンス

思ひ切り悪き女やヒヤシンス
 水栽培針の根降ろすヒヤシンス

●シクラメン

日当りが佳すぎても駄目シクラメン
 シクラメン手のほどこしやうもなく萎れ
 シクラメンぼかしてポートレート撮る

●スイートピー

問診に次いで触診スイートピー
 スイートピーつまらぬことは気にせずに

●シネラリア サイネリア

鉢売の三四十二のサイネリア
 看護婦の一語納得サイネリア

●パンジー 三色堇

パンジーを植ゑる陽気となりにけり
 パンジーの好みの彩の固め植え

●アネモネ

たつぷりと寝てアネモネの日曜日
 茎を曲げ生ふるアネモネ頑に
 人參の葉っぱのやうなやつはアネモネ

●ストック あらせいとう

風除け篠ストックの香を封じけり
 ストックに顔突つ込んで剪りにけり
 ストックの嗚呼このかをりこのかをり
 ストックの荅ほのぼの眠くなる
 ストックを剪るやほろほろ虫発たせ
 ストックの畑裾蛇口起ち上がる
 船室にあらせいとうの香の満てる
 あらせいとう三日ばかりをかほる家
 和田浦のあらせいとうのかほる径
 ハウス物あらせいとうを家苞に
 船室の一席とりてあらせいとう
 髪に憑くストックの香も安房土産

ばら

宿好

宿好

寒暑

素抱

暮津

燕音

宿好

もも

さざ

燕音

もも

燕音

さざ

ばら

随笑

随笑

ねず

もも

ばら

さざ

さざ

ばら

ばら

ばら

寒暑

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

● 仏生会 誕生仏 灌仏かんぶつ

花このまゝ仏生会までもたせし

さざ

御本尊どぜう髯もて仏生会

燕音

鯉群れて撒餌とり合ふ仏生会

随笑

あまたるう空暮れゆけり仏生会

随笑

掌を合はす誕生仏に喜捨の音

随笑

浴仏に妙なるものを降り注ぐ

随笑

空青う青うなりゆく仏生会

随笑

灌仏の柄杓のやりとり見ず知らず

寒暑

鯉に伍し亀の泳げる仏生会

暮津

● 花御堂

よき風の吹き抜けるなり花御堂

もも

花御堂新たなる風呼びにけり

ばら

花御堂ぐるぐる廻りに近所の子

随笑

花御堂守は檀家の古老にて

随笑

水仙光則寺を四柱に束ね花御堂

随笑

花御堂参りの男女なんによふと途切れ

随笑

花御堂大船 竜宝寺ぼつりぼつりと人の訪ふ

寒暑

人絶えて風訪ふばかり花御堂

寒暑

ちよこなんとお堂の前の花御堂

寒暑

● 甘茶 甘茶仏

さへずりに十余り甘茶茶碗伏せ

ねず

雨冷えの甘茶こくりとのみほせり

もも

手際よく傘をあづかる甘茶番

もも

甘茶仏乾き易きを淋しめり

ばら

甘茶懸く女の肱のすつと伸び

随笑

堂縁に甘茶の菓鐘汲まれよと

寒暑

ところと木の芽明りの甘茶仏

石鏡

● 御忌ごよみ

御忌御忌と鳥啼けるなり増上寺

宿好

● 緑雨の忌

緑雨齋藤緑雨の忌コラムニストが取り上げて

石鏡

毒舌家齋藤緑雨の忌なりけり

石鏡

● 虚子忌

忌寿福寺に参ず虚子一門の靴の数

随笑

虚子の忌の杖を持ち換へ立話

随笑

隆として柏楨老樹虚子忌かな

随笑

仕出し物届きて虚子忌の旦那寺

随笑

● 呼子鳥よこどり

呼子鳥専心花鳥諷詠経

ばら

●春の鳥

くちばしの黄色い鳥とだけ答ふ

素抱

●春の鴝

浅春の櫛に鴝のむかう向き

宿好

春の鴝こんな日もあるこんな日も

素抱

ぎうとこゑ居ること確か春の鴝

石鏡

正面に現れてまさかの春の鴝

石鏡

素っ首をくるりくるりと春の鴝

石鏡

●嘖さくろ 嘖さくろ

さへずりに十余り甘茶茶碗伏せ

ねず

さへづるは何かと問はれあてづつぼう

ねず

嘖れり横綱格の大桶も

ばら

気が利いてルビが嘖る日本語

燕音

チューリップの芽立ち嘖り初むやうに

宿好

日金閣寺が当り嘖りさうな梅擬

宿好

嘖りの歌姫にしてラテン系

随笑

鰻繁の黄のおしぼりの嘖りさう

随笑

ぎっくり腰感極まらば嘖らん

寒暑

さぞずりのありかは花の奥の奥

素抱

キキと舌焦げむばかりの嘖りや

石鏡

●鳥の巢

鴉の巢こゑから推して二羽はゐる

さざ

吹き降りの雨の降り込む鴉の巢

さざ

杜に棲む巢懸け鴉を皆敵視

寒暑

●巢箱

巢箱懸け穂高赤松天然林

ばら

●古巢

あれこれと詮索しをり古巢の材

さざ

●燕の巢

親鳥とおもふ頭が見え燕の巢

ばら

山峡の燕巢造りこれからよ

素抱

●春の駒 若駒

春駒の昨日廻りし村に泊つ燕村展

随笑

若駒が跳ねて燕村の南蘋画

随笑

●春の草

ひんやりと手の甲に当つ春の草

燕音

劉生岸田劉生展の習作春の坂の草

随笑

●古草

古草のそこらへ坐り給へと云ふ

古草の上を鳥の頭行き来せり

古草となりし賑はひ天あまがした下

古草を渡り歩きの天道虫

堂裏金澤文庫に古草武州金澤山きんたくさん

腑に落ちぬ古草の径途中まで

古草につらつら安房の日の射せる

●駒返る草

駒返る草定年を前にして

●雀隠れ

来てみれば雀隠れの衣川

●蘂ひばいへ

ひこばえや集合時間告げられて

●竹の秋 竹秋ちくしゅう

竹秋の物心より直心

竹秋の竹林鳴動して止まず

●春光

春光を芹に振り撒きゆける水

春光をやはらかに投げ利尻富士

●青麦

青麦の放てる夜気と覚えけり

あなたなる安土の麦の青霞

青む麦こんなになに早く逝くなんて

●菜の花 花菜 油菜

望遠レンズ花菜畑の黄を絞る

安房花菜日和ずんずん歩きけり

入船荘花菜畑を突つ切りて

一泊が二泊となりぬ花菜村

へんにたかく咲いて月夜の花菜かな

いちめんの花菜みつばち見えてくる

くらくらと花菜の中を歩きけり

船で来て安房の花菜に染まらんと

土地人に教はり花菜に沿ふ径

まんぼうの走り廻れる花菜の沖

畑ほとりより出す花菜の宅急便

男来て三脚降ろす花菜畑

押し黙り見居り花菜の虻の所作

花菜晴れ漁師は漁に精を出し

悠久の青空があり花菜の上

ねず

ばら

ばら

燕音

素抱

素抱

石鏡

宿好

宿好

さざ

ばら

鳩信

随笑

素抱

ばら

燕音

石鏡

ねず

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

燕音

宿好

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

石鏡

- 押し移る日翳は見えず花菜畑 石鏡
- 花菜見に足を延ばして江見太海 石鏡
- 花菜の香むんむん太海小学校 石鏡
- 真昼間の生唾のんで照花菜 石鏡
- カーフェリー土産売場の安房花菜 石鏡
- 咲きたくて花菜うづうづしてあたり 石鏡
- 菜の花のきちがひじみしひかりあぶ さざ
- 菜の花にずんと展けて安房の海 さざ
- 菜の花に虻は呪文を唱えけり ばら
- 菜の花の空ゆく雲も一茶風 燕音
- 菜の花に北信五岳月夜かな 燕音
- 踏切の傍に菜の花のほほんと 石鏡
- 遠く見し菜の花を今至近距離 石鏡
- 畑の昼菜の花いろの尿をして 石鏡
- 油菜にアゲハ春型かさむりて さざ
- 菜を摘みに車は袖ヶ浦ナンバー 石鏡
- 浜大根の花
- 浜大根何處から降りても小網代湾 石鏡
- この先に径無ささうで浜大根 素抱
- 大根の花 花大根 ばら
- 色合ひのおとなし過ぎる花大根 ばら
- 高苜ちしや レタス 素抱
- パリパリ感好きでレタスとフランスパン 素抱
- 狐の牡丹 素抱
- キツネノボタンその実みどりの金平糖 素抱
- 髭草かみくさ ばら
- かがんぼの脚踏み外す髭草 ばら
- 種漬花 燕音
- 一茶坊の生地たねつけ花の盛り 燕音
- 雀の鉄砲 ねず
- コップに挿すすずめのてつぼう独立祭 ねず
- 代掻かれ雀の鉄砲水浸し ねず
- すずめのでつぼう束毎山の田を返す 燕音
- 田に引ける水音すずめのてつぼうに 燕音
- 午報告ぐ酸葉に雀の鉄砲に 随笑
- 雀の帷子かたびら もも
- 天気雨はらと雀の帷子に もも
- 雀の槍 素抱
- 雀の槍生へり英軍墓地の芝 素抱

●諸葛菜

こんなにも殖えてどうする諸葛菜

諸葛菜晦日の雨に伸び切りて

検査日の諸葛菜彩薄れをり

腰越状したためし地の諸葛菜

継ぎはぎのその日暮しや諸葛菜

諸葛菜忍性蓋蒙古退かせし僧の墓

決めた事決めた通りに諸葛菜

諸葛菜些事より他に無き老後

諸葛菜要らぬ戦争引き起こし

諸葛菜巡らせ建長寺 回春院尼ぜの起居かな

●豆の花 蚕豆の花

そら豆のもう咲いてゐる青入江

そら豆の花の勝手な思ひ込み

●豌豆の花

豌豆の花ぬくぬくと砂地畑

●蝶 紋白蝶

紋白蝶もんしろが仏舍利塔を越えんとす

よろよるとじやがたらいもの花へ蝶

油菜にアゲハ春型かさむりて

取組る蝶もニッコウキスゲ色

車百合蝶をくるりと返しけり

上等な蜂蜜いろの蝶とべり

日中ゆく蝶のうねりを湧水も

知恵の輪の外るごとく蝶別れ

御柱落とす地点へ白き蝶

マンモスの臼歯のやうな岩に蝶

蝶せせる薬わなわなとまんじゅさげ

紋白蝶もんしろとおじやましている引き売女

いぶかしみ見て過ぐ蝶の菟まる木

ヅッキーニ実結ぶ蝶の肝煎りて

クレヨン画へんてこりんな蝶飛ばせ

幽冥の蝶たゆたへり南谷

捕虫網出会ひ頭の蝶逃がす

蝶の舞書体で云へば草書体

●春風

春風は海を渡りて檳榔樹

入り鉄砲 出女 春風 出入りす

●たこ 帆 いかのぼり 奴帆

もも

さざ

鳩信

宿好

随笑

随笑

寒暑

寒暑

素抱

暮津

ねず

燕音

ばら

ばら

もも

もも

さざ

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

ばら

鳩信

宿好

宿好

随笑

素抱

素抱

石鏡

石鏡

暮津

燕音

さざ

さざ

燕音

凧上げの下手も上手も先づ走る

凧上げの子の渚まで一目散

凧いかのぼり 遂に風向きとらえたる

凧平衡感覚使ひけり

凧の尾のながながしきを誇りとす

砂浜に落ちて砂噛む奴凧

●風船 紙風船

コスモスの空へ風船離せし子

紙風船土産に雲の浦を発つ

紙風船春を手玉にとるごとく

紙風船ぐちゃぐちゃにして興ず孫

怪獣ごっこ紙風船にもう飽きて

第六感当り風船逃がしたる

風船より軽き身ごなし大道芸

●石鹼玉

一つ一つが三千世界しゃぼん玉

まんまるに直りいびつなしゃぼん玉

石鹼玉飛ばす子追ひかけ壊せる子

石鹼玉吹ける側から壊されぬ

破裂して石鹼しゃぼんのしぶき岩っ角

ぶるぶると俵形してしゃぼん玉

突き出せる子の掌に大破しゃぼん玉

●鞆しゅうせん ぶらんこぶらんこ ぶらんこぶらんこ

女童の立ってぶらんこ漕ぎ出せり

ぶらんこの下の余寒の水たまり

ぶらんこは青天井より垂れゐたり

●朝寝

遠浅の海に遊べること朝寝

匂を案じ暫し朝寝も虚子掌上

日曜日大魚籠のごと朝寝せり

朝寝して通勤の日を遠くせり

●春眠

春眠曉を覚えずまでゆかず

春眠曉を覚え目覚めぬ大部屋に

春眠のゴリラの地下足袋めく蹠

●蛙の目借時 目借時

検査の為の検査蛙の目借時

採血の血管選れり目借時

目借時沽券てふ字が書けなくて

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

年金の本など読んで目借り時
 干菓子に型俳句にも型目借時
 めかり時映画はシルバー料金にて
 種あかす手品などみて目借時

●春愁

春愁ふウツボカズラに指入れて
レントゲン写真
 春愁ふ吾が骨格を医師と見て

鳩信
 暮津

●蠅生る 蠅の子

蠅生る磯長しながの國の磯歩き
 蠅の子の止まりつぷりも物馴れて
 蠅の子の追はれて次に止まる処
 蠅生る家居ばかりになまる身に
 蠅の子の飛距離まだまだ知れたもの
 蠅生まれ四辺にはかに活気づく
 人間も木石の類蠅の子に
 蠅の子の触りたくなるもの数多
 蠅の子の元へ戻つてをりにけり
 蠅生る家にぶらぶらしてゐては

ねず
 さざ
 さざ
 随笑
 随笑
 寒暑
 素抱
 素抱
 素抱
 素抱
 石鏡

●春の蠅

すぐ思いあたる仕種を春の蠅
 春の蠅探せばをりぬ俳諧寺
 春の蠅何をするかと見てをりぬ
 春の蠅一挙手一投足の妙
 春の蠅庭石はまだ冷たかろ
 止まらせてなまあたかき春の蠅
 春の蠅ちちんぷいとぞ消えにける
 春の蠅番屋の客に蹤いて来ぬ
 大人しくしてゐる春の蠅でなし

ばら

燕音

燕音

燕音

素抱

素抱

素抱

素抱

石鏡

●春の蚊

ぷーんと来る春の蚊にしてあな近き

寒暑

●虻

コスモスの縁へりを掴みて虻沈む
 買手つく菊の苗より虻立たせ
 ホバリングする虻に貌突き出して
 方向をくると転じ虻の尻
 虻去るとはつかに石路の独り言
武山三浦富士
 つつじに虻図図体あづけ蜜吸へり
 虻一匹迷い込みたる音薄暑
 押し黙り見居り花菜の虻の所作

さざ

ばら

宿好

宿好

宿好

随笑

寒暑

素抱

花虻の音聞く限りきかん坊

素抱

べこ虻は炭酸ガス好き車中にある

素抱

●蜂

あはててはいけない柿を滑る蜂

鳩信

柿色に降り注ぐ日に蜂降れり

鳩信

ポタージュを蜂嗅ぎつけぬカフェテラス

燕音

蜂飛来即眼圧といふ言葉

随笑

混浴のアダムがイヴに蜂指さし

素抱

混浴の蜂の来る湯に今一度

素抱

徒組は割喰う旅や蜂を除け

素抱

●蜂の巣

さんしゆゆの葉裏に蜂の小さな巣

もも

すずめ蜂患部のごとき巣を作り

随笑

山門にスズメバチの巢林昌寺

素抱

蜂の巣の容が風邪の熱の眼に

石鏡

●逃水

逃水の直路ビートの照り返し

燕音

逃水や斜里岳とろけ出しにけり

燕音

●山吹

山吹や川波めくれめくれゆく

もも

岳麓の朝日きびきび山吹に

もも

宿の灯のくつきり点る濃山吹

もも

山吹の上の断崖底技けし

さざ

ご門前朝の山吹なまなまと

ばら

山吹の黄を突つ切りて正受庵

燕音

夕暮を呼び出してゐる白山吹

石鏡

ここ最も奥まる塔頭濃山吹

暮津

●海棠

海棠の蒼解く風方丈へ

ばら

海棠に負けぬ笑顔を撮りなされ

随笑

●馬酔木の花

湘子逝く馬酔木も花の鉦打ちて

暮津

●雪柳 小米花

二度咲きの一つこつきり小米花

ばら

雪柳三千世界此処にあり

燕音

雪柳佛花と決めて幾星霜

素抱

●楓の花

朝方の楓翼果に風湧ける

もも

●榲桲の花

まるめろの花

- 花まるめる雨が陽気に降り出して
素抱
- 榎植の花 くわりん ぐわりんの花
空鳴つて風吹く日なりくわりん咲く
素抱
- 花くわりん夜間飛行の灯のちらちら
素抱
- 枳根 けんぼなし けんぼなし
けんぼなし昨夜の嵐の落としもの
石鏡
- 通草の花 あけび 花通草
瞬きてあけびの雄花雌花かな
ばら
- 花あけび雨うすずみに降るばかり
ばら
- 花あけび引率の子は上級生
素抱
- 花通草物音一つたてぬ村
素抱
- 葱坊主
葱坊主苞を破りて落慶式
もも
- 葱坊主越しなる象潟小学校
石鏡
- 春の筍 しゅんじゆん 春 筍
下駄履きの作務僧春筍抱えくる
暮津
- 明日葉
明日葉の道を巡りて島弘法
鳩信
- *島弘法は島内八十八ヶ所にある石仏
明日葉に子守唄めく冬の潮
八丈島で夕立のことを斯く云へば
明日葉を嬉しがらせる所降
寒暑
- 蝮蛇草 まむしぐさ
山道のここにどっこい蝮蛇草
宿好
- 杉菜
カツパ淵杉菜の青を流しけり
宿好
- 華鬘草 けまんさう
鯛釣草うらはらの世を明るうし
素抱
- 都忘れ
世話なしの都忘れの株殖やす
宿好
- 金盞花
雫切りのぼる太陽金盞花
ねず
- 篠困ひして金盞花まだ葉がち
ばら
- 金盞花挙げて畑土代赭いろ
随笑
- 金盞花砂の目潰し喰ひけり
随笑
- 日持ちよき安房金盞花仏壇に
寒暑
- 保田
金盞花くるみ呉れしは千葉日報
石鏡
- 種蒔
種蒔きに出て退屈の虫退治
ばら
- 朝顔蒔く
朝顔の種蒔く臍を下にして
もも

朝顔蒔く穴ぼこに種子一つづゝ
朝顔種子浸すに休眠するやつも

石鏡 石鏡

●茶摘

茶摘籠腰に弾ませ結仲間
茶摘み畑手が回らねばうち捨ておく

ねず 素抱

●蚕

天蚕いろカーテンに覚む患者なり

鳩信

●桑

廃れたり桑と甲源一刀流
靄といふおほやうなもの桑巻けり
大滝村桑が長じてしまひけり

ばら ばら 宿好

●蔦若葉

蔦若葉磨き込まれし芸に似て

素抱

蔦若葉吹く風クラブ10カラット

暮津

●座禅草

沼尻に雲せり上がり坐禅草

ねず

●春深し 春闌たく

病人に個室大部屋春闌けぬ

暮津

●夏近し

小包の紐切る音も夏近し
劉生の道の画ばかり夏近し
甘藪場に甲烏賊の寄る夏近し

もも 随笑 石鏡

●蛙

山蛙 代蛙 昼蛙 田蛙 蛙合戦 夕蛙 牛蛙
下駄鳴らすごとし古刹の山蛙
二夕三掻き股ひろげ浮く山蛙
山蛙聞き駢蕩として長湯

ばら 燕音 宿好 宿好

衣川やいのやいのと代蛙

宿好

代蛙一雨あつてもよささうな

暮津

昼蛙腹の底より啼くが佳し

燕音

曲り家の三和土伝ひて昼蛙

宿好

昼蛙愚の骨頂と啼くなめり

素抱

田蛙のカララ躰に共鳴す

燕音

北安曇野月夜高吟小田蛙

宿好

田蛙聞きうたたね心地畑毛の温泉

随笑

田蛙のかいかい雲から貌出す富士

随笑

足音に蛙の田蛙算を乱し

寒暑

田蛙の貝摺り合はすごとくなり

寒暑

田蛙も塚原問答根本寺

寒暑

田蛙のけくけく啼くは先がけ組

石鏡

口語で鳴く蛙文語で鳴く蛙
河鍋曉斎筆
 睨め廻す「風流蛙合戦圖」

ばら
 ばら

マスクして蛙めき来ることのおもしろ

燕音

蛙合戦見守る此処が上席ぞ

燕音

青蛙あおびつゝき遠野に雨をもたらせり

宿好

ひつつめに腹のぬくもる夕蛙

宿好

ひと雨を齎す蛙の手柄顔

随笑

良寛の里あいらたま 璞たの蛙つゝごゑ

寒暑

能舞台真野の蛙の囃し方

寒暑

能舞台蛙も一手仕る

寒暑

噴湯後生掛自然研究路ときにケコと蛙のこゑ出して

寒暑

牛蛙人さしかかれば音の詰る

素抱

飛び込むは蛙ガガブタ覆ふ沼

暮津

●躑躅つづじ

一言で癌と告げられ躑躅燃ゆ

ねず

武山 三浦富士
 つつじに虻あ図ず体あづけ蜜吸へり

随笑

うたた寝すつつじの上の瑠璃蜥蜴

寒暑

大味な彩のつつじに飽き飽きす

素抱

雨の赤つつじびんぼけ眼鏡の度

素抱

東京のつつじといへば根津権現

石鏡

●若緑 緑立つ 松の芯

みどり立つ難閑耳なにかにぼつんと良寛堂

寒暑

松の芯浪うらうらと寄せにけり

石鏡

●薊あざみの花

薊には棘あり用心してかかれ

寒暑

●藤 藤の花 藤棚 山藤

磯山の松にのぼれる藤の花

さざ

亀戸天神
 頭の中に藤の暗がり垂れ込めぬ

鳩信

越天樂奏つることく下り藤

鳩信

藤棚の暗部雫を零しけり

鳩信

花房を伝ひて微光下り藤

鳩信

亀戸の煎り豆本舗藤の雨

鳩信

山藤のむらさき散り込む魚道あり

素抱

河原石皚々天より下り藤

素抱

藤見事見事とぞとこゑ車中より

素抱

山藤とおぼしきが垂れ向ひ山

素抱

●行春ゆくはる 春行く

コンドルの怒り肩して春逝かす

さざ

●暮の春 暮春

腫ればつたき鯉に寄られてゐる暮春
 退院の途次の暮春の中華蕎麦
 造影剤かつと胸板焼く暮春
 もう一度呼び掛け暮春の枢窓
 紙碑として一集編むや暮の春
 あはあはと暮春の露の炊き合はせ

●春惜む

秋山郷赤湯に春を惜しみけり

●四月尽

今月は西向く土さむらひ四月盡

●黄金週間

ゴールデンウィーク

黄金週間職退いててふ語嘗ての響きなし

ゴールデンウィーク籠りて何すべく

■五月

●夏 炎帝 朱夏

炎帝に葡萄の種を抜かれたる

炎帝の隙ついて風生るなり

炎帝の何一つ手を下さぬに

炎帝に葉は皆垂れて従ひぬ

朱夏の旅詩うたの囊ふくろを携えて

亀の頭のごとくが朱夏の雲の浦

真つ当にあたらぬがよし朱夏万端

振れること忘れぬ朱夏の古磁石

流れ藻の長短首夏の佐渡航路

三夏その首夏告げわたる風なりけり

用足して丸善に寄る東京首夏

青故郷法事一つに繋がりて

常夏大船植物園のウツボカズラのサキノホン

硝子器に箸の当りて夏の音

水槽のホタテでんぐり返る夏

モンスター生まるゝ夏の甲子園

三振を喫す唇鹹き夏

常夏の島で鍛えしサウスポー

妻の夏吾が夏一つ屋根の下

ごろ寐の夏又来て厄介かけまする

硝子の泛子ごろり夏場の大間崎

乗り合はす夏の嘗ての通勤車

夏鴉開口一番「夜が明けた」

夏旅プランお岩木に寄り龍飛に寄り

ねず

鳩信

鳩信

石鏡

石鏡

石鏡

燕音

石鏡

石鏡

随笑

随笑

素抱

素抱

もも

もも

さざ

さざ

ばら

暮津

暮津

寒暑

寒暑

暮津

暮津

寒暑

寒暑

素抱

素抱

さざ

さざ

鳩信

鳩信

燕音

燕音

燕音

宿好

燕音

随笑

随笑

寒暑

寒暑

パナルジン効き過ぎ水腎症の夏

寒暑

夏の男鹿すなぶけおどのバスガイド

*すなぶけは鯉寄る おどは年寄

寒暑

夏鴉遺跡の丘に何漁る

寒暑

これといふ宿題はなし夏百日

冬は蟬鳴かないよという児の話を耳にして

寒暑

夏といふ概念掴み始めし子

寒暑

又の旅夏と定めて青富良野

素抱

脛打っていまいましきは夏机

素抱

鼻先に「夏だ！旅だ！」の車中ビラ

素抱

嬰の寝巻ビエロの水玉模様の夏

素抱

妻の名は陽子 横浜生れ

あけっぴろげの 港のヨーコ ヨコハマ 夏

素抱

寄りかかる妻ゐてなにかと助かる夏

素抱

夏雀山居倉庫の瓦に跳ね

石鏡

もめごとや野毛坂下の夏の闇

石鏡

茅ヶ崎 地魚料理店 えぼし

品書は天候次第夏魚

石鏡

納豆の風味のアボガド出回り夏

暮津

往時の逗子サマータイムといふがあり

暮津

足速き夏の魚は酔でべて

暮津

ハーモニカ上手な軍曹シネマ夏

暮津

へたる夏何かと云へば生卵

暮津

程々に手を抜くことも鎖夏のうち

暮津

岳父の世話そんなこんなで一夏過ぐ

暮津

瘡蓋や一夏過ぎむとしつつあり

暮津

夏の日思い出づくり休暇村

暮津

定年後夏はつとめて早起きす

暮津

あっさりと躰抜けゆく夏の水

暮津

●立夏 夏に入る 夏来る 夏始まる

けふ夏に入れり櫂の戦ぎぶり

もも

田淵ひで子さん逝く

訃音告ぐ子の名は穂高立夏経て

ばら

海原は鯢の背隆と夏が来て

ばら

口癖のえらいえらいの夏始まる

鳩信

これより夏砂州を舞台の花宴

燕音

けふからの夏を向ふに廻したり

随笑

良寛の綽名からすの夏迎ふ

寒暑

●五月

髪詰めて童顔もどる五月妻

ねず

白帆消ゆ沖に五月の風余し

もも

税関のブラス五月の空展け

随笑

良寛堂五月雀の屯せり

寒暑

山車出して風に当てをり祭月

素抱

グラビヤの五月の暦ガレー船

厨より話に加はる五月妻

●愛鳥週間 バードウィーク

奥鬼怒川温泉

バードウィーク森のみどりに染まるべく

●初夏 初夏 夏はじめ

ポポーの木と云ふを植込み夏はじめ

蹠にはつなつの砂返りけり

はつなつの砂場のままごと遊びかな

はつなつの尿を所望す泌尿器科

夏迎ふ駝鳥に片減りしない脚

夏は来ぬ焼津の海の魚光り

屑籠は大きめが佳し夏はじめ

はつなつの花を絶やさじ新仏

●卯浪 うなみ

雲の浦昼夜を舍めず卯浪寄す

ゆんで 左手より弥彦山へ寄せて高卯浪

卯浪寄せ佐渡を真正面の宿

目を据ふる卯浪の果てに佐渡が見え

船室に雑魚寝卯波の為すまゝに

卯波立つ沖へ乗り出すえつさ丸

船窓に高卯浪みて横坐り

佐渡島豊々として照り卯浪

●牡丹 ぼうたん 紅牡丹 白牡丹 緋牡丹

ぼうたんの白に浸りてゐる浴後

ぼうたんの匂ひ薄める風立ちぬ

ぼうたんを揉みに揉む風打合へり

さしかかるぼうたんの名は陽明門

ぼうたんに疎んぜられて発つ蠅か

ぼうたんを見限りて風荒吹ける

ぼうたんの咲けばついつい嗅いでみぬ

大きくて立派な鉢や紅牡丹

花あほる風千変す紅牡丹

円覚寺塔頭

まぶしかり雲頂庵の白牡丹

緋牡丹の錯乱状態つづくなり

がっくりと見せ場つくりぬ緋の牡丹

日の牡丹日暮れて風の牡丹かな

きさばし

階の幅員ひろし牡丹寺

牡丹圖を杜若圖に掛け替へよ

真上より覗きて牡丹いびつかな

石鏡 暮津

素抱

ねず

さざ

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

素抱

暮津

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

ねず

鳩信

随笑

随笑

随笑

随笑

素抱

さざ

随笑

さざ

鳩信

鳩信

ねず

もも

もも

さざ

愛染明王示現牡丹の花中より

さざ

格天井牡丹圖牡丹の頃に来て

ばら

連れ合いの渾名呼ばるゝ牡丹寺

鳩信

何事ぞ牡丹を寺の囀ひもの

燕音

たいがいにしろや牡丹の覗き見は

燕音

發送の牡丹苗木は横濱まで

宿好

牡丹に寄す侍従長筆大御歌

宿好

春先の牡丹の手入れもくもくと

宿好

牡丹守この須賀川の地味を云ふ

宿好

薬用としての牡丹の在来種

宿好

祖牡丹撰津の國より持ち込みて

宿好

すっぱりと芽二つ残し牡丹剪る

宿好

風嫌ふ牡丹の葉剪り大切と

宿好

牡丹は剪らねば剪ればよき花を

宿好

牡丹の手入れ総勢二十名

宿好

君其処へ牡丹の脇へ吾撮らん

随笑

真昼間の人氣疎げな牡丹かな

随笑

辯へたと牡丹に疲れ見えにけり

随笑

牡丹吹き通りすがりの巫女を吹き

随笑

旧浜離宮庭園
大き蠅牡丹臭さを帯びて発つ

随笑

閑にして寂たり牡丹の間の土

寒暑

真似して嗅ぎ牡丹に顔をそむける子

素抱

盛りの牡丹危惧する程の雨でなし

暮津

風絶えぬ一日牡丹の獅子奮迅

暮津

●更衣 衣更ふ

床ずれのはつかに在りぬ更衣

鳩信

衣更へて手足すうすうする一ト日

寒暑

更衣即ち着古るし作務衣かな

素抱

緩きもの肌が覚えて更衣

素抱

衣更へてたよりの襟搔き合はせ

石鏡

更衣首にほくろのある女

暮津

●葉桜

葉の混んできたるさくらの幹にほふ

ねず

葉ざくらの候と書き出し本降りに

ねず

身の廻り小出しに詠ひ葉ざくら季

ねず

葉ざくらに一も二もなく染まりけり

ばら

葉ざくらに葉ざくらのいろ正受庵

燕音

葉ざくらの葉末までゆきわたる風

宿好

葉桜を猶猶蒼く風吹けり

随笑

無為の日々葉ざくらを風養へり
 百葉箱葉ざくらの青一途なる
 葉桜の毛虫垂るるによき暗さ
 葉ざくらや日の斑を顔に胸肩に

●御柱おんばしら

御柱その盛土もさみだるる

下諏訪御柱祭

控へをる秋宮一之御柱

御柱落とす地点へ白き蝶

山風に木遣り起こりて木落とし坂

坂上の空へせり出す御柱

落とさんと諏訪の春宮二之柱

元綱に小綱を掛けて木落とし衆

木落としはまばたき一つする間

●端午

端午の湯踵きれいに磨きけり

●子供の日

紙兜折つてかむつてみせにけり

洗濯機朝から始動こどもの日

今にして躰け足らざるこどもの日

共用の水色ポロシャツこどもの日

ミドリ虫鞭毛使ふこどもの日

子供の日近し葉っぱのフレイ読む

鉛筆は2Bが好きこどもの日

●菖蒲

しやうぶ見る腰ポケットに扇子かな

立ち寄りて菖蒲青張る八日堂

天が下菖蒲の剣葉折葉かな

買物籠菖蒲の尖が見えてゐる

葉菖蒲の香ごとくるめり新聞紙

葉菖蒲の邪気祓ふ氣にあやからん

●幟のぼり

川中島過ぐる辺りか幟見ゆ

●柏餅

柏餅誰にでもある佳き時代

連休は何處へも行かず柏餅

柏餅人物談義言ひ得て妙

●菖蒲湯

はやばやと入りて菖蒲湯匂はすか

菖蒲湯の菖蒲に術後の身を寄せぬ

随笑

寒暑

素抱

暮津

さざ

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

素抱

もも

さざ

さざ

ばら

燕音

随笑

石鏡

ねず

ばら

随笑

素抱

素抱

素抱

ばら

素抱

石鏡

石鏡

ねず

鳩信

菖蒲湯をざんぶりと出づ赤仁王
 菖蒲湯に貝の切り傷いたく沁み
 菖蒲湯の菖蒲に倣ひ横たはる
 熱き湯を押し退け入る菖蒲どき
 菖蒲湯にざつと浸りて若返る

●夏蜜柑

夏みかんの花の匂ひを風薄め
 夏みかん良寛ここに発心す

鳩信
 寒暑

●新茶

朗報を聞くごと新茶味はへり
 新茶淹る湯加減のこと添え文に
 藪北の新茶新茶と云ひ注げる
 庵原より宅急便で新茶着く

ねず

新茶淹る湯気の向うに送り主

随笑

新茶なみなみ注ぎていつもの日の始まり

随笑

静岡 庵原郡 影島智子さん
 毎度のことかたじけなくも新茶かな

石鏡

川根茶を車内販売ポンコツ汽車

石鏡

茶ぼこりのかすかにあがる新茶淹れ

暮津

●古茶

古茶淹れて七番日記続き読む

石鏡

●夏めく

秋篠寺
 梵天の御衣夏めく安佐美止利

さざ

いちめん夏めく潮路えつさ丸

寒暑

話続け夏めく茶の間に汝が口調

暮津

●薄暑 薄暑光

関取に前歩かるる薄暑かな

ねず

むしむしとする日を咲きて夏みかん

もも

蒸し暑き花掲げたり泰山木

もも

ジョージ・グロス回顧展
 ハイル・ヒトラー！鷲ペンで描く髭薄暑

宿好

大道芸蒸す日を火噴き男かな

寒暑

虻一匹迷い込みたる音薄暑

寒暑

嗚呼東京駅
 赤帽のポーター徘徊驛薄暑

寒暑

蒸す一夜唄が洩れ来て「碌でなし」

寒暑

ヒザラガイ見るさえ薄暑覚えけり

素抱

だんご虫節々返す薄暑光

素抱

薄暑の野毛髯のチャップリン笑ひ集ると

石鏡

大道芸ネタを小出しに野毛薄暑

石鏡

薄暑来て始末の悪きチョコレート

暮津

鰻の肝横目に見て過ぐ街薄暑

暮津

やみくもにティッシュ渡さる街薄暑
●カーネーション

カーネーション妻母として贈られき

暮津
寒暑

●母の日
母の日のおかあさんてばおかあさん

随笑

●芭蕉巻葉 芭蕉青葉

青芭蕉風にはためく湯屋の帰途

暮津

雨風にばらけ初めたり青芭蕉

暮津

●茄子苗

茄子苗植う穴掘りかけて逝かれけり

暮津

●三社祭

角刈の舁き手匂へり三社祭

素抱

●祭 夏祭

御旅所

山車

神輿

夜宮

祭舟

祭の子

射的屋の手持ち無沙汰も夏祭

鳩信

裸電球柱に巡らせ夏祭

素抱

孫預かる故の散財夏祭

暮津

御旅所に団扇と扇子語らひつ

さざ

御旅所の氷の下の烏龍茶

素抱

山車倉を叩きて楯の荒雫

もも

はつはつと山車倉の上に鴟鳴ける

もも

よれよれとなりて夕日の山車を曳く

もも

山車獅子の晴れ着の唐草模様も古り

燕音

山車神楽鉦は痴人愚鈍と

寒暑

風流山車出を待つわんこそば屋の前

寒暑

風流山車見返し遠のく刈屋姫

寒暑

山車出して風に当てをり祭月

素抱

立話山車の引き手の減りしこと

素抱

山車を曳く中に友ゐて木遣誦す

素抱

浅草のカツ井色の神輿かな

燕音

神輿舁く掛声くたびれてはならず

燕音

玄関に子供神輿の祝儀置き

寒暑

酒気帯びて男はさうよ神輿舁

素抱

神輿舁道路端にて腹ごしらえ

素抱

躓きてゴツと夜宮の走り根鳴る

もも

綿飴にぶつかりさうになる夜宮

随笑

祭果て巨き夕浪立ちにけり

ねず

祭くる門川に殖ゆ糸みみず

ねず

わらしべに鯨の吊られて御祭神

ねず

浦祭藻を出で入りのべらを見て
 臚しでの花垂弥次郎兵衛めく祭舟
 祭の子銜遊びの町内湯

ねず
 もも
 鳩信
 鳩信

足が向き神田古本まつりかな
 小鯨さきびきの前曳祭の子がわーい
本石灰町 御朱印船
 祭足袋ばたばた御朱印船を曳く
港祭り 横濱国際仮装行列
 祭見の立ちんぼ疲れ馬車道に

燕音
 燕音
 随笑
 随笑

横濱にツンタカタツタ祭くる

随笑

ユスリ蚊のお祭り騒ぎ生まれり

随笑

祭の喧嘩男は似たりよったりで

随笑

にんげんに祭り雀に真炎天

随笑

町内の祭り
 コンビニも町内の裡御神燈

寒暑
 寒暑

祭寄付受付すずかぜ来るところ

寒暑

祭来るそれを目当てに孫が来る

寒暑

金魚屋の二軒張合ふ祭かな

寒暑

わんこそば屋の二階に詰める祭衆

寒暑

大道芸祭囃すやオツペケペー

素抱

ちよんまげが街練り歩く開港祭

素抱

突堤に舟虫しゃしゃり出て祭

素抱

祭の中しゃくりつゝ泣く女の子

素抱

釣具店祭提灯戦がせて

素抱

ゆすり蚊の気炎挙げをり祭まへ

素抱

砂浴びの社の雀祭前

素抱

祭済み元の冥さの八幡宮

素抱

横須賀のサンダル履きの開国祭

素抱

祭の夜半ベソかいて躓きゆく子

素抱

綿飴孫買へと伝家の宝刀泣きを入れ

素抱

櫓の上囃子地口のいかがはし

素抱

狐火祭
 祭待つ茶房にキツネメイクの男

素抱

野毛の祭当たり馬券のやうな空

石鏡

元禄より百余度ほど帯まつり

石鏡

帯まつり杵屋社中と同宿す

石鏡

祭の子強く手を引きねだりごと

暮津

●若楓

若楓煽られしどろもどろかな

さざ

●新樹

林間にさんざめく鳥新樹雨

素抱

一行の瞬き仰ぐ新樹雨

素抱

山径を降らるるままに新樹雨

素抱

新樹雨顔にぼつんとあとばらばら 素抱
 新樹雨四辺を打ちてまたたく間 素抱
 湯疲れのそこはか溜る新樹雨 素抱
 ニュートリノ天網を抜け新樹山 素抱
 ニュートリノ達してをらむ新樹山 素抱
 新樹山臨みてアイスマルクかな 素抱
 鳥ごゑの語尾尻上り新樹山 素抱
 オムレツのやうにやはらか新樹山 素抱
 新樹山連なるまゝをスケッチす 素抱
鬼怒川温泉
 神輿庫新樹の気宇につつまれて もも
 あかときの新樹の樹頭冷え居らむ さざ
 新樹林木の性質たちのこと話しゆく さざ
 分け入りし山ならではの一新樹 素抱
 前山の新樹に吸はる昼の雨 素抱
 出湯出づ脛のすうすう新樹冷え 素抱
 大粒となりて新樹を襲ふあめ 素抱
 写生して山の新樹のもくもく感 素抱
 新樹高しいつまでもある鳥の向き 素抱
 雷又雷尾根の新樹を震はせて 素抱
 骨壺と新樹の中を戻りけり 暮津
 ●新緑 緑 緑さす
 ずばぬけて樗のみどりよかりけり さざ
 天気もちにもつて新緑寸又峽 ばら
 緑さす籐編み籠に籐の鳥 ばら
 緑さす鴻山妖怪財布かな 燕音
 緑さす富貴寺の面取り柱かな 寒暑
 緑さす窓を雨滴の徒競走 素抱
 新緑に慣れたところで山下る日 素抱
 新緑の此岸に村はかたまりて 素抱
 新緑の押し寄せてゐる一山村 素抱
 広辞苑割れば新緑殺到す 石鏡
 ルアー釣箱根のみどり映す水 石鏡
 緑さす料理一品一品に 暮津
 ●若葉 若葉雨 若葉風 山若葉 若葉曇り
 若葉雨日照雨にかはる御神域 さざ
 くろもじ若葉雨降つてよし晴れてよし 暮津
 若葉風立たす木の名をふうといふ もも
*ふうは中国産まんさく科の樹木
 若葉風若葉雨とが入り乱れ 随笑
 若葉風温泉街に吹き込めり 素抱

遊園地若葉風切る複葉機 石鏡
 こんもりと煽り甲斐ある櫟若葉 もも
 若葉して櫟は杜の明り取 もも
 櫟若葉して石畳冷え込めり 素抱
 ふる雨に桃の葉並び美しき もも
 からまつの間の一樹の夕若葉 さざ
 山若葉こんもり朴の木もあらむ さざ
 礫山のタツチ若葉のやはらかさ ばら
 うねり出すぶだう若葉のみどりの炎 ばら
 栃若葉すいと雨滴を奔らす ばら
 熊ノ湯に入るも一興若葉どき 燕音
 森若葉してセンニユウの高調子 燕音
 宮鳩の若葉曇りのででっぽう 随笑
 播粉木の音のづるづる若葉冷え 随笑
 まてば椎若葉もりもり小公園 随笑
 連休の若葉曇りの初日かな 随笑
 真鶴の魚付林の総若葉 随笑
 甲斐甲斐しく若葉日を撥ね馬刀葉椎 随笑
 身の内の門外れ若葉の湯 素抱
 栃若葉山の天気恵まれて 素抱
 湯けむりも櫟若葉もくもくと 素抱
 連休の二日目若葉曇りかな 石鏡
 若葉して青葉す杜に神在ます 石鏡
 ヤットウの皇宮警察森若葉 石鏡
 若葉して敏達七年噴火の山 石鏡
鳥海山 びだう
 妻伴れて若葉曇りをウオーキング 暮津
 窓開けゐて吾も若葉の湿りもつ 暮津
 ●柿若葉
直木三十五の墓
 墓のうへ痩せ古柿の柿若葉 暮津
 ●椎若葉
三浦半島 小網代湾
 馬刀葉椎みどり溶け込む油壺 石鏡
 ●樟若葉
 楠若葉神馬のけぞることく揺れ さざ
 照り合うて拝殿おほふ楠若葉 さざ
 この森の貴公子楠の若葉せり 宿好
 楠若葉鎌倉むんむん御成小学校 随笑
 献燈は丸亀汽船樟若葉 寒暑
 樟の花八幡神社鎮めけり 素抱
 楠の花咲いて薄暮を募らしむ 石鏡

楠の花水屋に水のおふれをり

石鏡

●常磐木落葉とぎわぎ

旧道は細々常磐木落葉みち

素抱

連歌師の墓を常磐木落葉搏ち

石鏡

●杉落葉

杉落葉積もり旧道絶えだえに

素抱

杉落葉惨と散り敷き自刃の地

石鏡

●筍 たかん

たかん

筍は口を噤んで掘るべかり

鳩信

筍は何處にでも出る度し難し

鳩信

男氣の筍の反りおのづから

燕音

画狂老人真筆雪中筍狩

燕音

筍を例えて云へば男氣歟

随笑

●筍飯

齢なりに私も頑固筍飯

燕音

●蒨 きやうしやき

伽羅蒨

木雫の音を聴きみる華奢な蒨

さざ

伽羅蒨をつまむ箸もて「例のほら」

鳩信

山妻の蒨なればしつかり灰汁抜けと

燕音

蒨を先づ湯搔いて春の水仕事

随笑

面白さうに剥く蒨なれば私にも

素抱

朝の蛾のかぶさる蒨の葉の一つ

素抱

蒨を過ぐスクールバスの空車

素抱

新じゃがの入る料理なら何でもよし

素抱

●新馬鈴薯 新じゃが

新じゃが

新じゃがの薄皮ほどの幸せも

素抱

賞与の日そら豆が出て湯も沸いて

ねず

●蚕豆

そら豆の莢突き出せる島の道

ねず

皺寄らぬやうに蚕豆茹でるコツ

もも

蚕豆まごちの正東風に吹かれ勁き茎

さざ

突端に来てそら豆の花の道

ばら

そら豆の撓むかたちはダリ好み

ばら

そら豆の怪童に遭ふ夢のなか

ばら

そら豆をつまめば指の温みほど

ばら

俳諧のよしみの酒をそら豆に

随笑

剥き甲斐あるそら豆にしてこれっぽち

暮津

剥き売りのそら豆に錆雨後の街

暮津

● 豌豆 えんじょう 絹莢

さやゑんじょうの摘みどき海の乱反射

絹莢のさして頼りにならぬ蔓

莢透いて海の日とほる豆の部屋

● 豆飯 まめめし

豆ごはんほつと安堵すその彩に

はんちくな齡を取るまじ豆の飯

何するにも大勢は佳き豆の飯

豆飯の湯気の立つうちいたただかん

● 芍薬

芍薬の珠日に熟す根本寺

大船 竜宝寺

玉繩の一寺手広く芍薬植え

一休の数ある頓知芍薬玉

芍薬の蕾弾けば固し固し

● 敦盛草 あつもりさう

敦盛草母衣らしきもの抱え初め

● 海芋

筒つぼの海芋は雨を蒐む花

● 文字摺草 もじずりさう 振花

振花のどれも動力尽きしさま

文字摺草きりきりしやんと立ちにけり

振花の翩翩梅雨の中休み

見染めたるときのときめき文字摺草

文字摺草一つの他は皆消えて

おもはゆき振花の辺に汝と坐る

振花のういいういしさがこみあげる

振花の根がぶち切れて口惜しかり

文字摺草団地の芝に交り咲く

● 擬宝珠 ぎぼうし

吉野の日ぎぼしの上を通りけり

妙本寺

擬宝珠の花にはじまるお題目

擬宝珠の茎をすりと雨滴馳せ

消息のその後ぶつつり花ぎぼし

● 車前草の花 おほぼこ

雨脚のびよんびよん車前草伝ひなる

蝦夷大葉子青空に花穂さし入れて

偏見はすこぶるつよし車前草村

車前草に覆はれ堅穴住居の丘

ねず

さざ

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

暮津

素抱

ばら

もも

ばら

随笑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

ばら

鳩信

宿好

暮津

ばら

燕音

燕音

寒暑

車前草踏み遺跡ガイドのボランテイア
 車前草に埋もれて道は在るには在る
 車前草の穂の逞しく夏送る

寒暑
 素抱
 素抱

● 姫女苑 ひめじよをん

車前草の穂の擦り切れし岬みち

素抱

ひめぢよをん偶さか雨に搏たれけり

さざ

はるじよおん富士も薄紅帯びて聳つ

随笑

ひめじよおん朝方一度降ったきり

素抱

ひめじよおん作り込まない庭が好き

石鏡

● ロベリア

液肥与ふベチュニア・サフィニア・ロベリアと

暮津

● マーガレット

兔波マーガレットに駈け寄りぬ

さざ

● 罌粟の花 けし

蘇る為の管吸ひ罌粟のゆめ ICU室

鳩信

罌粟の昼キュンと音して砂糖溶け

暮津

● 雛罌粟 ポピー

煽られてポピーフレンチカンカンめく

さざ

雛罌粟のごとき欠伸を内房線

ばら

せつせつせ雛罌粟咲いてばらりとせ

ばら

花作りホース引き込むポピー畑

寒暑

雛罌粟の苔の考え深げなる

寒暑

欠航にて安房の雛罌粟摘がふい

石鏡

● 鉄線花 鉄線

鉄線の剪り処こころと鉄当て

もも

猷身は人目につかず鉄線花

暮津

● 忍冬の花 にんどう すひかづらの花

もも

にんだうの花の自墮落雨の底

随笑

吸呑みのやうな花つけすいかづら

素抱

● 棕櫚の花 花棕櫚

航海を終へて棕櫚咲く家に居り

ねず

花棕櫚を仰ぎゆつたり坐りけり

もも

棕櫚の花黄昏長う長うせり

もも

まだ借手つかぬ空家の棕櫚咲けり

もも

本堂の畳さはりや棕櫚の花

もも

棕櫚の花雨に散けて落ちにけり

さざ

棕櫚の花はらはら零れカステラも

鳩信

棕櫚の花生々垂れて負け惜しみ

石鏡

棕櫚の花一寸バナナを思ひ出し

石鏡

●桐の花 花桐

口笛に空鮮しや桐の花
 花桐に雲青年に志
 咲く桐に一瀉千里の旅ごころ
 いっぱんの水道局の桐咲けり
 雲冷えてひとりごころの桐咲けり
 もうひとつ桐の筒花拾ひけり
陽谷山 龍寶寺
 観音は空に存すや桐の花
 桐描くには水彩に如くはなし
 桐の花入れて一景仕上げけり
 桐咲いてやうやく空がおちつきぬ
 桐の花程よき距離に立ちてみる
 職退いて一年経つか桐の花
 花桐のあなたの佐渡は暮れずともよし
 *このみやのもりのこしたにこどもらとあそぶ はるひはくれず
とつもよし 良寛

ねず

もも

もも

さざ

さざ

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

随笑

寒暑

桐咲いて鰻の寝床のやうな町

寒暑

雲高山国上寺とや桐咲かせ

寒暑

桐の花寺の和尚はむらさき好き

素抱

桐の花ぼかんと眺めぬしが去る

素抱

桐の花先代の顔もう忘れ

素抱

桐の咲く民宿で売る遊魚券

素抱

●朴の花

指し示すゆびにあつまる朴の花
 さざ
 目を戻し再び天の朴の花
 さざ
 朝は朝の智が働いて朴の花
 鳩信
 葉隠れの朴見んものと一步横
 寒暑
 何だろと見上げて朴の残り花
 石鏡

●泰山木の花

門構へ泰山木に負けてをり
 ねず
 波羅羯諦はらぎあてい泰山木の花咲けり
 ねず
 泰山木散る滅却といふ言葉
 ねず
 泰山木拝見磴の端借りて
 もも
 泰山木ずりおちさうな花とどめ
 もも
 だしぬけに降られて泰山木の下
 もも
 蒸し暑き花掲げたり泰山木
 もも
 葉の混み来てアンリルソ一の泰山木
 ばら
 泰山木高みに咲いて月に逢ふ
 随笑
 泰山木花の始末をだうつける
 石鏡

あらがねの光放てり泰山木

石鏡

● 椽の花

花了り椽うっさうとして来たり

鳩信

● 胡桃の花

花胡桃

花くるみつめたき雫こぼしけり

さざ

鬼くるみほつつり芽吹く千曲川

燕音

● 花水木

一新の街路アメリカハナミズキ

もも

港区の街路樹ドッグウッドなり

随笑

● 大山蓮華

上品の大山蓮華咲きにけり

ばら

● 薔薇

ありきたりな色でありけり垣の薔薇

もも

老人が出て来て朝の薔薇剪りぬ

さざ

立て続け降る雨薔薇を砕きけり

さざ

黄の似合ふ薔薇の名札はオクラホマ

鳩信

薔薇の赤き棘も美観の一つにて

鳩信

グラビア版カレンダーあり裸婦と薔薇

宿好

剪り取りてヨハネの首のごとき薔薇

宿好

一政の龍三郎の得手の薔薇

宿好

晩年を薔薇に腐心の老大家

宿好

一政の心頭の薔薇真くれなゐ

宿好

けふと踏む予感当りて薔薇崩る

宿好

色と云ひ隣家の薔薇に遜色なし

随笑

鉄の音遠くよりして薔薇騒然

寒暑

芳香茶薔薇の季節にまだ遠く

素抱

雨のあと薔薇壊す風ありにけり

素抱

奇想曲薔薇にふさはしプッチーニ

素抱

ほら見てよ薔薇が奇麗よあんだ達

素抱

錠摺あぶすりのヨット馳すなり薔薇の窓

素抱

相応の薔薇の門あり領事館

素抱

マタドールレッド激しやカフェの薔薇

素抱

薔薇どきの噴霧器門に置き忘れ

素抱

知らぬ間にあらあら薔薇のうどん粉病

素抱

晴れ間縫ひ薔薇に噴霧器鳴らしをり

素抱

薔薇真つ赤チラシ一切おことわり

素抱

植木市薔薇前にして施肥講釈

暮津

● 卯の花

花卯木

木村家 良寛戒語百ばかりありと聞けば
良寛の戒語空木の花の数

寒暑

いつ降ってもよささうな空花空木
梅花卯木ほとほと雨の止まざるよ

団体客箱根空木の紅を愛で

気のせいかな箱根空木に雨ぼつり

●竹植う ちくすいび
竹酔日

庭土が性に合ひたる移し竹

洒落て詠む気などさらさら竹酔日

●卵の花腐し うくた

卵の花腐し思案ああでもかうでもなし

●蛭蛄 ざりがに

ざりがにのそっくり返るはこけおどし

ペント屋にざりがに入荷五連休

川向うざりがに捕りの金谷かな 懐古

大井川渡りざりがに採りにゆく 少年時代 回顧

●蝦蛄 しやこし

釜茹での蝦蛄に夕映始まれり

●穴子

寿司喰いねえ江戸っ子好みの穴子寿司

●鱧

島泊り別誂えの鱧料理

トラ鱧の薄茶の縞の涼しさう

半分は遊びの鱧の渚釣り

鱧・鮑・甘海老地物お任せ寿司

●べい

浦祭藻を出で入りのべらを見て

げんなりと赤べら魚籠に腹を見せ

●皮剥 かわはぎ 馬面剥 うまづらはぎ

初対面紋付剥と申す者

およそこの世に与し易きはうまづらはぎ

かははぎの目の後退を何とする

魚籠の皮剥もうおだぶつの顔したり

昼寝より覚めてうまづらはぎの顔

のんのんとウマズラハギが近づき来

皮剥の尾鰭背鰭の鰭拍子

ナンヨウハギそんじよそこらにない色で

正月顔せる皮剥を賞味せり

この槽のウマヅラハギでござんすよ ふね

かははぎの顔を迂闊に造物主

皮剥は天下の珍味火を熾せ

素抱

暮津

暮津

暮津

もも

寒暑

暮津

鳩信

石鏡

石鏡

暮津

随笑

暮津

ばら

鳩信

素抱

暮津

ねず

もも

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

鳩信

燕音

燕音

燕音

皮剥の小さき鱧振る鎖夏法

随笑

とぼけたる貌のうまづらはぎの旬

随笑

皮剥の革財布などあらまほし

随笑

馬面剥の外れに外れたり左右の眼

寒暑

●鯖

水揚げ場鯖鯖の太海港

石鏡

船名入りリヤカーしこたま鯖積んで

石鏡

●飛魚

八丈島等 九句

飛魚跳んで跳んで水平線退る

ねず

●烏賊

俳諧オベ景色(病棟は水槽)

烏賊医長やおら脈拍とりにけり

鳩信

下北路

烏賊釣りの漁火鬼の目ん玉大

随笑

烏賊と海胆さざむちりばむ半島絵図

随笑

下北の一夜干し烏賊星の下

随笑

烏賊釣船きんきらきんの百裸灯

寒暑

入江より漕ぎ出て朝のカッチキ釣

寒暑

一夜干し烏賊のカーテン風岬

石鏡

甘藻場に甲烏賊の寄る夏近し

石鏡

妻湯浴む間のげそ煮の火を守れり

石鏡

●蛸

玄冬の地蛸粗塩すり込まれ

さざ

蛸博士腹式呼吸教授せり

鳩信

地のもののこれ一品と云へば蛸

燕音

蛸漁のその大方は朝の内

素抱

にゆうべえと蛸漁の沖見渡して

素抱

●帆立貝

水槽のホタテでんぐり返る夏

燕音

活ホタテ開きほっけに地酒酌む

素抱

●鮑

鮑の上あるく鮑よ一遍忌

ねず

夜のあわび一枚岩を這ふといふ

ばら

腕つきき海女の揚げたる大あわび

ばら

房総産鮑槽よりひっぺがす

燕音

大金のごと磯鮑押しただく

随笑

門前のさざえあわびの岩場かな

寒暑

鮑金一丁持って海底へ

石鏡

鱧・鮑・甘海老地物お任せ寿司

暮津

●山女

青嵐山女魚焼く火を襲ひけり

ねず

山女魚らの口肥えて来ぬ青葉どき
 山女釣荒くれ岩をひよいひよいと
 岩魚の瀬すこし上ミ手に山女の瀬
 山女釣れ紅葉に腹を返しけり

●麦 麦畑

太陽の三時の色の麦畑

この丘の麦のツーン・トーン・カラーかな

麦畑継ぎ目なく風送るなり

大旋風つむじ生まるることも麦畑

麦畑を追はれ鴉の減らず口

停車してホームが足らず麦畑

人焼ける畑麦畑からからに

●麦の秋

力要る老いの脱糞麦の秋

●穀象

テロ企つ奴は穀象より劣る

●柩たまごの花

ほんち捕る子に目つぶしの柩たまご

柩垣たまごうどんこ病*ほんちは喧嘩蜘蛛のことのなすがまゝ

●安居あんじ

安居寺廁草履のうすべつた

●南畝なんしゆの忌

南畝の忌嘘をまことの種として

■六月

●六月

六月の鴉どすんと樹頭に降り

六月のピザ生地寝かす雨の昼

六月の自炊棟廊冥く長し

六月の植木鉢をばちばちん

●臯月さつき

臯月さつき 早苗月 田草月

雑草あつくさとしての勢ひを五月山

磁石の針大きくふれる五月山

谷川の水飛沫して五月空

パレード率て臯月のハーレイダビッドソン

越後長岡 悠久公園まで足を伸ばして田草月

早苗月ひとり非登利そびあ處非の旅をして

臯月賞ある日の野毛の酔っ払ひ

はがき書く臯月の水性ボールペン

人怖じせぬ雀臯月の鳩に伍し

鳩信

素抱

素抱

石鏡

燕音

燕音

燕音

燕音

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

暮津

暮津

ねず

ねず

随笑

随笑

さざこ

さざこ

もも

もも

鳩信

鳩信

素抱

素抱

石鏡

暮津

ばら

ばら

燕音

燕音

随笑

随笑

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

メモ書きの押さえに皐月の醤油壺
シンプルがベスト皐月の装身具

石鏡
暮津

●花菖蒲 白菖蒲 菖蒲田 ノハナシヨウブ
めんどくささうに吹かれて花しやうぶ

さざ

白菖蒲蕾きりきり鎌めく

鳩信

ごったがへす菖蒲田の径譲り合ひ

寒暑

花しやうぶ見つめて風の見えるまで

素抱

箱根湿生花園
素つびんのノハナシヨウブに逢ふ水辺

石鏡

山妻にノハナシヨウブの季ときありし

石鏡

風上にノハナシヨウブを愛づるこゑ

暮津

ノハナシヨウブ一町先の風が見ゆ

暮津

●アイリス 和蘭おらんたあやめ

暮津

助産婦の家の和蘭あやめかな

暮津

●グラジオラス

暮津

根っからの音痴に生まれグラジオラス

暮津

●溪蓀 あやめ あやめ

さざ

野あやめの妹分の著莪咲けり

さざ

●時計草

さざ

金網を這ひずりまはる時計草

さざ

●杜若 かきつばた

ねず

その中に杭もすつくとかきつばた

ねず

牡丹圖を杜若圖に掛け替へよ

もも

杜若空には雲の覆ひ物

随笑

●著莪 しやが

もも

しやがしやがと著莪にふる雨聴きみたり

もも

水捌けの悪きを著莪に好まれて

さざ

野あやめの妹分の著莪咲けり

さざ

島の著莪活けて茶店の富士見亭

宿好

著莪に雨たうたう来たねとご住職

宿好

御不浄と云ふ語遣れり著莪の花

随笑

著莪叢の凄みを増せる不動脇

随笑

著莪に降る雨や雨水のはけ所

寒暑

妙本寺
しろがねに著莪は睦月の日を返し

暮津

雨癖のこれからつくよ著莪の空

暮津

●一八 いちはち

さざ

一八のひよいと咲いてるまひるかな

さざ

一八の旺んなる中葬りけり

ばら

●短夜 明易し

もも

城ヶ島、鍛錬会
明易の顔をぶるんと洗ひけり

もも

並べ干す手拭三連明易し

もも

雨音の奥に雨音明易し

ばら

新聞売りのおばさんのこゑ明易し

鳩信

明易の己に見えぬそそけ髪

寒暑

明易の言葉は韻きやすきかな

寒暑

人語なし明易の鳥ひた啼くに

寒暑

明易の誰か蛇口をひねる音

素抱

水は尿にゆつくり変はり明易し

素抱

寝言云ふ孫預かつて明易し

素抱

雀啼く平屋の家の明易し

暮津

喪の家の明易ければ鳥のこゑ

暮津

気安さの千代さん無き家明易し

暮津

短夜の體内に水ゆき渡らす

素抱

短夜を寝ねんとするに肋に手

素抱

生保内節短夜の湯に響かせて

石鏡

自炊棟短夜明けて煮炊きの火

石鏡

●競馬

天皇賞走破の馬体湯気揚げて

随笑

●花橘

大野林火全集
橘のかをるが如く上木す

さざ

●蜜柑の花

むしむしとする日を咲きて夏みかん

もも

湯河原
保養所の庭木のみかん花盛り

燕音

●柿の花

柿の木の雨にからきし弱き花

さざ

柿の花ひとり男が遺されし

暮津

吾が棲みし借家健在柿の花

暮津

柿の花妻の実家に近く棲み

暮津

●石榴の花

石榴散り振袖火事の火の粉めく

鳩信

ざくろ散る凶事相次ぐ世となりて

随笑

ざくろ咲き通院かんかん照りの道

素抱

●栗の花

栗の咲くここまで三陸大津波

随笑

この村の津波避難路栗の花

随笑

栗の花しどろもどろとなる天気

素抱

●椎の花

花椎

花椎か薬師の壺か夜を匂ふ

ねず

椎の香と云ひかけて顔見合せり

ねず

「附子」を覩て椎のほへる戻り道
 椎の香のこれぞてふ香に立ち止る
 椎の花やたら妄想掻き立てに
 椎咲いてむつとするなまみあなさが狸穴坂
 椎匂ふ日中友好会館裏

●えごの花

えごの花虻のお尻の大きこと

●水木の花

索性よき樹木といはむ花水木

瑞々しき水木花挙ぐ塔ノ沢

箱根 宮城野温泉会館
 水木咲く青山にして温泉の湧ける

●繡線菊

繡線菊見る目元もやもやしてきたる

繡線菊の盛り過ぎしはピンぼけに

雨烟り繡線菊ぼんやり咲くところ

繡線菊にぼんやり道の続きをり

オニシモツケじんはりけふは蒸す日なり

繡線菊の愛くるしさに接しけり

●榭の花

みるからに榭はとつつき難き花

●紫陽花

友の忌の白あぢさゐを胸の丈

海よりも濃きあぢさゐを操舵室

あぢさゐをびいどろ色の雨つつむ

あぢさゐの咲きためらへる花のいろ

同期生
 あぢさゐの極まる色も見ず逝くか

濃あぢさゐ男色の粹尽しけり

あぢさゐののつべらぼうが庭木かけ

あぢさゐの色ならぬ色みえくる日

あぢさゐの雨の葉っぱのほひかな

あぢさゐが咲いて清潔無比の園

あぢさゐにはやりすたりの色ありし

あぢさゐのぼろんと零す雨滴かな

あぢさゐの彩の違ひを見てゆかん

あぢさゐののつべらぼうに雨ざんざ

良寛の里あぢさゐの万理都関まりつかん

新種の紫陽花出れば
 青勝ったあぢさゐがいい老頭児にはろーとる

あぢさゐのうすぼんやりと末路のはな

あぢさゐの雫を浴びぬやうに抜け

もも

鳩信

随笑

素抱

暮津

寒暑

鳩信

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

寒暑

ねず

ねず

ねず

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

宿好

随笑

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

あぢさゐののつべらばうがうすぼんやり
 あぢさゐのスケッチブック絵葉書大
 海に水母陸にあぢさゐ漂へる

あぢさゐの色脱けて雨縮り無し
 あぢさゐの花のあはひの水の膜

あぢさゐの精気そろそろ脱けてくる
 濃あぢさゐ登山電車はぎくしゃくし

あぢさゐがのさばり出して家の裏
 あぢさゐの地味に応じて醸す彩

百段をのぼりつめれば七変化
下田、下岡蓮杖の碑
 写真術開祖の咲かす濃あぢさゐ

あじさゐの毬に見事に乗りし色
 傘行き交ふ紫陽花のだらだら坂

孫と
 あぢさゐが飛ぶ飛ぶ回転木馬
メリューランド
 あじさゐと学生諸君の溢る寺

あじさゐをすたとんと過ぐ横須賀線
 携帯電話るとと四葩の辺に受けぬ

濃紫陽花雨の塊り落しけり
 紫陽花や死に支度にも手本あり

●額の花
川崎 妙楽寺から東高根森林公園へ
 朝風は平らに吹いて額の花

●葵 立葵 銭葵
あひひ
 銭葵長けしを残し引越せる

花了へしあふひの茎の突つ立てる
 立あふひ東海林太郎をおもふべし

聞き来し道わからなくなり立葵
 立葵てふてふ道草喰つてをり

ともかくも昔はよかった銭葵
 雨上る地明りのして立葵

立葵歩いて直す病あり
 銭葵元警官の家にして

降る雨の真っ直ぐ葵に倣ふべく
 ●ゼラニウム

ゼラニウムだらだら雨に打たれをり
 ゼラニウム赤き愛車を洗ひをり

ゼラニウムに金盥めく太陽が
 虫共の鼻も曲らむゼラニウム

●鋸草
 手に当てて切れ味試す鋸草

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

石鏡

暮津

暮津

ねず

もも

鳩信

宿好

随笑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

暮津

鳩信

もも

もも

さざ

鳩信

鳩信

素抱

素抱

素抱

暮津

暮津

もも

さざ

ばら

暮津

素抱

● 矢車草

矢車草風出て潮色急変す

寒暑

花殖やす和尚の心根矢車草

素抱

● 十葉じふやく どくだみ

十葉を抜き来てさつぱりしたる顔

もも

十葉に朝の一刻日差しけり

もも

とばつちりうけて十葉むしらるる

もも

十葉の森の何処より手をつけむ

さざ

うつむいて庭の十葉引一途

さざ

十葉のむつと一雨ありさうよ

ばら

十葉の筒芽棒立ち選佛場

ばら

十葉にも植物園の標示札

素抱

これなんとかしなくちや十葉はびこる庭

素抱

十葉を引き来しと云ふ言無けれど

素抱

繁茂せる十葉へたに引かぬがよし

素抱

十葉の見目うるはしき立石寺

素抱

磴巖し十葉の辺に弱音吐く

素抱

徒に十葉引けば梅雨近む

暮津

どくだみや皆何處か病み葉漬け

暮津

● 萱草の花くわんそうの花

萱草を燭と見立てて仏具岩仏ヶ浦

随笑

萱草咲く墓地の後を五能線

寒暑

● 紫蘭

風の中紫蘭の内緒話かな

寒暑

● 鈴蘭

鈴蘭に横より突き出すむさき顔

随笑

● 銀龍草

椴松の根方にひよっこり銀龍草

燕音

同音にへエと女ら銀龍草

石鏡

呼ぶこゑに後戻りして銀龍草

石鏡

銀龍草女五人に囲まるる

石鏡

● 蚊帳吊草

蚊帳吊草古風な風を送りけり

ねず

抜きとりて雨のにほひのかやつり草

もも

手折りみむかやつり草の彼のにほひ

宿好

かやつり草背高きは摘み取られけり

宿好

かやつり草翁も泊てし川港本台海

随笑

● 瓜の花

いつまでもこどもはこども瓜の花

暮津

●南瓜の花 花南瓜

花南瓜尻窄まりの通り雨 ばら
 頑張りのきくうちが華花かぼちゃ ばら
 いい加減降って止む雨花南瓜 鳩信
 半島のかぼちやの花のパツパラパ 燕音
 畏くも玉音放送花かぼちゃ 随笑
 君の磊落南瓜の花に相通ず 暮津

●西瓜の花

よく聴ゆ汽笛西瓜は一番花 ねず

●走り梅雨

新橋の飲屋の裏路地走り梅雨 寒暑
 引っぱれば飛び出すテイッシュユ走り梅雨 素抱

●入梅 梅雨入 梅雨の入り

梅雨に入る 樽昂然 樽無然 かも
在の百姓、菜を啄む鳥を菜食いと呼べば
 菜喰ひが梅雨入畑に現はれて もも
 くるぐると梅雨入の八ヶ岳の大つむり もも

梅檀の葉のこまごまと梅雨に入る 鳩信

梅雨入の湯舟にでんでんむしの唄 随笑

梅雨入の鰐逃げしが御用となるニュース 寒暑

使ひ古る座右の辞書と梅雨に入る 寒暑

梅雨入の八百屋そこそこ品揃え 寒暑

いないないバアを決め込む梅雨入富士 素抱

水垢の亀にも年季梅雨に入る 素抱

にゆうべえと蛸漁の沖見渡して 素抱

玉川温泉
 首筋にヒリと梅雨入の酸性湯 石鏡

●梅雨 青梅雨 男梅雨 荒梅雨 梅雨晴 梅雨湿り

青梅雨に集へる信徒魚族めく さざ

青梅雨のくどきチラシにくどき彩 石鏡

植込みを打ち始めたる男梅雨 さざ

映画館出て馬車路の男梅雨 寒暑

男梅雨吉良の仁吉の一節を 寒暑

男梅雨おろかに肥ゆる榊大樹 素抱

榊零砂地をうがつ男梅雨 素抱

梅雨空の突つかえ棒の外れ月 鳩信

長子、修学旅行より戻りて
 これもこれもこれも土産よ梅雨曇 ねず

寝そべりてクイズを解ける梅雨曇 素抱

しよぼくれし灯に床延べる梅雨曇 石鏡

ぶるぶると行手をよぎる梅雨雀 もも

梅雨雀何か追い詰めたる羽音 鳩信

俳梅雨「人生劇場」高らかに
 寒暑
 梅雨の家居あれもこれもと妻頼み
 寒暑
 身の内の退屈の蟲鳴き出す梅雨
 寒暑
 梅雨の家居おんしき飲食の手間かけます
 寒暑
 梅雨の玻璃阿弥陀籤めく雨滴馳せ
 素抱
 川幅をゆったりと持し梅雨大河
 素抱
 横浜駅西口梅雨のアンブレラ
 素抱
 診察室二十番出て梅雨の街
 素抱
 病廊に外来患者あふれ梅雨
 素抱
病院売店にて
 商品のお出かけメイトは梅雨の杖
 素抱
 梅雨のラジオ早口にしてください
 素抱
 老眼と乱視ごちゃまぜ梅雨をみる
 素抱
 原色のボデイスーツに梅雨のダイバー
 素抱
 梅雨払ふ笠置しづ子のよいわんわ
 素抱
房州 富浦
 釣人に野暮な問い掛け梅雨を云ひ
 素抱
 釣人のにべ無きいら応えボンと梅雨
 素抱
 梅雨の航連れ添うようぢろ鴉宜候と
 素抱
 午後からの梅雨のやつつけ仕事かな
 素抱
 表札の町名旧きまゝ梅雨へ
 素抱
 掃除機に追はれて梅雨の部屋を退く
 素抱
 梅雨どきの何處を見据えて金魚の目
 素抱
 徒然に梅雨の抽斗開けてみぬ
 素抱
 醤油壘押さえに梅雨の置手紙
 素抱
 気まぐれ梅雨降ってきたかと取り込みもの
 素抱
通行人
 こんにちわ上がりましたネ梅雨のあめ
 素抱
悼 名古屋章
 ドンガバチョの声優梅雨に隠れけり
 素抱
 とある日の梅雨の合間のコップ拭き
 素抱
 梅雨の本ブックエンドに挟まれて
 素抱
 蕎麦ボーロおやおやこれは梅雨湿り
 素抱
 梅雨どきの湾岸道路灯の連鎖
 素抱
 梅雨最中とんだ薬の副作用
 素抱
 生りものの容歪みて梅雨の果
 素抱
 振り塩の穴の目詰り梅雨長引く
 素抱
 はおるもの一枚足せと梅雨予報
 石鏡
孫 美雨
 だんご虫愛づる姫君梅雨の庭
 暮津
 徒に十葉引けば梅雨近む
 暮津
 ポツチャンと跳ねしは梅雨の稚魚でした
 暮津
 梅雨の湯舟に銀座カンカン娘の唄
 暮津
 自動点滅街灯梅雨の灯を点す
 暮津
 荒梅雨にぶつくさ云ひても始まらぬ
 暮津

●五月雨さみだれ

五月雨の降り込む椎と槇の間
道灌の墓五月雨を聴くばかり
さみだるゝ尿道造影剤検査
保もつまいとおもふ空から五月雨

●出水

出水して常水二尺五寸の川

●空梅雨からつゆ

空梅雨の下駄箱の戸をがらがらり

●あいの風

あいの風やひこ弥彦山の沖浪白らめ吹く

●やませ

淋代三陸路の浜のやませに身をすくめ

襲もひ来るやませに立往生の松

赤松の美林にやませ忍び足

やませ浄土ヶ浜の魔手蠟燭岩に伸びにけり

遊覧船やませの底を這ひ廻り

山峡の稲をいぢめに山背やませ風くる

●黴

黴まじく仁王どんぐり眼かな

黴まじくパイプオルガントツカータ

赤黴の自治領蟻が通りけり

黴どきの無精が無精生む寝床

黴ぬやう手の打ってあり梅雨食品

あらあら黴下駄箱の靴搔い出して

●生節なまがし

なまり節喉につかえて万事休す

十六夜の生節の血合いつつき食ぶ

●鰻

蒲焼きなど母に奢ろうかとおもふ

鰻召せ長寿の因もとの鰻召せ

東海道三嶋の宿しゆくのうなぎ食いぢぶ

鰻喰うて間延びした顔店を出づ

昼餉のあとごころり鰻にでもなるか

蜆は朝鰻は午後と漁仕分け

雨の中漁して鰻の地獄どめ

鰻の香ながす鰻松あな憎し

鰻松に入り来鰻のやうな客

さざ

さざ

鳩信

素抱

石鏡

燕音

寒暑

随笑

随笑

随笑

随笑

随笑

素抱

ねず

さざ

ばら

鳩信

寒暑

素抱

素抱

素抱

暮津

宿好

宿好

随笑

随笑

随笑

随笑

随笑

寒暑

素抱

素抱

鰻をり光湛えて桶の底

石鏡

鰻描く腹を真白にたらし込み

石鏡

鰻屋の好みみの歌麿絵

石鏡

ご無沙汰の鰻に箸をつけにけり

暮津

鰻の肝横目に見て過ぐ街薄暑

暮津

●鰻

なまづ

涼しさは染めつけ鰻向付

鳩信

●鰻

なまづ

雨合羽光らせ鰻のがらびき漁

寒暑

●亀の子

ぜにがめ
銭亀

銭亀のいづれ遜色無かりけり

さざ

泳ぎ出す亀の子鼻を反らしけり

ばら

蓮田べり亀の子ぶかぶかやつてをり

鳩信

亀の子は首から泛かむこと覚え

宿好

甲羅干しなどして亀の子亀之助

宿好

亀解る白砂と御坊指さしぬ

宿好

ごり押しの一子亀の子岩に乗る

随笑

●山椒魚

山椒魚の手足を置ける水温む

さざ

●蟹

気散じの虫首擡げチゴガニ見に

寒暑

チゴガニの遠目利く中闖入す

寒暑

チゴガニの百千萬と我对す

寒暑

チゴガニの応援団の白手套

寒暑

チゴガニのラジオ體操散開し

寒暑

チゴガニの鉄上げ下げボタンコ

寒暑

チゴガニの踊を真似て去なんとす

寒暑

チゴ蟹の小心者に芦の風

石鏡

チゴ蟹の万歳小旗持たせし

石鏡

鉄抱き磯蟹波をかぶりけり

もも

つままれて脚硬ばらす磯屑蟹

さざ

磯屑蟹打ちて雨脚強くなる

さざ

道一本引き込みアカテガニの森

寒暑

小網代の森の育てし赤手蟹

石鏡

穴掘れり森の隠者の赤手蟹

石鏡

もくもくと藻屑蟹漁濁り川

随笑

旅先の藻屑蟹めく目覚めとも

随笑

沢蟹の脚すりぬけて奔る水

さざ

沢蟹の桔梗いろの肯を押ふ

さざ

宇津谷
 沢蟹の歩むその先靴で堰き
 燕音
 沢蟹のとことこ宇津谷地藏盆
 燕音
 沢蟹も雨にもみづる凹凸おうちか窟
 宿好
 沢蟹のカタンと転けて宇津谷道
 随笑
 待宵の濡れ岩隠り蟹の爪
 ねず
 弁慶蟹葎の葉騒に目を上げぬ
 もも
 ぶつかつてここは譲れぬ蟹同志
 もも
 びらびらと蟹の口許南風吹く
 もも
 蟹横に横に夕日を引摺れる
 もも
 泥を食ふ蟹を見つめて腹空けり
 もも
 蟹に眼を凝らして蟹のやうな顔
 もも
下田稔氏
 降り出して干潟を蟹のわらわらと
 もも
 穴を出て小蟹疾とつ疾とと駆け出せり
 さざ
 砂蟹の穴に押し入る無理無体
 さざ
 目の遇ひし蟹が脳裡にちらつくも
 さざ
 口もとにぶだう運ぶは蟹めくも
 さざ
 冬灯蟹の甲羅はキチン質
 さざ
 駆け廻り蟹は干潟のプロデューサー
 ばら
 柿芽吹き蟹の缺のやうな芽を
 ばら
 渡り蟹いろの夕映え額染めて
 ばら
 来る波に蟹のたじろぐ岩っ角
 ばら
 泡の中蟹の何やら策しをり
 ばら
 踊るならタンゴに如かず高脚蟹
金澤八景 野島海岸
 ばら
 蟹蟹と岩を起こして蟹捕る子
室町水墨画展
 鳩信
 牧谿猿蟹捕へんと身を乗り出す
 鳩信
 蟹のいふ事情とやらを聞きやらむ
 燕音
 岩畳蟹追いかけて追いかけて
 宿好
 岩に手を掛けて退ければきよとんと蟹
 随笑
 盗み歩きする蟹数多ゐて面白
 随笑
 浄土ヶ浜蟹の称ふるお念仏
 随笑
 藻畳の中にて蟹の目覚むらん
 寒暑
 蟹奔らせ白南風渡る巾着湾
 寒暑
 芦騒の煽りくらひてコメツキガニ
 寒暑
 コメツキガニ穴に脚かけ警戒す
 寒暑
少年時代、マメコブシ蟹をまんじゅう蟹と呼び親しめば
 寒暑
 韓信の股潜りかやまんじゅう蟹
 素抱
 渡り蟹甘藻の林はすかひに
 素抱
 わらわらと乾きて蟹の砂だんご
 素抱
 蟹さんの型押し遊び灼け砂に
 素抱
 小網代湾蟹の棲み分け聞く干潟
 石鏡
 コメツキ蟹健啖にして砂団子
 石鏡

ロンパリの蟹の目干湯観察会
 冬の虹のこのこ蟹が這ひ出して
 椿落つ小坪の蟹の横這い径

石鏡
 石鏡
 暮津

● 蝸牛 かたつむり ででむし でんでんむし

でで虫の止まる広葉に朝が来て

もも

早起きをしてでで虫の側にゐる

もも

でで虫の当推量が外れけり

もも

でで虫に深淵なせる油壺

もも

でで虫も其角の墓も傘の内

さざ

でで虫のでん公雨を呼びにけり

ばら

でで虫の角のほとりへ寝ほけ貌

随笑

でで虫の大なる伸び朝あさほらけ

随笑

でで虫の角さえさはれぬ女めの子にて

素抱

庭中のでで虫蒐め一つ木に

素抱

角つき子はでで虫の調教師

素抱

でで虫の引つかかる殻さてどうする

素抱

巡礼の遠のくやうに蝸牛

ばら

蝸牛化シテ蛞蝓カッユトナラン今日カラハ

宿好

蝸牛程の私の運動量

素抱

竿の上滑り易くて蝸牛

素抱

蝸牛妙な明るさ遺しけり

素抱

蝸牛そこで迷うて何とする

素抱

人はローン蝸牛は殻を負ひ晩夏

素抱

殻負へる蝸牛より倅せに

素抱

なほ容とどむ朽木に蝸牛

素抱

蝸牛連休出歩く当てもなく

石鏡

蝸牛課題は生活習慣病

石鏡

総領の甚六にして蝸牛

暮津

竹木石何でも登る蝸牛

暮津

蝸牛さうださうだと領けり

暮津

白塗のバルコン滑る蝸牛

暮津

でんでん虫雨が当りて角曲げぬ

素抱

角振りてでんでんむしは唄ふ虫

素抱

毎日を気楽に気楽にかたつむり

素抱

その殻も薄手に秋のかたつむり

石鏡

● 蛞蝓 なめくじ なめくじり

なめくぢら砥石溶かしにかかりけり

もも

蝸牛化シテ蛞蝓カッユトナラン今日カラハ

宿好

なめくぢの請願届き雨三日

随笑

蛞蝓に好かれて良寛さんの墓

寒暑

鉢退けられあらはづかしのなめくじり

暮津

なめくぢの所業リンチに値せむ

暮津

なめくぢは極刑草鞋虫は放免

暮津

植木鉢取り退けなめくじ狩りにけり

暮津

小肥りな躰を伸ばしなめくじり

暮津

一言に気分害しぬなめくじり

暮津

蛞蝓の光を溜めて薄笑ひ

暮津

唇のごとくなめくじ歪みけり

暮津

● 蛞蝓 みみず

祭くる門川に殖ゆ糸みみず

ねず

掘り返して団子虫やら蚯蚓やら

さざ

洗ひ場の底にうごめく大蚯蚓

燕音

杭打ちて二月の蚯蚓驚かす

宿好

大蚯蚓仏となりて大異変

寒暑

みみず棲むことが上出来腐葉土と

暮津

恥部を見る顔付きをして蚯蚓見る

暮津

紋章のごとく大蚯蚓の轢死

暮津

ぺちゃんこに蚯蚓国道一号線

暮津

手を抜けばかうなる見本蚯蚓の死

暮津

● 墓 ひきがへる
蟾 ひき

踏み外すことが愉快でひきがへる

素抱

墓見とがめられてはもぐり込む

素抱

棲みつける墓ものそりと門涼み

素抱

後退る方は当方墓でなし

暮津

墓荒唐無稽の世に生れて

暮津

言の葉のでつくわすとは墓にこそ

暮津

隠棲の仕方を墓に教はりぬ

暮津

断るに墓の威厳を借りたきもの

暮津

へどもどと墓に遇ひたること申す

暮津

墓が家にわれらが間借りしてゐるやう

暮津

墓とことん措辞にこだはりて

暮津

● 河鹿

鬼無里 鬼無里
鬼無里村河鹿謡へり鬼女紅葉

燕音

● 時の記念日 時の日

時の日や曜日たつきに疎き生活たつきぶり

素抱

● さくらんぼ 桜の実 桜桃

団欒の灯のゆきわたりさくらんぼ

ねず

よく食べる子にはさくらんぼが出るぞ

ねず

アメリカンチェリー一粒底光り

鳩信

さくらんぼ甲乙丙の丙の味

随笑

手仕事にふんぎりつけてさくらんぼ

寒暑

さくらんぼ狩のツアーのごいっとうさん

素抱

さくらんぼ狩の観光バス横付け

素抱

さくらんぼ狩をある日の天童晴れ

素抱

試食してピンからキリのさくらんぼ

素抱

さくらんぼ天近きほど甘きとぞ

素抱

さくらんぼ熟れし証しの一光点

素抱

退け時の一年生過ぐ桜の実

石鏡

さくらんぼ片目つぶりてまだ酸しよ

暮津

けふも又雨かやれやれさくらんぼ

暮津

さくらんぼ茎を抛るが面白き

暮津

「あゝ雨」桜桃口へ運びつゝ

暮津

●ゆすいしめ 山桜桃

日和よく山桜桃の花の二三日

もも

愛らしき荅からしてゆすらうめ

素抱

●李 巴旦杏

けふいちにち裸でとほす巴旦杏

暮津

●杏子

杏の核真つ赤に蟻の総掛かり

随笑

おお何と酸っぱ杏に瞞されし

寒暑

●実梅 青梅

裾領けの実梅の山を三つに盛る

ねず

青梅のひよわきは落ち転がれる

もも

梅もぎの擦り傷此処とこことここ

さざ

青梅の真夜の土打つ音ならむ

さざ

生りものを包める産毛実梅にも

ばら

落梅を一つ處に庭そうじ

鳩信

濡縁に落梅三つ四つ寄せてあり

宿好

実梅採る母が長棹えつさつさ

寒暑

●紫蘇

庭の紫蘇摘み来て鯔のたたきかな

もも

虫喰ひの紫蘇も一緒に吹かれをり

もも

赤紫蘇にお山詣での汗拭ふ

素抱

赤紫蘇畑繩文人の棲みし丘

素抱

紫蘇漬の紫蘇の粒噛む一人酒

素抱

元氣づけ赤紫蘇巻のにぎり飯

暮津

●辣菹

生身魂だうした訳からつきよ好き

●パセリ

とんカツのツマのパセリのやうな日々

●玉葱

喪の家の厨の玉葱発芽して

●枇杷

デザートに枇杷の出で夜を本降りに

熟れ枇杷の雫ほたほた地をうてり

ほんのりと枇杷に自祝のおもひあり

枇杷にのる色の散漫また降り

枇杷の木にだらだら雨の始まれり

養生してひととせ経つか枇杷色づく

枇杷黄ばむほの明るさに百日忌

海明り早生り枇杷は四国一

ぎょうさんな実をつけ貧乏症の枇杷

病人の吐き出す枇杷の種大さ

雨上りわけても枇杷の雨雫

出来悪き坊主のやうな路地の枇杷

管理人室の横手の枇杷たわわ

喉佛大のころころ枇杷の種

枇杷の種落とせば木の音したりけり

認知症病みて熟れ枇杷滴らす

枇杷滴るこんな筈ではなき母に

熟れ枇杷や敢へて云ふなら人缺月

●楊梅

やまももの巨木なるほど温暖な

楊梅の朱ヶ夏落葉方円に

楊梅の街路樹中華街近し

●木天蓼の花

またたびに降りだしさうな出羽の空

●要の花

要栄ゆ吾が家新築然として

新築の家成りレッドロビン垣

●烏の子

子を産んで杜の鴉の都合五羽

子鴉の分際にして威嚇すか

神木を遊び場にして鴉の子

威嚇して地を掠め翔ぶ親鴉

御神域しんと鴉の子育てどき

暮津

石鏡

暮津

ねず

もも

さざ

さざ

鳩信

鳩信

燕音

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

さざ

素抱

素抱

石鏡

もも

もも

暮津

さざ

さざ

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

子鴉の姿もやがて樟の森
 悪態つく子鴉近所の電柱に
 近所まで出張り鴉の御曹司
 杜の子鳥通行人を小莫迦にす
 目に余ることも鴉の子育てどき

●早苗

早苗の上農兵節の富士現るる
 苗はこぶ南安曇野曇りかな
じょうねん
 常念岳の膝下早苗の丈も伸び

山峡の風に黄ばみて余り苗

●代田しろた

代搔かれ雀の鉄砲水浸し
 代田に引く水の咳き込むごとくなり
 張る水はどぶろくに似て代田なる
 道祖神巡り代田を迂回して
 代田水息せききって駆け込めり
 一夜荒れ濁りのとれぬ代田水
 代田水いまにも雨が降りさうに

●田植

どつと灯の点る親しき田植あと
 田植笠棚田の真下に見えてをり
 酒米の田植も済むや和島村
くがみやま
 国上山源八新田田が植り
こむみず
 強水に佐渡の田植の始まり
*強水は岩間より流れ出す冷水

●植田

どむみりと大山入れて植田水
 仁丹の看板健在植田中
隆泉寺
 良寛墓所尋めゆく頬に植田風
大膳神社
 参道に吹き込む真野の植田風

●蛾

秋立つと丸々肥えしモモズメ
 夕顔を天蛾すずめがぶると発ちにけり
 蛾を追ふて兼六園の夕雀
 茱萸の木より蛾のモスグリーンはたはたと
 蛾の骸窓の辺りに共同湯

朝靄に起き出す蛾族節足類
 朝の蛾のかぶさる露の葉の一つ
 上踊り雨の五郎に火蛾飛んで
 朝の蛾とぶつかりさうに草っ原

寒暑
 寒暑
 寒暑
 寒暑
 素抱

さざ
 さざ
 ばら
 鳩信

ねず

ばら
 ばら
 ばら

燕音
 宿好
 素抱

ねず

寒暑
 寒暑
 寒暑
 寒暑

鳩信

燕音
 寒暑
 寒暑
 寒暑

もも
 もも

ばら
 ばら
 随笑

寒暑
 素抱
 石鏡
 暮津

夕顔の妙なる闇を蛾の羽打ち

暮津

●火取虫

灯を取りに箱根の山の兜虫

随笑

火取虫飛び廻る輪を拵げつゝ

素抱

火取虫光輪放ちつつ飛び

素抱

灯取虫黙らせんため灯を消しに

素抱

火取虫こんど飛んだら百年目

素抱

火取虫火取始めの音のおどろ

暮津

一人舞台ひとり演ずる火取虫

暮津

●金魚草

金魚草摘み居る処に団体客

寒暑

●アマリリス

アマリリスラジオのヴォリューム一杯に

素抱

九州は梅雨入と聞くアマリリス

暮津

●ジギタリス

ジギタリス花筒の中にもがくもの

さざ

●父の日

父の日の酔ひて子よりも早く寝る

ばら

父の日の昼寝セットのプレゼント

随笑

父の日の昼をふんばつ勝烈庵

素抱

父の日の素足すうすうしてゐたり

素抱

父の日の加賀鳶の封切りにけり

素抱

父の日のあらためて見る脛なりけり

素抱

はんぺんを肴に父の日の晩酌

暮津

●螢 草螢 螢火

嗚呼といふこゑにほうたる横江り

もも

川下の方へほうたる木を替へて

もも

ほうたるの独りごころの灯を提げて

さざ

ほうたるの自家発電の灯の明し

宿好

ほうたるのモールス信号打つごとし

随笑

拍子木が鳴りてほうたる舞ひ始む

随笑

ほうたるのサマリヤ人といふところ

随笑

ほうたるの今日の興行終りけり

随笑

遅れ来し人にほうたる居るには居る

寒暑

ほうたるを吹き消す風と点す風

素抱

手探りの径をほうたる点し呉れ

素抱

ほうたるに殴りかからんばかりの風

素抱

ほうたるの風に浮き名を流すごと

素抱

ほたる火に一幹ぬつと現れにけり

ねず

葉つばごとむずとほたる火掴みけり
 くさむらに転げ込んだりほたる火が
 川の音ほたるさつぱり出なくなり
 山峡を一つほたるの急行便
 ほたるにも戀の鞘当てありぬべし
 ホタルの句書き取る手許如何にせん
下田稔 田中灯京 泉下にて
 稔ほたる灯京ほたる連れ立ちて
 ほたる待つ谷戸にわくわくしてゐたり
 今日居ずホタルガイドのボランテイア
 ほたる火の人に當たるもおかまいなく
 ときに雄渾ときに可憐に谷戸ほたる
 ほたるにも気に喰わぬ風あると見え
 竹林に発し螢と一川と
 鼻先へすうつと螢臭き風
 目の前をずんと明るき螢過ぐ
 トバーズいろサファイアいろの螢とぶ
 よるよると平家螢の草隠り
 一匹は上ずるやうに飛ぶ螢
 なまなまと葉を透き歩く草螢
 大螢降下わくわくする子らへ
 竹林螢の宿はこの奥に
 螢臭き掌をおし広げ見せにけり
横浜自然観察の森
 源氏疾うに平家これから螢谷
 この谷戸に月と私と草螢
 螢火を団扇に受けて粹な人
 木道をあらく螢の速さかな
 隠り沼に遅まきながらと出づ螢
 さてさてと螢見の腰上げにけり
 行き交へる螢大きな方を追ふ
 螢との交信何を以てせん
 突如吹く風に螢の灯を落とす
 螢発つ粹な噂の起つごとく
 棲み分けてここは源氏の螢谷
 迅きこと飛脚のごとき螢なり
 大風に螢あはてゝ落つこちぬ
 風出でて螢の宿の早仕舞ひ
 草螢そこそこそこ指さすさき
 螢の出問ひ合はせれば昨夜五頭
横浜 自然観察の森
 風の綾捉えて螢上昇中
 風絶えて螢の宿は藪臭き

もも

さざ

さざ

ばら

宿好

随笑

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

もも

もも

さざ

ばら

ばら

随笑

随笑

随笑

随笑

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

暮津

素抱

素抱

●螢狩 螢見

螢狩知り合ひのゐて声かはす

ばら

螢見に行かんと軽く腹拵え

随笑

螢出る迄の四方山話かな

随笑

螢狩戻りがてらの街明り

寒暑

●通し鴨

己が浮力持て余しをり通し鴨

石鏡

●軽鳧の子

軽鳧の子の一羽後塵拝しけり

素抱

軽鳧の子の入り来るを待つファインダー

素抱

軽鳧の子の従順なるとならざると

素抱

●田亀

水中に田亀もさつと昏れにけり

ばら

●蛭

田の蛭にラジオ体操第二番

寒暑

●源五郎

源五郎へへと闇より現はるる

ばら

●まひまひ

かひもちかき

木杭に呪文かけられかいもちかき

ばら

南無南無と円光負ふてかいもちかき

ばら

まひまひの気合ひの入りし一円相

ばら

●水馬

あめんぼう方程式のXなす

ねず

あめんぼう跳び越しゆけるあめんぼう

もも

あめんぼう木屑のごときがやたら跳ね

寒暑

水遁の術もて泛けるあめんぼう

寒暑

沓履きて古刹の秋のあめんぼう

石鏡

囟に乗りて蓮に乗り上ぐあめんぼう

暮津

二夕三搔き樹影を出づるあめんぼう

さざ

あめんぼうの気紛れ歩きぶつかれり

さざ

あめんぼう足投げ出して中休み

さざ

あめんぼう脚のさうじにかかりけり

さざ

あめんぼうの脚のかしやかしや小競合

ばら

推力の一桁違ふあめんぼう

ばら

頭の内はまだ遊びるあめんぼう

ばら

あめんぼうくんずほぐれつ日の暮るる

ばら

新進のあめんぼう滑り出しにけり

ばら

あめんぼうのドンファンぶりも板につき

ばら

水を掻く仕草も秋のあめんぼう

鳩信

秋雨にひるむどころかあめんぼう
かがよへる水の回廊あめんぼう

あめんぼう飛ばし過ぎなり乗り上げぬ
たそがれ毛越寺の光帯びつつあめんぼう

達者なる足腰秋のあめんぼう

ぎこちなきところ未だあるあめんぼう

仕方なくあめんぼ覗いてゐたりけり

あめんぼう覗きゐるのみ他意あらず

あめんぼをぼかんと佇つてみてゐたり

あめんぼの親玉カヌー漕をすべる

あめんぼうちよっかい出され遣り返す

あめんぼの鏝迫合の何時果てる

あめんぼのタップダンサー水叩き

あめんぼの水を踏まえしトウシューズ

水馬二つ光輪ぶつけ合ひ

水馬総出で水を澄ましをり

明けわたる水に水馬の鉄脚

空元氣出して晦日の水馬

だしぬけの雨に臆しぬ水馬

みるからに元氣のかたまり水馬

水馬雨に追ひ立てられにけり

水馬試し走りの朝の池

水馬つと奔流に打って出ぬ

此処にもや時流に乗らぬ水馬

水馬未だ埃の大きさに

菟まつて軍団めける水馬

●蓮の浮葉 浮葉

蓮巻葉風にほぐれてジャンクめく

背鰭にて浮葉撥ね上げ池の主

蓮丸葉ついと流るる風起ちて

デッサンの浮葉浮葉の間合ひかな

●萍ついでくひん

萍のとつき方といふがあり

萍に鎌倉の昼深きかな

萍のあはひあはひの漆闇

萍のしんと緑の一帝国

萍の隠蔽工作始まれり

萍をひつくり返しゆく大雨

萍の支離滅裂か整然か

鳩信

鳩信

燕音

宿好

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

石鏡

石鏡

暮津

暮津

ねず

ねず

ねず

さざ

さざ

さざ

鳩信

鳩信

宿好

寒暑

寒暑

素抱

素抱

さざ

燕音

宿好

随笑

随笑

燕音

宿好

随笑

素抱

素抱

素抱

素抱

萍の收拾つかぬざんざ降り
萍は破れし穴を繕へる

素抱
素抱

萍の仕掛成程斯うなのか

素抱

萍の水栽培を厨にて

素抱

萍に吾が空けし穴もう塞がる

石鏡

萍は一つから殖ゆその一つ

石鏡

●浅沙の花

叩かれて雨にくたんとなる浅沙

随笑

●河骨

河骨を掠め流水間断なし

寒暑

●水芭蕉

人拒む色をとほせり水芭蕉

ばら

雪中水芭蕉
がしと雪踏みしめ見入る水芭蕉

燕音

水芭蕉乾きし泥を揉み落とす

燕音

水芭蕉そこはゆつくり水流れ

燕音

山水に凱歌を挙ぐる水芭蕉

燕音

水芭蕉山水くびれ流れけり

燕音

水芭蕉林中に水響きけり

燕音

もう一つ顔乗り出しぬ水芭蕉

燕音

水底に倒木透けり水芭蕉

燕音

水芭蕉水に萎ゆ花横たへて

宿好

●草取 草むしり 草引く

草むしりして来て茗荷の出来云へり

素抱

墓地の草しみじみ引きてをりひとり

素抱

蚊を打ちては草引く手順繰り返す

暮津

引く草がみんな露草なららくちん

暮津

●夏の空 夏空

翼打つ音のばっさり夏空より

燕音

道東行
シートベルトかちやりと締めて夏空へ

燕音

夏空が救ひのやうにある日なり

燕音

積まれたる石の放熱夏空に

宿好

パントマイム天使の輪っか夏空に

寒暑

ユリの木の花はと街の空を見る

寒暑

だんご虫転けて宙掻く脚清ら

寒暑

寒風山蹴飛ばしハンググライダー

寒暑

夏空馳すアンパンマンは強かりき

素抱

●夏の川 夏川

夏川の瀬に廻り込む水迅し

さざり

玉堂の昔の川の夏の音

燕音

夏川に手を突つ込んでつめたしと
 旅疲れ夏川に眼を落としみて
 孫六湯前夏川の展けたり
ほつと湯田 湯本温泉
 夏川のここらが熊の通り道

宿好
 随笑
 素抱
 素抱

●鮎

当り来た来た来たさくら鮎ならむ
 鮎釣の雨暗に竿納めざり
 菅笠の仰向くは鮎釣れるとき
 狭客の鮎にしらじら谿明くる
 囀鮎漁期も了り近くなり
 山峡の風戸ふつとで降りて鮎を釣る
 鮎どきの佳き風のくる酒匂川

ばら
 ばら
 ばら
 鳩信
 燕音
 宿好
 素抱

●鵜飼

ひしひしと水の暮れ来て鵜に鵜影
 ●あめふらし 雨虎 海牛
 遊ばれて磯に置き去りあめふらし
あめふらし
 雨虎花魁道中歩きせり

石鏡
 ねず
 さざ

あめふらし遊びあかして磯日暮れ
 あめふらし好すいた事して潮溜り
 一生を棒にふりたるあめふらし
観音崎
 装ひも定九郎めくあめふらし

鳩信
 燕音
 燕音
 随笑
 随笑

遠浅の海の牧場にあめふらし
 海牛の二日の波にたゆたへり
 よき浪が来て海牛を泳がしむ
 海牛の泳ぎ歩きといふものす
 比類なきオトメウミウシ捕らへたり
 つまみ上げ大海牛の段袋
 えんぴつで海牛つつく冬渚
 海牛のモウモウ歩きしたりけり
 海牛をおいてけぼりに忘れ潮
 海牛の頭上を跨ぎ浅蜷掘

●鰻

わらしべに鰻の吊られて御祭神
 庭の紫蘇摘み来て鰻のたたきかな
 小柴産地鰻の干物血筋透く

ねず
 もも
 素抱

●鯉 松魚

かつを船滴る陸くがに戻りけり
 半島に足を伸ばせる鯉ととぎ季
 天日干し鯉を吹けり時津風

ねず
 さざ
 鳩信

茹でごごみには鯉節ぶっかけて
宿の膳何はさておき姫かつを

燕音
寒暑

晚酌の松魚にちよんと擦り生姜

素抱

酒は会津肴は三浦初かつを

石鏡

湯上がりの手首の赤し鯉時

石鏡

ぶん投げられ糶らる鯉のメタリック

暮津

●赤鱒 あかえび
えい

さざ

アクアミュージウム
鼻つ先エイのフリルを戦がせて

さざ

墨かぶりエイの涼気を曳き来たり

ばら

クー・クラックス・クラン団員エイ飛来

ばら

金澤八景シーパラダイス
爆撃の体勢に入るエイを見よ

素抱

沖ゆくはリマン海流カスベエ干す

素抱

堅干しの筆りカスベエ晚酌に

素抱

*カスベエはエイのこと
ビール酌む礼文カスベエむしりつゝ

素抱

●たかべ

タイトル張り魚屋の売る地のたかべ

素抱

●羽太

水槽の隅に大ハタでろりんと

ばら

●虎魚 おこぜ

針深く呑みし虎魚の横つ面

もも

岩化してダルマオコゼとなる暮春

ばら

虎魚産み落とせし親もこんな貌

随笑

オニダルマオコゼの口中ちよと動く

素抱

●藺 あ

藺枕をひよいとつまみて頭かしらに当て

寒暑

藺枕を投げ出すそが仮寝所

寒暑

雨の水輸出で入りつして細藺

石鏡

藺枕に首転がしているうちに

石鏡

繕ひの藺草はヤロウ菊人形

石鏡

*ヤロウは藺草の中でもつとも強靱なもので畳などに使う

石鏡

●太藺

須く太藺青天目指すべし

寒暑

太藺見て吾もゆらゆら揺れるたり

暮津

●青芒

そよりともせいで巨利の青すすき

もも

鋭さを内に押さえつ青すすき

燕音

古戦場ここら一帯青すすき

随笑

向日葵の王道青すすきの霸道

随笑

青すすき道をいっぽん通しけり

石鏡

青すすき仙石原は風に富み

石鏡

湯けむりの翳這ひゆけり青すすき

石鏡

● 葭切 行々子

葭切の長寿長寿と朝朗

さざ

靴の泥こそぎ落せば行々子

さざ

葭切の黙ればはたと照りつけぬ

さざ

行々子田夫野人の唄うたふ

燕音

葭切の伝法口調に大分慣れ

燕音

葭切の直談判が続きをり

宿好

葭切に念を押されてゐるごとし

寒暑

もう一声葭切あらぬところより

石鏡

葭切は詭弁を弄す如くなり

石鏡

行々子もぐり込んだる葭っ原

暮津

● 翡翠

かはせみ

何と雪ワライカワセミ渋い貌

さざ

翡翠の眼力疑ひなかりけり

燕音

拙宗と名乗りし頃のかわせみ図

寒暑

● 糸蜻蛉

雪舟展

灯心蜻蛉 とうしんとうんぼ とうすみ

一茎を両手で押へ糸とんぼ

さざ

灯心蜻蛉の尻尾ずんずん目の前を

ばら

止まらんと瑠璃糸とんぼ間合詰め

燕音

糸とんぼ止まる所が判りけり

燕音

糸蜻蛉進むリズムはピチカート

素抱

糸とんぼ茎に取り付くその角度

素抱

燈心蜻蛉は瑠璃一色の針とんぼ

素抱

尻のさき待ち針いろの糸蜻蛉

暮津

● 川蜻蛉

おはぐろとんぼ

鉄漿蜻蛉

うしろにも居さうなおはぐろとんぼかな

さざ

つと廻り込んで止まれる川蜻蛉

ばら

鉄漿蜻蛉に羽搏ち疲れといふものなし

鳩信

鉄漿蜻蛉の影おはぐろを追ひゆきぬ

燕音

考えの閃く如くおはぐろ現る

燕音

川蜻蛉飛んで翅色薄めけり

石鏡

● 蠅螂生る

たうつ

蠅螂の子 かまきり

取り込まる洗濯物に子かまきり

素抱

子蠅螂かまって斧を向けらるる

素抱

子蠅螂生意気構ひたくなりぬ

暮津

ひさびさに腕が鳴るなり蠅叩

さざ

蠅叩き難ければ肘折り曲げて

さざ

必殺を目論む妻の蠅叩 燕音
 蠅叩湯吞卷き添え喰ひにけり 燕音
 蠅叩遺品のごとく扱へる 随笑
 蠅叩く術練達にまだ遠し 寒暑
 脳震盪間違ひなしの蠅叩 寒暑
 蠅叩持ちつゝ雑談湯治人 寒暑
 打ちもらす蠅の行方を追へる顔 さざ
 蠅が脚長く使へり花八っ手 さざ
 再犯の金蠅なれば許さざり ばら
 箸取りていちいち蠅を追へるひと ばら
 易々と蠅にたかられ一患者 鳩信
 なうなうと止まるこの蠅不埒なり 鳩信
 葉蘭の蠅居場所を二転三転す 燕音
 追ひやれど膝にまたくる島の蠅 宿好
 山小屋の窓辺に蠅の頓死せり 宿好
 蠅日に日にちからをつけぬその羽音 随笑
旧浜離宮庭園
 大き蠅牡丹臭さを帯びて発つ 随笑
 ぼうたんに疎んぜられて発つ蠅か 随笑
 行き過ぎの一つや二つ蠅打てる 随笑
 バスの旅俱にし岩手県の蠅 随笑
 芋煮会蠅も仲間に入りたがる 随笑
 二等船室隣より来る夏の蠅 寒暑
 アラヨツと蠅の一心太助かな 寒暑
 蠅の死のあっけなかりし脚挙げて 寒暑
 蠅憎き世の懐かしや畳撫す 寒暑
 石を替ゆ蠅と退屈同土かな 素抱
 皺苦茶婆貝を剥くやら蠅追ふやら 素抱
 何處からか蠅の入りくる家なりし 素抱
羽黒山門前
 板蕎麦を待つ間頭上の蠅を追ふ 石鏡
 追憶の熟れ無花果は蠅呼ぶ木 石鏡
 妻うっかり五月蠅さばえを入れて仕舞ひけり 暮津
 曲がる術知らぬ五月蠅さばえの飛び来たり 暮津
 蠅たかる所をそれとなく見居り 暮津
 蠅を退け遣るに止どめぬ老の箸 暮津
 歳時記の蠅の例句も古りにけり 暮津
 ●蜘蛛 蜘蛛の囿 女郎蜘蛛 蜘蛛の糸
 蜘蛛の囿を払ふことなく庭掃除 鳩信
 蜘蛛の囿にまんまと懸かる粗忽者 宿好
 蜘蛛の囿が顔に迷惑千万な 宿好
 蜘蛛の囿の顔に懸かるをエイヤツと 宿好

蜘蛛の囀の糸端探る目を皿に 宿好
 乙子祠に稚わかき蜘蛛囀を張りにけり 寒暑
 蜘蛛の囀に病葉二、三ちらし掛け 素抱
 蜘蛛の囀に捕られし顔の後始末 素抱
 蜘蛛の囀の幾つもあるれば破り甲斐 素抱
 蜘蛛の囀に朝霧の粒あからさま 素抱
 蜘蛛の囀もあさみどり帯ぶ芦の間に 素抱
 囀の中央に押し出しのよき女郎蜘蛛 素抱
 囀の蜘蛛にさうさう獲物なかりけり 石鏡
 蜘蛛の囀の獲物にこれといふもの無く 石鏡
 蜘蛛の囀に一つの攻防見たりけり 石鏡
 蜘蛛の糸すすつと見えてすすつと消ゆ ばら
 糸揺すりやればどう出る女郎蜘蛛 燕音
 女郎蜘蛛縦の糸張る手順見て 宿好
 蜘蛛の糸端安養院を宝篋印塔に 随笑
 突っ込んでいやはや蜘蛛のねばる糸 素抱
 一夜にして自転車捉ふ蜘蛛の糸 素抱
 女郎蜘蛛朝は黄金に張れる糸 素抱
 鉛筆で叩いて蜘蛛の糸の端 石鏡
 蜘蛛の糸こころ辺りとたたつ切る 暮津
 「さうはどっこい」身ひねりかわす蜘蛛の糸 暮津
 女郎蜘蛛木の葉外しにかかりけり ばら
 日の当りながら物食ふ女郎蜘蛛 ばら
 女郎蜘蛛金龍院の空を降り 鳩信
 女郎蜘蛛楯円函教論知るや 宿好
高山寺
 樹上には明恵 樹下には女郎蜘蛛 宿好
藤沢市 長久保植物園
 女郎蜘蛛あはてふためく様見んと 宿好
 獲物へと押っ取り刀の女郎蜘蛛 宿好
 じたばたをぐるぐる捲きに女郎蜘蛛 宿好
 腰据えて料理に懸かる女郎蜘蛛 宿好
 手も脚も腹も化粧ふて女郎蜘蛛 随笑
 所在無き雨日を汝も女郎蜘蛛 素抱
 江ノ電の踏切女郎蜘蛛見上げ 石鏡
 女郎蜘蛛屋敷と云ふに躊躇せず 石鏡
 妖怪の親玉何故か女郎蜘蛛 暮津
 女郎蜘蛛網繕ひを怠らず 暮津
 ほんち捕る子に目つぶしの柁櫃 ねず
*ほんちは直唾蜘蛛のこと
 土蜘蛛の撫でやる腹の珍無類 ねず
 真昼間の山雪のうへ蜘蛛あるく 燕音
 厚物の菊の顛頂に蜘蛛の子来 宿好

同意なく此処に蜘蛛の巣張るべからず
幾何学を篤と学びし蜘蛛ならむ

河鍋曉斎
暁斎の蜘蛛出づ月の怪しき夜

宿好
素抱
暮津

●油虫 ごきぶり ごきかぶり

御器嚙追ひ詰めおいて助け呼ぶ

さざ

ごきかぶり初太刀二の太刀かいくぐり

ばら

ごきかぶりゲストのやうに現はるる

ばら

ごきかぶり団子喰らひて御用となる

暮津

灯まみれにごきぶりの子のピーナツ色

もも

ごきぶりを見とがめし妻さあ大変

随笑

ごきぶりを前にわくわくする一打

随笑

ごきぶりをどうしてくれやう丑満刻

随笑

ごきぶりのどうでもよきが髭を振る

随笑

ゴキブリ駆除家の隙間といふ隙間

素抱

ゴキブリ駆除硼酸だんごをへエとみる

素抱

ごきぶりを打馴れてゐて打洩らす

素抱

ごきぶりを追ひ遣る妻は総身もて

暮津

ごきぶり打つ力余りてこの始末

暮津

気がつけば形無きまでごきぶり打つ

暮津

髭振りつ次はどうでる油虫

もも

油虫に手を施すも出るには出る

素抱

油虫触り犯せるものの数

石鏡

油虫下見の現場灯さるる

石鏡

パソコンの画面を舐めに油虫

石鏡

油虫厨をちよろちよろ醬油いろ

暮津

●守宮 やもり

お出ましの守宮と暫しにらめっこ

鳩信

階段の壁が遊び場守宮の子

随笑

やあ守宮お主とところで何代目

随笑

目の合へば少しどぎまぎして守宮

石鏡

大玻璃戸守宮の吸盤護謨仕立て

石鏡

●夜盗虫

シマガラスヨトウ嘉せる夏の雨

もも

悪食のヨトウガ奴の仕業なり

ばら

●羽蟻

羽蟻墜つ奇妙な夜となりにけり

宿好

机に稿に羽蟻の落下傘部隊

随笑

原稿に降りし羽蟻に迫る指

随笑

羽蟻また紙に包んで捨てにゆく

素抱

畳ある限り羽蟻はそこへ落つ
羽蟻退け遣れば又来て小奴めが

素抱
暮津

●蟻地獄

あとずさり

一興の掘り返されてあとずさり

もも

掘り出されまじまじ見らるあとずさり

もも

蟻地獄扱も根気の要ることよ

もも

蟻地獄石ころ一つ振舞はん

随笑

●蟻まくなぎ

まくなぎ

まくなぎのしつちやかめつちやかか払ひけり

さざ

まくなぎのこんちくしょうめ躓ける

ばら

まくなぎの何こじれたる内輪揉め

ばら

たいがひにせよとまくなぎ打ち払ふ

随笑

●蝨ぶじ

利かん気な飛び方をせる蝨一つ

さざ

●蚊 藪蚊 蚊柱

蚊柱がいっぽん立ちぬ党派心

ばら

蚊ばしらの柱を何處へ持つてゆく

随笑

蚊柱の柱のづれを立て直す

素抱

くるぶしの上より刺せる秩父の蚊

もも

蚊の刺せる辺りぶっくり掻き壊す

素抱

蚊の刺せる處膨らむ天の川

暮津

蚊の刺せる箇所は真つ赤に掻き壊す

暮津

大人げなく蚊の刺す処掻き壊す

暮津

打ち水に真顔もて蚊が刺しにくる

暮津

弁慶の泣きどころにて蚊の打たる

ねず

藪蚊打つ自とこゑも添ひにけり

随笑

断り無く入り来し蚊なれば平手打

素抱

打つ前のまだら縞蚊の凄味かな

素抱

蚊を打ちては草引く手順繰り返す

暮津

快音と共に昇天手打ちの蚊

暮津

顔面の蚊打てば眼ちぐはぐに

暮津

蚊の奴めまだまだまだよそれと撲つ

素抱

蚊を撲つに眼を宙に漂よはせ

素抱

問題にしをり藪蚊の侵入路

ばら

藪つ蚊の金属音の急降下

鳩信

手に当るものと見れば藪蚊なり

素抱

藪つ蚊の敵機来襲眼を凝らす

素抱

藪つ蚊をまたぞろ誰が引き込みし

暮津

血を吸うてあからさまなる藪蚊の腹

暮津

藪つ蚊か脛に感じる庄少し

暮津

草刈らむと踏み込む藪蚊の梁山泊

暮津

昨夜雨の籠り蚊放つ木曾格子

ねず

腕光則寺 日朗の土牢つぶし強き矢倉の蚊に螫さる

燕音

ぶつかるは糠蚊のたぐひ払ひけり

随笑

蚊に喰はる妻が夜中にむずと起き

随笑

酔ふたればチャンスとばかり蚊の寄り来

寒暑

蚊の敵機来襲されば返り討ち

寒暑

喰はれたと妻の差し出すふくらはぎ

寒暑

終戦日深くしゃがんで厠の蚊

寒暑

ひっぱたかれべしやんこの蚊の垢じみて

寒暑

吾が前を走りゆく蚊に手を出さず

素抱

雨の夜をいやに元気な蚊が出でて

素抱

充分に引きつけ置いて蚊を叩く

素抱

脚つまみ白紙の上へ蚊の骸

素抱

人の吐く炭酸ガスを求めて蚊

素抱

蚊の止まる耳搏ち据えて耳が莫迦

素抱

ひっぱたかれ潰されし蚊を払ひ退け

素抱

蚊除けスプレーたっぷりかけて子を放つ

石鏡

搏てる音頼りなければ蚊を逃がす

暮津

逃げし後また来てわれを弄する蚊

暮津

空ら響きして脛の蚊をうち洩らす

暮津

蚊を入れぬ蚊帳の出入り慣れたもの

暮津

蚊に喰はるところ見せ合ひ母と妻

暮津

蚊の声す急いで何か羽織らねば

暮津

だいぶ夜の更けし厨を蚊のうろうろ

暮津

討ち取らる蚊のべっちゃんこ膝がしら

暮津

妻の指す腿の一箇所蚊の圧死

暮津

蚊に喰はる処をさうかさうかと揉み

暮津

● 蠅虎 はたらくも

一茶堂蠅虎が戸袋に

燕音

板塀に蠅虎の岡っ引

随笑

子規庵の戸袋の反り蠅虎

随笑

俳諧の手ほどき蠅虎より享く

寒暑

蠅虎即曉斎のかみつき貌

素抱

蠅虎稚くも貌老成す

石鏡

蠅虎雨戸に日和がよささうと

暮津

● 蚊帳

蚊帳潜り出でしところで覚む昼寝

随笑

ひよいと思ひ出したる蚊帳の入り方
 鴨居見て蚊帳の吊り手の懸け方など
 蚊を入れぬ蚊帳の出入り慣れたもの

●蚊帳

蚊帳の見当たらぬ世も亦佳きか
 みな清潔に蠅帳の失くなりぬ
 妻用意の昼餉小さな蠅帳に
 定食屋蠅帳があり勝手にとる

●蠅取紙

帰省せり蠅取リボン吊る家に
 じたばたと蠅取紙の蠅の脚
 蠅取紙詠める世代を同じうし

●蚊遣火 蚊遣香 蚊いぶし

金魚屋の親爺かたへに蚊遣香
 近頃の蚊いぶし随分いい香り
 蚊遣香背中の方が手薄なり
 蚊遣豚おもしろおかしくこの後のちも
 捨てゝある湯宿の蚊遣灰白し
 蚊いぶし吸ひ脚をじたばたじたばたす
 一日の疲れ蚊遣に巻かれみて

●ががんぼ 蚊蜻蛉 蚊の姥

かがんぼのずりおちさうな後ろ脚
 かがんぼの礎石を発てり国分寺
 かがんぼの脚踏み外す髻草
 かがんぼ来夜間急患窓口に
 幾そ度かがんぼ吾の採血よ
 かがんぼの雨やり過ごす葉裏かな
 縫り来るかがんぼに胸貸しにけり
 かがんぼ斯様に物に掴まり躰寄す
 堂縁にかがんぼ纏る五合庵
 かがんぼの交みては飛ぶ複葉機
 片脚のかがんぼ悪びれてはならぬ
 かがんぼの暢気な父さん歩きせり
 かがんぼの閉じこめられし湯治棟
 かがんぼの空中飛行見下ろせる
 かがんぼのせうことなしに玻璃せせる
 古き湯宿ががんぼの発つ脱衣籠
 ががんぼの猿猴宜しくぶるさがり
 一人留守おおせつかればががんぼ来

素抱 素抱 暮津

素抱 素抱 暮津

ねず

ばら

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

暮津

暮津

ばら

ばら

ばら

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

石鏡

さざ

さざ

ばら

寒暑

素抱

がんぼの五體満足暁の棧
 素抱
 がんぼのぶらさがりを滝不動
 素抱
 うしみつのがんぼ離る脱衣籠
 石鏡
 卒塔婆に高脚を懸け蚊の姥は
 ばら
 蚊の姥に留守を頼んで出かけけり
 鳩信
 蚊の姥が雨に追はれて玻璃にくる
 素抱
 蚊の姥に消灯時間湯治棟
 石鏡
 蚊とんぼのやうな神主大祓
 素抱
 蚊とんぼのぶらさがりをる谷地柳
 暮津
 ●蝙蝠 かはほり
 蝙蝠の躰鈍れば飛びにけり
 さざ
 かはほりに油ッ紙のやうな空
 さざ
 かうもりの翼電動仕掛かな
 さざ
 かはほりに問答無用と昏るる空
 ばら
 通り魔の如くかはほり頭を越せり
 ばら
 蝙蝠のやうに下りて枯るゝ葉あり
 燕音
 かはほりの妙な飛び方正飛び
 素抱
 素抱
 素抱
 素抱
 素抱
 踊りに飽きかはほりのごと闇馳す子
 暮津
 ●梧桐 梧桐
 美丈夫の梧桐の幹打ち据ゑぬ
 さざ
 梧桐の幹の葉混みに自若かな
 ばら
 ●南風 白南風 南風 南風
 大南風勇魚の息をつくやうに
 ばら
 大南風舁りしひよこより柔らか
 ばら
 海を揺り山を揺り立て大南風
 随笑
 大南風途絶えてへなへなヨットの帆
 素抱
 ややくしくなる前の蔓白南風に
 ばら
 蟹奔らせ白南風渡る巾着湾
 寒暑
 吹き起こる白南風長瀏剛の唄
 素抱
 白南風埠頭帆船で賑はへり
 素抱
 ぴらぴらと蟹の口許南風吹く
 もも
 チューリップツリー並木を南風馳せ
 さざ
 タカノハ鯛大きく息す南風の中
 燕音
 夜又五倍子の青実南風にごつつんこ
 燕音
 サーフアーの臀部凜々しく南風吹く中
 宿好
 南風に奏つは弁天様にまします敷
 随笑
 たはむれにモンローウオーク南風のなか
 素抱

南風に載せジャズ風ちんどんミュージック
 石鏡
 南風吹き抜け野毛の縁台将棋かな
 石鏡
 南風の中パントマイムのはじまりはじまりー
 石鏡
 くろもじの宿す雨滴を南風払ふ
 暮津

●青嵐

青嵐山女魚焼く火を襲ひけり
 ねず
 青あらし鯉の英気を養へる
 ばら
 読み切るとひとり気負へば青嵐
 随笑
 国上山青嵐湧きくるめく葉
 寒暑
 鳩も目をくりくりさせぬ青あらし
 素抱
 青あらし通るところが判りけり
 石鏡
 つっかける雨に処置なし青あらし
 石鏡
 街往けば正面からくる青あらし
 石鏡
 青嵐煽られし身を立て直す
 石鏡
 青嵐まだ吹き足らぬまゝ通夜へ
 暮津

●風薫る 薫風

薫風を捌き疲れて夕櫂
 もも
 風薫じ作務衣で通す日なりけり
 寒暑
 薫風に仁王の視線やはらげり
 寒暑

●夏至

海猫の糞透明に夏至明けにけり
 石鏡
 傷跡のこんもり夏至の胸板に
 暮津
 ●鮎鷹あゆたか 鮎刺
 随笑
 鮎刺の一撃をもてテロありぬ
 随笑

●鶺鴒

ふなばたの湿り鶺鴒舟の出を待てり
 ばら

●海猫うみねこ こめ

羅臼町海猫は女めごゑを曳き曳きて
 燕音
 海はもう手ぐすね引いてこめの声
 随笑
 海中に落ちて広がる海猫の糞
 随笑
 海猫寺泊のくわいくわい佐渡へ発つフェリー
 寒暑
 海猫の糞皚々宗谷暮れんとす
 素抱
 きうきうと海猫鳴く岬カスベエ干す
 素抱
 *カスベエは土地言葉でエイのこと
 海猫・鴉カスベエこちやまぜ礼文の風に乗り
 素抱
 海猫退けて埠頭を占むる島鴉
 素抱
 浪漫あり海猫舞ふフェリーターミナル
 石鏡
 甲板酒田港のウッドチェアーに海猫の糞
 石鏡
 海猫の糞透明に夏至明けにけり
 石鏡

●岩燕

自炊棟その間を飛ぶ岩燕

石鏡

●老鶯ろうおう

老鶯や起きて欠伸をもうひとつ

さざ

老鶯の間髪入れず玉のころゑ

随笑

恐山 老鶯も下北訛恐山

随笑

霧ヶ峰・車山高原 山巔に立ち老鶯の気分なり

随笑

老鶯のさうともさうとも珠のころゑ

随笑

●時鳥

半島の空をテッペンカケタカと

鳩信

二の坂で音ねを上げ聞けり時鳥

石鏡

●郭公

郭公の峰三方よ信濃へ下車

ねず

郭公の連呼絶えざる八ヶ岳は好し

もも

ともかくも郭公を詠みおほせたり

もも

ケルル作曲「カッコウによるカブリツチヨ」 くわくこうの声出すオルガン奏者かな

さざ

遠郭公うたたねの耳開きけり

燕音

山頭火の本の中から遠くわっこう

寒暑

郭公に得したやうな顔をせり

石鏡

足どりのどんだん軽くなる郭公

石鏡

郭公にぼちぼち起き出す湯治人

石鏡

郭公に湯疲れの身を漂よはせ

石鏡

●慈悲心鳥 十一

十一のイントネーション真似易し

ばら

●瑠璃 大瑠璃

菱形となりて大瑠璃駆くるそら

さざ

オオルリのこの森深しといふごとし

燕音

●青葉木菟あをばづ

三羽目の青葉木菟の子洞を出で

さざ

宿にて 青葉木菟ほらほら啼くよたてつづけ

寒暑

相槌を打つごと別の青葉木菟

寒暑

青葉木菟いつしか寺に来ずなりぬ

寒暑

●夏木

幹もりかす赤く守一夏の木を画ける

もも

こころもち幹を振りて夏櫂

さざ

吹かれゐる夏の櫂の鉄火肌

随笑

夏けやき戦ぎて耳に盈つ葉音

寒暑

*何れの処にか蒸炎を消さむ 独り愛す出田の宮 民々耳に盈つ

るの蟬 冷々林を出づるの風

夏木伐る使はぬ筋肉使ひもし

暮津

●犬枇杷

犬枇杷に沖より旭駈けつけし

もも

●茂

茂みより一羽飛び出す葉っぱいろ

さざ

ソロモン産ポトス茂みをつくりけり

ばら

しげしげと鏡の眉の茂りかな

随笑

軍神は茂みに佇てり忠魂碑

寒暑

混浴の真上の大き茂みかな

素抱

がさつかせ茂みの虫を捕る雀

暮津

●万緑

万緑に抑へ込まるゝ一堂宇

もも

万緑に磬を配す立石寺

素抱

万緑の中の一川ルアー釣

石鏡

●緑蔭

緑蔭を彼方の人も立つところ

もも

緑蔭のベンチあそこが空いてをり

さざ

サイクリスト緑蔭に汗拭へるも

さざ

大緑陰鳩・人・蜥蜴憩はしめ

鳩信

病院は緑陰ナースは白き風

随笑

緑蔭に莫迎げて大き忠魂碑

随笑

緑蔭の雀とんとん走り根越え

素抱

緑蔭に未練残して去る素振り

素抱

●青葉

青葉吹き散らしさしもの颱風も

さざ

吉野ぶり青葉時雨に目覚めけり

ばら

青き葉も意気のあがらぬ落葉焚

ばら

山女魚らの口肥えて来ぬ青葉どき

鳩信

謡はなむ青葉楓の面目を

鳩信

家康公御廟きささげ青葉して

鳩信

大寒の底光りせる檜青葉

宿好

国上山青葉の葉騒鳶挙げて

寒暑

一、二枚青葉飛ばして大夕立

寒暑

温泉ゆに浮かむ羽虫一匹一青葉

寒暑

杜覆ふ青葉の階調宜しけれ

素抱

山青葉妙本寺もって客人饗す寺

素抱

掛けこゑを専らに登る青葉山

素抱

若葉して青葉す杜に神在ます

石鏡

ブナ青葉して鳥海山の保水力

石鏡

くさぐさの病ひ秘し入る青葉の湯

石鏡

舞い込める青葉いちまい自刃の間
五月十七日 義母 新城千代逝去
 青葉青臭しまさかの脳出血

石鏡
暮津

大往生と云ひて云はれて青葉の夜
 トネリコの微光放てるその青葉
 灼かれても青葉が綺麗いたちはぜ

暮津
暮津

●尺蠖

尺蠖の探り直せる空の奥
詐欺頻発
 尺蠖や擬態は怪しき商ひにも

素抱
暮津

●夏の蝶

揚羽蝶 黒揚羽

武者窓を烏揚羽のよぎりけり

ねず

黒揚羽宙より降れる晋山式

もも

黒揚羽追ひゆく別の黒揚羽

さざ

ガレ場あり奈落より現る高山蝶
白馬岳 八方尾根

宿好

草臥れて瓦礫に座せばベニヒカゲ

宿好

黒揚羽一息入るゝ大樹の根

随笑

草々の容をなぞり夏の蝶

素抱

黒揚羽すと消え飛石あるばかり

素抱

揚羽蝶雨後の路地より発ちゆけり

素抱

強く吹く風に乗り換え碧揚羽

素抱

黒揚羽おつとこちらの道でなし

素抱

夏蝶の眩しき野合見てゐたる

素抱

黒揚羽おどろに川原毛地獄越ゆ

素抱

黒揚羽手離す一茎揺れてをり

素抱

夏の蝶8の字翔びに興じけり

暮津

●夏野

思い立つままに旅して来て夏野

随笑

乱開発 道路然り用水路然り
 人の手のかからぬものはなし夏野

寒暑

高照神社
 お岩木は雲のスカート履き夏野

寒暑

●夏草

夏草を手折り夏草搏ちゆけり

さざ

夏草を引きちぎっては歩むなり

鳩信

夏草のウナギツカミといふを引く

燕音

夏草や俳壇に撒く除草剤

燕音

屋根草も夏草のうち復原棟

寒暑

目黒 自然教育園
 夏草にかにつりぐさといふがあり

素抱

夏草の穂先くるくる回す風

素抱

夏草の丈なす皇居内ポスト

石鏡

夏草に雨横なぐり五能線

石鏡

夏草のまた生えくれば同じこと

暮津

北辺の日の未だ高く浜苦菜
 浜苦菜ほろりと風に動く砂
 流木と別の白さのシロヨモギ

燕音
 燕音
 燕音

弘法芝弘法麦の族やからにて
 一輪の影の揺れづめ浜苦菜

燕音
 随笑

覚えたてのくさばなにして草の王
孫六温泉
 黄花のそれコウゾリナとか云ふ草か

素抱
 随笑

●草刈
 鎌跡の残る草長け吹かれをり

もも

草刈って海峡に向く一祠
古口 最上川舟下り
 刈草を抱へて投ず最上川

随笑
 随笑

快音を谷に響かせ草刈機
 能舞台脇正面の草刈れり

寒暑
 寒暑

草刈つて蔵王縦断道路脇
 石齧る音も混じれり草刈機

素抱
 素抱

草刈らむと踏み込む藪蚊の梁山泊
 ●昼顔

暮津
 素抱

ひるがほは時間を湛えゐることし
 昼顔に尽きざるガードレールの白

暮津
 石鏡

●浜昼顔
ろしる
 老頭児に浜昼顔が毎日咲き

寒暑

●酢漿草
かたばみ
 接吻といふ語思へりかたばみに

鳩信

かたばみを捨てて電話に出でにけり
 かたばみの花見るもの無ければ瞰る

随笑
 素抱

かたばみの花の淋しきかぎりかな
 ●蛇の髻
じやひげ
 竜のひげ

素抱

職退きて今夏で三年竜のひげ
 蛇の髻の花気がつけば雨小止み

素抱
 暮津

天気予報出掛けに聞いて竜のひげ
 ●小判草
赤泊
 俵麦

暮津
 素抱

佐渡島至る処に小判草
 たはら麦程の軽みの一句欲し

寒暑
 素抱

からつきし雨に弱くてたはら麦
 ●馬鈴薯の花

素抱

よるよるとじやがたらいもの花へ蝶
下田稔さんを偲ぶ会 三浦半島剣崎にて
 馬鈴薯の花半島は曇り出す

もも
 燕音

馬鈴薯の花曇日を好みけり

燕音

●甘野老の花

掬切る手際宜しも甘野老あまじころ

さざ

●木苺

乙子祠おとしじの木苺の実を頂戴す
参道を少し外れ摘む木苺を

寒暑

石鏡

●苺

時かけて苺をつぶす腰痛持
デザートに年々大き苺かな
匙をもち苺をつぶすこと一途
匙よりもずんと大きな苺であり

寒暑

素抱

石鏡

暮津

●蛇苺

蛇苺採など真似てせぬものぞ

寒暑

●蛇

動物園ながむし くちなは 青大将
蛇の衣懸けあり蛇の遊び木に

さざ

さざ

官軍の錦蛇とはもつともな
野毛山動物園錦蛇暫し見てゐてのぼせけり

鳩信

この池を目当てに現るゝ青大将

随笑

蛇を見し胸の早鐘鎮めをり

寒暑

それ以上蛇を深追ひせぬがよき

寒暑

うす膩泛く青大将を正視して

素抱

ながむし蛇の唯々通り過ぐを待つ

素抱

くわなわ蛇を滑り込ませて沼無風

素抱

すすむ胴水に密着させ くちなわ蛇

素抱

蛇の舌まざと脳裡に刻まれぬ

素抱

蛇よぎる水脈須臾にして跡かたなし

素抱

水上を突き進む蛇不敵なり

素抱

泥湯温泉側溝に蛇の亡骸うち捨てられ

素抱

●蛇の衣

動物園蛇の衣懸けあり蛇の遊び木に

さざ

●蜥蜴

駐在所前を駆けぬけ青蜥蜴
腹這ひに蜥蜴ぬくもる子産石

ねず

足柄古道よぎる蜥蜴の貌に冬日

もも

目を宙に標本擬まがひの大蜥蜴

さざ

ふふふふと地に息かけて蜥蜴出づ

ばら

大緑陰鳩・人・蜥蜴憩はしめ

鳩信

取り外しきく蜥蜴の尾置いてゆく

随笑

胡座かく蜥蜴はこうもり安のさま

寒暑

うたた寝すつつじの上の瑠璃蜥蜴

寒暑

身の危険察知蜥蜴のダッシュせり

寒暑

蜥蜴の腹なんぞ見をればもう昼どき

素抱

虫籠に蜥蜴を入れて兄貴分

素抱

雨音に追いかけらるゝ蜥蜴かな

素抱

虫籠を覗けば何と瑠璃蜥蜴

素抱

混浴の洗ひ場奔る青蜥蜴

素抱

青芝を蜥蜴は泳ぐやうにして

石鏡

軟体の蜥蜴は水のごと流れ

暮津

●馬陸やすで

ものかげに昼やりすごす大馬陸やすで

さざ

蹴返せばはらほろひれと馬陸かな

鳩信

悪路王此処に討たれぬ大馬陸

宿好

●百足虫むかで

御威光の具足をみする大百足

随笑

●朝顔苗 朝顔の二葉

朝顔の双葉本葉と喪の日過ぐ

暮津

双葉もて百の朝顔翔びさうな

暮津

これと決む朝顔苗のポリポット

暮津

●青芝

青芝を蜥蜴は泳ぐやうにして

石鏡

青芝がぐんぐんボール落下点

石鏡

●青蔦

青蔦や叙事詩展開せるごとく

暮津

蔦癖に青龍一頭放たれぬ

暮津

●珊瑚樹の花

珊瑚樹の花にあがれる雨飛沫

ばら

●女貞の花ねずみもち

ねずみもち咲く辺を妻の往き来せり

ねず

征桓立交り咲くねずみもち

もも

女貞雨に乏しくなりし花

もも

ねずみもち花のまはりのまだ昏れず

さざ

女貞咲かせこの家地味も地味

鳩信

古きよき時代の垣花ねずみもち

素抱

●木斛の花もっしやく

木斛咲きじわじわむしむしする日なり

ばら

●ガーベラ

ガーベラにプラチナ線のやうな雨

ばら

南仏料理卓に一輪挿しガーベラ

随笑

●サルビア

アフガンにテロ前庭にサルビア咲く

随笑

サルビヤに真つ赤な風が起つところ
 寒暑
 サルビヤやいつになったら雨あがる
 素抱
 サルビアにおもふダンテの煉獄編
 素抱
 花サルビヤ旺んに空気澄みぬたり
 石鏡
 サルビアの一斉咲きといふに遭ふ
 暮津
 サルビアやその場しのぎの日を重ね
 暮津
 ●とらのを虎尾草
 暮津
 虎尾草の風に払子を振るごとし
 さざ
 トラノオのその先霧の粗く飛ぶ
 宿好
 この家にはこの家の家風おかたらのお
 暮津
 ●を螢袋
 老人ホームほたるぶくろの道のさき
 ねず
 摘まずともほたるぶくろの裡知れり
 ねず
 がやがやとほたるぶくろの辺を通る
 さざ
 柵の中螢袋の変電所
 鳩信
 去り状を見て来てほたるぶくろの辺
 寒暑
 ずぶ濡れの螢袋の一輪挿し
 素抱
 露零す螢袋に道草す
 素抱
 螢袋山土蒸れし香を放ち
 石鏡
 ほたるぶくろ悼みは時を経て薄らぐ
 暮津
 ●を雪の下 鴨足草 虎耳草
 ねず
 父試歩より吹かれて戻る鴨足草
 ねず
 たあいなく風につまづく鴨足草
 ねず
 虎耳草石垣沿ひに風の起つ
 もも
 転勤を小耳に挟むゆきのした
 さざ
 もめごとの外に洩れをり鴨足草
 さざ
 旧西田幾多郎宅
 哲学を此処に深めぬ雪の下
 宿好
 雪の下平屋に棲みて平屋に死す
 暮津
 ●を若竹 今年竹
 筋通すことが第一今年竹
 石鏡
 若竹のそつちは剪りて是残す
 暮津
 ●を竹落葉 竹散る
 ねず
 竹が散るまた散る論されぬることし
 ねず
 竹の葉の降るになかなか昏れぬなり
 ねず
 竹の葉のそそのかさること散りぬ
 もも
 竹落葉突つ込むままに氷りけり
 ばら
 竹の葉散る名利の塵を払ふかに
 寒暑

*乙子神社 炉辺一束の薪 誰か問わん迷悟の跡 何ぞ知らん名

竹の葉散る良寛の世を語り草
鞆走る音して竹の葉の降れり
竹の葉散る奥へ奥へと魅せられて
竹落葉拾へり痴呆軽度の母

●羽抜鳥 羽抜鶏

羽抜鶏もんどりうつてスコール来
気骨あるその歩きぶり羽抜鳥
男氣の廃れたる世の羽抜鳥
おっとりとして過ごしてゐては羽抜鳥
羽抜鳥沽券も意地も疾うに無し
羽抜鳥どころか鏡のわが瘦軀
外見は一見丈夫羽抜鳥

●青鷺

青鷺がここにもオホーツク晴天
青鷺の子つ子に翔べと湖の風
置物のごとき青鷺置く干潟
青鷺の嘴を預けし砂州の天
青鷺の八頭身を水鏡
青鷺の探り歩きの一歩づゝ

●五月晴

愚図ついていつになつたら五月晴れ
赤鼻のピエロ一礼五月空

●暑さ 暑し 暑 暑気

金澤文庫 称名寺
古書守に暑いと云へばええ暑い
「糞暑いねえ」と自転車行き交へり
白木槿とびきり暑き日とならむ
暑き日の飯粒何處に三分粥
暑き日々俳句詠むにも糞ぢから
先生は暑き日選び逝きなすつた
青き幹じりじり暑くなりさうな
昨日より暑くなるぞと朝の蟬
どうやらけふは暑くなりさう番茶の香
けふ暑くなること確か またら斑鯉
黄表紙に凌ぐ暑さも峠越す
臍切れてよりの暑さと書き添へて
灸花けふの暑さの如何ばかり
かのこ百合やうやう暑さ納まるか
死ぬ程の暑さ人能く生かしけり

寒暑
素抱
素抱
暮津

ねず

鳩信

燕音

素抱

石鏡

暮津

暮津

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

随笑

石鏡

寒暑

暮津

ばら

鳩信

暮津

暮津

さざ

燕音

寒暑

素抱

もも

さざ

ばら

ばら

随笑

洗濯物家に暑さを取り込めり 随笑
 夜をうとうと暑さに馴れるまでのこと 随笑
 暑さめと己に言葉ぶつけけり 随笑
 家にごろごろ暑さの持つて行き場なし 随笑
 ふて寝して暑さの通り過ぐを待つ 随笑
 降りて来て二階の暑さ嘆きけり 随笑
 雀の他みんな暑さにやられけり 随笑
 この暑さどうかしているペンキ塗り 随笑
 頭^{かぶり}振りけふの暑さを諾へる 随笑
 莫迦げたる暑さに馴るる他なかり 随笑
 寝物語などして暑さ一頓挫 随笑
 なほ猛威ふるふ暑さにはだけ寝る 随笑
 颱風のあとのなんだいこのあつさ 随笑
 顔でも洗ひ直す暑さも極まれば 随笑
 やりきれぬ暑さと己にこぼすなり 随笑
 この上はごろ寝に如かずこの暑さ 随笑
 よき智慧が泛かばぬ道理この暑さ 随笑
 山妻の暑さ凌ぎはコップ拭き 随笑
 真綿締め大蛇^{おろち}のごとき暑さとも 随笑
 浴びせかく野次のやうなる暑さとも 随笑
 暑さにも十両級と横綱級 随笑
 やうやうに暑さ収まり厨ごと 随笑
 この暑さ身体を馴らす他なけれ 随笑
 纏はりつく暑さは開き直りても 随笑
 この暑さ躰がついてゆけぬといふ 素抱
 この暑さお手あげ水をのむばかり 暮津
 けふの暑さ鰻のぼりと聞き凹む 暮津
 よく探さないで物云ふ暑さかな 暮津
 仕方なし暑さのがれの昼寝せり 暮津
 のうぜんの宙ぶらりんや糞暑し 宿好
 牛頭馬頭の徘徊暑し恐山 随笑
 家暑し駄菓子にろくなもの無くて 暮津
 暑にかすむ新宿が見え烏龍茶 暮津
 浄玻璃の鏡も曇らむこの暑気に 暮津
 *地獄の閻魔の庁にあつて死者の生前の行為を映し出すといふ鏡 暮津
 家の中一巡りして暑がれる 暮津
 鉢植の棕櫚竹ともども暑に耐へむ 暮津
 赤松に対す秩父の暑に対す 暮津
 暑にめげぬための麦湯を沸かしおく 随笑
 度忘れを暑のせいにするよくあること 寒暑

聞こえ来ぬ「暑つくるしいことはいや」

電話口孫出てあうむ返し暑

寒暑

蓮根の俳画懸け暑を煙に巻く

寒暑

暑ければ頭に負担なき戦記物

寒暑

胡座かきそこに居座るとっこい暑

寒暑

たたみ込む暑や死神に手を貸して

素抱

顔にくる今朝のあつさや会葬日

素抱

散髪してサツパリすれば暑のやはらぐ

暮津

暑に徹るこゑてきばきとヘルパーさん

暮津

菓子袋くしゃくしゃにして暑を譏る

暮津

暑はいまだ序の口ご自愛なされよと

暮津

滾る暑の底の方より油蟬

暮津

暑にああと四、五軒先の赤ん坊

暮津

●夏衣 夏着

夏物のパジャマ引つ掛けギブスの上

鳩信

ころり往生阿弥陀を拝す夏衣

素抱

夏着数枚年金暮しはシンプルに

暮津

●単衣^{ひとへ}

普段着の海月の単衣よかりけり

鳩信

伊勢佐木町ブルース単衣のソックリさん

暮津

●夏服 白服 アロハシャツ 半ズボン

お気入アロハ押し込む旅靴

ばら

アロハ着てはしゃぎたくなる気の未だあり

鳩信

ナフタリン臭きアロハに手を通す

寒暑

ピンボケの柄のアロハをことしも着て

寒暑

アロハシャツ色地味にして柄派手や

素抱

退院の挨拶だぶつく夏ズボン

鳩信

来島海峡単車で飛ばす半ズボン

寒暑

半ズボンにて夏の男鹿巡るべく

寒暑

こんなにもベルト重たき夏ズボン

素抱

膝小僧うらはずかしき半ズボン

素抱

半ズボン地震来て咄嗟に入るゝ足

暮津

白服にねむり成層圏を航く

ねず

夏服に永年勤続祝がれをり

ばら

谷地渡る風に白シャツはためかせ

燕音

白服に浜の豆ツ子鼓笛隊

随笑

●夏帽子 夏帽

パンの実の何処にとあふぐ夏帽子

さざ

カウアイ島巡りの夏帽買うて来ぬ

さざ

夏帽子壁炉の上に誰のもの
妻の云う
 夏帽子被れというに首を振る
 被るのがめんだうなだけ夏帽子
山寺
 夏帽の囲む山寺案内図

●夏手袋 夏手套

妻
 コンビニに行くにも帽子・夏手套

●夏座布団 藎座布団

藎座布団きちんと坐り直しけり

●夏布団 夏掛

夏掛のひやつとせるをあてがひぬ
 夏掛して妻と思ひ出話など

たぐり寄す夏掛その内夜も明けん

夏掛を一枚抱え漂流中

體には毒よと夏掛かけ呉れぬ

夏掛てふ健気なるものうち被り

夏掛の引つ張り過ぎを押し戻す

夏掛を優にはみ出す足二本

夏掛を挙げ句の果てにぐるぐる巻

手探りでさがす夏掛あらぬ方

夏掛の柄古ぼけてごろ寝かな

●熱帯魚

チョウチョウウヲ吻吻云うて泳ぐなり

この辺の何処かにサザナミヤツコの本

拗ねる癖吻にありありフエヤツコ

いそいそと竜宮城ヘルリスズメ

いっせいに顔の向き替えデバスズメ

淡水水槽
 ペレズテトラ・コンゴテトラ・エトセトラ

熱帯魚所帯臭さを捨てゝ見る

●青簾 古簾 簾

青簾吊るや寝てよし覚めてよし

青簾風に色目を使ひけり

古簾取り替えやうかこの辺で

古簾一枚吊りて籠城す

ザツと雨ササササと風軒簾

ごろ寝して裸の王様すだれ裡

●網戸

灯を取りにきたぞと網戸の外の蟬

娑婆といふ紅蓮を堰きて網戸あり

地震あまりに激しく網戸に手掛けしまゝ

さざ

随笑

随笑

素抱

素抱

ばら

鳩信

鳩信

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

暮津

さざ

さざ

ばら

ばら

ばら

ばら

素抱

随笑

素抱

素抱

素抱

暮津

暮津

随笑

寒暑

暮津

網戸に隙道理であちこち喰はるるよ

暮津

● 籐椅子

籐椅子に腰を浮かせぬまた余震

暮津

● 紅緑忌

書き損じくしゃくしゃにして紅緑忌

石鏡

● 丈山忌

度忘れの頭叩いて丈山忌

随笑

● 五月富士 夏富士

夏富士を語るに静岡弁が出て

もも

この向きの夏秋田富士よかりけり

石鏡

● 茅の輪ちわ 名越の祓

大茅の輪おうち大蛇を跨ぐ心地せり

ねず

大茅の輪仕上り風が先づくぐる

もも

大茅の輪雨具携え潜りけり

鳩信

瀬戸神社 夏越の祓
狩衣に風はらませて大祓

素抱

祝詞の間蟻を見つむる大祓

素抱

神主の出を待つ木履大祓

素抱

むにやむにやにむにやむにや和せる大祓

素抱

瀬戸神社
ゆすり蚊と名越の祓受けにけり

暮津

勤め人茅の輪せかせか潜りけり

暮津

● 小暑

採血の跡黄味がかる肌小暑

鳩信

■ 七月

● 七月

首筋に蝉の羽月の風受けて

ばら

七月の食器洗はれ置かる音

暮津

● 水無月みなづき

華やぎて雨の降るなり祭月

ばら

雨だれの音のとんとん祭月

ばら

● 海開

あやかしを畏み畏み海開

素抱

濤音に犬の追はるる海開

素抱

土左衛門欲しがる海の海開

素抱

● 海の家

氷水伊豆見屋と云ふ海の家

ねず

くろんぼと云ふ名もよけれ海の家

もも

高浪に茶をひいてをり海の家

もも

海の家二つこつきり日本海

ばら

海の家ぼつりぼつりと建ち始む

暮津

靦面にその葉畳める含羞草

さざ

ひやひやと夜の手が触れて眠草

暮津

眠草なんなら君も触れてみな

暮津

眠草突つく処がなくなりぬ

暮津

姉妹交互に手出しねむり草

暮津

●合歓の花 花合歓

曇日を待ちゐしごとく合歓咲ける

もも

古木にて惰眠むさぼる合歓の花

ばら

禿めくうひうひしさも合歓の花

随笑

そよ風の何ほのめかす合歓の花

随笑

いっぽんの合歓咲く彼方古戦場

随笑

合歓の花一雨あるやも知れぬ闇

寒暑

花合歓に曇天覆ひ被さりぬ

素抱

合歓の花風に散々雨に散々

素抱

合歓若木叩ける雨も象潟ぶり

石鏡

合歓の花咲いてベティの長睫毛

暮津

岩牡蠣と云へば象潟合歓咲くころ

暮津

雨の日も夢見る合歓の下田港

暮津

花合歓の上を舞ふ揚羽うはの空

暮津

●海桐の花 花とべら

花とべら海匂はする風が吹き

さざ

海桐の香つよく干潟を押し出せる

さざ

●夾竹桃

夾竹桃ブツダガヤなる聖地あり

鳩信

夾竹桃一難去つてまた一難

素抱

●梅雨明

予報官えいと梅雨明宣言出す

寒暑

●冷夏

稲不作うつつたふ婆の冷夏の眼

素抱

牛乳の泡泡を押し夏の朝

ばら

床擦れに手こずり居れば夏曉の日

鳩信

夏曉の散歩の顔の血色よき

素抱

硫氣に顔撫でられ夏曉の露天風呂

石鏡

夏曉の湯浴びに湯治の床もぬけ

石鏡

夏曉のぼんやりしてゐる頭と手足

暮津

●夏の露

夏の露ころりと白馬岳快晴

宿好

夏の露払ひ諏訪社の五兵衛杉

宿好

夏大間崎の露昆布干し場の留石に

随笑

●夏の虫

四人で聞いて確かに夏の虫

随笑

夕かぜに息浅くつく夏の蟲

寒暑

しやかしやかと仙石原の夏の虫

暮津

●夏の日

夏の日をさへぎる櫂にして偉なり

さざ

●夏の月

投函に出でて蹤き来る夏の月

随笑

夏満月妻のうながす処に佇ち

素抱

この匂ひ鮓の煮付け夏の月

暮津

このところ忘れてをりし夏の月

暮津

夏満月近々とあり顔ほとり

暮津

●夏の灯

夏の灯の鯨の本へ乱反射

もも

夏の灯に売るアボガドのされかうべ

寒暑

●青田 青田風

青田風吹き込む三番札所寺

宿好

一枚東北道の巨きな青田みちのくは

随笑

清浄と男鹿の青田に注ぐ雨

寒暑

日本海前に青田のしんと澄み

寒暑

鷺を見て青田曇りの庄内路

石鏡

蚶満寺裏の青田の目に沁めり

石鏡

●雲の峰 入道雲 峰雲

十歩出て左方に海や雲の峯

さざ

怪鳥を出して見せうぞ雲の峰

鳩信

碧天へいきなり到達雲の峯

素抱

ぐつぐつと煮ゆる泥湯や雲の峯

石鏡

求道的たること今も雲の峰

暮津

雲の峰崩るることを厭はずに

暮津

雲の峰あらあら崩れ始めけり

暮津

雲の峰肋バタバタ叩きみる

暮津

鯢に入道雲の聳ち損ね

ばら

ピッチング入道雲の高さより

随笑

直ぐ崩れては形なしの入道雲

素抱

峯雲のよく聳つ日なり鵬を見ず

もも

峯雲に亀裂入ることなかりけり

もも

峯雲に見下ろされぬる鮫州駅

もも

天を突く気なき峯雲は斥けむ

さざ

ぐわらぐわらと峰雲崩る筈もなし
決勝の壁と峯雲峙てり

ばら
燕音

旺んなり朝の峯雲も食欲も
峯雲孫美雨の漲れる日を産見舞

随笑
素抱

峯雲より滑走ジェットコースター

素抱

痛恨の極みの峯雲突つ立てり

素抱

峰雲の力づくにて作りし塔

石鏡

一方に峰雲一方よりタンカー

暮津

ラ懐古 船旅パウルへ夏の密雲生る中

寒暑

●雷 はたた神 日雷 鳴神なるかみ 軽雷 迅雷 遠雷
いかづち

はたた神空を鳴らして空開き

さざ

うなばらを押へつけたるはたた神

さざ

はたた神大だんびらを振りかざし

ばら

ちやかぴかとそれも端はなからはたた神

ばら

東ひんがしに取って返せりはたた神

ばら

その伝で云へばなまくらはたた神

ばら

海陸に鈍器打ちつけはたた神

燕音

やたら落ち田舎つぺえのはたた神

宿好

はたた神ダイダラ坊を起すなよ

随笑

落ち方と云ふものあろうがはたた神

寒暑

雨降嶺を唐竹割にはたた神

寒暑

さつきから目くじら立てゝはたた神

素抱

腹に据えかね居るところをはたた神

石鏡

遠雷が一つ鳴りあて下山道

宿好

遠雷は陰口に似て崎つ方

随笑

くわばらと云ひて遠退く雷ならず

寒暑

遠雷は響かず雨が蓋をして

暮津

あさつての方から聞え軽き雷

寒暑

迅雷の三連発に天地裂け

寒暑

日雷水大将の家震ひ

もも

*佐久平に塩沢堰を引きし六川長三郎氏村人に水大将と呼ばれ親

しまれば

日雷雷電関の碑いしづみに

宿好

日雷孫のご機嫌斜めなり

素抱

日雷母が正気に戻るとき

暮津

鳴神の逢瀬天上往き来して

ばら

わたつみに鳴神墜ちてどっぴんしゃん

鳩信

鳴神の幕引とんと目途たたぬ

石鏡

雷光に木像ガルーダ眼を剥いて

寒暑

雷公の所持品古ぼけ大太鼓 鳩信
 雷公のもぐら叩きに遭ふごとし 寒暑
 京劇の殺陣稽古めく雷最中 寒暑
 雷神の太刀先杉をばらりずん ばら
 ピカザザと天地俄にさうざうし 随笑
 雷果てて現にかへる顔と顔 随笑
 雷の尻すぼまりに海の方 寒暑
 言葉尻濁せるごとく雷了る 寒暑
 眼鏡置き眼休ます雷の中 寒暑
 落雷を逃るゝための唱えごと 寒暑
 押入に片さるゝごとく雷了る 寒暑
 雷いかづちに出し抜かれては道急ぎ 素抱
 雷又雷尾根の新樹を震はせて 素抱
 雷いかづちは会津の方よりそれつきり 素抱
 雷が西瓜に入れし縞模様 素抱
 雷夕立関東大気不安定 素抱
 雷の楔を入れるゝ相模灘 暮津
 雷獣の千里を駆くる光が見たり 暮津
 雷にい行くうしろを断たれけり 暮津
 蛸壺に一喝かれて海の雷 暮津
 武州金澤八景落雷なくはなし 暮津
 ●夕立 白雨はくう ゆだち 驟雨
 甲子園グラウンドを馳す大夕立 燕音
 一、二枚青葉飛ばして大夕立 寒暑
 大夕立煙草ふかしてやり過ごす 素抱
 ところどころ言葉が消され大夕立 暮津
 一線を越えてどどどど大夕立 暮津
 大夕立など何糞の一油蟬ユヂ 暮津
 二階より母の見てゐる大夕立 暮津
 地を抜かんばかりの釈迦力大夕立 暮津
 白雨に舗道応へてをりにけり さざ
 白雨を浴びをりペリカン修道士 ばら
 そら来たと白雨に掌を差し伸べぬ 鳩信
 白雨のごとログコテツジのバーベキュー 燕音
 枝々の明るさ増せり白雨中 燕音
 白雨抜け泊りは星の白馬村 宿好
 切返すごとくに白雨上りけり 石鏡
 白雨の仕上げに風を送りくる 石鏡
 踏めばそこ雨の滲めり白雨あと 暮津
 夕立のあとのむむっとする中に 鳩信

夕立が上り辺りのなまぐさし	鳩信
登ってさんざん下りてさんざん岳夕立	宿好
兎平駅にて夕立遣り過ごす	宿好
夕立に赤蟻川止め喰らひけり	随笑
軍配の返りたるごと夕立来	寒暑
夕立後のごとくすかっとしてあかし	寒暑
端的と云ふは夕立の上がり際	寒暑
夕立のざつとありたる雄物川	寒暑
五能線田母木に夕立うちつけて	寒暑
夕立に叩かれめちやくちや日本海	寒暑
夕立来て東京湾をぶったたく	寒暑
夕立中健気なる灯の点り初む	寒暑
夕立の音の間合ひを詰め来たる	寒暑
夕立にこりやたまらんと馳せる蟬	寒暑
夕立来て地に喚くもの疾駆す	寒暑
大翼たたむごとくに夕立熄む	寒暑
夕立のそのたまさかに苗倒る	素抱
夕立熄み雨音の輪を狭めくる	素抱
連れ立ちて物の流るゝ夕立川	素抱
夕立に足止喰いぬバーガー店	素抱
夕立あと町空響き易きかな	素抱
雷夕立関東大気不安定	素抱
夕立の音立てゝ街呑み込めり	石鏡
町雀けふは夕立まぬがれて	石鏡
また夕立こどもだましのやうな空	石鏡
夕立に何處か伸び伸びして晩酌	暮津
夕立に降られて肌着総取り替え	暮津
てのひらを返すごとくに夕立来	暮津
夕立のあと何處となく大胆に	暮津
夕立となりて万象雨隠れ	暮津
夕立に容あるものみな打たれ	暮津
夕立の涼気杉より檜より	暮津
夕立といふ一快挙ありにけり	暮津
夕立といふ快音を広げたる	暮津
夕立のみるみる上がりつつびんしゃん	暮津
夕立にちからづけられ食すすむ	暮津
夕立性一雨新宿駆け抜けり	暮津
夕立あと傘提げチャップリンめく家路	暮津
夕立の一気呵成のそれが来た	暮津
夕立来と妻はクイズを抛り出し	暮津

一驟雨高層ビルを壮とせり

ねず

驟雨あり大根台地の地味肥やす

もも

驟雨来て朝の大正池壊す

宿好

驟雨来空ゴンドラを送りけり

宿好

驟雨来ぬ白馬の美田輝かせ

宿好

なぐり描き劇画のやうな驟雨くる

寒暑

一驟雨青森椴松濡らし去る

石鏡

遣り過ごす韋駄天驟雨バーガー店

石鏡

一降りに闇を正せる夜の驟雨

暮津

近づきて遠ざかりては夜の驟雨

暮津

打ちつけて傍若無人夜の驟雨

暮津

真暗がり打ちてやにはに夜の驟雨

暮津

端然として聞く夜半の一驟雨

暮津

夜の驟雨納まりかけて来りけり

暮津

一驟雨頭のもやもやを拉し去る

暮津

車内放送男鹿のどしやぶり雨告げて

寒暑

●スコール

波のりのこゑスコールのあがる海

ねず

羽抜鶏もんどりうつてスコール来

ねず

スコールは洋上はるか固め降り

暮津

●虹

虹立てり荒き雫は縦の直

ねず

海へ虹一帆もなく立消えに

もも

鯛・鯉昇れや虹の太鼓橋

ばら

色合ひをつべこべ云ふな虹は虹

ばら

立つ虹に見合った言葉ぼんと出で

寒暑

虹のこと古事類苑の天文部

寒暑

鱸へなし作経て深浦辺りで虹を見ぬ

寒暑

のれん出す野毛飲屋街虹立ちて

素抱

母の記憶虹より淡くなる勿れ

素抱

この家で命全うしたき虹

暮津

はつきりせぬ虹の七彩折衷案

暮津

●夏霧 海霧しり

夏霧のじはつと鳴れる日本海

ばら

海霧抜けてフォングランプは黄青色

燕音

羅臼沖背黒鷗に海霧去来

燕音

国後島あとかたもなく海霧の中

燕音

魔がさしたやうに海霧湧きまだ引かず

燕音

ぼんやりと夏霧のこる山間部

随笑

岳樺呑み込む海霧の迅さかな

素抱

●夏座敷

魚佐次(割烹)

夏座敷茶のうまければおかはりす

随笑

佳き風を振舞はれけり夏座敷

随笑

嵌め物の類ひあれこれ夏座敷

随笑

夏座敷楓の風を取り込みて

随笑

ごたごたと物を置かぬが夏座敷

素抱

夏座敷豆麩浮かせて会津椀

素抱

懐かしくサクがあるなり夏座敷

素抱

骨壺の一つ置きある夏座敷

暮津

遺品よく片づきをりし夏座敷

暮津

●扇 せんす
扇子

しやうぶ見る腰ポケットに扇子かな

ねず

けふ差して腰に馴染まぬ扇子かな

もも

御旅所に団扇と扇子語らひつ

さざ

腰折れの扇子使ひてふむむと

鳩信

通院日またぞろ扇子取り出して

燕音

三人が三人扇子取り出せり

随笑

扇子もつひとは扇子を遣り木蔭

随笑

飯店の円卓扇子を遣りながら

寒暑

定年後扇子が家に遊びをり

素抱

五大堂風あり扇子納めけり

素抱

骨傷みしても現役古扇子

素抱

南谷ここがさうかと扇子出す

石鏡

海を見て扇子パチパチやつてをり

暮津

白扇に茶化しきれざる病景色

鳩信

話かいつまんで云へばと古扇

鳩信

隣席の扇の風にあやかりぬ

鳩信

嘶家の扇のごとく器用なり

随笑

中老の扇ひらひら屋台曳

石鏡

●団扇 団扇風

絵団扇のあらかた竹の性抜けて

ねず

古団扇扇ぎて去年の手術のこと

鳩信

古団扇扇ぎ損ねて肋打つ

寒暑

傷み方あれこれありて古団扇

素抱

古団扇骨傷みして風へなへな

素抱

古団扇きゅつきゅと骨が鳴るやうに

素抱

暇あればすぐ横になり古団扇

素抱

骨折のそれでも使ふ古団扇

暮津

大リーグ観戦団扇持ち替えて
気休めの団扇あふぎとなりゐたり

素抱

ビニール製団扇の朝顔色褪せず

素抱

孫吾をあふぐ団扇のへなへな風

素抱

くさぐさの団扇の中のお気に入り

素抱

雑魚寝すや団扇片手に湯治人

石鏡

団扇畳にほいと投げだし昼寝せり

暮津

身ほとりに好みの団扇取り揃え

暮津

団扇の辺通りすがりの蟻一匹

暮津

●ハンモック

ひとねむり椰子の高みのハンモック

ねず

●露台 テラス バルコニー

ハマナスに別名あれば
テラスのさき露のジャパニーズ・ローズかな

燕音

ポタージュを蜂嗅ぎつけぬカフェテラス

燕音

風通るテラスにてピザ避暑家族

燕音

珈琲を喫せりロッヂ「五千尺」

宿好

バルコニー「マサイの矢尻」鉢に活け

暮津

●日傘 白日傘

白日傘水母の海を覚ましゆく

ねず

ハイカラな日傘と出合ふ軽井沢

燕音

日傘して次に浮き来る亀を待つ

宿好

恐山日傘抹香臭くなり

随笑

横浜港
白日傘行き交ふ新装大栈橋

寒暑

熱線に痛み走れり浜日傘

暮津

●サングラス

サングラス断てり氷河の乱反射

ばら

●道をしへ 斑猫

はんめうのふつと消えたる岩の色

もも

はんめうの背後にそつと息詰めて

ばら

つと寄りて轉法輪寺道をしへ

宿好

斑猫は肉食の彩泛べけり

随笑

●天道虫 てんたうむし

天道虫ハイカラな星七つかな

もも

てのひらに這はせて愛づる紅娘 てんとうむし

さざ

教団の使者とし来たる天道虫

ばら

十勝晴れ天道虫が肩に来て

ばら

屯して天道虫のローティーン

ばら

古草を渡り歩きの天道虫

燕音

冬ざれの天道虫は能く歩く

素抱

よそゆきの水玉模様天道虫

素抱

●金亀子 こがねむし かなぶん ぶんぶん 黄金虫

かなぶんの鉄砲玉に斜面畑

もも

かなぶんに玻璃戸を引きて助け船

ばら

茶天鷲絨ちやびろうどかなぶんひつくり返りけり

燕音

かなぶんの支離滅裂となり当る

随笑

ぱたと落つところを見れば豆かなぶん

随笑

かなぶんの堂々巡りむさき家

寒暑

いつもならかなぶん翔んで来べき頃

寒暑

板の間に落つかなぶんの硬き尻

素抱

かなぶんを捕つて抛りて戸をぴしゃり

素抱

二階に赤子階下になぶん喚く家

素抱

潜みぬし昨夜のかなぶん灯を取りに

素抱

うるさかり先生口調もかなぶんも

素抱

かなぶんの打身の音をひたと聞く

素抱

かなぶんに飛ばれ驚く夜の寝所

素抱

かなぶんの現行犯を投げ撲ちぬ

暮津

文机へかなぶん落ちて紙の音

暮津

かなぶんのその実じつよからぬ虫と聞く

暮津

かなぶんを音として聞くよからぬ音

暮津

かなぶんを色として見る至福のいろ

暮津

ぶんぶんと泣虫抛り出さんかな

ねず

もう我慢出来ぬぶんぶん締出せり
空襲警報下、母幼稚園に迎えに来ること再三と聞けば

さざ

ぶんぶんやぶんと飛び来し艦載機

暮津

ぶんぶんは緑の鎧着し騎士ナイト

暮津

ぶんぶんの遊び半分灯を取りに

暮津

ふんばりてドウガネブイブイ露吸へり

もも

黄金蟲手っ取り早く翅畳む

ばら

金亀虫さうかさやうか灯を遣ろふ

随笑

分銅の飛び来るごとく黄金虫

素抱

黄金虫吾が掌たなこころ蹴りあるく

暮津

鉛筆はH金亀虫の固さ

暮津

●髪切虫

かみきり 天牛

もも

かみきりにいちじく甘露用意せる

ばら

天牛のつままれ鳴きのいと女なし

鳩信

天牛の朝飯前の力かな

随笑

●鍬形虫

寒暑

強さうな名のへラクレス大きくわがた

寒暑

少年の溺愛鋏形劍闘士

暮津

●兜虫 かぶとむし

甲虫

闇を翔け来たる強肩兜虫

ばら

偽八ヶ岳へ兜虫かぶと飛んだりまっしぐら

宿好

灯を取りに箱根の山の兜虫

随笑

鍛えたる角いつ使ふ甲虫

素抱

●毛虫

毛虫焼く一部始終を見て足れり

ねず

柁垣毛虫に先を越されたる

ばら

むくむくと大善坊の毛虫かな

燕音

山茶花に毛虫一騒動ありぬ

燕音

山道に毛虫の落ちて忙しき

随笑

毛虫つく頃の柁と見てとほる

随笑

連休の中日の毛虫退治かな

随笑

木より落つ毛虫地べたを一目散

随笑

黒毛虫妻譏ること譏ること

随笑

毛虫垂る糸の辺りを横払ひ

随笑

毛虫のごと空攀づジェットコースター

寒暑

満腹や毛虫の下見でもせんか

寒暑

さざんくわの毛虫の下見的中す

寒暑

良寛墓所毛虫も托鉢姿して

寒暑

小肥りの毛虫良寛墓石馳す

寒暑

格子縞羽織り毛虫の三太夫

寒暑

葉桜の毛虫垂るるによき暗さ

素抱

毛虫居るだけで全てを物語る

素抱

毛虫ひそかに事運びしが発覚す

暮津

発覚即リンチと毛虫心得よ

暮津

おとつと森の小径の垂れ毛虫

暮津

つままれることをいやいやする毛虫

暮津

毛虫付き驚き桃の木山椒の木

暮津

こら毛虫ここで会うたが百年目

暮津

●青山椒

青山椒隈取り深く毛虫の貌

暮津

●青葡萄

青ぶだう日毎に凌ぎやすくなる

随笑

●鬼灯市 ほぼづきいち

四万六千日

愛宕神社千日詣

ほぼづきの鉢提げ愛宕大権現

鳩信

ほぼづき縁日笛ひやらひやらとひやらひやらと

鳩信

軍艦に四万六千日の波

素抱

ほおづき縁日近し愛宕の杜冥く

石鏡

●夏の山 青嶺 夏山

蝦夷青嶺肩寄せて守る湖の艶

ねず

花火野郎青嶺の肝を抜き来しと

ねず

切り出してここら青嶺の水利権

ばら

押し迫る青嶺や罷棲息地

燕音

お国自慢などしてバスは青嶺越え

随笑

釣竿を青嶺に向けて川漁師

随笑

川ぐいと曲る青嶺を引き寄せて

随笑

悠々と暮れて青嶺のいま黒嶺

随笑

ドライブイン四方の青嶺に見下ろされ

随笑

田沢湖は青嶺の間に手の窪ほど

素抱

骨壺に葛生の青嶺見せ戻る

素抱

青嶺攀ずよろよろ岩手県北バス

石鏡

釣人の居る瀬居らぬ瀬青山中

随笑

エンジンブレーキ響かせ下りる夏蔵王

素抱

杉皮の赤むきだしに夏の山

素抱

夏鳥海山はるばる来たる者にこそ

素抱

天候は出たとこ勝負夏山行

石鏡

●山滴る

かつを船滴る陸に戻りけり

ねず

山滴る島を離れておけさ丸

寒暑

羽後牛のステーキ青嶺滴るに

素抱

墓洗ふ向う滴る唐沢山

素抱

山滴る箱根に手づくり豆腐屋あり

暮津

●森林浴

ふっ切らむ老いのしよぼくれ森林浴

石鏡

●登山 登山靴

ガレ場あり奈落より現る高山蝶

宿好

遠雷が一つ鳴りみて下山道

宿好

登ってさんざん下りてさんざん岳夕立

宿好

ガレ場にて喰れしこゑの昼の虫

宿好

後ろより兀と迫れる登山靴

宿好

八方尾根下山がたがた蝶番

宿好

登り来てモウセンゴケに顎出しぬ

宿好

トレッキングシューズの先の岩鏡

宿好

濃あぢさゐ登山電車はぎくしゃくし

石鏡

登山届ポストぼとぼと霧霰

石鏡

登山帳前黒帽子岳をピストンすと

石鏡

●ケルン

二株のハクサンシャジンケルンに待す
 足垂らし涼みあるなりケルンの端
 ケルン経て風届くなり車百合
 時かけて風の第三ケルンまで

●キャンプ

象亀のやうなテントもキャンプ場

●野外映画

野外映画鞍馬天狗のをちさん出づ

●岩魚

だんだんと水の高鳴る岩魚釣
 岩魚の瀬すこし上ミ手に山女の瀬
 水底についと向き変ふ岩魚の斑

●お花畑

お花畑

えいおうと咲き出てエゾノヨロイグサ
 お花畑雨も疾走虻も疾走

太陽は真近しエチゴギジムシロ

オオバギボウシ白雲翳り易くして

露は凝りゐたりタテヤマウツボ草

白雲の雲影よぎるカラマツ草

エゾホソイ山雨傍若無人なり

雨脚のみるみる太しオヤマソバ

健脚なご婦人トリアシショウマの辺

ハクサンシャジンリフト減速して頂上

お花畑雲の空中散歩かな

登り来てモウセンゴケに顎出しぬ

ショウマ等ちらちら兎平かな

お花畑リフト二つを乗り継いで

右左だう廻ろうかお花畑

風が湧き走り回れりお花畑

●雪渓

氷河

カナダ アサバスカ氷河
 動悸打つごとく氷河の雫かな

雲に日の入れば氷河の慄然たり

草の花氷河すさりし跡に充つ

音も無く氷河の上を水はしり

光度増し氷河息づきあるごとし

氷河焼けしたるガイドのジョーク好き

氷壁を煽りて発てるブルーージェイ

*ブルーージェイは北米産青懸巢
 サングラス断てり氷河の乱反射

宿好

宿好

宿好

宿好

随笑

素抱

ばら

素抱

暮津

燕音

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

素抱

素抱

暮津

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

真輝く氷河を前に道消ゆる
足下より煌きわたる大氷河
大氷原わたる太陽古びずに

ばら
ばら
ばら

目くるめく光体となり氷河馳す
氷河湖を見つむころもエメラルド
水餅のやうに氷河の横たはる

ばら

ばら

氷河つるつる尻餅ついたら百年目
雪溪の端まで二三歩ふきのたう

素抱

雪溪の風に画用紙めくれけり

さざ

ばら

万年雪きれいきれいと日本語

ばら

アマニューとアマニューの間雪溪見ゆ

ばら

雪溪の風の抜け口お涼し

宿好

見晴らしは兎も角雪溪よぎるとせん

宿好

雪溪の舌の先なるチングルマ

宿好

雪溪の風八幡沼に榎松頭を削がれ

石鏡

雪溪の風にウインドブレーカー鳴る

石鏡

雪溪の風を受けつつスケッチす

石鏡

雪溪の半ば風向き変りしか

石鏡

雪溪の風がすらさうヒナザクラ

石鏡

●雲海

雲海をとよもし航けるエンジン音

素抱

●滝 滝壺 男滝 女滝

滝飛沫あびてアリアを聴くごとし

ばら

滝飛沫ダグラスフレイ樅を育めり

ばら

滝しぶき女はキヤーと云ったきり

素抱

不動滝名前負けて落ちにけり

素抱

滝不動苔むすなまくら剣かな

素抱

ががんぼのぶらさがりを滝不動

素抱

滝壺へ瀬を替え道の続きをり

素抱

滝壺の轟音に我投げ込まれ

暮津

滝水のぐるりと迂回せるもあり

もも

滝水の巖過ぐとき巖いろ

ばら

滝水の下に滝水割込めり

ばら

まとまりのつかぬ滝水とはなれり

素抱

滝水のとどろに大徳出づる寺

素抱

滝落下点へゆつくり向ふ水

さざ

真向へる男滝じりじり詰め寄れる

さざ

水垂みずたれで降りて七滝なな巡りかな

ばら

インディアン滝を称えてタカカウと

ばら

*タカカウは素晴らしいの意

滝落ちてアオダモの木に轟けり

別名を鳥肌立の滝となん

熊本より来たばい真名井の滝はよか

滝に皺入りて雪村観瀑圖

滝音の呪縛振り切り来たりけり

岩山北伝酒水の滝ひしゃらんしゃらんと女滝落つ

奔放は滝の放てる音にこそ

飛瀑音筋といふ筋伸ばしけり

かへり見るときには滝の威厳失せ

瀧双竜の滝けむり双竜の鬚帯びにけり

滝見茶屋ざつくばらんな紅葉かな

男滝へは女の足で十四、五分

●清水しみづ 山清水

山清水鳴れり朽葉を潜り出て

冬の清水音色もるとも掌に汲めり

朝顔の大輪清水湛ふごと

お岩木岩木山神社の真清水引きて御神水

お岩木の手水の真清水手に痛し

湯治場に天下の一品山清水

湯治宿つと山清水引き込んで

真清水に蕨の塩抜き湯治宿

●滴り

滴れり三葉虫の潜む岩

滴れり三葉虫の昔より

●涼し 晩涼 夜涼 すずかせ 涼気

晩涼の黒の勝ちたる斑ぶちの猫

晩涼の津軽じよんがら哭き三味線

晩涼の胸に砂寄せ砂ゆっこ

低音部利かせ夜涼のダリエンソ

宝石函羽田上空ぶちまけしごと夜涼の灯

彦三頭巾白鉢巻が夜涼呼ぶ

巻き舌に夜涼呼び込むエルチョコクロ

亀の手といふ貝が出て涼しき餉

木偶の抜く段だんびら平涼し文弥節

大疑堂竜沢寺坐禅堂覗く俗頭涼しけれ

糸からくり大きな所作の音涼し

藤の実の如く垂れなば涼しからむ

まんぼうの涼しげな胸スポーティー

ほぐれ初む麻酔の糸や脳涼し

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

随笑

随笑

素抱

素抱

石鏡

石鏡

暮津

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

寒暑

素抱

燕音

寒暑

素抱

鳩信

燕音

素抱

暮津

ねず

もも

さざ

ばら

ばら

ばら

鳩信

鳩信

トラ鱧の薄茶の縞の涼しさう 鳩信
 涼しさは染めつけ鮎向付 鳩信
魯山人展
 時代の眼涼しく使ふ雄之介 鳩信
俳優伊藤雄之介逝く
 涼しさもその名からしてユカタハタ 燕音
 目元涼しく「私カタクチイワシです」 燕音
 市涼し買ひ手のつかぬおおかみうお 燕音
 美食家の歯音涼しうモモスズメ 燕音
 振りかざすだんびら涼し怪猫圖 燕音
 大型絵本覗き込む子の瞳の涼し 燕音
上高地
 鱒ぐらとその向き変へる翳涼し 宿好
 雪溪の風の抜け口お涼し 宿好
 水を撒く母がもつともすずしさう 宿好
 銀砂子撒ける蓮池のいと涼し 随笑
 暁齋の百鬼夜行図お涼し 寒暑
 降つて湧く涼しき風を待ちゐたり 寒暑
 玉澤のずんだ餅目に涼しきよ 寒暑
 大棧橋波をデフォルメして涼し 寒暑
 笑み涼し何を夢見て赤ん坊 素抱
 症状の因もとの知れたる涼しさよ 素抱
 一切を天に預くる涼しさよ 素抱
 日々のこと天に任する涼しさよ 素抱
 変調は杞憂で済みし涼しさよ 素抱
 ミズ涼し辛子のからみ具合よし 素抱
 涼しとも蒙古撃退成就の鐘 石鏡
 うなづいて答へるときの瞳の涼し 暮津
 銭湯のタイル流るゝ泡涼し 暮津
 この涼しさ訝り肌着に手を通す 暮津
 ゆふがたは涼しきものと期待して 暮津
 ボンネットヘッドシャークの涼気過ぐ 燕音
 気っ風よき啖呵のごとき涼気とも 寒暑
 走鳥類エミュー目を伏せすずかぜに ざざ
 天然の涼風窓より浅草線 鳩信
 何といふ涼味ホルンのまあるい音 ばら
 涼味満点天上大風てふ地酒 寒暑
 朝市の涼ジャワ一とくるみバナナの葉 ねず
四句
 棒杭の如きをぐいと墨の涼 ねず
 北極熊棒立ちの涼ふりかぶる ざざ
 ダリエンソ手練手管のピアノの涼 鳩信
 幕末絵師国芳ひろぐ怪奇の涼 燕音
 すれ違ふ蹠の涼大正池 宿好

奏鳴館(オルゴール博物館)
涼奏でオルゴール函シンフォニオン

清方の八百屋お七の紅の涼

掛けたる肌着の釦貝の涼

地区図書館朝涼の顔集はしめ

●羅

おおかみうお黒の羅うすものはおりけり

羅を着こなし上手水海月

羅の仏下ろしに畏まる

羅に患者付き添ひ過ぎにけり
慈恵医大

羅の二人は佳けれ納涼図

●浴衣

縞鯛のごとき浴衣と浜に遇ふ

術後の日の為の浴衣を着慣らしぬ

浴衣着に一皮むけていい女

今町のおわら流しの浴衣柄

浴衣着て妻も飛び入り湯揉みシヨウ

宿浴衣もみづる山に向ひ干す

よその子が気になる祭浴衣かな

湯治棟浴衣など吊り仕切りけり

浴衣干す針金ハンガー湯治棟

●縮布ちぢみふ 白縮

白昼の真中に覚めて白縮

●パリ祭

パリ祭

手術当日救命の管のいろいろ巴里祭

管ぶらさげ鳴り物入りの巴里祭

巴里祭定番鳩の手法かな

●甚平

甚平が術後の吾を待つてをり

甚平著て貴方も齡と云はれをり

お化け小屋呼び込み男の甚平着

あっさりと白旗掲ぐ甚平着

皺む腹甚平におし包みけり

甚平に捌けて口調も応対も

甚平着見て振り返る甚平着

甚平の好さがわかつてくる齡

甚平の紐結ふ手つき馴れてきし

甚平の食い込む紐をゆるめをり

サンダルを履き違へ来し甚平着

くるぶしをぶつつけおお痛甚平着

宿好

宿好

随笑

石鏡

燕音

随笑

随笑

素抱

素抱

もも

鳩信

鳩信

宿好

随笑

寒暑

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

鳩信

鳩信

随笑

鳩信

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

石鏡

立読みも堂に入りたる甚平着
甚平の腰泳がせて地震最中

石鏡
暮津

●すてつじ

汗くさき肌着ステテコシャツの山
すててこのすつぽんぼんは佳かりけり
すててこで出てゆき速達受け取りぬ
肌合ひのよきを好みてすててこ党
大リーグすててこ観戦愉しめり
すててこで古本整理ああ汚きたな
すててこの上よりあはてゝ履けるもの
すててこの膝のところが薄くなり
すててこのまゝ玄關に出やうかとも
来客にすててこの腰泳がせて
妻が来て剥ぎとりゆけるすててこ等

鳩信
随笑
随笑
随笑
寒暑
寒暑
素抱
素抱
素抱
石鏡
暮津

●汗 汗ばむ 玉の汗

出色の百日紅に汗退けり

もも

サイクリスト緑蔭に汗拭へるも

さざ

団扇風みぞおち辺り汗に冷ゆ

さざ

ボテロ描きしモナリザでぶで汗ばめり

ばら

汗っかき大漢にして大ジョッキ

鳩信

汗くさき肌着ステテコシャツの山

鳩信

汗っかき太つちよ監督サイン出す

燕音

戦う汗涙となりぬ夕榮に

燕音

札所寺百日紅に汗退けり

宿好

汗をかき日々を勇んでああ昭和
懐旧二句

随笑

毛髪の間にはろつと汗生まれ

随笑

汗拭いて七百八十五段の労

寒暑

高からぬ鼻も汗かく日なりけり

寒暑

痩せぎすの身なれど汗がなんぼでも

寒暑

放つとけばころがり落つる汗の玉

寒暑

汗地獄それもよからう徒食の身

寒暑

汗拭いて縦に走れる手術痕

寒暑

汗かかぬ魚を羨しと見てゐるも

寒暑

永久に拭く汗の貌ともおもへりき

寒暑

汗拭いた了へて須臾の間仏がほ

寒暑

汗かくだけかいて魂すつぽぬけ

寒暑

身を離るときの快感汗の玉

寒暑

汗は先づ顔から噴くもの探し物
記念写真撮影場

寒暑

なまはげの汗だく学生アルバイト

寒暑

今日やること薬のむこと汗かくこと
番頭曰く
 すすき見て露天湯に汗流されよ

寒暑
寒暑

額に汗お山詣での首手拭い

素抱

赤紫蘇にお山詣での汗拭ふ

素抱

玉の汗五大堂にて一休止

素抱

汗止まぬ上り弱音はあきらめに

素抱

仁王門汗し過ぎれば膝笑ふ

素抱

かにかくに玉の汗かく千余段

素抱

汗のものともかくここに置き申す

素抱

汗だくのおでこ拭はれ砂ゆっこ

素抱

額に汗尻に火がつき砂ゆっこ

素抱

弥坂湯に箱根巡りの汗ながす

石鏡

汗たじたじ羽黒権現三の坂

石鏡

ガーデニングなんて洒落ても汗仕事

暮津

汗つかき前置きにして言訳云ふ

暮津

汗流るむずむず虫の這ふやうに

暮津

山妻のこまめに出せと汗のもの

暮津

●ハンカチーフ ハンカチ

ハンカチをベルトに挟む齡でなし

随笑

湯西川
 ハンカチをすこし余分に旅支度

素抱

ハンカチは嗜みのうち忍ばせぬ

素抱

ハンカチがなければないで服で拭く

暮津

●白靴

恐山巡りの白靴憂々と

随笑

白靴の一団お釜を覗き見に

素抱

●籠ひまろ枕

籠枕ことしの頭慣らしをり

素抱

早起きが徒の寝不足籠枕

素抱

籠枕年金暮らし快適ぞ

石鏡

●緋鯉 錦鯉

金欄の綾なす鯉と金閣と

宿好

金閣の金を破りて錦鯉

宿好

金閣を呑まんばかりに鯉の口

宿好

丈山の髯を倣ひて錦鯉

宿好

詩仙堂
 よう放し山古志村の雨最中

寒暑

*ようは土地言葉で魚の意
 よう放しは鯉の池入れを指す

寒暑

よう放し支度盥に鯉を入れ

寒暑

養鯉池雨に緋鯉のうすぼんやり

寒暑

●造り滝

石鏡

旅人に盛岡駅の作り滝

●噴水

コリント式噴水の水柱かな

さざ

突風に噴水のすぐへこたれて

さざ

噴水速く望メバ鯨魚ノ潮吹クカト

鳩信

噴水の整ひ過ぎてよそよそし

随笑

噴水の背骨をしゃんと立てにけり

寒暑

噴水に飽きしその眼を森に遣る

寒暑

冬の噴水モービルアートめく動き

石鏡

●納涼すずみのうりよう 納涼 門涼み 涼む 涼み台 夕涼み

涼めとや清涼寺式釈迦如来

ばら

ギブス組涼みがてらの莫迦話

鳩信

胸板に夜風涼しみある患者

鳩信

絵師清方風も描きて納涼図

燕音

国芳の肉筆美人門涼み

燕音

カルピスを喫し涼める上高地

宿好

足垂らし涼みあるなりケルンの端

宿好

両神山を指呼に頂上涼み台

宿好

八尾びと路地先に据ふ涼み台

宿好

初老とは木陰に涼むやうなもの

随笑

大樗戦ぐ神社に涼みに来

随笑

涼まんと帆船模型置く茶房

随笑

丈六佛涼しみ拜む御居処かな

素抱

羅の二人は佳けれ納涼図

素抱

仙厓の布袋図さながら夕涼み

素抱

棲みつける墓ものそりと門涼み

素抱

云ふならば初老夫婦の夕涼み

素抱

老人のでれつと涼む湯屋板間

暮津

板の間にへタリて銭湯納涼図

暮津

ビル風に涼んでゐたり病院裏

暮津

ほつとせる貌を納涼夕雀

暮津

夕雲を見つゝ涼とる妻共々

暮津

●端居 夕端居

随笑

あそこからかう来るかぜと端居人

随笑

関節を鳴らしてみせぬ端居人

寒暑

片膝立て地震に身構ふ端居びと

暮津

端居人臍の掃除をして居れり

暮津

なるやうになれとはだけ夕端居

寒暑

薄光る切傷撫でて夕端居

暮津

脛の創これは彼の時夕端居

暮津

衰ふるもの目に見えず夕端居

暮津

手術痕古ぶばかりや夕端居

暮津

夜色楼台雪万家圖を見て端居

ねず

端居して孫の手をもう借りる齡

随笑

端居しておもひ巡らす眼となれり

随笑

きのふけふ仏がそこに居る端居

素抱

端居してみな遠のけるものばかり

素抱

端居してまじまじと見る爪の土

暮津

端居してしみ・しわ・ほくろなど数ふ

暮津

端居して退職挨拶読み返す

暮津

端居していちばん風の来る処

暮津

●打水 水撒き 水を打つ

末つ子の水撒き上手水打てり

ねず

ばしやばしやとばしやりと水を打ち了る

ばら

水を撒く母がもつともせずしさう

宿好

店先に水打つ鰈の洋服屋

随笑

散水の葉蘭打つにやぼたぼたと

随笑

水撒いてやろうかほとぼり覚めぬ路地

寒暑

水打って木に葉に石に當たる音

寒暑

水打つて収まるものを収まらず

寒暑

打水の垣越ゆ水の一塊り

素抱

水打てば庭木喜ぶことしきり

暮津

土けむりばっばとと打水ぼたぼたと

暮津

打水のぼかぼか木の音草の音

暮津

打ち水に真顔もて蚊が刺しにくる

暮津

お隣りは元銀行員水を打つ

暮津

●髪洗ふ

髪洗ふボトル二つやさてどちら

素抱

脂っ気もうなき髪を水洗ひ

暮津

●シャワー

シャワー浴び貝殻ランタン灯の入りし

ねず

海水着踏みつけて浴ぶシャワーかな

さざ

肌伝ふシャワーに骨皮筋右衛門

鳩信

シャワー浴び吾が前よぎるアフロディテ

随笑

シャワー浴ぶといふより滴らす

随笑

シャワー浴ぶこんなところに雀斑かな

寒暑

●夏の夕 夏ゆふべ

白樺の一幹に倚る夏ゆふべ

もも

夏の夕虫の語らふ繁々夜話

素抱

●夏の夜 真夏夜

夏の夜の力道山にこゑ囁らし

さざ

おろしたてパジャマに夏の夜の更くる

鳩信

夏の夜の採尿採っても採ってもや

鳩信

真夏夜の黒鍵叩きつける指
フジコ・ヘミング

燕音

真夏夜の知らぬが仏不整脈

燕音

シンコペーション真夏夜刻むジャズののり

随笑

夏夜刻むリズムの権化ダリエンソ

素抱

夏の夜のうしろに廻る灯影かな

素抱

湯治人ボソボソ話しある夏夜

石鏡

真夏夜をチャンバラ好きの映画好き

石鏡

夏の夜の字幕に友情出演と

暮津

夏の夜の宴昭和のタップかな

暮津

●夜店

走り根を除けて夜店を組み始む

寒暑

夜店建ちけふの稼ぎを待つばかり

寒暑

夜店の材鉄パイプなど持ち込まれ

素抱

水舎から水借り夜店支度とよ

素抱

お願いを連発する子夜店の前

素抱

でっぷりした夜店のおばちゃん焼蕎麦焼く

暮津

夜店より孫を剥がすにくまれ口

暮津

●夜濯

惣領に生まれて夜濯ぎなど不得手

暮津

濯ぐべきものくらがりの一隅に

暮津

●パイヤ

目に入りて拳大なる青パイヤ

さざ

パイヤの青果押し合ひ^へ押し合ひて

さざ

パイヤへ銀の額をもてる朝

ばら

完熟のパイヤそれを賞味せん

鳩信

●パイナップル

パイナップル熟れきつてあるお仏壇

暮津

パイナップルえぐ味の針が舌を刺す

暮津

●バナナ

朝市ジャワの涼四句とくるみバナナの葉

ねず

ゆつたりと泊船を入れバナナの葉

ねず

南米産バナナは台湾バナナの横

ばら

大温室全開バナナに風入れて

ばら

老人の間食モンキーバナナかな

石鏡

棕櫚の花一寸バナナを思ひ出し

石鏡

吾が一つ覚えの臺灣バナナ買ふ
世は移り二束三文バナナかな

暮津 暮津

●マンゴー

マンゴーの見ゆる席にてグアバジュース

ばら

●メロン

海上につよき一星メロン冷ゆ

ねず

鳶の糞メロンの蔓を汚しけり

寒暑

●瓜

隼人瓜畑の先を通り雨

鳩信

変なこと覚えてゐるよ瓜の種

素抱

瓜の種そこと云はれて顔撫づる

暮津

●胡瓜きゅうり

曲がることついつい忘れ優胡瓜やさ

ばら

胡瓜皆すんなり基準値合格品

素抱

古漬胡瓜茶漬の候となりけり

暮津

一物のごとく胡瓜のぶるさがり

暮津

へへと云ひ葉下の胡瓜覗きゐる

暮津

朝もぎの「つ」の字「く」の字のへぼ胡瓜

暮津

へぼ胡瓜ヘルパーさんにお裾分け

暮津

古漬の胡瓜つまめる残暑かな

暮津

朝昼晩餉に出る古漬胡瓜かな

暮津

●胡瓜もみ

胡瓜揉みぼりぼりやりて昼餉了ふ

随笑

もう少し肥りたけれど胡瓜揉

暮津

●冷索麵ひやそうめん

けふの昼餉冷索麵に一致して

さざ

たとふれば男の美学冷索麵

燕音

冷索麵見た目も味の内也と

随笑

●アイステイ

とんとんと砂糖ステイックアイステイ

随笑

アイステイー茉莉春キリチユンハオ 毫試し飲み

寒暑

アイステイーストロウ吸うとき顔細め

寒暑

アイステイーぐびぐび飲んでまた寝る子

素抱

●麦茶 麦湯

文庫本伏せて麦湯を飲みにゆく

さざ

麦湯煮ることに精出す妻なりき

宿好

年金の出る齢となり鳩麦茶

宿好

麦湯飲み暑さ負けせぬ夫婦なり

宿好

鳩麦を加ふ麦湯の香なりけり

宿好

職引きて麦湯の湯気のやうな日々
暑にめげぬための麦湯を沸かしおく
冷麦茶ありて重宝しておりぬ

なまる身をしゃんと正せる冷麦茶

冷麦茶菓の如く頂ける

麦湯の滋味吾らが元氣の源よ

起きだして朝から麦湯沸かす妻

體に佳き麦湯毎朝沸かすなり

麦湯呑み午から体力消耗戦

やるせなし麦湯に氷片二つ入れ

一日了ふ壇の麦湯も底尽きて

煮立つたる麦湯さましてゐる背中

麦湯なまぬるくひとりでとる昼餉

●氷水 氷苺

氷水伊豆見屋と云ふ海の家

大仏をまづ先に見て氷水

兼六園松が根を見て氷水

片町に朝の氷を挽ける音

しなしなの氷掬へり岐阜城下

わたしには氷いちごの真っ赤なやつ

掻き鳴らし我が家自家製氷水

氷水落ち着くところに落ち着きぬ

がりがり^と妻が自家製氷水

新宿の地価折り込みの氷水

口染めてきんとと色の氷水

舌先が莫迦になるまで氷水

旅先の風の津軽の氷水

なまる身にしつかりせよと氷水

かうなれば開き直りて氷水

氷水搔き止め遠きもの見つめ

氷水真っ赤なやつに歯が浮いて

氷水舌の形が判りけり

●アイスクリーム

馬車道を歩きがてらのアイスクリン

アイスクリームこんもり小岩井農場製

蔵王山麓・酪農センター
蔵王見てアイスクリームてんこ盛り

●氷菓

水脈を見てフェリー船尾に氷菓舐む

其の上の病院船は氷菓いろ

宿好

随笑

随笑

随笑

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

ねず

さざ

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

鳩信

鳩信

燕音

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

暮津

暮津

暮津

暮津

ばら

随笑

随笑

素抱

寒暑

寒暑

寒暑

氷菓買えと孫の奥の手泣威し

素抱

●ラムネ

売店へ空のラムネの壇戻す

さざ

ひよつこりとラムネのおくび出で来たる

さざ

旧季題ラムネに明治の活気あり

鳩信

ラムネ玉ころりと仙石原晴れて

石鏡

ラムネのごと エムの三文字昇り来る

暮津

●ソーダ水

鎌倉近代美術館
モガ・モボ展一渡り見てソーダ水

鳩信

●サイダー

サイダーの大きなげつぶ暮めける

素抱

あやふやなサイダーの味雨籠り

素抱

炭酸水ハヤシライスの木村屋にて

石鏡

●ビール ビヤガーデン 麦酒 生ビール

何は扱置き一杯目のビール

もも

長かりし一日ビールの黄昏色

さざ

熱燗麦酒覚相半ばして

さざ

手術して一年経つかビール注ぐ

鳩信

生ビール内地の人よと云はれ酌む

燕音

ブリュッゲルのビア樽男ビール酌む

燕音

交し飲むビールの琥珀胃の琥珀

燕音

地ビールにステーキ木目の頭てる卓

燕音

東尋坊美しやビールの泡透けて

宿好

歩きつゝ地ビール「独歩」喇叭飲み

寒暑

黄昏れてくるまでビール我慢しぬ

寒暑

ビールますますうましアundesポテトも又

寒暑

SCANDIA
オーダーのビールさうだなハイネッケン

寒暑

操舵輪壁に懸けあるビアホール

寒暑

一日が了る麦酒の泡見つめ

寒暑

ビールの泡鼻の辺りでぶつぶつと

寒暑

もうそんな頃かや屋上ビアガーデン

素抱

ビール酌む礼文カスベエむしりつゝ

素抱

ビール乾し辺りの風がぬるくなる

素抱

こんな日はビールが佳けれ酔のものに

素抱

ひとり酌むビールを余す夕べかな

素抱

屋上の風を肴にビール酌む

素抱

ミズゴブの突きだしビールうまかりき

素抱

*ミズゴブはミズの実
ビヤガーデン雨の匂ひの木椅子引く

素抱

ビール酌む腹のくびれに眼を落とし

素抱

傍らにビールの空き缶かはたれどき
もう齡かビールのピッチあがらずよ
追憶を肴に老の麦酒乾す

ジヨッキ挙げわれらウルトラマン世代

●焼酎 泡盛

麦焼酎あほりあほりてカチャーシー
街ぼこりさりとながし烏龍ハイ

焼酎は薩摩で飲んであれ以来

泡盛に時間稼ぎをしてゐたる

●冷酒 冷酒 冷し酒

小原紫光さん逝く
酌み初めはきのふのごとし冷酒の匂

吃 逆のやうに冷酒注ぐなかれ

疎遠なることはともあれ冷し酒

冷し酒世迷い言など申すなよ

冷酒にして口当りよき岩手川

同慶の至りの冷酒注ぎ合へり

豆腐一丁あれば御の字冷やし酒

会津出の汝を帛ふに会津の冷酒

冷し酒お先走りもいところ

●水羊羹

午睡より覚めしところへ水羊羹

●心太

やつと手の空きし妻来て心太

家ぬちに風通る日や心太

すつとした顔になりたる心太

心太冷水もつて口直し

一樣に寿命は伸びて心太

●葛餅 葛練

葛餅に頁の耳を折りて立つ

葛練や山の肩より山覗き

家包の葛餅膝に池上線

●葛饅頭 葛桜

家ぬちに風を通して葛ざくら

葛饅頭お産に一人目二人目あり

了見を一通り聞き葛桜

葛饅頭何が喰いたきかと問はれ

●白玉

白玉や奥羽の旅はここに果て

白玉の甘味処を素通りす

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

素抱

素抱

素抱

素抱

ばら

ばら

ばら

随笑

随笑

寒暑

素抱

素抱

暮津

暮津

寒暑

寒暑

さざ

ばら

随笑

随笑

素抱

暮津

もも

ばら

随笑

随笑

随笑

素抱

暮津

暮津

寒暑

寒暑

暮津

暮津

白玉にこゑ生き返り「お勘定」

●蜜豆

日光山一巡りして蜜豆

鳩信

●麩 麦落雁 麦こがし はったい

落雁売茶つこさのんでいけといふ

宿好

妻との旅すぐにまとまる麦落雁

寒暑

その声価大いに疑問麦こがし

素抱

麦こがし老と片づけきれぬこと

暮津

●冷奴 奴豆腐

だいそれたことを言ひ出す冷奴

ばら

奴豆腐の上音頭とるのは花かつを

寒暑

冷奴地震の起こるメカニズム

素抱

大山の水が命の冷奴

素抱

冷奴堅牢箸をつけむとす

石鏡

隔たるものどんどん隔たり冷奴

暮津

冷奴へたに動かぬほうがよい

暮津

冷奴本心さらりと云ひ退けし

暮津

水切って醤油をかけて冷奴

暮津

ともかくも生きていりやこそ冷奴

暮津

冷奴の他に肴はもう一品

暮津

●鮓 鮓

柿の葉鮓ほおれば雨響くなり

ばら

●水飯 水飯

水飯の彼の日々母の語り草

素抱

●洗膾 洗膾

風通り鯉の洗膾を待つ座敷

燕音

●泥鱈 泥鱈

どぜう捕大佐渡曇り背に負うて

もも

日の下に田螺の大愚どぢやうの愚

ばら

泥鱈捕りザシキワラシも加はりて

宿好

温床を蹴って泥鱈の浮き上がる

随笑

うたたねのホトケドジョウの髻立派

寒暑

金北山けふは晴れたと田のどぜう

寒暑

面構え佐渡随一のどぜうとも

寒暑

沼底のどぜうの欠伸ならむ泡

素抱

溝萩の謔けさ破り泥鱈捕

暮津

●泥鱈鍋

やっとなって岩手時間のどぜう鍋

随笑

●扇風機

ピザ店の大扇風機頭上より
坊ちゃん湯
 道後の湯古りて天井扇風機

随笑

扇風機万遍なくといふことを

寒暑

扇風機の風が洩れなく来るやうに

寒暑

首振の一芸をもつ扇風機

素抱

扇風機悼みの風を送るなり

素抱

扇風機夜はぼつねんと座せるのみ

暮津

翅休め昭和の遺物扇風機

暮津

扇風機はたと止まりしまゝ晩鐘

暮津

●冷房 クーラー

病棟の深夜冷房音どすん

鳩信

冷房裡才家人と面会へ顛末記筆談に

鳩信

見舞客勝手に変へて冷房「強」

鳩信

かかりつけ心臓外科の冷房利く

鳩信

浮世絵太田記念美術館
 髑髏圖も弱冷房裡国芳展

燕音

白馬山麓星夜天然冷房裡

宿好

クーラーのああ埃臭さ試運転

随笑

冷房を入れず自然の風待ち派

随笑

がら空きの電車ひやすに弱冷房

寒暑

冷房のどすんと入る音の又

寒暑

入れては切りいたちごっこの部屋冷房
病院 大部屋

寒暑

冷気にも気迷ひのありお化け小屋

素抱

シネマ冷房空席冷えに冷えゐたり

暮津

●風鈴

予後よきを聞きし日よりの鉄風鈴

ねず

軒風鈴ついついこんなことまで書く

ばら

風鈴の広長舌を聞き遣るべし

宿好

仕事人間止めて風鈴吊る家に

宿好

風鈴の少し慌てゝ鳴りにけり

随笑

何しても中途半端に軒風鈴

随笑

煮えきらぬ風鈴の音とつぶやけり

随笑

風鈴の音色乱打に変わりけり

寒暑

風鈴の手持ち無沙汰といふ風情

寒暑

風鈴のただ働きの労おもふ

寒暑

グラビアの風鈴に耳すましけり

素抱

軒風鈴風のいふことかかぬなり

素抱

節電や掠れて鳴れる軒風鈴

素抱

風鈴の引き込む風の裡にをり

素抱

風鈴を鉦と聞く日のありにけり

素抱

南部鉄風鈴その名に羞じぬ音を
 素抱
 風鈴の空打ときに見せにけり
 素抱
 メリハリつく家居風鈴吊りてより
 石鏡
 風鈴の臨時の舌とてボール紙
 暮津
 ●釣忍 吊忍
 暮津
 亀型へ舟型吹かる釣忍
 ばら
当浴場の鏡広告なら(有)三宝社へ。係員参上
 鏡広告てふもの湯屋に吊忍
 暮津
 ●走馬燈
 随笑
 走馬燈僕の時代が遠くなる
 ●金魚 蘭鑄 獅子頭 金魚死す 金魚屋 出目金
 鳩信
 金魚掬ひ
 手を膝に金魚屋親爺目を配る
 寒暑
 金魚屋の親爺の顔も一とせぶり
 寒暑
 金魚屋の二軒張合ふ祭かな
 寒暑
 金魚屋のグッピーの眼が忘れられず
 素抱
 金魚屋の布袋草よく肥えてをり
 素抱
 金魚屋の親爺かたへに蚊遣香
 素抱
 金魚屋の親爺と金魚の共喰談
 素抱
 灯より濃き金魚を掬ふ夜宮かな
 ねず
 蘭鑄を揺りて昼の地震ありぬ
 ねず
 すぐ掬へさうな金魚をしくじれり
 ばら
 水ばかり掬ひて金魚何時掬ふ
 鳩信
 二夏を経たる金魚を死なしめき
 鳩信
 浮かぬ顔姉の金魚と見比べて
 随笑
 餌付きの金魚貰へり義弟より
 随笑
 水も入れ替へて金魚の新居の秋
 随笑
 雨の日の蘭鑄を見てリラックス
 寒暑
 水替えの金魚を洗面器に揺らし
 寒暑
 金魚の死因松笠病とや突き止めて
 寒暑
 家居とは金魚うるちよろする構図
 寒暑
 斯く肥えて押しも押されぬ獅子頭
 素抱
斑なるは猫のみならず金魚にも
 素抱
 江戸川区金魚ガイドを取り寄せて
 素抱
 金魚の名アズマニシキは四股名にて
 素抱
 梅雨どきの何處を見据えて金魚の目
 素抱
 鉢底に貰はれて来し金魚の眼
 素抱
 しばらくは貰はれ金魚の品定め
 素抱
 まだ鉢に馴れぬ金魚を寝しな見て
 素抱
 灯して鉢の金魚を散らしけり
 素抱

金魚など飼うて年金暮らしの身
金魚また死なせてしまふ金魚運
雨一日金魚が浮いて死にさうに

素抱
素抱
素抱

撒く餌に金魚なついて来たりけり
金魚餌^{習性}を貰ひ一礼後ずさり
簡単に生きる金魚を見本とす

素抱
素抱
素抱

鉢の金魚一つ一つの無分別
「金魚さんご飯ですよ」と餌やる孫
金魚の糞掬ひて待てる店開き

素抱
素抱
素抱

金魚掬ひおたまじゃくしも入り交り
掬はるゝ金魚は隅にかたまりて
掬ひたる出目金の黒抽んでぬ

素抱
素抱
素抱

新参の金魚が鉢を一巡り
ほぼ鉢の真ん中金魚の平常心
金魚の死母には伏して言はずにおく

素抱
素抱
素抱

十四で何んぼの和金売れゆきよし
閉じてまた開く金魚の口可愛^{めぐ}し
彫り露けく金魚奉納三百尾

石鏡
石鏡
石鏡

枯木攀ずあの猫金魚盗った猫
金魚掬ひまだ諦めぬ姉の意地
追ひ回し遂にデメキングットの子

石鏡
暮津
暮津

忘れがちそれでも金魚生きてゐる
布袋草残り金魚は死に絶えし
ニユースキヤスター金魚の如きおめめして

暮津
暮津
暮津

金魚飼ふといつまで言ひ張るわからんちん^{夜宮}
金魚掬ひ一回だけと念を押し
雨の日のペット屋金魚ぶかぶか浮く

暮津
暮津
暮津

●金魚玉 金魚鉢
水を張る手も逸りけり金魚鉢
雨の日の今日の句材は金魚鉢

宿好
素抱

金魚玉留守を任せたりけり
台風を生める地球と金魚玉
金魚玉如何に台風荒れやうと

素抱
素抱
素抱

●松葉牡丹
松葉牡丹咲かす家などんと失せ
汝が植えし松葉牡丹も喪に服す

随笑
暮津
暮津

●水遊び
松葉牡丹よく咲き未だ咲き猶咲かむ
べべ濡らす如雨露遊びもたけなはに

暮津
素抱

ありとあらゆる容器並べて水遊び
よその子とすぐうちとけて水遊び

●樟脳舟

樟脳舟すぐに元気をなくしけり
頭の裡に樟脳舟を走らしめ
ゆくゆくは樟脳舟の船長に

●水中花

云ふに窮してそこまで云ふか水中花
家居して大いに退屈水中花
水中花薬は処方箋に基づき

●花氷

駅長大曲の粹な計らひ花氷

●冷蔵庫

患者等大部屋のわれらが宝庫冷蔵庫
スペースはづらして作る冷蔵庫
冷蔵庫に西瓜入れあるぞと出掛け
男手の何でも突っ込む冷蔵庫
冷蔵庫内部は蛙の胎に似て
往生すぎうぎう詰の冷蔵庫
物匂ふ世が嘗てあり冷蔵庫

●盛夏

真夏 夏旺ん
厨房中華街へ徹る真夏の広東語

日を追うて旺んなる夏如何にせん
バスの旅盛夏の下北くんだりまで
恐山盛夏団体割引あり

旺孫んなる夏に生まれて嬰の名美雨みう

盛る夏妻は地力をつけつつあり
とんカツの旨き盛夏となりにつけり
夏旺ん紅茶はベルガモット入り

真夏夜の弦切り刻むカナロ・エン・パリ

真夏日のがちやんと癩に触る音

鼻つまみ鳴き継ぐ蟬の盛夏過ぐ

真夏の夢どうせみるなら酒池肉林

●朝曇

朝曇さきほど薬飲んだっけ
朝曇り気概ばかりが雄々しくて
朝曇り鈍く光れるドアのノブ
朝曇黄のうちかすむ女郎花
納豆のやっかいな糸朝ぐもり

素抱
石鏡

もも

寒暑

寒暑

暮津

暮津

暮津

素抱

鳩信

素抱

素抱

暮津

暮津

暮津

暮津

鳩信

随笑

随笑

随笑

素抱

素抱

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

暮津

朝曇妻の指さす食べこぼし

暮津

●日盛ひさかり 日の盛り

さざ

日の盛かすがひ 鎧 打たる仁王の脛

ばら

日の盛引つ張り出して片付けもの

燕音

京劇に呑み込まれをり日の盛り

燕音

日盛りの中軸打線火を噴きぬ

随笑

日盛りの老人割引利く映画

随笑

たまさかに聞く鳥の音も日の盛り

寒暑

日盛りをあれもこれもと欲張らず

寒暑

日盛りの出湯百沢温泉に血行よくなれり

寒暑

日盛りを煌めき渡る風のあり

寒暑

日盛りの波倒れんとする際の照り

素抱

検針のこんどは瓦斯や日の盛り

素抱

もう一軒寄つてゆかねば日の盛

暮津

くるぶしに透く静脈や日の盛

暮津

日盛りの音たて壊す菓子袋

暮津

日の盛りカレー粉の素炒る香のす

暮津

日盛りの町の湯に入りわたくし私なし

暮津

●炎昼

炎昼の時間の檻に入ることし

ばら

炎昼をへたばりをると誰が云ひし

鳩信

家中に玩具踏み場もなき炎昼

素抱

炎昼の玩具転がしある一間

素抱

炎ゆる昼人に二つの呼吸法

暮津

炎昼の古漬嘔めば澄みし音を

暮津

炎昼をふうふう言うてコップ拭き

暮津

●炎天 炎ゆる 炎暑 炎天下 真炎天

炎ゆる日のはじめのトマトもぎにけり

ねず

炎ゆる日をピツアヨーラの海鮮ピザピザ職人

随笑

炎ゆる日にふかすキャメルといふ苺

寒暑

炎ゆる日の昼餉昆布茶に焼きにぎり

暮津

ここに来て炎暑一掃通り雨

随笑

炎暑あま年金生活者に貯金下ろすは砂取りゲームに似

寒暑

炎天下三半規管に従ひて

素抱

とりあへずこちらの方へ炎天下

素抱

はらからと喪服を灼かる炎天下

素抱

炎天下へたに歩かぬ方がよい

暮津

ギブス嵌めそれでも煙草炎天下

暮津

虫瘤の意気壮んなり真炎天

宿好

心棒に狂ひを生ず真炎天
随笑

にんげんに祭り雀に真炎天
随笑

アツパーカット啖らひしごとき真炎天
素抱

真炎天雀憶せず足許へ
素抱

真炎天ピシと音して割けるもの
暮津

アイシャドウ濃く炎天の一帆追ふ
ねず

炎天見る武人埴輪の面持ちに
さざ

炎天へ妻着て出づるジャワ更紗
ばら

炎天を味方につけぬ勝投手
燕音

目をぎゅつとつむって開いて炎天へ
随笑

通院の炎天の道ゆく他なし
随笑

診察は東の間炎天また戻る
随笑

軽装がベスト炎天あるく旅
随笑

炎天をマリオネットのごと歩し来
随笑

作務衣の紐三つ目結うて炎天へ
随笑

炎天にもつてゆかれし大飛球
随笑

打って出るおもひ強かり炎天に
寒暑

ポケットの小銭ちやらちやら炎天へ
暮津

帽子などなくてもへつちやら炎天ゆく
暮津

炎天来し笑顔が家に上がり込む
暮津

炎天に思ひ浮かばぬもの名前
暮津

炎天をのこのこ訪ね来る御仁
暮津

郵便夫配り損ねて炎天くる
暮津

●油照

かんかん照り雀翔つさへ億劫な
宿好

巡礼の秩父はかんかん照りの道
宿好

屁理屈の罷り通らぬ油照
寒暑

ぎすぎすした物言ひになる油照
暮津

油照起死回生の一手欲し
暮津

●灼く
影ぐるみ灼かれ突立つ義民の碑
ねず

「当人渡世勝手次第」の島に灼け
ねず

大佐渡の竹灼き尽す日なりけり
もも

照りつける鉄砲鼻に葛灼けて
もも

白象のごとくけだかく雲灼けて
ばら

灼け紅旗へんぼん関羽生誕祭
鳩信

灼けほてる土にどすんとランディング
燕音

街道はこれから灼けむ露葎
宿好

海照りて鬼の手作り岩を灼く
随笑

石灼けて粉塵に帰す恐山 随笑
 ペンキ塗る青空がまだ灼けぬうち 随笑
 青空がまるごと灼けて玉砕日 随笑
 灼けてをりお岩木行きのバスダイヤ 寒暑
 彼の日のごと林火忌と権兵衛坂は灼けをりぬ 寒暑
 灼くる道ほじくり返しその上に 素抱
 天灼けぬ白さるすべり地に灼けぬ 素抱
 蟹さんの型押し遊び灼け砂に 素抱
 天が下灼けゐる墓誌に余白あり 素抱
 はらからと喪服を灼かる炎天下 素抱
 こんなにも灼けゐる墓石西林寺 素抱
 ラバウルに灼けし零戦見て船旅 石鏡
 やせつぼち灼ける海見て怯みけり 暮津
 灼かれても青葉が綺麗いたちはぜ 暮津
 灼ける景眼鏡の球を拭くばかり 暮津
 灼け木道一人歩めば一人の音 暮津
 ●昼寝 三尺寝 昼寝覚 午睡 暮津
 午睡して妻の背ひろびるとありぬ さざ
 午睡より覚めしところへ水羊羹 寒暑
 三尺寝濁世に用はなかりけり 鳩信
 読みかけの本のほとりに三尺寝 寒暑
 胸中に小さき虹懸け三尺寝 寒暑
 遣りつけぬ仕事たたりて三尺寝 素抱
 昼寝人かさと寝返りうちにけり もも
 昼寝より覚めてうまづらはぎの顔 ばら
 なさけなき顔のオオカミウオ昼寝 ばら
 昼寝せるゼブラ縞柄バジヤマかな 鳩信
 足のつぼ崑崙揉みてより昼寝 鳩信
 お昼寝の面付き直せ山の神 鳩信
 世之介の昼寝の涎ぬぐひやれ 鳩信
 昼寝して腕むつちり如来肌 燕音
風俗文選
 「豆腐ノ辯」読み漁りゐて昼寝かな 随笑
 蚊帳潜り出でしところで覚む昼寝 随笑
 父の日の昼寝セットのプレゼント 随笑
 大昼寝して沙悟浄の国にかな 随笑
 自墮落と譏られやうがまた昼寝 随笑
 昼寝して雲散霧消時の枷 寒暑
 読むことはここまでにしてあと昼寝 寒暑
 昼寝して飛脚行き交ふ東海道 寒暑
 昼寝せん頭のもやもやのとれるまで 寒暑

お昼寝の済みしばかりの目の坐る孫

昼寝して我は当家の山頭火

寒暑

昼寝して恐竜の影よぎる夢

寒暑

昼寝して手足遠のく心地せり

寒暑

昼寝より覚めてどこぞの馬の骨

寒暑

書き止めし句のたわい無し昼寝あと

素抱

赤ん坊の欠伸おしやぶりママ昼寝

素抱

団扇畳にほいと投げだし昼寝せり

暮津

昼寝してカタクチイワシの群るゝ中

暮津

昼寝より覚めてはてさて妻いづこ

暮津

午は昼寝に徹すと決めてやせつぼち

暮津

仕方なし暑さのがれの昼寝せり

暮津

昼寝して何がなんきん唐茄子かぼちや

暮津

昼寝覚椰子五六本突立てり

ねず

昼寝覚とろんと庭木ありにけり

ねず

藻を離る気泡のごとく昼寝覚

ねず

昼寝覚一陣の風つまさきに

ばら

古ぼけし昼の目あり昼寝覚

ばら

注射針ぬうつと太き昼寝覚

鳩信

麻酔覚昼寝覚ではなかりけり

鳩信

声の主一体誰や昼寝覚

鳩信

武具馬具と昼寝覚めたる人の言

随笑

泡沫のなほ立ち昇る昼寝覚

随笑

腸の水の山彦昼寝覚

随笑

昼寝覚六牙の白象降り佇ちて

随笑

昼寝覚やつと合点のゆく風情

寒暑

昼寝覚潰れしこゑを立て直す

寒暑

昼寝覚てのひらの斯くやはらかし

寒暑

昼寝覚出づる言葉のあぶくめく

寒暑

昼寝覚我翩翩とひるがへり

素抱

浪々の身をいまさらに昼寝覚

石鏡

昼寝覚五臓の位置が不確かだ

石鏡

昼寝覚辺り白みてそっけなし

暮津

昼寝覚檻褌が起き出す如くなり

暮津

雪村の鯉にまたがりぬし夢か

ばら

畳の目見遣り睡後の漂流感

寒暑

● 熱帯夜

熱帯夜一服つけんと起き出しぬ

寒暑

熱帯夜はと覚め夢のもうこりこり

石鏡

妻は鯰わたしは平目熱帯夜
二夜連続戦争ドラマ熱帯夜

暮津 暮津

●片蔭 片蔭道

片陰ゆくハローワークの呼び出し日
男つぷり上げて戻れり片陰道

宿好

随笑

ガヴァジューストラック島の片陰選り

随笑

国府津駅蓑ふかすに片陰無し

石鏡

●西日

カナディアン・ロッキーの西日赤シャツに

ばら

西日中バックホームの残像も

燕音

つらさうな顔して通る西日中

素抱

一切を放置してをり西日中

素抱

大西日覚悟のほどは出来てゐる

素抱

先急ぎ西日をさまる当てもなし

素抱

葬りて西日切り裂く中にをり

素抱

手庇に西日当れる鶴ヶ城

石鏡

莫迦となる錠や西日の硝子窓

暮津

大西日差すといふより照射せり

暮津

大西日蟬の今際いまはに立ち会へる

暮津

呼び出され西日の中へ出でゆけり

暮津

西日中空振り三振シャツアウト

暮津

●朝焼

東京の朝焼け入院一日目

鳩信

●夕焼 夕焼雲

長政のこゑぞ全天夕焼けて

ねず

夕焼空アラ―讚ふるこゑのぼる

ねず

夕映えを長びかせをりブラシの花

もも

誇張して夕焼空を彩れる

さざ

夕焼けに拳句の果ての寅次郎

ばら

神々の乗り込む船が夕焼けて

ばら

海上に夕焼屈み込むやうに

ばら

夕焼けて年増女のやうな舟

ばら

クルーズ船バンクーバーの夕焼け追ひ

ばら

夕焼けの終の光の水平線

燕音

斜里町はサーモン色の夕焼けに

燕音

夕焼けに顔を燃やして発句修羅

随笑

福島の桃の夕焼けどき長き

随笑

大夕焼そのところは割り切つて

素抱

八幡船ばはんせんさながら夕焼け雲南下

石鏡

口癖の「生きていりゃこそ」夕焼見て
海夕焼け未だ償い足らぬかに

暮津 暮津

●風死す

法難絵図風死す灘を正面に
風と云ふ風が死にゐる大蓮田
ベンガル虎風死す檻を往き来せり
風死すなか脛毛の薄きところかな
風死す中あらぬ方見て採血す

ねず ねず
もも
さざ
暮津 暮津 暮津

●大暑

石獣のひたすら座せる大暑とも
大暑の頭巡らすよいやさよいやさのさ
この大暑逃れんための一ねむり
気圧されてぐうの音も出ぬ大暑かな
頷いてばかり大暑の電話口
なまくらな鉢を使ふ大暑かな
あらためて大暑と聞きて太吐息
瘡蓋の黒くかさばる大暑かな
指の間残る大暑の薬粒
肉じゃがの鍋に漁る大暑の肉
考へて大暑を味方につける策
ものさしの目盛薄るゝ大暑かな
牛よりも鈍し大暑の身のこなし
大象の大暑の牙の薄光り
大暑には頭使はぬコップ拭き
硝子器の汚れ目につく大暑かな
膝鳴らし起ちて大暑の水をのむ

●三伏

三伏の激痛に腰挿まれし
三伏の肩を叩きて肩の音
三伏の我が身一つを持って余す

もも
ばら
鳩信

●極暑ごくしょ 酷暑こくしょ

詐欺に遭うやうや猛暑に出合へるは
頭のうへ酷暑の通り過ぎるを待つ
棒のごと瘦躯横たえ暑の極み
音を上ぐるものこのゑ聞く暑の極み
うだる日を背を押すやうに送りけり

寒暑 寒暑
寒暑
暮津 暮津 暮津 暮津
暮津

●旱ひでり 旱星

引とり手なき古本の旱山
家居とは無言なる行大旱

寒暑 寒暑
暮津 暮津

床擦れの我が身離れぬ早かな
 早星創は乾かすこと大事

暮津
 暮津

●夏枯

夏枯れの詩囊繕ふ術知らず
 夏枯れの糶場に口細鱗かな

寒暑
 寒暑

●雨乞

請雨経某々竜王づくめかな
 難陀竜王即断下し給ひけり

さざ

雨乞に獺おその真似事したりけり

ばら

●喜雨

喜雨雫カナリー椰子の刺にかな

ねず

●夏の雨

シマガラスヨトウ嘉せる夏の雨

もも

広重の人馬ふためく夏の雨

さざ

上高地降られに寄ったやうなもの

宿好

札所寺二番で降られ夏の雨

宿好

存分に泰山木の雫切る

随笑

夏の雨白黒映画の画面ぶれ

素抱

鳥海山の夏場の雨の桁外れ

石鏡

走り根を洗ひて夏の雨あがる

石鏡

はだける肋に韻く夏の雨

暮津

●蝉 にいにい蝉 啞蝉 熊蝉 油蝉 蝉捕り

蝉時雨 蝉の穴 朝蝉 夕蝉 夜蝉 落蝉 晩蝉

みんなん蝉

生ぬるき木椅子にいにい蝉聴けり

もも

にいにい蝉生ぬるく夜の明けにけり

ばら

まんじりともせざる夜の明けにいにい蝉

寒暑

たどたどしきにいにい蝉の節廻し

寒暑

煮え切らぬ鳴き方あれはいにい蝉

素抱

鳴く番がなき啞蝉とやがて知る

寒暑

啞蝉の羽音ばかりが大きくて

寒暑

バタバタと啞蝉あたり昏れしめき

暮津

熊蝉の熊坂長範啼き出すよ

寒暑

熊蝉の大捕物となりにけり

素抱

熊蝉が朝から納豆粘り出す

素抱

死してなほ肉付きのよき蝉の肩

ばら

死す蝉のままドンキホーテ面

ばら

青空がずり落ちて蝉転落死

寒暑

吾知らぬところで蝉のぼっくり死じに

素抱

方寸の景見て死ぬる蟬ならむ 素抱
 死してなほ蟬の目鼻の剛健に 暮津
 時国家湯殿にとほる蟬のこゑ ばら
 こゑも褪せ茶の出がらしのやうな蟬 随笑
 虚空会えの説法蟬のこゑ借りて 随笑
 先客にとまどひながら止まる蟬 寒暑
 高低を選ばず止まる蟬となんぬ 素抱
 蟬止まる所に拘る太郎杉 素抱
 蟬止まれりや何處でもよいといふ風情 暮津
 蟬声のおっと止まった誰か来た 暮津
 蟬飛んでなんだ近くにまた止まる 暮津
 土壇場の蟬の声音こわねと思ひけり 随笑
 肉声に肉声ぶつけ油蟬 随笑
 山林に蟬の蛮声おとろえず 素抱
森の石松 三十石道中
 お粗末を悪声ながら勤む蟬 暮津
 脱藩者めく蟬街道外れて飛ぶ 寒暑
 飛行法伝授させたき蟬のあり 寒暑
 見当をつけずに飛べる正に蟬 素抱
 電線揺れ地震の間飛ぶ蟬見たり 暮津
 地震に発つ蟬のおろおろ飛ぶばかり 暮津
 飛び方を蟬に手ほどきして遣りたし 暮津
 飛ぶ蟬のいづれも路頭に迷ふさま 暮津
 蟬飛ぶは粹な小政の旅姿 暮津
 蟬捕りの子を指図して通行人 寒暑
 蟬捕りを中断塾に出かける子 素抱
 虫籠提げ蟬など捕ってちようだいと 素抱
 僕捕りし蟬見て呉れと眸めの云へる 素抱
 蟬を捕る子のためにあり八幡さま 素抱
 捕虫網蟬を大地に押さえ付け 素抱
 ご近所での蟬捕上手肉屋の子 暮津
 捕虫網ぬうつと蟬の背後より 暮津
 界限の木々に目配り蟬捕る子 暮津
 蟬捕りの極意は逃げ来る蟬捕れと 暮津
 いとたやすく手捕らる蟬となり果てしか 暮津
 唐突に簾の蟬の鳴き出せり もも
 また鳴きて蟬は古きに泥むごとと さざ
 鳴き納む蟬ヂリヂリとヂリとヂと ばら
 じり貧といふ鳴き方をせる蟬も 燕音
 まだ鳴かぬ蟬のどうしていることやら 随笑
 蟬わつと鳴き出す前しておくこと 随笑

蟬時雨ときにはうねることのあり 暮津
 蟬時雨やぼ用一つ出来にけり 暮津
 蟬時雨晩年押しつけられてをり 暮津
 つじつまの合ふ句は陳腐蟬しぐれ 暮津
 蟬しぐれ痴呆の母と禅問答 暮津
 赤恥をさらす訳には蟬しぐれ 暮津
 蟬穴の瞑さに辺り暮れて来ぬ ばら
 蟬の穴程の寂しさなどといふ 燕音
 蟬の穴ホーチンミンも斯く潜み 宿好
 蟬の穴探し切りなしもう止めた 暮津
 蟬の穴同士近くて愛しけれ 暮津
 蟬の穴ここに集中する訳は 暮津
 そこらぢゆうとり散らかして蟬音の中 随笑
 蟬音断ち鞞彦の釈迦説法図 随笑
 竜口寺蟬音の念ねん彼観音力 随笑
 夕飯の支度そろそろ蟬音減る 随笑
 蟬音絶ゆ木が悄然と佇つてをり 寒暑
 晩酌や蟬音遠のくばかりなり 寒暑
 蟬音沁む洗濯ものを取り込めり 素抱
 野分あと斯く減る蟬音拍子抜け 素抱
 盆近み蟬音そろそろ空いて来し 素抱
 上ずつて蟬音何とも幼かり 暮津
 水のみにつく昼蟬音の締め無き 暮津
 蟬音いま空中楼閣なせりけり 暮津
 ヒリヒリと蟬音あたりが暮れてくる 暮津
 減る蟬音聞いて山妻厨に立つ 暮津
 昏れて来て蟬音半減又半減 暮津
 夕方の風が出てきて減る蟬音 暮津
 朝蟬のじゆげむじゆげむに起き出して 暮津
 行く方に朝蟬の杜わつとあり 暮津
 心経の皮切りに似て朝の蟬 暮津
 朝蟬の頭越しなる喧し屋 ばら
 自宅にて養生始まる朝の蟬 鳩信
 朝蟬が啼かぬとある日来たりけり 鳩信
 朝蟬のいやに啼くとき啼かぬとき 鳩信
 鼻声に何か言ひたげ朝の蟬 鳩信
 昨日より暑くなるぞと朝の蟬 燕音
 朝の蟬うんざりする日が始まりぬ 随笑
 朝蟬の誦経の尻切れとんぼかな 随笑
 百蟬せんの息ひそめけり朝の杜 随笑

処暑処暑と今朝方の蟬さう鳴くも 随笑
 朝蟬のしゃんしゃん手拍子足拍子 寒暑
 朝蟬の寝言まがひのこゑ一つ 素抱
 ぶるぶると鳴かぬ朝蟬木を替えて 暮津
 朝蟬の鳴き出すまでの樹のしじま 暮津
 もう既にこゑの森なす朝の蟬 暮津
 朝の蟬潮のごとく退くときあり 暮津
 朝蟬のいつとはなしに一潮流 暮津
 朝蟬の勢ひたてるが元氣の素 暮津
 朝蟬に鼓舞され我流体操す 暮津
 朝の蟬聞き流しをり床の中 暮津
 晩蟬のこゑ押つ被せ押つ被せ 随笑
 晩蟬の明けても暮れてもこの一手 随笑
 晩蟬のきのふともなく音を絶てり 素抱
 木斛に晩蟬こゑをたてずにゐる 暮津
 盲蟬ぶつかる音にまどろまず 鳩信
 ごによごによと云ひて夜蟬の紋切型 随笑
 劍客シラノさながら夜蟬の呟くは 随笑
 濡縁で聞きぬ夜蟬の腹話術 素抱
 夜の蟬も十七文字も紋切り型 素抱
 檻樓のごと寝ねて夜蟬の短鳴き 暮津
 手短に鳴ける夜蟬の空元氣 暮津
 幾つもや月夜を蟬の魂昇天 暮津
 夜蟬啼くは後悔に似て忸怩たり 暮津
 社好き瀬戸明神の油蟬 鳩信
 割り込んでここぞと鳴ける油蟬 燕音
 まだ鳴かずどうしたことか油蟬 随笑
 大施主のこゑを代弁油蟬 随笑
 油蟬一列縦隊なせる幹 素抱
 滾る暑の底の方より油蟬 暮津
 飛び下手の頭でつかち油蟬 暮津
 着艦に似たり油蟬の止まり際 暮津
 町中の墓地の空飛ぶ油蟬 暮津
 塔婆より塔婆へ飛んで油蟬 暮津
 夕蟬にやうやう見ゆる鳴き疲れ 燕音
 夕蟬の一段落や飯にせん 素抱
 落蟬のころりと参る姿かな 随笑
 通り雨長らふ蟬に落蟬に 随笑
 落蟬のごとく仰向きぐうたら寝 随笑
 落蟬にいつもの空があり真青 寒暑

落蟬の落ち方むろん頭から 寒暑
 落蟬のまた此処にももの思ひかな 素抱
 落蟬をヘッドライトのよぎり消ゆ 素抱
 落蟬は有為の奥山けふ越えて 素抱
 落蟬の一つは玄関灯真下 素抱
 落蟬の足蹴にされて一、二転 素抱
 落蟬の翅ヒクヒクとききほどまで 暮津
 落蟬のほとり過ぎゆく勤め人 暮津
 いと白き落蟬の腹秋立ちぬ ねず
 明神のうしろ日当る竹に蟬 ねず
 ずんどうの櫓に蟬の取紐る かも
 わめく蟬塚原問答聴くごとし かも
妙宣寺
 抽んづる赤松蟬を集めをり かも
 行きあたりばつたりの蟬吾を掴む かも
 寝返りを打ちつゝ蟬のかすれごゑ かも
 おぼつかなくなりし日差しに愚図る蟬 かも
 拾ひあげ蟬の茶羽根を広げみる さざ
 みんなの持論力説するごとし ばら
 結局は一日蟬を聞く羽目に 鳩信
 ご当地の赤蝦夷蟬といふを聴く 燕音
 堂縁に一つ載せあり蟬骸 宿好
 秩父事件蜂起の鐘を蟬抱き 宿好
 わめき散らす蟬あり我に鼓膜あり 随笑
 割れ鐘の蟬の独壇場に入る 随笑
 颱風の合間蛮勇ふるふ蟬 随笑
 灯を取りにきたぞと網戸の外の蟬 随笑
蟬の法華経 二十一 句
 不受不施と日蓮坊を慕ふ蟬 随笑
良医の喩
 顛倒せる蟬の太つちよ一凡夫 随笑
 方便の一つに蟬の小便も 随笑
 ご法話に蟬随喜して霊鷲山 随笑
 けふも又蟬の頭陀行檜の木に 随笑
ほつしほん
 法師品称えて蟬の生まる也 随笑
 森深く蟬八百の眼睦きて 随笑
げん
 羽化の蟬地涌の菩薩の化身にて 随笑
じゆ
 身は空に放ちて蟬の糞掃衣 随笑
ふんぞうえ
 定年は如何にと蟬の頭陀行者 随笑
 成仏を明日に蟬の富楼那の弁 随笑
ふるな
 蟬は木に登る六根清浄と 随笑
 喚く蟬二百億劫経て成佛 随笑
こつ
 念力をキリキリ蟬の大神通 随笑
だいじんずう

蝉は今普賢の行説く大団円 随笑
 昏倒の蝉を箒に懸けにけり 随笑
 健気にも蝉が櫂に取り付く図 随笑
 蝉の瑠璃ちらつと脳裏掠めけり 随笑
 青天の霹靂とはこれ蝉の尿しと 寒暑
 みんなは途中で止めてしまひけり 寒暑
 戦艦の一部のごとき蝉の胸 寒暑
 蝉の胸部時計の内部に酷似して 寒暑
 玻璃の蝉腹部まじまじ見られをり 寒暑
 この木さしづめ蝉の井戸端会議の木 寒暑
 正調といふべき蝉に耳を藉し 寒暑
 ご近所を騒がす蝉も一頓挫 寒暑
 引継もいと簡単に楠の蝉 寒暑
 お騒がせしましたと蝉木を離れ 寒暑
 遠き蝉さらに遠くを風吹けり 寒暑
 公園の広場を蝉のまつしぐら 寒暑
 あらぬこと考えて蝉、音の鈍る 寒暑
 哲人の風貌しかと蝉の面づ 寒暑
 行きずりの松から転倒したる蝉 寒暑
三門博
 リズムよく蝉の唄入り観音経 寒暑
ピス 手術痕
 捻子埋すむ胸の手ざはり遠き蝉 寒暑
 いたづらに力んでみせる蝉は野暮 寒暑
 夕栄えも手伝ひ蝉の愁嘆場 寒暑
 意気上がらぬ世嘆き蝉もこんな調子 寒暑
 万歳をして落つ蝉の手をそのまゝ 寒暑
 驚き逃ぐ蝉の尿浴び「まあいいか」 寒暑
また元の木に舞ひ戻る蝉のあり
孫に示す
 この通り蝉は素手もて掴むもの 寒暑
 せみとらせてくださいと子の門に立つ 寒暑
 榊大樹果たして蝉はここに居る 寒暑
 蝉逃ぐるぶうんと熱き風起たせ 寒暑
 夕立にこりやたまらんと馳せる蝉 寒暑
 出し殻のやうな蝉の音絞りをり 寒暑
 孫おうむ返しに「せみさんしんでいる」 寒暑
 蝉の尿ならぬお山の通り雨 素抱
 虫籠に蝉の御報謝ありにけり 素抱
 空蝉も蝉も入れられ一つ籠 素抱
 みんなに云ひ負かされてをることし 素抱
 かうなれば蝉の殲滅計りたし 素抱
 口はさむ余地なき蝉の天下なり 素抱

野次馬のやうに馳せゆく蝉見たり 素抱
 肅と蝉発たする天下一の鐘 素抱
 台風の眼の中にゐて蝉憶せず 素抱
 ざら紙に蝉の一句を書留めん 素抱
 蝉手づまりそんな感じのする夕べ 素抱
 武士の風貌なるも蝉非力 素抱
 放浪の木を替え蝉の山頭火 素抱
 木に縋る蝉のまたもやドジを踏む 素抱
 蝉の音の納まるを待ち門火焚 素抱
 頭を寄す子ら一人が蝉を押さえ付け 素抱
 いま正に蝉の天下といふべかり 素抱
 建前の柱に蝉も招ばれけり 素抱
 その羽音てつきり蝉と思ひけり 素抱
 大夕立など何糞の一油蝉 素抱
 コンビニに蝉と蝉がら持ち込む子 暮津
 百蝉せんの中の一蝉たち優る 暮津
 杜の蝉勝手に幕を引きにけり 暮津
 早起きを励ます蝉も減りにけり 暮津
 凡百の蝉に占められ官幣社 暮津
 強靱な蝉の肋を仰ぎ見て 暮津
 方向がちがふと羽根を返す蝉 暮津
 こりやあびつくり郵便受より蝉発てり 暮津
 行き遇ひて蝉も驚く吾も驚く 暮津
 おし黙りころり転倒せる蝉も 暮津
 大西日蝉いまはの今際に立ち会へる 暮津
 蝉何かに突き当たたる音露けしや 暮津
 ●空蝉うつせみ 蝉殻
 空蝉の貫き通す初一念 鳩信
 ドロの木より空蝉剥がしやりにけり 燕音
 空蝉の興はや失せて掌に残る 素抱
 空蝉とEODG机上に昼蘭けぬ 素抱
 空蝉を机上に置いて散歩果つ 素抱
 空蝉のやがて忘らる机の上 素抱
 空蝉も蝉も入れられ一つ籠 素抱
 空蝉の爪先少し焦げてをり 素抱
 腑分け図のごとく詳しく空蝉描く 素抱
 空蝉のかけらも入るらむ長寿薬 素抱
 空蝉の鋼の脚のどこしなへ 素抱
 空蝉の宝庫と巡る八幡宮 素抱
 空蝉の背に刻めるは梵字とも 素抱

空蟬は白雨飛沫を浴びてをり

石鏡

空蟬をおっかなびつくり抓む指

石鏡

空蟬の一つひつつく常夜燈

暮津

空蟬の風雨に目鼻古びざる

暮津

コンビニに蟬と蟬がら持ち込む子

暮津

蟬殻のそこで時間が止まりをり

暮津

蟬殻を剥がし欄干歩まする

暮津

賽銭箱のぼり詰めたる蟬殻あり

暮津

蟬殻を終には壊し始めし子

暮津

虫籠の中はと見れば蟬の殻

暮津

● 捕虫網 ほちゅうあみ

捕虫網持つてほつつき歩きけり

鳩信

垣内にずんと伸びくる捕虫網

寒暑

草原の端っこ押え捕虫網

素抱

捕虫網押えたままで大きな声

素抱

捕虫網戻りはママがうち担ぎ

素抱

捕虫網破れかぶれに振る始末

素抱

捕虫網継ぎ足す棒が見あたらす

素抱

捕虫網産土の森一漁り

素抱

捕虫網蟬を大地に押さえ付け

素抱

捕虫網出会ひ頭の蝶逃がす

石鏡

捕虫網ぬうつと蟬の背後より

暮津

捕虫網かなぐり捨てて鳩追ふ子

暮津

● 跣 はだし 素足 跣足

山荘の板敷素足よろこべり

さざ

素足吹く風あり本を読み継げり

ばら

素手素足ずいぶんすつきりした色に

鳩信

干潟踏む素足の白くさみしけれ

燕音

素足となり踏んづけてみぬオカヒジキ

燕音

ぶくぶくの素足むんずと赤子立つ

宿好

ロシア船員跣足であるくタロ芋島

寒暑

父の日の素足すうすうしてゐたり

素抱

混浴の女岩踏む跣の音

素抱

● 裸 素裸 赤裸

真裸にて辿り着きたる正念場

鳩信

手術着に所詮孤りとなる裸

鳩信

グラビア版カレンダーあり裸婦と薔薇

宿好

素裸を朝からたのしむ誕生日

随笑

診察のそばかす裸裏返す

随笑

朝刊をさてと開きて丸裸
老體に近づく裸にも産毛
素裸に電極五箇所心電図

湯上がりのすつぽんぽんは佳かりけり
宅配の人にあはてる裸かな
居間塞ぐ裸寝妻に咎められ

タオル一枚はおる裸やバツ悪し
混浴の飄ひょうと上ひょうがれる赤裸

玉すだれ裸叩いてゐる男

急雨来る韻き裸にはおるもの

虫刺され酸の如きを裸身に

はらと落つ抜け毛のあたる裸かな

驚破地震と咄嗟に裸にはおるもの

賢愚邪正貧福貴賤皆裸

けんぐじやしょうひんぐきせん
はだかみ裸体の前を押さえて「御免なさい」

*浮世風呂

銭湯の徳を数えて赤裸

裸形はだかにて湯浴び孔子も権助も

●日焼

日焼せし腕ものいふホームラン

先生に日焼顔見す診察日

ビーチバレーの日焼けピチピチガールかな

日焼けして二等船室雑魚寝組

着てみせて旅装のきまる日焼妻

実家にて油売りくる日焼妻

鼻っ柱少し日焼けて水を遣る

●夏の海

ヨット馳せグレープフルーツ色の海

オホーツクブルーに夏の海無辺

水戸 涸沼 那珂湊
ぎしぎしの枯れさま海は荒れ模様

二時間と何んぼの夏の佐渡航路

門前照りつけて男鹿の瘤鯛揚がる海

だるさうに横たはりある夏の海

●夏潮

夏潮の煌めき寄する国府津駅

●船遊び 遊船 遊び舟

遊覧船やませの底を這ひ廻り

岩牡蠣の岩場の向う遊び舟

●山ア

ヨット馳せグレープフルーツ色の海

随笑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

燕音

随笑

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

暮津

暮津

ばら

燕音

随笑

寒暑

寒暑

暮津

石鏡

随笑

随笑

寒暑

ばら

お披露目のごとくヨットの快走す
 燈摺あぶすりのヨット馳すなり薔薇の窓

ペデュキュアの女ヨットに乗り込めり

檳榔樹ヨットスクール開校中

大南風途絶えてへなへなヨットの帆

ヨット操る男サルビア色のシャツ

美学にして幾何学ヨットの帆走は

●波乗り サーフアー

波のりのこゑスコールのあがる海

サーファーの臀部凜々しく南風吹く中

サーファーに勝手の違ふ風が吹き

●プール

船の旅プールではしやぎ夜はダンス

●泳ぎ 水泳

われ泳ぐ下にテーブルサンゴ礁

水族館ドレッシー・ハナミノカサゴ水掻けり

乙なもの大海馬の立ち泳ぎ

皮下脂肪揺りてセイウチ泳ぐなり

水泳の足の切り傷オキシフル

のうのうと髯のオジサン泳ぎけり

ひょうきん者ねずみ泳ぎのネズミフグ

力泳のその名もウケグチイトウダイ

定年の一年前の立泳ぎ

シンクロナイズドスイミング咲かす四肢の花

ダイビング黄膚台頭アジア勢

平泳ぎのあとは出鱈目犬っ掻き

ずいぶんと泳いだつもり本人は

女川おながわの優しき波に泳ぎけり

大川に溺れて真水のみしこと

●箱眼鏡

ふなばたに箱眼鏡のみ新しや

水視見みずきりよう漁い木り地り新りしき箱眼鏡

●海水浴 浮輪 浮袋 潮浴しほあび

五能線浜で手を振る浮輪の子

浮袋並べ干しある月の庭

ポカやってもう追ひつけぬ浮輪かな

金沢八景 乙艦海岸砂の城築きし王子潮浴びに

浮輪の子くらげの拾いごっこして

はしやぐこと尻をぷりぷり浮輪の子

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

暮津

ねず

宿好

暮津

随笑

ねず

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

鳩信

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

暮津

石鏡

石鏡

石鏡

随笑

寒暑

随笑

寒暑

素抱

素抱

素抱

花火の傘爛れかつをのえぼしかな
花火の煙ゆらゆらかつおのゑぼしめく

燕音
随笑

●海鞘ほや

海鞘食べて午睡六腑の匂ふらむ
海鞘好きの客と覚えてゐて呉れし

ねず
ねず

海鞘の酔が利きてぴくんと長まつげ

ばら

旅北山崎をして陸中海岸海鞘どころ

随笑

旅のプランじよんがらを聞き海鞘突つつき

寒暑

海鞘料る妻は手馴れたものである

石鏡

商店街海鞘を横目にうち過ぎぬ

暮津

匂を貶し海鞘に談論風発す

暮津

●人手ひとで 海星

刺網にかかるとがらくた蜘蛛人手

燕音

漁減りて海星ばかりが殖ゆる海

石鏡

海星水族館見字子に手触るとき心臓どつきんこ

暮津

●夏牡蠣 岩牡蠣

岩牡蠣の岩場の向う遊び舟

寒暑

プランクトン食うて夏牡蠣太る海

石鏡

雨しぶく露店に夏牡蠣注文す

石鏡

鳥海山の溶岩らばめく夏牡蠣二口に

石鏡

夏牡蠣は鳥海山もたらす雨の味

石鏡

旅人の喉に納まる夏場の牡蠣

石鏡

岩牡蠣と云へば象潟合歓咲くころ

暮津

旅は寄り道夏牡蠣育つ日本海

暮津

●船虫

舟虫のしよぼしよぼ歩き雨に釣る

もも

船虫散る活路開けるごとくなり

さざ

舟蟲の吾に続けと云ふごとし

ばら

舟蟲の這ひ廻る岩減りもせず

ばら

舟虫や怪傑ゾロを彷彿と

ばら

舟虫の鬚をそよろの翁ぶり

ばら

老舟虫時化占ひの髭を立て

ばら

舟虫の俗気さらなる俗気呼ぶ

鳩信

舟虫に危害加えることなんぞ

燕音

舟虫の梁山泊を覗きけり

燕音

海峡の舟虫にして黒光り

随笑

時化するぞと牢名主めく舟虫が

随笑

突堤に舟虫しゃしゃり出て祭

素抱

船蟲に持ち場持ち場のあるごとし

石鏡

●海女

腕っこき海女の揚げたる大あわび

ばら

●天草取

風一夜天草浮いて生口島

寒暑

天草採序でに引きさし鶏冠のり

素抱

●荒布

雁引くや荒布色なる島の子ら

ねず

オホーツク渚を滑りをる荒布

燕音

●搦布

島人、シツタカ(貝)のこを搦布つ食いと云えば
笹茄の搦布つ喰ひに手が伸びて

もも

シードラゴン搦布林を散策す

ばら

●昆布刈る 昆布

夏大間崎の露昆布干し場の留石に

随笑

値の張って然り利尻の厚昆布

素抱

島土産利尻昆布のピンからキリ

素抱

晩酌に子持ち昆布かこりやいや

暮津

●浜木綿 浜おもと

浜おもと踏みしむる砂ほこほこと

もも

浜木綿のざんばら髪は幡随院

素抱

浜木綿はタカラジェンヌの長まつげ

素抱

●避暑 銷夏

避暑客のたてこんでくる小海線

さざ

伊豆へ避暑今は山中今は浜

鳩信

カンバスに避暑地の風も描き込めり

燕音

避暑便りペイネのポストカードかな

燕音

風通るテラスにてピザ避暑家族

燕音

皮剥の小さき鱈振る鎖夏法

随笑

ナツメロに夫婦してのる銷夏法

寒暑

その上は華族熱海の避暑地お宮の松

寒暑

●夏休み

武甲山どんと構えて夏休

宿好

ラジオ体操老人にこそ夏休

寒暑

夏休テレビひねればドキンちゃん

素抱

●帰省 帰省子

帰省せり蠅取りボン吊る家に

ねず

帰省便り玄海灘に友釣ると

ねず

帰省子の弥次郎兵衛めく手土産に

ねず

自転車で駅まで運ぶ帰省の荷

素抱

●夏期講習会 夏期講座

午からは頭も霞む夏期講座
夏期講座先生三角定規もち

燕音 暮津

●土用

ほれほれと土用雀を翔たせゆく
よい匂ひして来ぬ土用の焼にぎり
古漬に顔を顰める土用かな
木鉢に木渋かたまる土用かな
ただ魂消土用の地震のなすままに

随笑 随笑 素抱 素抱 暮津

●暑中見舞

夏見舞

ヤツプより届き主治医の夏見舞

随笑

小山梧雨兄
飲み仲間直腸断てりと夏見舞

随笑

絵葉書に貝のイラスト夏見舞

暮津

退職の挨拶兼ねて夏見舞

暮津

●河童忌

河童忌の横須賀海軍カレー食ぶ
河童忌の肋撫つれば風の起つ

宿好

●虫干

曝書 書を曝す

素抱

背の崩る温知叢書を曝しけり

もも

古地図
曝されて龍の取り巻く秋津島

もも

虫干しの開山語録と韓櫃と

燕音

曝書などせんとて一念発起の日

宿好

●紙魚

雲母虫

月明の紙魚と遊びて師の忌くる

ねず

公理より定理導く雲母虫

さざ

曼荼羅圖喰うとは紙魚のふてえ奴

ばら

同一の紙魚の仕業でありにけり

ばら

死者の書は畏多しと紙魚云うも

燕音

紙魚を詠むころ世過ぎの足しにせん

随笑

宸筆もものは紙魚の確信犯

随笑

ルーペもて紙魚の歯なんぞ見てみまし

素抱

古書即賣案内元は紙魚之會

石鏡

●梅干

気づかひの梅干茶漬忝なし

素抱

●土用浪

荒凡夫土用太郎の波起こす
土用波波の裏より手が拳り
土用浪一つ大きく勇魚いさないろ
土用浪うねりそこねるものあらず
海めくれ出して生まるる土用浪

ばら 鳩信 燕音 燕音 燕音 燕音

土用浪暫し泡沫漂はせ

寒暑

●土用鰻 鰻の日

照り返し強し鰻の日の舗道

ねず

上背ある次男と土用鰻食ぶ

さざ

溪流に土用鰻を活かしをり

随笑

飯の量注文つけて鰻の日

暮津

鰻喰ふ客を横目に鰻喰ふ

暮津

●暑氣払ひ

暑氣払やるかと妻は探り入れ

暮津

水たつぷり飲みて眠氣と暑氣払はむ

暮津

●梅酒

あれこれと梅酒造りの空壇出す

もも

飲み頃と持ち出してくる梅酒瓶

素抱

●水中り

水中りの洗禮を受くジヨクジャカルタ

素抱

その嘔吐鮮烈にして水中り

素抱

水中りコーラン聞いて遙かな目

暮津

●夏瘦 夏負け 夏ばて

夏バテの我が身思へば酔豚など

寒暑

夏バテなし漫画を糧の青年は

寒暑

羊羹が何故か効きさう夏バテに

素抱

指圧教室夏バテの筋掴まれて

素抱

夏バテに百合根など佳し煮てお呉れ

暮津

夏瘦せてブラキオサウルス仰ぎけり

ねず

夏瘦せてハダカイワシのご面相

燕音

昼餉共にして夏瘦の弟よ

燕音

夏瘦て花王石鹸また逃す

随笑

夏瘦の腕ただ組みて無為無策

寒暑

夏瘦せて術後回想拌み太郎の湯浴みなり

素抱

夏瘦は風体のみに非らざるよ

素抱

夏瘦せて妻の指圧の稽古台

素抱

夏瘦の肋凹ませハーモニカ

暮津

こほろぎの腿に引け目や夏瘦せて

暮津

夏瘦を挽回せよと通り雨

暮津

夏負けもせず来て蝦のチリソース

寒暑

快眠を心がけ夏へこたれず

随笑

ぶりかえす暑に打負けて易きにつく

寒暑

●寝冷

寝冷腹抱へて槽の狼魚

燕音

●夏風邪

キリストの鼻かむやうに夏の風邪
 夏風邪にうだうだ咳きてお恥ずかし
 夏風邪の眼を茫々の海へ投ぐ
 夏風邪引く面目なしと云ふ他なく
 抜け気味の夏風邪妻よ無理するな
 夏風邪に昇れる月のうすぼんやり

●日射病

若き日の出張
 日射病倒れし其処はジャカルタで

●線香花火 手花火

手花火の煙くる部屋にシート敷く
 手花火に興じぬしこゑ引つ込みぬ
 手花火の音の奇天烈奇天烈と
 後かたづけやうやく終り手花火す
妻
 線香花火じゅじゅじゅじゅと牡丹より
 線香花火踊る小松葉大松葉
 線香花火終の柳は公家のひげ
 線香花火一本領けてもらひけり

●花火 揚花火 遠花火

音に凝る花火もありてどよもせる
 花火音立て込む家に銜して
 どんじりに控えて音も凄花火
 花火にも音の味付ありにけり
 花火果て闇抱え込む雄物川
 花火果つその大空のみみず腫れ
 花火果つ五體叩きて砂払ふ
 ナトリウム色の花火に顔染めて
 中華風彩色花火あがりけり
 ポカポカと追打かけて昼花火
 しけた音残して揚がる昼花火
 一工夫ありそな花火揚がりけり
 パリパリと揚がりズドンと花火了ふ
 意気込みも新たに花火揚がりけり
 ストトンとさきがけ花火揚がりけり
 揚花花表六玉もあがりけり
 不景気を一蹴せんと揚花火
 揚花火どんと武甲山の肩を突き
 揚花火連打ドンブスドンブスと
 長たらしき呼び名の花火揚がりけり

ばら

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

素抱

もも

ばら

鳩信

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

さざ

宿好

寒暑

素抱

燕音

暮津

暮津

もも

もも

ばら

ばら

暮津

もも

もも

さざ

ばら

ばら

鳩信

宿好

随笑

石鏡

コココーラにおくび連発独立祭

●閻魔参

内職洋裁にて戦後を乗り切りし母曰く
黄泉にては閻魔の禰の丈詰めん

鳩信

●青柿

青柿の尻辺に廻る雨滴かな

燕音

青柿の雨滴ぴしゃりと浴びにけり

寒暑

ちっぽけな青柿にしてお恥ずかし

素抱

青柿や党首張り上ぐ第一声

暮津

●青林檎

青りんご青田青風岩木山

寒暑

青りんご葉隠れお岩木雲隠れ

寒暑

お岩木の日照雨を弾く青りんご

寒暑

お岩木に雲又かかる青りんご

寒暑

青りんご薄光りせるおでこかな

寒暑

●青胡桃

青胡桃この木とことん優しき木

燕音

●胡麻の花

湧く雲も胡麻の花いろ奥秩父

宿好

●苧

苧麻知らず東海道の一筋も

随笑

●滑莧

糸屑が絡まってゐるすべりひゆ

素抱

すべりひゆ繁茂なにぶん古き庭

石鏡

●苔茂る

老梅の老梅たる枝苔生す枝

燕音

光苔見ゆかと問へば「それとなく」

燕音

滝不動苔むすなまくら剣かな

素抱

木道よりもうせん苔に目を落とす

石鏡

●瓢の花

ひょうたんの花等類を好みけり

ばら

●夕顔 夜顔

坐をすこしずらせば見ゆる夕顔棚

ねず

家に入る前に夕顔垣間見て

もも

夕顔を天蛾ぶると発ちにけり

もも

夜顔や老人ばかり殖ゆる世に

鳩信

夕顔とおわら流しの宵迎ふ

宿好

夕顔に胡弓漂ひ初めにけり

宿好

夕顔の大首役者めく花よ

素抱

火星大接近妙なる夕顔に

素抱

少し手に余る花なり夜顔は
夕顔の妙なる闇を蛾の羽打ち
咲き登る夜顔脇の月を見て
夜顔と夕月闇を同じうす
夕顔の雨にでれつと五つ程

● 萋の花

萋の花とまどひがちに雨降れる

さざ

● 烏瓜の花

からす瓜真白き花の怯え咲き
烏瓜の花の縮みて昨日あり
烏瓜咲く辺の興味津々と
烏瓜不思議や不思議霞み咲き
烏瓜開花頗る珍にして
煙る花曇み込みけり烏瓜
烏瓜の花煙幕を張りにけり
一夜経て悄然からすうりの花
音曲に合はせて咲くや烏瓜

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

随笑

寒暑

素抱

石鏡

石鏡

● 萋

むくひ

夏萋埃立たせて雨の来る
宇津谷の萋叩きの雨上る
街道はこれから灼けむ露萋
夏萋人を葬ることに馴れ
夏萋掃出窓の高さほど
小用を足しに萋の真ただ中

鳩信

燕音

宿好

素抱

素抱

石鏡

● 布袋草

布袋草きゅつとくびれるところかな
札所寺大鉢に生ふ布袋草
布袋草程の明るき世を欲れり
金魚屋の布袋草よく肥えてをり
尻腐れ座りづめなる布袋草
布袋草表紙に掲ぐ一俳誌
布袋草残り金魚は死に絶えし

燕音

宿好

随笑

素抱

素抱

暮津

暮津

● 睡蓮

むくひ

未草

睡蓮の四方の水面ぴらぴらす
未草目白押しとはこんな様
日に熱す一千枚の未草
生かされて生くる御教え未草
未草そこ離れむとして眩暈

鳩信

寒暑

寒暑

暮津

暮津

雨降ればもうめちやめちやに未草
後楽園池に蓋する未草

暮津
暮津

●蓮

風と云ふ風が死にゐる大蓮田

もも

蓮の葉のさつと開いて風通す

さざ

蓮に雨素通りといふ通り方

さざ

莫迦でかきオオオニハスの葉の置き処

さざ

金輪際動かぬ蓮の間の水

ばら

蓮開きジャポニズム展開催中

ばら

蓮咲くとイスパニア語にて言ふならむ

ばら

蓮の葉の瑕つけ合うて風の中

ばら

うつくつと蓮の奥より誰がこゑす

鳩信

蓮葉の大きなやつがはたと昏れ

鳩信

蓮弁のグラデーションを愉しめり

鳩信

蓮田べり亀の子ぶかぶかやつてをり

随笑

息つけり蓮華数顆のかほる中

随笑

蓮葉をめぐりにかかる池の風

随笑

煽られて蓮の棒茎ごつつんこ

随笑

蓮葉の大きな葉を揺り大き風

随笑

娑婆といふ紅蓮を堰きて網戸あり

寒暑

蓮田の彼方竿灯点り初め

寒暑

齢取ったかな蓮根はやや苦手

寒暑

蓮見たくなりて上野の池之端

素抱

紅蓮上野の山の負け戦

素抱

こなたよりあなたへ渡る蓮の風

素抱

青蓮の器量の程も斯くなりて

素抱

水破る音のみしりと蓮の奥

素抱

丁寧に生きて蓮のこちら側

暮津

●茗荷の子 茗荷汁

庭石に二つ茗荷の忘れ物

随笑

順ぐりにお迎えが来てめうが汁

寒暑

草むしりして来て茗荷の出来云へり

素抱

めうが採る数の目当ては特になく

素抱

茗荷汁気兼ねなき友いつか減り

素抱

四つほど採れたるめうが妻に見す

暮津

茗荷採ここに無ければそこだうか

暮津

一膳で足る餉茗荷の古漬に

暮津

●新語

新語を水に濯げば紅はしる

随笑

● 干瓢乾す かんべう

ふるさとの雲の匂ひのかんぴよう着く

ねず

● キャベツ かんらん

夏キャベツ盛り沢山に勝烈庵

素抱

甘藍の苗に寄せやる土ふんだん

暮津

● トマト 蕃茄 ミニトマト

炎ゆる日のはじめのトマトもぎにけり

ねず

ピザ・パスタ何にでも合ふミニトマト

寒暑

釜利谷のをばさんの売る地のトマト

素抱

蕃茄に塩振りすぎとこゑありにけり

素抱

トマトに振る塩目分量一寸過ぎし

素抱

トマト好き故にピザ好き紅茶好き

素抱

蕃茹に塩たつぷり昭和生まれなる

石鏡

生り方も見てのとほりのミニトマト

暮津

手を変へてトマトの料理朝昼晩

暮津

それなりに数つけにけりミニトマト

暮津

プチトマト朝夕の膳賑はせり

暮津

● 茄子 茄子汁 なすび

焼茄子の直火強めぬ盆厨

寒暑

焼茄子にまづまづ食のすすむなり

素抱

茄子を焼く熱気厨に籠りたる

素抱

茄子の他仏は水を糧とせり

素抱

丸茄子朝露弾く梵天丸

素抱

水茄子の笹売り朝市たて込めり

素抱

茄子汁にすこし早めの夕餉とる

素抱

混濁の一日なりしなすび汁

素抱

茄子汁の味噌の香残暑の香なりけり

素抱

茄子汁や妻のきりもり四十年

素抱

煮冷ましの茄子汁底なし沼めける

石鏡

茶屋の婆勸む民田茄子抓む みんでん

石鏡

賀茂なすの素の味秋はもうそこまで

石鏡

夜は明けて茄子炯々と納骨日

暮津

● 若牛蒡 新牛蒡

朝市の牛蒡せり出す寺門脇

ねず

腸の為よるしき牛蒡召し上がれ 妻の二へる

随笑

新牛蒡どちの雑談牛蒡語で

随笑

● 鳴焼 しんやうやい

鳴焼のわが家の味は極甘め

素抱

● 茄子漬

漬茄子と佐渡米に食すすむなり

もも

ほんとうに軽く一膳漬茄子

ばら

茄子漬時が薬と養生す

随笑

●蘇鉄の花 花蘇鉄

花蘇鉄黒船の世は嘸やさぞ

随笑

●仙人掌

仙人掌に侏儒の咲かせる黄の小花

さざ

●ユッカ

沖波のときに牙だち花ユッカ

もも

●ダリヤ ポンポンドリア

風采のあがらぬ花よポンポンドリア

ばら

その頃の花ではポンポンドリアかな

ばら

男鹿温泉ポンポンドリアが咲いてをり

寒暑

ぽんぽんだりあ昔は良かった能く遊んだ

素抱

ポンポンと咲いてポンポンドリヤとぞ

暮津

●向日葵 実向日葵

ひまわりの一哲人にゆき遇へる

暮津

ひまわりの火の性 天より煩たれて

暮津

ひまわりの彼方夕栄え未帰還機

暮津

ひまわりの一つ目小僧月下に聳つ

暮津

ひまわりの根を見ておもふ保水力

暮津

大向日葵竜顔を拝すごと

もも

向日葵の茎は棍棒火山灰大地

さざ

向日葵の百の素顔と阿蘇連山

鳩信

向日葵は海を見据えぬ巨匠の瞳

随笑

訓示垂る大向日葵と思ひけり

随笑

向日葵の王道青すすきの霸道

随笑

昔日の海向日葵の瞳の中に

寒暑

向日葵の花より茎のヴァイタリテイ

寒暑

向日葵の謹厳実直背を正し

素抱

向日葵の意気軒昂に接す朝

暮津

長雨がたたり向日葵ひよろひよろ立

暮津

向日葵に劣らぬ笑顔のヘルパーさん

暮津

向日葵の育ち盛りの大きな葉

暮津

向日葵のぐでんと水を欲しがるさま

暮津

向日葵を一呑みにして険しき雨

暮津

向日葵の見通せぬもの無きごとし

暮津

向日葵や真にひとりとおもへるとき

暮津

向日葵や還らぬものを猶おもひ

暮津

向日葵の司どる海荒れむとす
 痩せ向日葵勤王志士にさも似たり
 防諜と殺戮向日葵知っている

向日葵の種子皆窮屈さうにして
 実向日葵故人の笑ひかけるごと

その目つき何暗示せる実ひまわり
 実向日葵ブラックホール引き込みて
 実ひまわり典座のごとく佇つ夕べ

実ひまわり今は落ち着き土の性

実ひまわりそっくり返ってしまはぬか

憲兵のごとき眼をして実向日葵

ひよろりと長け一寸猫背の実ひまわり

小机城周辺
 ひまわりを十本植うは晴れがまし

●風蘭

行きずりの御婦人

長生きをしさう風蘭見て曰く

風蘭を見上ぐる人のうしろに佇つ

風蘭はそらそらあそこ木瘤の下

風蘭を見て来し夕べ雲呑食ぶ

●柳蘭

坊平

高原ゴルフコース敷地のヤナギラン

●凌霄花 のうぜんくわ
 のうぜん

のうぜんの方へ顔向け母眠る

焼香の列遅々としてのうぜん花

のうぜんの盛りや防火講座聴く

のうぜんの散らかつてゐる伝心寺

目に見えぬ雨にのうぜん昂れり

通院の途次のうぜんの宙ぶらりん

のうぜんのあたりかまはず散りにけり

のうぜんの妄想を詩の糧とせよ

のうぜんの繰出し吹ける青き空

若死とおもふのうぜん散るにつけ

のうぜんの落花を蟻の離れざる

大難の降り懸かるごとのうぜん花

のうぜんの似たり寄つたり花なだれ

具原益軒「花譜」
 のうぜんは脳破る花そを嗅ぐな

挫折にもいろいろありてのうぜん花

のうぜんの宙ぶらりんや糞暑し

のうぜんの焚き付けられてゐるごとし

のうぜん花掃きしばかりの地を汚し

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

鳩信

鳩信

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

ねず

ねず

ねず

ねず

ねず

もも

もも

もも

もも

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

鳩信

鳩信

宿好

随笑

寒暑

のうぜん花どうやらかうやら風が出て
 のうぜんの散りやうさしづめ振袖火事
 料亭ののうぜん下火となりにけり

のうぜんになまぐさき風起ちにけり

のうぜんの散乱あたり昏れしめず

のうぜん地に燃え移らむとしてゐたり

雨の日もお祭りさわぎ凌霄花

凌霄花テレックテンと咲き昇り

凌霄花散るに興じてはめ外す

ふしだらな部類に入る凌霄花

漢名は目赫爛れし夕空に

*のうぜんに漢名あり もつかく

●ラベンダー

富良野産ラベンダー入り線香とよ

●ペチュニア

液肥与ふペチュニア・サフィニア・ロベリアと

ペチュニアは雨にからきし駄目な花

ずぶ濡れに雨のペチュニヤぺったんこ

●百日草

百日草今どきこんな花咲かせ

●玫瑰 はまなす

はまなすも目つむる砂州の砂つかぜ

はまなすに空気小流れつくりけり

ハマナスに別名あれば

テラスのさき露のジャパニーズ・ローズかな

北辺の日を余すなくハマナスに

はまなすの花と実の数実が勝ちて

●破れ傘

孫ほどの破れ傘容れ破れ傘

この葉形がたちたしかに破れ傘の花

破れ傘大分しつかりしてきたる

やぶれ傘油じむ日を浴びゐたり

岨道に六方踏むややぶれ傘

やぶれ傘傘さしきればつまらなき

やぶれ傘臺が立つとはこんなもの

達谷の岩屋へやぶれ傘の道

やつとこさ地べたを出でて破れ傘

破れ傘生ふ裏山の道愛す

破れ傘こころ辺りとおもふ辺に

破れ傘控え目といふ出立ちに

破れ傘ことし見損じなかりけり

寒暑

素抱

素抱

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

鳩信

素抱

暮津

暮津

暮津

素抱

燕音

燕音

燕音

燕音

素抱

もも

もも

さざ

ばら

宿好

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

寒暑

寒暑

寒暑

含羞の一つの容破れ傘

物の怪の何時離れたる破れ傘

●竹煮草

竹煮草雨あたふたと駆け抜けて

箱根路の何だ坂こんな坂竹煮草

●宝鐸草の花

人のあと宝鐸草の花こづく

木洩れ日に群れを待める宝鐸草

宝鐸草森の冥さに眼が馴れて

山道の一層冥く宝鐸草

●浦島草

浦島草釣糸垂れてむかう向き

浦島草蕭白好みの画材にて

糠雨に凄味を増しぬ浦島草

●えぞにう

エゾニユウアマニユウみんな似ていてどれがどれ

アマニユウと断ずるこゑも自信なげ

入日急大傘持の太茎に

エゾニユウのポンポン咲ける岬なり

棒立ちの大傘持に沖時化て

アマニユウとアマニユウの間雪溪見ゆ

アマニユウにピカツとザザツと降るわいな

●岩煙草

岩たばこ宿創業は明治なり

雨の日の葉影うつすら岩たばこ

●綿菅

ワタスゲの雨吸ひ過ぎて絮の惰気

●風露草

ハクサンフウロガレ場の風に煽られて

極めつけタカネグンナイフウロかな

風露草雨すれすれに落ち来たる

●薄雪草

一目見て薄雪草と断じけり

真上より天つ日ハツポウウスユキノウ

●岩鏡

トレッキングシューズの先の岩鏡

話声ぴたりと止まり岩鏡

●駒草

霧濡れの小石を抛り処駒草は

寒暑

寒暑

鳩信

随笑

さざ

随笑

寒暑

暮津

さざ

鳩信

寒暑

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

宿好

随笑

寒暑

石鏡

宿好

石鏡

暮津

さざ

宿好

宿好

石鏡

ばら

駒草を囲ふ鎖の霧霽

素抱

駒草や岩場岩場の岩の彩

暮津

●ちんぐるま

溪寄りの脇道閉鎖チングルマ

宿好

チングルマ好みの風が吹いてをり

宿好

雪溪の舌の先なるチングルマ

宿好

●梅鉢草

ウメバチソウ我等向き合ひ昼餉とる

宿好

八幡平夏の名残の梅鉢草

寒暑

●さるをがせ

乗鞍の霧を糧としさるをがせ

素抱

●独活の花

山出しのししうどの花盛りなり

鳩信

独活の花無駄と思へば全て無駄

燕音

ししうどの花を霧来て閉ざすところ

随笑

ししうどの花のほとりに捨て蒸気

石鏡

●灸花

へくそかづら

石鏡

灸花やたらむしゃくしゃする日なり

ばら

灸花けふの暑さの如何ばかり

ばら

灸花いつまで続くこんなこと

燕音

灸花七番寺へ喘ぎ坂

宿好

民宿の裏手のへくそかづらかな

随笑

灸花今はかうして日を送る

随笑

灸花首を傾げて見る人も

寒暑

疎まるゝことに馴れつこ灸花

寒暑

へくそかづら凡打ばかりの草野球

素抱

過ぐるこゑへくそかづらと言ひ捨てに

石鏡

へくそかづら駄花のみかは実もあるぞ

石鏡

へくそかづら攀ずる金網灼けてをり

暮津

●射干

射干や家を毀ちて家が建ち

素抱

銭湯の跡地射干咲いてをり

素抱

射干咲きあたりジメジメして来たる

暮津

●芭蕉の花

味はふて珍うづの芭蕉堂守のすすめればの花の蜜

燕音

●麻

卸かけ麻のしちめんどくさい肌着

暮津

●帚木

帚草

暮津

帚草雨に優しさ加はれり

暮津

日と雨のたまもの色づく箒草

●夏萩

夏萩のすんなり風を受け入れて

夏萩のはらほろひれと葉の靡き

夏萩や地べたを伝ひ風起てり

●沙羅の花 夏椿

一つ咲きうしろ向きなる夏つばき

沙羅咲いて且つ散る根本中堂前

●百日紅 さるすべり 紫薇 ひやくしつこう 百日紅

散りそめて白さるすべり水の上

さるすべり咲きつゝ散れる空まさを

天灼けぬ白さるすべり地に灼けぬ

此処天界白さるすべり散るところ

漢名おんの音の締りのよくて紫薇

紫薇花下に極楽おもへとや

寺々の中でも出色この紫薇は

畳廊百日紅に突きあたる

出色の百日紅に汗退けり

極楽寺百日紅の夢見時

さほどにはあかくはならぬ百日紅

つきあたり百日紅の極め付け

境内のこれは別格百日紅

百日紅盛りなりいざ極楽寺

札所寺百日紅に汗退けり

百日紅どうれと山門潜りけり

百日紅詩は独断と心得て

採血の血止する間の百日紅

閻魔序正門脇の百日紅

百日紅皮の剥落続きをり

太幹にしてなかなかの百日紅

百日紅花より幹の至福相

赤裸々に生きていりやこそ百日紅

百日紅愛染明王然として

紅にもう一盛り百日紅

お寺さま咲かする百日紅が見え

●海紅豆 かいこうづ

綱繕ふ手許けだるく海紅豆

タツクルに走者潰さる海紅豆

手放しに海が招くよ海紅豆

暮津

さざ

素抱

素抱

さざ

素抱

ねず

随笑

素抱

暮津

鳩信

随笑

暮津

もも

もも

さざ

さざ

さざ

ばら

燕音

宿好

宿好

寒暑

素抱

素抱

素抱

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

もも

もも

随笑

●茉莉花 まつりくわ ジャスミン

ジャスミンの芬々馬鹿に蒸す日かな
石鏡
茉莉花に皆鼻持つてゆきにけり
石鏡
つきあひにも距離といふものジャスミン茶
暮津

●朝鮮朝顔 ダチュラ エンゼルトランペット

曼陀羅華

むつとして妻良の明け方ダチュラ咲く
もも
ダチュラ咲き当地至つて温暖な
さざ
花ダチュラ押さばばふ鳴るならむ
ばら
下田港きだちしようせんあさがお咲く
鳩信
アトリエを包む潮騒花ダチュラ
宿好
ぶらさがり咲きが得手なり花ダチュラ
宿好
徒に大きなエンゼルトランペット
随笑
曙いろダチュラ大きく開けゴマ
寒暑
仲違ひダチュラがそっぽ向いてゐる
素抱
曼陀羅華咲けば豆州の妻良おもふ
素抱
エンゼルトランペット教会の庭に垂れ
石鏡
月光にダチュラ怪人佇つごとし
暮津
花ダチュラだらんとびちよびちよ雨の路地
暮津
終末の喇叭を吹けり花ダチュラ
暮津

●ハイビスカス 仏桑花

すぐあがる雨と知りをりハイビスカス
ねず
ハイビスカス花の真中の突起物
鳩信
バンザイのこゑこびりつく仏桑花
暮津
仏桑花葉巻めく花落しけり
暮津

●夕菅

夕菅の霧を素早く技けし色
さざ
英名は洒落ゐて夕菅デイ・リリー
暮津
ユウスゲ 軽井沢にて
暮津
当地ではアサマキスゲと呼ばれもし
暮津

●日光黄菅 ぜんていか 禅庭花

日光黄菅霧の向うの霧を見て
さざ
取組る蝶もニッコウキスゲ色
さざ
鐵路伸ぶ限り群落ゼンテイカ
燕音
だまなして霧の走れりゼンテイカ
燕音
先生が引率ニッコウキスゲの径
随笑
お弁当ニッコウキスゲに向き合ひて
石鏡
霧湧かす花別名をゼンテイカ
石鏡

●夏落葉

寺男朝な手古摺る夏落葉

さざ

楊梅の朱ヶ夏落葉方円に

素抱

高齢のもう起きて掃く夏落葉

暮津

石畳かつんと打ちて夏落葉

暮津

●病葉わくらば

雨あとの磴打ち泰山木病葉

もも

蜘蛛の囿に病葉二、三ちらし掛け

素抱

病葉落つ鋼はがねの音を立て、落つ

素抱

病葉の散るがきつかけ降り出せり

暮津

●夏深し

はりきり草しほたれ草や夏深み

さざ

●秋近し 秋隣

手にとる本手にとらぬ本秋隣

寒暑

図書館の中庭に秋待てる樹々

石鏡

賀茂なすの素の味秋はもうそこまで

石鏡

もう了る花と秋待ちみたる花

暮津

●夜の秋

草稿に手を置くことも夜の秋

ねず

元素記号子の諳んずる夜の秋

ねず

枿酒に口とがらする夜の秋

ねず

トランプのジャック振向く夜の秋

ばら

月琴の音締めきりきり夜の秋

ばら

エッセイのとば口に佇つ夜の秋

鳩信

寝返れば傷口ひくと夜の秋

鳩信

自転車漕いで灯点す夜の秋

素抱

夜の秋赤鉛筆が見当たらず

素抱

風通る所に身を置く夜の秋

素抱

歳時記の表紙藍鉄夜の秋

素抱

佳き風の四通八達夜の秋

素抱

路地をゆく蹠音つぶさに夜の秋

素抱

寝酒などともとやらぬ夜の秋

素抱

犯人を妻見破れり夜の秋

石鏡

夜の秋湯屋の板間の節くろぐる

暮津

ぺらぺらの着慣れしパジャマ夜の秋

暮津

●晩夏

牢名主めく患者あて部屋晩夏

鳩信

余分なことばかり考えあて晩夏

寒暑

人はローン蝸牛は殻を負ひ晩夏

素抱

山間を雲ゆく晩夏の孫六湯

素抱

晩夏はや煮詰め過ぎたる豆腐汁

素抱

遠くを見るゴリラに園の晩夏かな
亭々と晩夏を送るホルトの木

紹興酒晩夏の酔ひのよるべなく

象牙の箸浸しあるなり晩夏の水

ぞりぞりと晩夏の魚の鱗剥ぐ

模糊として口の開け閉て晩夏の鯉

晩夏をたとへて云へば座礁船

船体のごとく傾き始む夏

晩夏の地震母は二階の揺れを言ふ

晩夏なる机にやたらもの積まれ

回覧板届けに晩夏の腰痛持

●虫送り

むずむずと田虫送りの火のすすむ

松明の高きいっぽん虫送り

虫送り嶺に張りつく二集落

虫送り竹竿に鉦ぶるさげて

あきあかね先導つとむ虫送り

虫送り五色のノロセ持ち寄りて

盆がらを追ひやる掛け声山里に

山風*盆がらは農作物の病害虫のことに「ようづの虫も送るヨイ」

ゆく雲に「はやりの虫も送るヨイ」

盆がらにあらざる秋津里に殖え

虫送り撮りにケーブルテレビ局

村の衆手拭い首に虫送り

●原爆忌

がぶがぶとピカドンの日の真水のむ

眼も耳も広島原爆忌の忌も皆風化

その昔リトルボーイの降り来しそら

エノラ・ゲイぶーんと飛び来て止め刺す

●夏の果

夏送るころにアディオス・パンパ・ミア

樟脳の気落ちして夏逝けるなり

あさがおに夏も了りの尿の音

八幡平夏の名残の梅鉢草

牢乎として櫛一夏逝かせけり

夏惜しむ豆腐とうぼうじやんに絡め豆板醬

アルミ銭つまみ退けおく夏の果

車前草の穂の逞しく夏送る

ぼろぼろの夏果ての鳶岩鼻に

素抱

素抱

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

ばら

ばら

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

暮津

暮津

暮津

暮津

さざ

さざ

随笑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

暮津

夏果ての隠れ煙草を患者らは

暮津

■八月

●秋 秋色

石炭紀の模型蜻蛉に秋が来て

もも

城垣の上より呼べる秋の鯉

もも

カルテの横秋の心臓模型かな

さざ

カナディアン・ロッキーの秋見に來たり

ばら

秋秋と尾鰭を付けて啼く蟬も

鳩信

横須賀へ舟賃五十銭の秋

鳩信

心音も至極尋常明日は秋

鳩信

有袋類おばさん秋の日向路へ

鳩信

店頭の本に目利きの要る秋ぞ

鳩信

日本の秋一見の遠眼鏡

燕音

上野の山人出の秋となりゐたり

燕音

秋はひねもす「鼻峯高慢男」読む

燕音

ランチタイムは秋のシシリア風ピザに

宿好

ピザの秋アイダホスペシャル平らげて

宿好

達人なる足腰秋のあめんぼう

随笑

湯畑の秋やとてつもなき湯量

随笑

水も入れ替へて金魚の新居の秋

随笑

定年は鰐の退屈地でゆく秋

随笑

酷評に怯まぬ錦秋球子富士

随笑

エゾオヤマリンドウ秋を告ぐ峠

寒暑

あららぎの泰然栃の自若の秋

寒暑

おのづから秋となりぬる爪楊枝

素抱

秋そこに横臥屈葬人骨に

素抱

地に降りて人に動じぬ秋の鳶

素抱

無聊とて秋はかまけるもの多し

素抱

小心の秋の雀も餌貰ひに

素抱

雀あぐ秋の小さな土埃

素抱

乗鞍の秋磧より林道より

素抱

上高地ピジターセンター木々の秋

素抱

上高地帝国ホテル樅の秋

素抱

公園の秋トビアリーコンテスト

素抱

トビアリー秋のイルカのジャンピング

素抱

擦過音身ほとりに殖え秋半ば

素抱

秋色のこれより亘る街並木

石鏡

その殻も薄手に秋のかたつむり

石鏡

沓履きて古刹の秋のあめんぼう

石鏡

日に爆ぜるものの音して牧の秋
（做蛇笏（誰彼もあらず一天自尊の秋 飯田蛇笏）
 標本としての脳天自尊の秋

正視して絶景秋の人體展

筆ささと芋銭のスケッチ秋の生りもの

杉玉に喜多方の秋紛れなし
（大和川北方風土館）

商秋の白虎堂とは菓子舗なり

秋の遠足車内さながら鶏舎のごと

秋も半ばの東京より来て智恵子のそら

波間に空瓶ぶかり川崎洋死す秋

団体用乗降口ある駅の秋

錦繡の秋パノラマの鳩ノ巣荘

そこそこの句が出来秋のたんぼ道

●立秋 秋立つ 秋に入る 秋来る 今朝の秋

立秋の影のごと出て帆の一つ

秋立つと丸々肥えしモモズメ

木斛の葉つばびかりと秋がくる

人間に雲脂といふもの秋立ちて

忍性の赤鼻に秋立ちにけり
（金澤文庫）

立秋と云はれて空の海のいろ

ヤブニツケイ大樹自尊の秋立てり

秋来るといふ目を鹿のしたりけり

それとなく秋は来にけりポタアジュに

堰とどろ山に秋くること早き

目もさやに秋は来にけり牛蒡の葉

起きあがり小法師ゆらゆら立てる秋

立秋の掛け声ばかり臍のゴミ

一步づゝ秋来る空とおもひけり

いと白き落蟬の腹秋立ちぬ

今朝秋の踝汚し戻りけり

今朝秋のモーニングコーヒーブラックで

秋来たり木々の陰翳礼讃す

●八月

土崎

八月のフェリー向かふは苦小牧

麻婆豆腐食うべ八月乗り切らん
（まあぼうじょうふ）

八月の負ふてゐるもの何々ぞ

物故者一名俳誌八月号末尾

●文月

（かみづき）

文月の投句句数揃えに雨の日當て

仏壇より借りくる文月のチャッカマン

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

ねず

もも

さざ

ばら

ばら

鳩信

鳩信

燕音

随笑

素抱

素抱

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

暮津

寒暑

素抱

●初秋 秋の初め

トカトンと秋も始めの家造り

素抱

●ねぶた ねぶた 倭武多 立倭武多

扇燈籠おぎしろう

金魚ねぶた 鏡絵

ねぶたの件でおたづねしますと電話口

寒暑

眼をぱちくりさせて見送る武者倭武多

寒暑

ヤーヤドー倭武多は鬼火掻き立てて

寒暑

しずしずと見返り天女遠退ける

寒暑

扇燈籠おぎしろうの熱気にゆらぐ立見客

寒暑

五所川原おもしろの面白女武者ねぶた

寒暑

天を衝く北の守護神立倭武多

寒暑

立倭武多近づけば子をてんぐるま

寒暑

ねぶた山唄を見る津軽民謡酒場にて

寒暑

旅人も声を限りのヤーヤドウ

寒暑

津軽公御紋牡丹の炎のねぶた

寒暑

見送り絵小雪舞はせて雪をんな

寒暑

鏡絵の関羽だんびら振りかざし

寒暑

溜息を誘ふ鏡絵九紋竜

寒暑

見送り絵常磐御前の被りもの

寒暑

鏡絵に武者の素っ首十あまり

寒暑

鏡絵のこの透明は何處よりくる

寒暑

鏡絵の女美丈夫太刀かざし

寒暑

鏡絵の大蛇は青く鬼赤く

寒暑

跨り打つ倭武多太鼓の撥の反り

寒暑

子供ねぶたヤーヤドウのこゑ絞る

寒暑

扇燈籠おぎしろうの紅蓮見送り立ちん棒

寒暑

ちびっ子の手に手に金魚ねぶた提げ

寒暑

雲漢へ飛ばされさうに大太鼓

寒暑

白眼の張飛関羽の武者倭武多

寒暑

婆と孫やんやのピカチュウねぶたかな

寒暑

うつしみの顔へねぶたの灯の透けぬ

寒暑

旅をして夜毎のねぶたねぶたかな

寒暑

立倭武多ゴジラのごとくやってくる

暮津

●竿燈祭 竿燈

羽後の空深く竿燈黄金咲き

寒暑

竿燈の灯の川絶えずゆらぎゐて

寒暑

点秋田り初むコンビニの灯と竿燈と

寒暑

蓮田の彼方竿燈点り初め

寒暑

竿燈の油断大敵ふいの風

寒暑

竿灯は大きく宙を一泳ぎ

寒暑

竿の癖よく読み竿灯あやつれる

寒暑

自衛隊日の丸竿灯ゆうらゆら

寒暑

どうだいと云はんばかりの大竿灯

寒暑

ところてん製造元の竿灯なり

寒暑

竿灯の一艘一艘すすむごと

寒暑

竿灯の均衡破れ走り出す

寒暑

竿灯のどう傾くかスリリング

寒暑

転げ竿灯目なしと起ち上る

寒暑

●七夕 願の糸 星祭

七夕の夜風にあたるギブス組

鳩信

包帯に患部包みて星祭

鳩信

七夕竹搭乗手続カウンターに

燕音

七夕の水平飛行に入る空路

燕音

七夕の空を降り来て女満別

燕音

生まれくる子のごとに尽く願の糸

素抱

大方は妻の筆跡願の糸

素抱

●天の川 銀河

甲板にて星座教室天の川

随笑

赤ん坊に敷布妙なる天の川

素抱

かるめ焼おたまの上の銀河系

素抱

傾ける銀河系模し懸崖菊

素抱

蚊の刺せる處膨らむ天の川

暮津

●中元

盆の挨拶妻がおもむく西林寺

素抱

●生身魂 いきみたま

どぜういんげんこまめに摘んで生身魂

ねず

へうと水のみに起ちたる生身魂

寒暑

ご先祖に遇ふ面持ちであらせられ

素抱

ネーム入り傘を貸し呉れ生身魂

暮津

飯支度お手のものなる生身魂

暮津

生身魂達者なものよ卵焼く

暮津

捨て湯して今日が始まる生身魂

暮津

生身魂好き嫌ひなく膳のもの

暮津

生身魂野菜サラダに目の無くて

暮津

一寸づゝおかずに手つけ生身魂

暮津

生身魂何出て来てもマヨネーズ

暮津

じつくりと聞く耳持てり生身魂

暮津

座睡して楽土に遊ぶ生身魂

暮津

生身魂だうした訳からつきよ好き
生身魂畳を擦りて小用に

暮津 暮津

● 芋殻をがら

芋殻折るひびきに迎へごころかな
行き交へる人も芋殻のひと包
芋殻折るひびきを芋殻を折る前に
はらからは屈んですなり芋殻焚
芋殻束半分残し霊迎え

もも さざ ばら 鳩信 寒暑 暮津

「ただいま」と芋殻抱へて妻戻る

暮津

● 溝萩

溝萩の綻びかけに目を細め
鼠尾草みぞはぎも売られスーパ―花売場

寒暑

島田家の溝萩常のいろ湛え

素抱

骨壺は溝萩盛る家を出で

素抱

手つかずの溝萩に風拡がれり

暮津 暮津

溝萩の謔けさ破り泥鱈捕

暮津

● 盆花

盆花摘み川原歩きも朝のうち
盆花の色よき花の取り合はせ
庭先の何にしやうか盆の供花
剪りて来し盆花にまだ日の温み
生彩無き盆花なれど仕方なし
盆花の活けある水のすぐ古ぶ

ばら

寒暑

素抱

素抱

暮津

暮津

● 盆波

盆波のうねり座頭鯨ざとうの背のやうに
じよんがらのででんと盆波くつがへる
盆波のあとからあとから遠江
盆波の生めるあぶくのたゆたへる

ばら

ばら

ばら

随笑

素抱

● 門火かどび 門火焚く 芋殻火 芋殻焚く

芋殻火また消え入りさうになりにけり
おがら火の一ト揺らぎして直なる炎
芋殻火吹く風のうごきを見てあたり
芋殻火に降り出す雨のすまなささう
芋殻火を跨ぐ仕種が身について
芋殻火にめいめいの頭をよぎるもの
芋殻火の果てたる闇に炭の香す
三人みたりにて芋殻火囲む今年また
仕舞ひまできれいに芋殻燃えにけり

もも

さざ

寒暑

素抱

暮津

暮津

暮津

暮津

ねず

燃えのこる芋殻にも炎を廻らしむ ばら
 燃えさしの無きやう芋殻焚き了えぬ 素抱
 燃え尽きる迄燃す芋殻の切れつ端 暮津
 わらわらと芋殻燃えけり石の上 暮津
 路地明けて来るなり芋殻の燃え殻に 暮津
 後後のことを芋殻を焚きながら ばら
 炎明りに雨粒見ゆる芋殻焚 ばら
 芋殻焚きなど大切にしませうや 随笑
 芋殻焚く新聞紙は吾が持ち 随笑
 風の来る方を開けおき芋殻焚 随笑
 昨年は一寸降られし芋殻焚 随笑
 芋殻焚き了へたる指の煙くさき 随笑
 芋殻焚く頃ぞとひねる新聞紙 素抱
 いつもより早めの夕餉芋殻焚 暮津
 芋殻焚日暮れひとえに待たれけり 暮津
 芋殻焚うすくらがりに溜まる煙 暮津
 本日の一大事とは芋殻焚 暮津
 弟が立寄り呉れて門火焚 暮津
 門火焚く時刻そろそろ来てをりぬ もも
 門火焚く用意かさばるもの多し もも
 蟬の音の納まるを待ち門火焚 寒暑
 飲食の腹足りてさて門火焚 素抱
 ●迎火 魂迎 素抱
 迎へ火のたきつけ紙をひねりけり さざ
 迎火焚く横を挨拶して通る 随笑
 芋殻束半分残し霊迎え 寒暑
 迎え火は共に 送り火はひとり 暮津
 ●孟蘭盆 盆 盆休 盆の入 魂祭 魂棚
 盆過ぎの更に大きくうねる浪 さざ
 盆過ぎの空の高さを妻云へり 暮津
 八丈太鼓教師の打てる盆休 ねず
 泥亀も首をすぼめて盆休 鳩信
 さうかさうかお盆休か散髪屋 随笑
 吊革の揃って揺るゝ盆休 寒暑
 ゆふかぜに葉の摩れて鳴る盆の入 さざ
 盆の入電車幾分空いてをり 鳩信
 盆に入る朝の煮炊きの炎をながめ 暮津
 切株の白打って雨盆の山 ねず
 何に付けきゅつとやらねば盆最中 鳩信

紅花隠元咲けば秩父に盆が来る
天国よりの盆帰省
 霊者らに盆の改札始まり

宿好

寒暑

この奥に津軽家霊屋姥百合咲く

寒暑

箸の水切つて乾かす魂祭

寒暑

焼茄子の直火強めぬ盆厨

寒暑

コンビニに盆供のセット出廻りぬ

素抱

コンビニのとつつきで売る盆のもの

素抱

盆近み蟬音そろそろ空いて来し

素抱

魂棚の賑やかしとて葉鶏頭

素抱

喰いちぎる盆の蒟蒻お熱し

素抱

鳥海山の夕栄ながく送り盆

素抱

徒浪の盆供曳きては打寄せぬ

石鏡

あらくさ
 雑草は露を蒐めて魂祭

暮津

盂蘭盆の仏飯一夜にて乾ぶ

暮津

仏壇のおさがり貰ふ盆雀

暮津

盆の家いい塩梅に風が抜け

暮津

雀来て群がる盆の変電所

暮津

盆僧の頭下げ下げ隣家辞す

暮津

●施餓鬼

莫産の上に婆を満載川施餓鬼

寒暑

●墓参 はかま参り
 墓洗ふ ほさん 墓参

死ぬは莫迦と告げたる人の墓洗ふ

ねず

栃木田沼
 墓参とて葛生に近き片田舎

素抱

閑伽桶の水鳴る一人の墓参かな

素抱

線香の付け火に手を焼く墓参かな

素抱

墓洗ふ向う滴る唐沢山

素抱

●燈籠

能登
 名舟衆切籠泣かせて山を降る

ばら

デカメンが割り込み御神乗夏太鼓

ばら

すと現れて幽霊面を受け継ぐ子

ばら

道中飛脚奉納燈籠そぞろ寒

石鏡

●岐阜提灯

岐阜提灯ならではこのアトモスファイア

ばら

仕きたりの花鳥の絵柄岐阜提灯

随笑

岐阜提灯未だ見ぬ世の景見する

暮津

岐阜提灯小野小町は野に倒れ

暮津

●踊

阿波踊 盆踊 鹿踊 踊唄 踊の輪 踊浴衣

阿波踊りそこは素通りぞろぞろ連

ばら

阿波踊目抜きにかかりハイヤットサ

寒暑

飛び込んでもう止められぬ阿波踊

寒暑

水飴のやうに伸す腰阿波踊

寒暑

鹿踊諸流の中の春日流

寒暑

鹿踊鹿八頭の揃い踏み

寒暑

かんながらちぎれんばかり鹿踊

寒暑

腰ざしのゆらゆら奉納鹿踊

寒暑

鹿踊伝えて遠野十五ヶ村

寒暑

一寸手を空に合はせて女の踊り

宿好

阿波女踊り手付きが身上よ

寒暑

よう踊れ西馬音内女このハギ衣裳

素抱

男踊り日本一の尻ばしより

寒暑

盆踊ここでお仕舞い子供の部

寒暑

近道は墓地の脇道盆踊

素抱

ここまでは子供の時間盆踊

素抱

夕風にすちやらかちやんちやか盆踊り

素抱

嬢っこ達めかして西馬音内盆踊り

素抱

盆踊り爆笑もののエロ音頭

素抱

盆踊りホームステイはお寺にも

素抱

盆踊り甚句詞は野趣あふれ

素抱

盆踊雨の様子見して再開

暮津

豆腐屋の娘めかして盆踊

暮津

よしこのに腕まくりしてうづうづ連

ばら

高張のずうんと高く蜂須賀連

寒暑

浴道に汗を振りまき阿呆連

寒暑

綺麗どころ前面に立て殿様連

寒暑

阿呆連奴踊りにくったくた

寒暑

ヤツチクを郡上生まれの娘っこ

ばら

若衆のゲンゲンバラバラ夜つびいて

ばら

足わろき上人さんの庭踊

燕音

念仏と薄と踊る一遍と

燕音

踊り手が町に戻りて風の盆

宿好

風おさまる如く豊年踊果つ

宿好

墓地越へて二夕夜続きの踊唄

随笑

踊巧者踊見巧者風の盆

随笑

チゴガニの踊を真似て去なんとす

寒暑

一人脱け二人脱けて踊の輪

寒暑

雌鹿狂ひ雄鹿闘ひ倒れたり

寒暑

*雌鹿狂ひは一匹の女鹿を男鹿が奪い合う鹿踊の演目

しし踊り十八番の柱懸りかな

寒暑

一連隊大人に伍して炭坑節

素抱

踊の輪間合の空けばそこ詰めて
素抱
墓地越えて風の運べる踊唄
素抱
皆浮かれ戯け地口の踊唄
素抱
皆踊る笛に鉦つこハギ衣裳
素抱
踊る夜を嬢つこ真紅のしごき帯
素抱
彦三頭巾キタカサツサと踊りけり
素抱
一踊りおじやれ篝火盛る間を
素抱
嬢つこ等の踊り浴衣を見てたんせ
素抱
踊り見に二万石橋うち渡り
素抱
亡者踊り鼓、鉦すりがね打鳴らし
素抱
晩涼の橋の向うの寄せ太鼓
素抱
亡者踊り夜半の篝火掻き立てて
素抱
撒き砂を踏みしめ亡者踊かな
素抱
撒き砂に願化踊りの雁形舞
素抱
彼の世にも搏ちて願化の鉦鼓
素抱
西馬音内夜更けて踊り達者が出
素抱
願化踊り篝の薪目減りして
素抱
夜も更けて彦三頭巾の虚こけ仮踊り
素抱
見物衆踊る腰つき見てたんせ
素抱
優に六尺彦三頭巾の踊るかな
素抱
篝の前こごと亡者踊かな
素抱
豊年踊り地口も嬢かぶ腹満作と
素抱
踊果つ町筋篝なほ染めて
素抱
帰るさに編笠抱え踊人
素抱
踊り見て宿は雑魚寝の公民館
素抱
上踊りサアサ島田の夜のとばり
石鏡
藤娘早抜き自慢の上踊り
石鏡
上踊り雨の五郎に火蛾飛んで
石鏡
上踊り一寸法師におひねり飛ぶ
石鏡
校庭の鉄棒に寄り踊り見る
暮津
山妻は根つから陽気踊りもラフ
暮津
新作の踊りに挑む影法師
暮津
踊りに飽きかはほりのごと闇馳す子
暮津
●終戦記念日 終戦日 敗戦日 八月十五日
ねず
あかあかと諸洗ひあげ終戦日
さざ
卓袱台で卵割る音敗戦日
ばら
醤油瓶醤油尽きかけ終戦日
宿好
水団終戦日腹毎日あれから五十年
宿好
水団の戦後生まれを自認せり
随笑
灰皿に灰横たはる終戦日

終戦日深くしゃがんで厠の蚊
掩えんたい体に蝙蝠巣くふ終戦日

ピースからホープに替えて終戦日

マツカサー銜えパイプの終戦日

終戦日目当てに組まるドキュメンタリー

病院は軍艦に似て終戦日

したたりを許さぬ蛇口終戦日

連結車輛の数の当てっこ終戦日

鉄路に釘均らす遊びを終戦日

その本は今も何處かに終戦日

玉子割れば黄味の生き生き敗戦日

真水飲み噎ぶ八月十五日

もの溢る屑籠八月十五日

ひっちぎる日めくり八月十五日

研ぐ米の釜に張りつく終戦日

●流燈

雨落ちて来ぬ流燈のまへうしろ

流燈長壽のライン下りとなりにけり

急湍にかかる流燈間合詰め

流燈の二つひつつき流れけり

流燈の脈打つごとく打過ぎぬ

闇より手伸び来て流燈すいと押す

流燈はおのが道筋照らしゆく

流燈のひかひか川面照らしゆく

瞬けば流燈もまた瞬ける

うつすらと水明り流燈そこを過ぐ

●精霊舟

くろぐろと精霊舟を曳きし跡

●送火

風船かづら祖霊送りも済ませしよ

迎え火は共に 送り火はひとり

●処暑

処暑処暑と今朝方の蟬さう鳴くも

手妻すさびに処暑のコップを拭き並べ

処暑のそら土器かわらけいろの火星現る

処暑処暑と口火切りたるつくつくし

●相撲すまふ 角力 秋場所 勝相撲 負相撲

角力好き患者綿子にくるまれて

一波乱相撲秋場所上位陣

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

ねず

ねず

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

ねず

ねず

宿好

宿好

暮津

随笑

随笑

素抱

素抱

暮津

ばら

ばら

鳩信

そのかみの力士と云へば名寄岩
ほれぼれとするあんこ腹鏡里

東海の弓取り上手大岩山

あんこ形力士あづくるあんこ腹

かうなれば小細工効かぬ四つ角力

秋場所の力相撲となりにけり

突っ張ってはたいていなす技が効いて

舞ノ海大きな相撲取りにけり

横綱の巨きな張り手飛んでくる

どうにでもなれと当るが勝角力

尻はたきここの一番の大相撲

解説は相撲巧者の舞ノ海

勝ち越しのすまふに花を添えにけり

負越しの土俵勤むも後二番

横綱を取って投げたる晴姿

投げられて口をへの字の武蔵丸

踏み込んでやうやく初日の出るすまふ

待ったなしうるさきすまふ取る同志

持ちまえのがむしやらが出て負相撲

立て込める黒星同志「はっけよい」

好調は躰に任せとる相撲

乾坤の当りに懸けぬ土佐ノ海

俳諧に我も自分の相撲とる

相撲取草履つっかけ総武線

顔叩き力士勝気を呼び込めり

首捻り宙を睨んで負け力士

インタビュウはあはあぜいぜい勝力士

相撲見て膝を叩いて晩酌や

負相撲鬚が全てを物語る

あんこ腹あづけて力士がぶり勝

その巨漢恃める力士ポカ多し

角力見てをれば辺りの暮れて来ぬ

大相撲地震の画面に切り替り

●林火忌

林火忌 彼の日のごと権兵衛坂は灼けをりぬ

日盛りを煌めき渡る風のあり

林火忌を憶へばそれに連なるひと

林火忌の朝動き出す街の音

●蛸 かなかな 暁蛸 夕かなかな

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

なほ翔びて縋るものなき秋の蟬
落とすものあと命だけ秋の蟬

寒暑
素抱

鳴きさまの朝からなげやり秋の蟬
朝から翅バタつかせゐて残る蟬

暮津
暮津

残る蟬非力非力と鳴けるなり

暮津

飛ぶさまは愚直そのもの残る蟬

暮津

長たらしく鳴いて鎮守に残る蟬

暮津

●赤蜻蛉

秋 茜 あきあかね

空にゐる鶴田浩二の赤とんぼ

さざ

アキアカネ墳の鞍部を乗り越えて

さざ

赤チンを吹いて乾かすアキアカネ

ばら

あきあかね先導つとむ虫送り

宿好

火口湖へ降りゆく昼の秋あかね

寒暑

湯治場の錆び木杭に秋あかね

寒暑

山頂駅鉄鎖に止まる秋あかね

寒暑

秋あかね和賀流の句碑の肩選み

素抱

夕日に透き五効ごこうのすりきれ赤とんぼ

暮津

ともかくも選挙終れり赤とんぼ

暮津

赤とんぼ汚るゝ翅に無頓着

暮津

●残暑

秋暑 秋暑し

阿武隈川ぶくと秋暑の泡生める

さざ

ここのごところご無沙汰残暑見舞出す

鳩信

ことさらにことしの残暑手強こわかり

素抱

ピザ食うて残暑なんぞにへこたれじ

素抱

前山に残暑色濃くのこりけり

素抱

糊の効きわるき秋暑の古切手

石鏡

秋暑のこと家鴨に言ってもはじまらぬ

石鏡

観念し秋暑の路を辿るのみ

暮津

拡声器がなり秋暑の声割れぬ

暮津

舌垂らし秋暑にダアと寝そべる犬

暮津

●秋旱

返信の筆も鈍れる秋旱

寒暑

●秋めく 秋づく

秋づくと上野の山を歩きけり

素抱

めつきり秋らしくなる日をピザ焼いて

石鏡

秋めくといふ空の下授かる句

暮津

秋めくといふこゑ空に吸はれけり

暮津

●秋の初風

辞書は机上に開きおくもの秋初風

寒暑

秋初風句帖持たずば頭に記す

こんな日はひとりがよくし秋初風

●初嵐

一遍に阿弥衣はりつく初嵐

けだるさが目に見えて退き初嵐

●新涼

新涼の燈台五十万カンデラ

新涼の柳手といふ指圧法

新涼やあらかた骨の膝小僧

●秋の雷 秋雷

秋雷の一つ転がる山向う

秋雷の豆を煎るごと空ら響き

秋雷のさあらぬてい体に鳴り出せる

秋雷の果てはザとくる雨の快

秋の雷どすんと荷物おろすごと

●稲妻 稲光 稲つるみ

いなびかり大海原に珊瑚樹に

稲妻の夜討ちの如く廊を馳せ

稲妻の銀の眼を沖合に

稲つるみ全幅を見す最上川

凄いのはこれから先よ稲つるみ

稲びかり天の裏側垣間見せ

●流星

碧きまま昏れて流星椰子の上

大接近ワクワクドキ流星群

●芙蓉 紅芙蓉 白芙蓉

昨きのよりけふ気力の優る紅芙蓉

紅芙蓉手荒な風を嬉びて

芙蓉咲く高さは風の通り道

月半までお向いさんの芙蓉咲く

芙蓉咲き生・老・病・死持ち回り

お隣の芙蓉が咲いてホツとする

芙蓉咲くこともふとしたことのうち

見る者をつつみ込むいろ芙蓉咲く

芙蓉咲くや一方的なあかるさに

眼をこすりつゝ来て芙蓉の咲くほとり

芙蓉咲きこつちを向ひて呉れぬ花

芙蓉咲きけふもぼんやり日を過たつごす

日毎咲く芙蓉と共にある生活

暮津

暮津

もも

随笑

寒暑

素抱

石鏡

随笑

寒暑

素抱

素抱

素抱

さざ

ばら

ばら

随笑

寒暑

寒暑

ねず

鳩信

石鏡

石鏡

鳩信

燕音

随笑

随笑

随笑

随笑

素抱

素抱

石鏡

石鏡

暮津

そはそはと次の風待つ白芙蓉

もも

白芙蓉咲かせに朝がやってくる

さざ

朔日の空にぽっかり白芙蓉

さざ

白芙蓉閉つと云ふよりポシヤリけり

ばら

白芙蓉後事託すと云ひて墜つ

鳩信

白芙蓉如に上よ常住のほとけなり

燕音

白芙蓉見ながら体調どうと問ふ

燕音

白芙蓉咲き加はりし庭の景

宿好

白芙蓉鎮まらぬもの鎮めをり

素抱

西施・虞姫芙蓉の三十二相かな

ばら

朝の気をはらめる芙蓉雨外れし

ばら

夕されば芙蓉けじめをつけるごと

ばら

芙蓉淡々同窓会の日が近む

宿好

昼からの芙蓉曇りとなりにけり

宿好

芙蓉萎え申しそびれしやうな形がら

随笑

退院のその後を聞けり芙蓉の辺

随笑

世尊に掌合はせるごとく芙蓉閉ず

随笑

単純で明快が佳し花芙蓉

随笑

御命講芙蓉に洩れて医院の灯

随笑

芙蓉の明るさ例ふるもの見つからず

石鏡

午から晴れ芙蓉の気色とりなおす

石鏡

芙蓉散り法器のやうなその落花

石鏡

看取りの日々芙蓉は花を幾つもつけ

石鏡

アメリカ芙蓉国家斉唱するごとし

暮津

芙蓉食ふ虫は小奴でありにけり

暮津

芙蓉喰う虫はお主か悪漢わるじやのう

暮津

吹かれては芙蓉の影の舞ひあがる

暮津

●木むくげ 白木槿 底紅

白木槿とびきり暑き日とならむ

ばら

底紅やうち籠るべく家があり

寒暑

底紅に胸なでおろす風が出て

寒暑

白木槿母に忘らる日が来るか

素抱

●鴨ひよどりばな 花

子規ここを下りゆきしか鴨花

素抱

●鳳仙花

第二子もおなごと聞けり鳳仙花

素抱

朝夕の落ち着き来る鳳仙花

暮津

上海が出て来て困る鳳仙花

暮津

*嘗て 教科書で学べば たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙

花紅く散りみたりけり

鳳仙花防空頭巾を被る世の

暮津

千人針知る人絶えてほうせんか

暮津

この道は湯屋に抜けるほうせんか

暮津

また一つ湯屋が潰れてほうせんか

暮津

悲しみは追ひかけてくる鳳仙花

暮津

鳳仙花ほどに晩年弾けたし

暮津

鳳仙花昔はよいことだらけなる

暮津

●白粉の花 おしろい おしろい

白粉花の勝手気ままに路地に殖ゆ

さざ

おしろいの種菟む子のたそがれぬ

さざ

しゅんとしておしろい朝を迎へけり

さざ

四時廻り白粉 フォーオク ロック 花咲き出せり

ばら

ありふれてゐる定年と白粉花

随笑

空模様怪しくなれば白粉花 しよげ 悄気

素抱

白粉花散るは浪費といふ風情

暮津

●朝顔 舜

朝顔のうなだるる葉に水遣れり

さざ

朝顔の小つさうなつて咲きつづけ

さざ

朝顔の色はと見れば在り来たり

ばら

朝顔の大輪清水湛ふごと

燕音

朝顔の遅まき咲といふがほと

宿好

風の盆朝顔の葉に灯の洩れて

宿好

微風湧くなり朝顔の瑠璃の淵

寒暑

朝顔の花に従ひ葉もくたり

素抱

彩と云ひけふの朝顔奥床し

素抱

朝顔の一時に咲き勿体なし

素抱

朝顔の明日期す蕾五つほど

素抱

朝顔のけふ咲き惜しみ一つだけ

素抱

朝顔の花能く見んと中躰み

素抱

鉢植えにして朝顔の鼎咲

素抱

朝顔のくたんと十時廻る日に

石鏡

朝顔に水やる朝の内がよし

石鏡

煮立てゐる味噌汁の香が朝顔へ

石鏡

朝顔の残りの花期を尽してや

石鏡

朝顔の掴まる処用意せり

暮津

朝顔にあいにくの雨上がらざり

暮津

朝顔蔓おいおいそこは物干竿

暮津

鉢朝顔ご丹精とぞ褒められし

暮津

朝顔の蔓に誤算のあり漂ふ

暮津

くたくたよ三時の葬ならずとも

暮津

落胆のこゑ葬のほとりより

暮津

昨今の新聞紙上を見れば
葬の耳を疑ふ怪事件

暮津

日課となる朝顔の世話水の世話

暮津

●弁慶草

雨弾き弁慶草の葉にちから

ねず

弁慶草起こし野分の後始末

鳩信

腕組みしてさてどう詠まん弁慶草

燕音

弁慶草擦り傷つくらぬ子が殖えて

暮津

●泡立草

秋の麒麟草

泡立草錆つくものは錆つきて

さざ

上背のあればやアキノキリン草

燕音

この辺り倒れながらも泡立草

燕音

席卷といふ語まさしく泡立草

暮津

●西瓜

間引かれてふてくされゐる西瓜玉

もも

西瓜置く場所を最初にこしらへて

さざ

西瓜種ほじくる種のうしろにも

さざ

灯が貧しく見えて西瓜の種わびし

寒暑

一わたり西瓜の種をうち眺め

寒暑

西瓜の種一つ鎖骨に付いてをり

寒暑

出来不出来は西瓜の胴を叩き聞け

寒暑

匏相して濡らせる西瓜臭き胸

寒暑

零れたる西瓜の種は蹠好き

寒暑

ほじくれば幾つも出てくる西瓜種

素抱

雷が西瓜に入れし縞模様

素抱

冷蔵庫に西瓜入れあるぞと出掛け

素抱

口中の西瓜の種を何處へやろ

素抱

何にでも被せるラップ西瓜にも

素抱

莫迦をみる初生り西瓜承知で買ふ

暮津

西瓜の出来上出来で無しスカでも無し

暮津

西瓜売軽トラで来て店開き

暮津

西瓜食ぶ間にピッチャー立ち直る

暮津

●南瓜

元気出てかぼちやいろなる尿の色

鳩信

南瓜煮る妻に俳句の出来栄え問ふ

随笑

農作業南瓜の玉敷岬晴れて

寒暑

粹な昼餉つめたき南瓜のスウプかな

暮津

煮南瓜の皮真青なる盆の入

暮津

●**豇豆** ささげ

親孝行てふ名の十六ささげ干す

石鏡

●**新豆腐**

つきだしに水もしたたる新豆腐

宿好

掬ふとき掌におよがせて新豆腐

石鏡

●**地藏盆**

地藏盆実の付いてゐる楳束

ばら

なむあみだ躰にたむる地藏盆

ばら

ずず玉の天つ日返す地藏盆

ばら

沢蟹のとこと宇津谷地藏盆

燕音

●**赤のまんま** 犬蓼 赤のまま

犬蓼の稲田になだれ込むところ

もも

赤のまま此処らで誰か滑りしか

もも

昼の虫すがれし赤のままのなか

さざ

水張りしコップに空地の赤のまま

ばら

犬蓼にけふの散歩はここ迄と

宿好

化野の犬蓼の辺の欠け佛

宿好

赤橋既に土に帰し無しのまま賢治作りし弥助橋

寒暑

小流れをなせる余り温泉赤のまま

寒暑

犬蓼見てふらんふらんと戻りけり

暮津

犬蓼この雨何時か上がるだろう

随笑

●**蓼の花**

この方が面白さうな蓼咲く路

随笑

蓼の咲く家並み外れに口取宿

石鏡

略図又出して確かむ蓼の道

暮津

●**藪からし**

やぶからし最初考え違ひして

鳩信

雑草あいらひに掴まり立ちのやぶからし

鳩信

こ奴めとお小言貰ふ藪からし

素抱

藪からし怪しき光り放ちけり

素抱

荒廢の片棒担ぐ藪からし

暮津

●**水引の花** 水引草

水引の際立つ方へ目を遣りぬ

もも

水引に視力測られぬごとし

もも

水引がすいと目に入る高山寺

宿好

養生は一生のこと水引草

石鏡

●**煙草の花** 花煙草

花煙草十分に葉の大きかり

ばら

● 反魂草 はんこんそう

反魂草残り少なき休みかな

暮津

● 玉すだれ

玉すだれなかなか夏が逝かぬなり

燕音

家一つ毀たる跡に玉すだれ

寒暑

玄關の灯の及びゐる玉すだれ

素抱

玉すだれ裸叩いてゐる男

素抱

玉すだれ政権どちらに転ぼうと

暮津

● アカンサス

どう見てもこれ育ち過ぎアカンサス

暮津

● カンナ

手に負へぬ赤さのカンナ咲き出して

もも

老人の我流体操カンナの辺

素抱

緋カンナに国府津の海の展けたる

石鏡

艱難は切り抜けてこそ緋のカンナ

暮津

かたまつてカンナ八紘一字かな

暮津

● 芭蕉 芭蕉林

翻る芭蕉に雨の五十棒

もも

青芭蕉煽らるる日の清方展 籙木清方

宿好

騒然たる雨を嬉ぶ芭蕉林

寒暑

窓に人ちよんと描きて芭蕉林

素抱

● 田村草

花の名をそこそこ覚え田村草

もも

田村草風は二手に岐れゆく

燕音

● 八月尽

八月も終りに降れる雨に斑

ばら

煮浸しの鮓を返す八月尽

石鏡

かさぶたを搔きこはす癖八月尽

石鏡

小遣いの前借りなどして八月盡

暮津

手すさびの手のゆく腋毛八月尽

暮津

■ 九月

● 九月 其色月

風立てる其色月の橋わたり

ばら

● 葉月 雁来月 かりく弔旗垂れ雁来月端紐育 はな

随笑

● 仲秋

仲秋の雲片づけに風が出て

石鏡

仲秋の或る晴れた日の耳掃除

暮津

● 震災忌 防災日

震災忌云い聞かす婆無うなりて
一切は過去と云うても震災忌

燕音
寒暑

蛇口より水の塊防災日

寒暑

花鳥風月なんのかんのとマグマの上

石鏡

今日を逃がしてどうする我が家の地震対策

暮津

棚の本ときに仇なす震災忌

暮津

つくねんと水を味はふ震災忌

暮津

●風の盆

川の音おわら流しの遠ざかる

宿好

おわら見て二階に風の通る家

宿好

足そろと運びておわら流しかな

宿好

おわら流しふらりと出でて町流す

宿好

夕顔とおわら流しの宵迎ふ

宿好

おわら流し橋で一息入れゆけり

宿好

紅引いておわら流しの出を待つ娘

宿好

おわら流し折り目正しき手の捌き

宿好

佳き風が出て来ておわら流しどき

宿好

聞名寺堂縁借りておわら節

宿好

揃え脱ぐおわら流しの草履に名

宿好

今町のおわら流しの浴衣柄

宿好

おわら流しここで一服私も一服

宿好

おわら流しころと川原の石鳴れり

宿好

踊り手が町に戻りて風の盆

宿好

坂の町足のむくまま風の盆

宿好

石垣の上の町並み風の盆

宿好

風の盆朝顔の葉に灯の洩れて

宿好

太棹の影が法被に風の盆

宿好

町衆の趣向の法被風の盆

宿好

くらがりに鈴虫を飼ふ風の盆

宿好

編笠も月を象どる風の盆

宿好

団扇風妻より貰ひ風の盆

宿好

風おさまる如く豊年踊果つ

宿好

夕顔に胡弓漂ひ初めにけり

宿好

素通しに川原の見ゆる盆の家

宿好

一寸手を空に合はせて女の踊り

宿好

黒羽二重法被衣桁に風の盆

宿好

八尾びと路地先に据ふ涼み台

宿好

一息に唄ひ切らねば風の盆

宿好

細き路地大きく使ひ総流し

宿好

踊巧者踊見巧者風の盆

随笑

●台風

颱風シーズン到来

あばずれのキティ上陸せしことも

もも

青葉吹き散らしさしもの颱風も

さざ

関東縦断台風スピードアップせり

ばら

颱風の何処へ抜けやうかと腐心

鳩信

秋津島颱風窺う頃となり

燕音

颱風のたてこんでくるこの時分

宿好

颱風の道草食うて近畿道

宿好

颱風のアップパークット喰らふ軒

宿好

玉突きの玉めく台風天気凶に

随笑

颱風は颱風として葉嚙む

随笑

颱風の出方を待てる外房線

随笑

風来坊颱風こつちへ向つて来

随笑

颱風やうち倒さるゝ樹が凶器

随笑

颱風の腕力のほど身にしてみて

随笑

生木剥ぐ風の鈍刀颱風裡

随笑

颱風来て玄関にわかに物置場

随笑

颱風の合間蛮勇ふるふ蟬

随笑

颱風のあとのなんだいこのあつさ

随笑

少しづゝガタのくる家颱風裡

随笑

颱風一過。パンパカ。パンと晴れわたり

随笑

真ん中をへことやられて風倒田

随笑

颱風のいい加減さに振り回され

随笑

颱風の眼の中にみて蟬憶せず

素抱

颱風の巻き添え喰つて鳴く蟬か

素抱

颱風を生める地球と金魚玉

素抱

金魚玉如何に台風荒れやうと

素抱

颱風の素通りてふはなかりけり

素抱

茶の間にも寄せて颱風余波の浪

石鏡

颱風禍まざままきチャンネル切り替えても

石鏡

台風に脚掬はれて百葉箱

石鏡

越後に地震播磨に颱風なんてえこと

石鏡

颱風の眼窩豁然青菜畑

石鏡

台風の雨の底抜け箱根町

暮津

のろまなる台風と聞きやきもきす

暮津

予報士のまたもやへクトパスカルと

暮津

台風に先手打ち鉢取り込みぬ

暮津

台風のその規模風鈴きりきり舞

暮津

煙草買ふ間ありて台風中だるみ

暮津

買置きの煙草とライター―台風下

暮津

台風の眼のなかジメジメしてあたり

暮津

台風直下こんなものと空見上げ

暮津

台風来庭木を括る紐いろいろ

暮津

台風の中出て垣根手当せり

暮津

台風下足のベタつく厠板

暮津

一灯の他は台風圏の闇

暮津

台風のあとの日差しに疲れけり

暮津

ここに来てペース落とせり雨颱風

暮津

●野分 野分晴 野分あと

ふれ込みと違ひ野分の雨然程

さざ

野分あと街は輝く万華鏡

寒暑

うつくしゆうみえる家々野分晴れ

素抱

電線をつくづくとある野分あと

素抱

野分あと長々起きてゐたりしよ

素抱

野分あと斯く減る蟬音拍子抜け

素抱

大鯉の真水突き上げ野分中

石鏡

うなばらの涯まで野分一掃す

暮津

万象の斯くあきらかに野分あと

暮津

野分あとこんなに晴れて目の遣り場

暮津

●秋の虹

解決にまだ道遠し秋の虹

寒暑

●秋夕焼

ぼつと出の社員に新宿秋夕焼

さざ

●秋曇り 秋翳り

ほうほうと馬遠の作画秋翳り

宿好

断つてばかりの家居秋ぐもり

石鏡

●秋湿り

揚菓子の拍子抜けして秋湿り

素抱

●夕月夜

夕月の一刻経ってその高み

素抱

独酌の間あわひを夕月移りつゝ

石鏡

夕月の色のいよいよ栗きんとん

石鏡

酒のあと水恋しくて夕月夜

石鏡

●秋の昼

石像のテーベ市長と遭ふ秋昼

燕音

きゅつと鳴る紅茶の砂糖秋の昼

宿好

●秋の夜 秋夜

夜や秋の手にとりてみぬ不審紙

もも

秋夜読む「扱さて化狐もはけたりきつね通人つしん」

燕音

秋燈下勢ひし日には勢ひし書
懐旧
黄表紙 七句

鳩信
燕音

秋の灯に湯呑の絵柄廻し見ぬ

寒暑

秋の灯に詰め替えてゐる旅靴

素抱

●燈火親し

燈火親し楷の木の本展ぐれば

ばら

燈火親し流石てふ字に目を止めて

ばら

燈火親し「臍の下谷」を読み始む

燕音

燈火親しめず雲脂より軽き句に

宿好

燈火親し袖珍文庫二色刷り

素抱

●夜なべ

夜なべの肩凝りみて蟹の甲羅ほど

寒暑

●秋意

ぎらぎらと日差すなかにも秋意かな

素抱

ぐい呑みを買ひ足すこともまた秋意

石鏡

●秋気

秋気満つ金閣を出て銀閣へ

宿好

●遊行忌 一遍忌

遊行忌の道一本や相模晴

ねず

回遊の鯉の鱗見え一遍忌

ねず

鮑あわびの上あるく鮑よ一遍忌

ねず

●耕衣忌

永田耕衣逝く
トラトラトラ！耕衣俳句は奇襲もて

鳩信

●生姜市

芝神明宮 だらだら祭
大門は目と鼻のさき生姜市

燕音

かはたれの芝に廻りて生姜市

燕音

●花野

花野ゆく女の服の大雑把

さざ

花野行足弱組に加はれり

ばら

いっぽんの手拭首に花野行

随笑

どうどうといなし花野を巡る馬

随笑

花野行さよなら三角また来て四角

随笑

●秋草あきくさ

秋草を折りとる音の根元より

もも

一秋草ひよんなはづみで田に入りて

さざ

秋草も黄勝ちの野草摘みとりぬ

宿好

秋草を鳥羽絵の兔高掲げ

宿好

等伯の松剛直に秋草図

宿好

秋草といひて一草引いて来ぬ

随笑

秋草の長きは長く摘み揃え
 随笑
 秋草を摘める長短取り混ぜて
 随笑
 秋草は茎を活けるがごとくなり
 寒暑
 秋草を倒せる雨の定めなき
 寒暑
 秋草と一つ括りに野辺の草
 素抱
 秋草を厨廁に頌ち活け
 素抱
 秋草を食卓に活け愛づ生活たつき
 素抱
 つんつんとへなりと野辺の秋草は
 石鏡
 秋草の風に打合ひ古ぶ穂よ
 石鏡
 秋草や舗道余熱を持ち続け
 石鏡
 秋草のこの名も妻の知るところ
 石鏡
 せいぜい知る秋草の名を独りごち
 石鏡
 秋草を手折るは釣れぬ証拠なり
 暮津
 ●芒 花芒 尾花 世原 薄 穂芒
 さざ
 笛吹川の中州の尾花日和かな
 鳩信
 花すすき夜盗さながら裾野馳せ
 燕音
 花すすき十方衆生の願ありて
 燕音
 花すすき揺るゝがごとくおねんぶつ
 燕音
 花すすき人家といふは寄り添うて
 燕音
 川上も又川下も花芒
 燕音
 花すすき雲を飛ばして最上川
 随笑
 花すすき河の流れのやうにかな
 随笑
 自炊棟裏のすすきの花盛り
 寒暑
 花すすき照蓮寺仏拜んでゆかれよと
 素抱
 ひとりでに唄が出てくる花すすき
 素抱
 言うなれば奉書の明るさ花すすき
 石鏡
 花すすき揺るゝ辺ひねもす釣糸垂れ
 暮津
 芒とる少年月を迎ふ村
 燕音
 月祀る芒に添えてゑのころも
 宿好
 月祀るすすき折り来し此通り
 寒暑
 蔵店は月見名残りの芒活け
 石鏡
 なあなああの仲の芒と望月と
 暮津
 芒原目がみえてきて女郎花
 ばら
 川床に湯花川原にすすき咲く
 随笑
 湯治小屋嘗て十六芒原
 寒暑
 果し合い活動写真のすすき原
 寒暑
 近道のつもりが何ですすすき原
 寒暑
 眊に紅ほとばしる芒かな
 寒暑
 紅すすきほどにあからみ山の湯に
 素抱
笹峠 蛸や夕日の里は見えながら 子規
 紅すすき湯田の町並見えながら
 素抱

女郎花容れて一景なまめきぬ
 白日下色を増しつつをみなへし
 天目に撲たれ強しよをみなへし
 をみなへし朝日に溶けてしまひけり
 女郎花今を盛りとなまめきぬ

● 菊芋の花

菊芋の長けて切なきまで青空

● 葛

照りつける鉄砲鼻に葛灼けて
 精悍なにほひの蔓でありにけり
 とりついたりとりつかれたり葛の蔓
 宇津谷の葛も了りの峠道
 大井川葛は暴走して止まず
 あらあらしく落ちて来るなり葛の雨
 葛の霏ここらで道の尽きをるよ
 葛蔓の何を仕出かすこの勢ひ
 言うならば葛這屋敷荒れ放題

● 葛の花

崎鼻に葛とおぼしき花吹かれ
 野の草を見る会葛に屯して
 湯治場の山深ければ葛の花
 葛咲いてやぶらこうじのぶらこうじ

● 萩

白萩

立ち直るいとま与へず萩へ風
 萩に萩押しつけゆける萩の中
ふんらい 大野林火先生居
焚菜山房庭前の萩走り咲き
瀬谷 徳善寺
 道思い出しながらゆく萩の寺
 無常迅速生死事大と萩咲けり
 萩叢も萩見る会も旺んにて
 知己に逢ふごときやすけさ萩を見る
 白萩の楚々たるを寄せ掃き給ふ
 卯辰山前に白萩うねり初め
常栄寺
 回廊に回廊を継ぎ萩の風
 萩優るぼたもち寺の植込は
 ぼたもち寺寺門の萩に乱れなし
 萩と露色のつり合ひとれてをり
 山萩の地味であて且つ和むいる
 その生活手に取るやうに萩便り
 風往なすことにかけては宮城野萩

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

石鏡

もも

ばら

鳩信

燕音

宿好

随笑

素抱

素抱

石鏡

もも

もも

素抱

暮津

もも

さざ

ばら

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

随笑

随笑

素抱

素抱

素抱

暮津

信貴山縁起繪卷 飛倉卷
露の鉄鉢長者の倉を持ち上げて

鳩信

ピアソラのタンゴ魂露と凝り

鳩信

テラスのさき露のジャパニーズ・ローズかな
ハマナスに別名あれば

燕音

露の日の顔の輪郭思はるる

燕音

扁平になりて千切れぬ芋の露

燕音

露は凝りあたりタテヤマウツボ草

宿好

街道はこれから灼けむ露葎

宿好

栄西の茶種育てし露の畑

宿好

露の金閣屋根は榎と申されき

宿好

碧眼も露の十五の石見据え

宿好

化野の露の佛の背のまるみ
化野念仏寺

宿好

石白く粗く化野露佛

宿好

化野の露を零せる多聞塀

宿好

枯山水巖顛頂に露を置き

宿好

露の他省き尽くして銀沙灘

宿好

叭叭鳥を四方に翔ばせ露襖
蕪村筆

宿好

湛慶の作とうんぬん露御坊

宿好

露どきの魚の眠りに棹さして

随笑

朝露に触るゝ足許湯中り呆け

随笑

屑籠は大き程よし露の家

随笑

村宮バス朝刊下ろす露の村

寒暑

露零す螢袋に道草す

素抱

書家にして露の世あとにせられけり

素抱

萩と露色のつり合ひとれてをり

素抱

鬼やんま棲みつく山に露降りて

素抱

青花を摘むとき露が手に当り

素抱

羽黒山大鐘露を生みにけり

石鏡

大露に衿搔き合はせ驚きぬ

石鏡

触るもの全てに露の影し

石鏡

露の浜犬にも流行りすたりあり

石鏡

おとつと露のまだ干ぬ草っ原

石鏡

朝露にあらあら濡れてしまひけり

石鏡

雑草は露を蒐めて魂祭
あらくさ

暮津

芋の露面白ければ覆す

暮津

露の空何かあつては困るなり

暮津

露の世の木と紙の家震ふ地震

暮津

おほらかに露の凝りしが葡萄とも

暮津

大石田大河洋洋露満満

暮津

●虫 朝の虫 昼の虫 夜の虫 虫籠 虫時雨

虫の闇 虫の音 虫音

昼蘭けて鳴く虫もなき岡城趾	鳩信
<small>大英博物館 古代エジプト展</small>	
太陽神ラーとミイラと昼鳴く虫	燕音
半島はここにてくびれ昼の虫	さざ
昼の虫すがれし赤のままのなか	さざ
<small>一龍斎貞水</small>	
白浪物短けえ娑婆に昼の虫	鳩信
ガレ場にて噎れしこゑの昼の虫	宿好
東尋坊岩間に昼の虫音澄み	宿好
顔つくる外出の妻に昼の虫	宿好
昼の虫電車はなんぼ待てば来る	随笑
子規庵のつましき間取り昼の虫	随笑
虫の音のほろろばったり雨閉す	ばら
上人の虫音のごときおねんぶつ	燕音
虫音のごと木乃伊の音声ガイド洩れ	燕音
虫の音におっとりとまた性急と	寒暑
暁の虫音交りの雨降れり	素抱
<small>西馬音内(にしもない)</small>	
鳴く虫も鉦のやうなり西馬音内	素抱
聞き分けて違ふ虫の音三つほど	石鏡
点線の虫音と棒線の虫音	石鏡
虫の音のじんじんとフルオーケストラ	暮津
虫の音を聞きつゝ庭の片づけごと	暮津
虫の夜のあ利尿剤利きにけり	ばら
根詰めて仕事にかかる虫の夜	鳩信
山峡の百千の蟲夜を徹し	燕音
夜半の虫煙草ふかしに起きて来ぬ	随笑
虫の夜といふには虫を知らずに来し	随笑
虫を聴くゆとり生まれぬ夜風のなか	寒暑
虫の夜をピアノ小刻みダリエンソ	素抱
捕れたかと云へば虫籠掲げ見す	宿好
皆百円香奠袋も虫籠も	素抱
虫籠に蜥蜴を入れて兄貴分	素抱
虫籠を覗けば何と瑠璃蜥蜴	素抱
虫籠に蟬の御報謝ありにけり	素抱
虫籠提げ蟬など捕ってちようだいと	素抱
虫籠の棧に掴まり弱りをる	素抱
虫籠の中はと見れば蟬の殻	暮津
虫一つ水平飛行秋日中	さざ
とび出して土師器色なる墳の虫	さざ
繰返す蟲は一病息災と	ばら
虫時雨妻の寝顔のつやつやと	鳩信
月渡る空朗々と虫今宵	鳩信

芙蓉の葉食むは一体如何な虫

鳩信

かしやかしやと番屋近くに鳴く虫も

燕音

茶畑のその畝々の朝の虫

燕音

肝張っていきいき鳴ける朝の虫

宿好

虫のこゑじいんじいんと稲稔る

宿好

悪さする虫に先んじくわりん採

宿好

虫の鳴く左沢線トコトンと

随笑

進みゐるくわりんの尻の虫腐れ

随笑

始めて鳴く蟲と思へず達者なもん

寒暑

目覚むれば妻も目覚むる暁の虫

寒暑

虫すだく坊主地獄の陥没箇所

寒暑

温泉に浮かむ羽虫一匹一青葉

寒暑

バンドネオンは虫の息継ぎダリエンソ

素抱

満腹の腹先すっかり虫の闇

石鏡

がさつかせ茂みの虫を捕る雀

暮津

虫の名のそのいちいちちは知らざりき

暮津

●鈴虫

くらがりに鈴虫を飼ふ風の盆

宿好

●馬追

すいっちょよ

すいっちょよと云ひて足音しのばせゆく

鳩信

●蟋蟀

えんま蟋蟀 ちちろ虫 こほろぎ

ちちろ虫雨の音色と心得て

鳩信

口さがなき婆のがちやがちや娘のちちろ

鳩信

こほろぎが暈のうへに上がり込む

随笑

玄関にて鳴くこほろぎの居候

随笑

脱衣籠えんまこほろぎ宿しけり

寒暑

草叢をごそつかせぬしは蟋蟀

素抱

こほろぎの腿に引け目や夏瘦せて

暮津

髯を振るこほろぎ遺愛の箏笛の辺

暮津

●寵馬

かまどつつま ひとど

手に乗せて勝手の違ふ寵馬

さざ

病み上がり足許いとどに跳ばれけり

鳩信

逞しきいとどの腿に及ばざり

暮津

●蝨螻

ぎす きりぎりす

擬態語の力を借りてぎす鳴けり

さざ

きりぎりすぴくりと動く水平線

ばら

ぎす鳴いて玉川温泉岩盤浴

寒暑

陶工の筋金入りやきりぎりす

素抱

きりぎりす灯を取り損ね露天湯に

素抱

きりぎりす奥羽山系横たはり

素抱

●轡虫 くつむし がちやがちや

口さがなき婆のがちやがちや娘のちよろ

鳩信

●鉦叩 かねたたき

仏頭をあづかる寺に鉦叩

ねず

●邯鄲 かんたん

邯鄲を聴きにひきずる下駄の音

ねず

身じろげるとき邯鄲に鳴かれけり

もも

●地虫鳴く

刺客篇読む地虫鳴く夜の底

石鏡

寺の名が即ち地名地虫鳴く

石鏡

●蓑虫

オオミノガの巢をこじあけてみるつもり

さざ

蓑虫の蓑はおほかた簡單着

随笑

蓑虫の蓑温めぬし日の陰る

随笑

蓑虫の着たきりすずめ押し通す

寒暑

●蝻螂 たうつ

かまきり いぼむしり 拌み太郎

鳩信

見えてゐるものが全てやいぼむしり

暮津

種採のおつとここにはいぼむしり

もも

朔日の風蝻螂の貌を吹く

もも

中 ちゆうぶる 古の斧を振りあげ蝻螂は

さざ

蝻螂の翅にも山の露降りて

ばら

蝻螂の翅まだ青き十二月

燕音

腹立つとみえて蝻螂斧振り上ぐ

宿好

蝻螂は千人斬りの構えなり

宿好

青蝻螂生兵法の斧を振る

宿好

藁持つて青蝻螂を指南せる

宿好

紛れ込む蝻螂を外に出し遣りぬ

宿好

蝻螂の斧振りかぶり豪の者

宿好

腹見せて蝻螂ひっくり返るとは

宿好

素浪人風の蝻螂振り返る

宿好

蝻螂の登攀そこに壁があり

宿好

蝻螂の背筋をびんと張るときあり

宿好

棒切れでかまえば蝻螂ご立腹

随笑

蝻螂の一劍客に出会ひたる

随笑

蝻螂の構えは卜伝無手勝流

随笑

蝻螂の一棒切れと渡り合ふ

随笑

蝻螂と戦争一つ日の下に

随笑

蝻螂も戦もキツと身構へて 随笑
 先づ出方窺ふ戦も蝻螂も 随笑
 蝻螂の暢気な父さん歩きかな 随笑
 蝻螂に横を向かれてしまひけり 随笑
 蝻螂の三角の貌キューヴィズム 寒暑
術後回想
 夏痩せて拝み太郎の湯浴みなり 素抱
 蝻螂の美学を学びジャコメティ 素抱
 蝻螂の斧見よ一点豪華主義 素抱
 額艶やかに蝻螂の妙好人 素抱
 こりやあびつくり菊に跨りゐる蝻螂 石鏡
 権禰宜めく蝻螂にしてうやうやし 暮津
 蝻螂の逃げるにあらず尻向けぬ 暮津
 蝻螂を凝視ひるんだ方が負け 暮津
 ●放屁虫 三井寺歩行虫 寒暑
みいでらごみむし
 三井寺歩行虫訳も分らず詠んでみぬ
 ●敬老の日 敬老日
 町内の二百と五人の敬老日 もも
 とかんと金槌振ふ敬老日 鳩信
 敬老日ころつと忘れをりにけり 宿好
 お年寄駄菓子ほおぼる敬老日 石鏡
 敬老日番組玄米健康法 石鏡
 ●月 月夜 月光 月明 月の出
 枯月夜燭入りて堂膨らむよ ねず
 月の夜の海月が考へさうなこと ばら
 菜の花に北信五岳月夜かな 燕音
 北安曇野月夜高吟小田蛙 宿好
 月交え白木蓮の夜の宴 随笑
河鍋暁斎
 暁斎の蜘蛛出づ月の怪しき夜 暮津
 幾つもや月夜を蟬の魂昇天 暮津
 垢抜けてみゆる月夜の路地てふ路地 暮津
 月下にて山田の案山子隙だらけ 寒暑
 痩せ猫の背中ごとごと月下をゆく 暮津
 月光のあまねく葱に性根入る もも
 月光に育つくわりんと思へりき 石鏡
 醉漢の駄指しあるく月光裡 石鏡
 月光にダチュラ怪人佇つごとし 暮津
 月明の紙魚と遊びて師の忌くる ねず
 月明に母船の如く吾家あり 石鏡
 焼山に月の出かかる母郷かな ねず

月高みはくれむ浮力のつくごとし
 シヤガールの月にビュッフェの一枯木
 海を出て水母の一つ昼月に

月氏国おもへと月に琵琶弾ず

しつかりと蛇口締め来て月の座へ

ダマスカスナイフの月が椰子の横

一疋のねりぎぬ月の千曲川

麴こうじ花いろの昼月冲天に

月渡る空朗々と虫今宵

ぬるま湯に浸りて雨降りお月さん

水面月岡芳年 月百姿展の月檜の寶藏院覗く

仲麻呂のまなざし凜と月の海

薩摩琵琶待月軒に徹りけり

芒とる少年月を迎ふ村

町内に枯木と月と銭湯と

月あるも寒さしぶとき戻り道

編笠も月を象かたどる風の盆

昼月をあふぎ海月の波枕

月浴びて夜叉のはくれん突っ立てる

浮袋並べ干しある月の庭

買物の帰りに見て来し月のこと

重くれるくわりんに月のまどかなり

月の前はばかり通る雲一つ

質蔵に月高まりぬ寺前町

仙厓の拙き月のなぐり描き

高山の月を歩ませ練り屋台

銭湯の煙突月と睦むかな

武州金澤明けて朝月松の上

月よりも慎ましきもの対ひの灯

風禍・震災かうむる人に澄める月

月の家ヒゲタ醤油の髭の屋根

●待宵

待宵の濡れ岩隠り蟹の爪

待宵の湯吞をつつむ両手かな

●名月 今日の月 十五夜 満月 望月 望の夜

供へらる二十世紀に今日の月

今日の月三溪園の松越しに

雨止めば確かめに出て今日の月

飛石に載りて迎へる今日の月

ねず

さざ

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

鳩信

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

随笑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

ねず

寒暑

さざ

宿好

随笑

石鏡

町中の墓地ぼつかりと今日の月
顎髯のいやにちくちく今日の月

暮津
暮津

この路地に建て込む家並今日の月

暮津

十五夜の空へこぞれる糸瓜加持

ねず

十五夜三浦三崎の花暮町に灯の入りて

もも

浮かぬ空模様十五夜台無しに

石鏡

地卵の色の満月上りけり

石鏡

白帯びて満月の路地愛しきやし

石鏡

満月はいつもここより家並の間

石鏡

満月にほっとする顔寄せにけり

暮津

満月の下に睦める家と家

暮津

もうけもの雨後の望月正面に

ばら

月並みを恐れず恥じず名月吟

鳩信

天柱山闇夜転じて望の月

燕音

いちまつの望みはありてけふの月

石鏡

望の夜のかさごの煮付け甘かりき

暮津

なあなあの仲の芒と望月と

暮津

●月見 観月 月を待つ 月祭る

大寺吐月峯の二間打ち抜き観月会

燕音

月祀る芒に添えてゑのころも

宿好

観月会琵琶の音締めを襖越し

宿好

蔵店は月見名残りの芒活け

石鏡

月見だんご供えて妻の横坐り

石鏡

月見まんじゅうが食うたか一つ減る

暮津

鉛筆をいっぽん置きて月を待つ

暮津

月見まんじゅうもちもちとして月見の座

暮津

●良夜

通夜ありて良夜の句会一人欠く

ねず

家々に良夜迎へる窓のあり

ばら

庭石を二つ渡りし良夜なる

宿好

水道の雫切る音良夜なり

寒暑

寐落つまで耳を遊ばせある良夜

石鏡

明日の良夜待ち切れざれば酒無心

石鏡

良夜の足二本重ねて寝まるなり

暮津

二つ飛ぶ夜間飛行の灯も良夜

暮津

手に通す良夜のバジヤマ薄黄なる

暮津

どの家にも一つ良夜の玄関灯

暮津

良やかな家は明りが点りてこそ

暮津

良夜の本開けたところを先づは読み

暮津

良夜の本ここ迄にして寝るとせむ
●無月むげつ

箱河豚に酌みて無月の泊りかな

折角の月の供へとはなれり

重衡を弾ず無月の薩摩琵琶

蘇鉄らのずんぐりむっくり無月かな

いかんともしがたき空やけふ無月

ぬうぼうと無月の家路辿るなり

●雨月うげつ 雨名月

軽雷の飛び入りもあり雨名月

玄関に雨月の靴の匂ひして

●刀豆なたまめ

刀豆の天麩羅といふごわつけり

●枝豆

枝豆を根こそぎにしぬ佐吉多万人さきたまびと

付けたりの固き枝豆昼の酒

口中に飛ばす枝豆いい感じ

●芋 里芋 八頭やっがしら 芋の露

佳き顔の里芋を頷く子の皿へ

八つ頭馬鹿丁寧に洗はれをり

扁平になりて千切れぬ芋の露

里人の里芋作りこの家も

里芋の茎の色よき十六夜

鳶の糞里芋の葉に垂れてける

タロ芋のとてつもなきを掘る島人

あり合はせの芋の煮しめに一膳飯

妻にとり我は口きく八つ頭

芋の露面白ければ覆す

●長芋

長芋の短冊切りにひとり酌む

●衣被きぬかっぎ

衣被だまつておいてゆきくれし

衣被できればごめんこうむりたい

綺麗事どれもつまらぬ衣被

懸案の一事果たしぬ衣被

衣被剥きつゝぼやく何のかんの

ど忘れの話題弾みて衣被夫婦

衣被不義理いちいち気にしては

●十六夜いざよひ

暮津

ねず

鳩信

燕音

寒暑

石鏡

石鏡

随笑

寒暑

燕音

燕音

燕音

さざ

さざ

ばら

素抱

ねず

もも

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

随笑

寒暑

石鏡

暮津

宿好

宿好

さざ

燕音

燕音

燕音

宿好

寒暑

石鏡

暮津

十六夜やギターケースの胴くびれ

さざ

十六夜の小腹に納む里の栗

燕音

十六夜の宿の枕を均しけり

燕音

十六夜の宿の障子を走らす

燕音

里芋の茎の色よき十六夜

燕音

十六夜の生節の血合いつつき食ぶ

暮津

●希典忌

だだこねて木馬に乗る子希典忌

暮津

●子規忌 糸瓜忌 瀬祭忌

糸瓜忌に出来て俗だが気に入る句

鳩信

瀬祭忌発句にもある著作権

宿好

糸瓜忌の鶯谷で落ち合ひぬ

随笑

瀬祭忌天気どんどん悪くなる

随笑

糸瓜忌の傘立に傘十四五本

随笑

糸瓜忌の癩癩玉が破裂せり

随笑

糸瓜忌の一犬吠えれば三天吠ゆ

暮津

●鬼貫忌

鬼貫忌平語しつかり使はねば

もも

●霧 朝霧 夕霧 夜霧 霧冷 霧らふ 霧雨

霧の香

駒草を囲ふ鎖の霧傘

素抱

朝霧の汝を訪ひ声を掛くるならむ

ばら

朝湯して湯花は霧の淡さなる

素抱

シャツ通す冷氣朝霧湧き止まず

素抱

朝霧の樹間ほのぼの明るめり

素抱

蜘蛛の囀に朝霧の粒あからさま

素抱

朝霧に散歩の下駄の緒の緩し

素抱

霧の中四五歩先ゆく妻の肩

さざ

カルデラを一目たりとも霧の中

鳩信

霧の中霧に日当る一所

宿好

霧の中バスはもたもた蔵王嶺へ

素抱

霧の中ガイドお釜がある筈と

素抱

足許は草の色して霧の中

暮津

夕霧にチヨイナチヨイナの時報かな

随笑

霧冷えの肩に落ちくる樅傘

燕音

土産物屋をひやかし霧冷え宿浴衣

素抱

霧冷えの先客ひとり町宮湯

石鏡

霧籠めの朝は一際硫黄の香

随笑

霧籠めに一茶の句碑のふすばり貌

随笑

戻り湯の湯町坂がち霧にほふ

素抱

夜も更けて霧に灯ながす老舗宿

素抱

濃霧の夜壁越しにこゑ共同湯

素抱

ガタの来し下駄箱霧の共同湯

素抱

庭園灯さ霧の他に訪ふものなし

素抱

霧退くと思へば寄せて白樺に

素抱

みやうみやうと霧の乗鞍スカイライン

素抱

日雀啼き大日岳の霧霽らす

素抱

乗鞍の霧にトウヒのかくれんぼ

素抱

霧好きは一位に如かず摩利支天岳まりしてん

素抱

霧の香に八百萬神在す羽黒山

石鏡

霧の坂羽黒詣での息整え

石鏡

羽黒権現姥百合に霧ながれけり

石鏡

潜水艦霧雨隠りにその艦尾

石鏡

霧雨に箱根七湯めそめそと

石鏡

霧に頭つ岩相岩場の道ゆけり

暮津

●うすばかげろふ

翅ひろぐうすばかげろうガレの壺

宿好

●蜻蛉 あきつ 秋津 やんま 鬼やんま 銀やんま

塩辛蜻蛉

また顔にあたる狼煙のあきつかな

ばら

もくもくと投げるエースにあきつ殖ゆ

燕音

最上川あきつの止まる破れ竹瓮

随笑

天守閣あきつがこんな所まで

石鏡

安達太良山晴れてあきつを湧かす谷

石鏡

隠坊の如きとんぼが前から来る

燕音

羽化一番乗りのとんぼと出合ひけり

随笑

湧水見てサナエトンボに出会う径

随笑

とんぼ飛ぶ泥亀町でいきりょうとはこの辺り

暮津

泥亀町吾が前をゆく鬼やんま

さざ

張り切つてやんまがやんま追ひゆけり

さざ

時国家ぐんと高むや鬼やんま

ばら

鬼やんま青の洞門抜け来たる

鳩信

鬼やんま飛行高度を上げにけり

随笑

鬼やんま追い駆く目線振り切られ

寒暑

眼中に吾無きごとくやんま過ぐ

素抱

鬼やんま棲みつく山に露降りて

素抱

蓮田に潜む少年ぎんやんま

素抱

水飲むをルリボシヤンマとしておかう

素抱

塩辛蜻蛉しほからの汚れし翅しほを笑むごとく ともも
 ぎしぎしの錆しほびを塩辛蜻蛉しほから貰ひ受け 随笑
 野趣蒸ノ湯溢る出湯は塩辛蜻蛉しほからいろ 寒暑
 盆がらにあらざる秋津里に殖え 宿好
 混浴混浴の脱衣場秋津の入り来たる 素抱
 混浴は熱め折々秋津くる 素抱
 混浴のずばり入る湯に秋津来る 素抱
 足湯大釜温泉して簀の子に止まる秋津見る 素抱
 男体と名も佳き山に蜻蛉湧く ねず
 石炭紀の模型蜻蛉に秋が来て ともも
 黒塚をよぎる蜻蛉の胴焦げて さざ
 蜻蛉は翅を頼れる楽天家 さざ
 祖師堂前蜻蛉のつるむ音すなり ばら
 蜻蛉の面白がりぬ穂先の揺れ 鳩信
 沼辺より翔ちて蜻蛉の飛行艇 鳩信
 霧浴びし山の蜻蛉の羽根使ひ 燕音
 蜻蛉の訝しげなる眼に遭ひぬ 燕音
 蜻蛉の極めて人間臭き季とき 燕音
 ふらふらと頭の上にくる岳蜻蛉 宿好
 岳蜻蛉日差しの強さ知つてをり 宿好
 石ころ径霧に眼の利く蜻蛉来て 随笑
 蜻蛉も一差し舞へる能舞台 寒暑
 指立てて蜻蛉止まらず子の真顔 寒暑
 今市のそらゆく蜻蛉権現晴れ 寒暑
 上昇の蜻蛉頭を振りぐんと振り 寒暑
 蜻蛉の流さるゝ方鶏頂山 寒暑
 露天湯八丁の湯の上をくる蜻蛉にでつくわす 寒暑
 葭叢の中に蜻蛉の通り道 素抱
 この沼を往き来蜻蛉の二匹は居る 素抱
 蜻蛉捕パお手本の忍び足 素抱
 蜻蛉がお手本人力飛行なる 素抱
 蜻蛉の好みて止まるダンボール 素抱
 孫六湯山の蜻蛉は岩場好き 素抱
 木道に人に蜻蛉の寄り易し 素抱
 序幕から蜻蛉が飛んで村芝居 素抱
 そこ動かぬ蜻蛉にたうたう根負けして 石鏡
 蜻蛉の咄嗟に我を交はしゆく 石鏡
 蜻蛉に無き石段が吾にあり 石鏡
 蜻蛉飛ぶ定期航路のある如く 暮津
 蜻蛉つるむ音のかさこそかさど随つ 暮津

蜻蛉を捕ふにへんな手つきかな

暮津

●秋の蝶 秋蝶

秋蝶のあれあれとほる仁王門

宿好

秋蝶沿ふ仁和寺の塀長く長く

宿好

段きたのぼる気多若宮の秋の蝶

素抱

ぶらさがり止まりが好きで秋の蝶

石鏡

気をもませながら秋蝶まだ止まらず

暮津

セセリ蝶ねずみの如き貌をして

暮津

せせり来て吾がズボンまでせせる蝶

暮津

●木の葉蝶

山道の腐れ木株に木の葉蝶

素抱

●秋の蠅

火山弾上にぬくもる秋の蠅

随笑

吉田牧場たか秋の蠅集る牧牛見せ呉れし

石鏡

●蜩蝶

しじみ蝶一つは寂し二つある

寒暑

地に沿ひて石ころ色のしじみ蝶

寒暑

しじみ蝶庭の何處かに飛んでゐる

寒暑

視野に入り視野を出でゆくしじみ蝶

寒暑

しじみ蝶止まるまで見て草っぱら

寒暑

父郷 葬送会葬の人に躑あきゆくしじみ蝶

素抱

前後しててんで二舞のしじみ蝶

素抱

しじみ蝶捕らむとすれば擦り抜けて

素抱

しじみ蝶降り立つほどに道露けし

石鏡

しじみ蝶躍り越ゆものある限り

石鏡

しじみ蝶日向の端から端へ飛び

石鏡

しじみ蝶股間を抜けてゆきにけり

石鏡

蜩蝶あちらではたはたこちらではたはた

暮津

蜩蝶はたはた舞へば書き割りめく

暮津

蜩蝶せせる一日始まりぬ

暮津

蜩蝶せせり疲れの無きものか

暮津

●秋の蚊 あぶれ蚊

ぺしやんことなりし秋の蚊塵と捨つ

寒暑

秋の蚊を打ちて血しぶき浴はたえぶ膚

石鏡

足揃え搏たれし秋の蚊なりけり

石鏡

暖房を焚けばあぶれ蚊のこのこと

石鏡

力んでは秋の蚊をまた打ちもらす

暮津

秋の蚊の抛なん所なく隅すみにをる

暮津

刺すことの今旺盛な秋蚊とも

暮津

秋の蚊を振り切りしかと辺りみる

暮津

●秋簾

見当のつくこゑ過ぎぬ秋簾

素抱

秋簾五枚連ねて真宗寺

素抱

外とに起こることは外とのこと秋簾

暮津

●秋扇あきあふぎ

書きあぐねをれば秋扇手にとりて

ばら

迷へども持つて出かけぬ秋扇

鳩信

扇面のをんな艶たる秋扇

寒暑

秋扇いっぽん持ちて通院す

暮津

●秋袷

仁和寺の御室で降りぬ秋袷

宿好

●秋彼岸

お供物に両手塞がる秋彼岸

暮津

線香を身寄りの墓にも秋彼岸

暮津

認知症とはけつたいな秋彼岸

暮津

言替えても痴呆は痴呆秋彼岸

暮津

判りにくき墓地の地図見て秋彼岸

暮津

●おくんち

長崎くんちくんちくんちと鉦囃す

燕音

シーボルト挿し絵に遺す鯨曳

燕音

おくんちのカラクリ鯨潮を吹く

燕音

小鯨の前曳祭まえびきの子がわーい

燕音

繰り出すは屋台鯨の親爺舟

燕音

祭足袋本石灰町 御朱印船ばたばた御朱印船を曳く

燕音

印度人の傘持御朱印船上に

燕音

日本の秋一見の遠眼鏡

燕音

阿蘭陀万才手書きの髭も爽やかに

燕音

あっぱれの阿蘭陀万才秋天下

燕音

●薄念仏会

遊行寺清浄光寺 (遊行寺) 薄念仏会のすすき光沢持ち始む

燕音

薄は穂に清浄光佛在す寺

燕音

薄念仏唱ふや鏡縁澄むほとり

燕音

*鏡縁は時宗固有の内陣の板の間で極楽の池を象徴的に表す

燕音

お上人手ずから賦算念仏会

燕音

*賦算はお札くばりのこと 二南無阿弥陀仏決定六十万人

燕音

艶ありて甕の薄も念仏も

燕音

白芙蓉しらばな如常住にじょうじゆのほとけなり

燕音

花すすきじゆつぽう十方衆生の願ありて

燕音

藤沢山野とうざくさんぶだうに色のり初めぬ

燕音

足わろき上人さんの庭踊

燕音

花すすき揺るゝがごとくおねんぶつ 燕音
念仏と薄と踊る一遍と 燕音
上人の虫音のごときおねんぶつ 燕音

●面掛行列

長谷 御霊神社(鎌倉権五郎神社)の面掛行列
江ノ電をよぎり出発面掛衆

面掛行列ひようと「天狗」の先祓い 燕音

*面掛行列は「仮面風流」を今に伝える文化遺産鎌倉権五郎景政
の命日に当たる例大祭は神輿渡御に面掛衆が行列するので知られ

神輿渡御を待つ間「鼻長」一服す 燕音

*面に十面あり「爺」「鬼」「異形」「鼻長」「烏天狗」「翁」「火吹

男」「福祿」「阿亀」「女」なり

「鼻長」をわし鼻が見る面掛祭 燕音

面掛の「天狗」の高下駄のつしし

「女」が孕み「阿亀」に団扇風 燕音

鎌倉に裏面史ありぬはらみつと 燕音

*はらみつとは面掛衆のうち、おかめは妊婦の風態に仮装し、大
きな腹を抱えながら歩行する。それゆえ、この行列を「はらみつ

と」と称したこともある。田楽によく出るはらみ女の流系と見た

のであるが、里伝によると、源頼朝が甘縄の非人の娘を懐胎させ

たので、年に一度、彼らに無礼講の機会を与えた、その名残とい

い、近年まで「非人面行列」とも呼んでいた

先祓い「天狗」ぐらつくこと幾たび 燕音

をさな子の鎌倉囃子に乗り「翁」 燕音

面掛けの一戸一役里祭 燕音

●秋分の日

金澤八景駅 懐古
秋分の木造駅舎の日章旗

鳩信

●竜淵に潜む

レントゲン写真
龍淵に潜む透視図医師と見て

もも

龍淵に潜む面持ちして診られ

龍淵に潜みとろんと紹興酒

龍淵に潜む好機を逸しけり

龍淵に潜む秘湯に四肢伸ばし

肩のツボケンセイ
龍淵に潜む肩井指圧して

龍淵に潜む色愛で紹興酒

龍淵に潜む槽より豆腐揚ぐ

龍淵に潜む色愛で紹興酒

●美術の秋 二科展

上野周辺
ずぼらな吾東京に出て二科を観る

素抱

美術の秋上野にぼんと降り立ちて

石鏡

●蛇穴に入る 秋の蛇

そそくさと蛇穴に入る海蔵寺

秋蛇に遭ひし女の気色ばむ

もも
随笑

●穴まどひ

こんなのと母が手揚げ穴惑ひ

穴惑大日如来につこりす

かえるで
楓の穴惑めく走り根よ鳩信
鳩信
宿好

穴まどひ間が悪さうに消えゆけり

穴惑前にしどぎまぎしてゐる妻

素抱
石鏡

●雁 かりがね

顎引いて太棹雁のわたる空

連れ立ちて屏風の裾より雁どち

燕音
寒暑

●仙入

森若葉してセンニューの高調子

燕音

●雁渡し

四十五歳で口取りに
人足に定年ありて雁渡し

石鏡

草の上は空に直結雁わたし

暮津

●燕帰る

秋燕を見たりのこゑに振り返る

燕音

秋燕濁りやまざる最上川

随笑

ホテルニューグランド前飛ぶ秋つばめ

寒暑

秋燕の翼返すや伊豆相模

石鏡

●曼珠沙華 彼岸花 死人花 まんじゅさげ

野に出でてよりの水勢まんじゅさげ

ねず

まんじゅさげ蹴散らかしゆく小鬼あり

さざ

まんじゅさげその朱ヶ飛んで宇佐八幡

鳩信

しがらみの地縁人縁まんじゅさげ

宿好

蝶せせる薬わなわなとまんじゅさげ

宿好

まんじゅさげ生白の茎によきによきと

宿好

懐古
まんじゅさげ此処を黄泉路と違へ咲く

随笑

金澤山弥勒院跡まんじゅさげ

随笑

高麗・巾着田
散らばつて散らばつて日とまんじゅさげ

寒暑

武州 金澤山 弥勒院称名寺
薬わたる一匹の蟻まんじゅさげ

寒暑

当山は真言律宗まんじゅさげ

寒暑

まんじゅさげ菟まり咲けば墳めきぬ

寒暑

月光に色を奪られてまんじゅさげ

素抱

石火矢のここに炸裂まんじゅさげ

石鏡

まんじゅさげ薙ぎて悪餓鬼健在ぞ

石鏡

いづれ行く彼の世の下見まんじゅさげ

暮津

悪たれは何處にでも居るまんじゅさげ
彼岸花彼岸の色を薄めけり

暮津
ばら

彼岸花一本咲きぬ宿外れ

燕音

彼岸花ツンツカツンと咲きにけり

寒暑

彼岸花咲きぬし場所を事細か

暮津

曼珠沙華念彼観音力以て

ばら

長雨に火力衰ふ曼珠沙華

ばら

日豊線爪先立ちに曼珠沙華

鳩信

曼珠沙華突撃バンザイ花にして

鳩信

墓域より人家へ飛んで曼珠沙華

石鏡

描線のみな生きてゐる曼珠沙華

暮津

曼珠沙華先づは一輪挿にして

暮津

藪裾に燃え尽きをりぬ曼珠沙華

暮津

ポキポキと目で折り行きぬ曼珠沙華

暮津

曼珠沙華疾うに御首級あげられて

暮津

死人花薬は変じてむらさきに

素抱

●鶏頭 鶏頭花

鶏頭花

曲ろくに鶏頭明り忌を修す

もも

はつはつと山車倉の上に鶉鳴ける

もも

内祝鶏頭の茎色づきて

もも

鶏頭の数にこだはるすさびごと

さざ

惘然たる鶏頭に似て史の歌

鳩信

鶏頭の今年の種類を見せに来る

鳩信

鶏頭の頭の塵払ふ雨来たり

燕音

鶏頭の暮るる暮るといへば暮れ

燕音

鶏頭の小火出す火の見櫓下

随笑

鶏頭の駈けだしさうな若冲忌

随笑

火の見の下槍鶏頭の小火ありぬ

随笑

鶏頭の頭化け物めく遠野

寒暑

鶏頭花空気違へば彩違ふ

寒暑

鶏頭の随筆何とかまとまりぬ

素抱

種子零す鶏頭いやはやひどい形

石鏡

喜多方の蔵もつ宿の鶏頭図

石鏡

墓を守るはらからも絶え鶏頭花

暮津

鶏頭を引っこ抜くとき土けむり

暮津

鶏頭のいたくうらぶれ霧雨に

暮津

鶏頭のとつと昏れてしまひけり

暮津

●葉鶏頭 かまつか 雁来紅

雁来紅

かまつかに出陣の下知下ることし

ねず

かまつかの旭にむせぶ斜面畑

さざ

かまつかの錦の御旗振るごとし

鳩信

かまつかの彩なかなかに鄙ぶ寺

宿好

かまつかの紅蓮を見栄とおもふ日も

随笑

かまつかのてんでこ舞の風の日よ

随笑

かまつかの赫つとイスラム原理主義

随笑

かまつかや報道一ト日テロ一色

随笑

かまつかに殴りかからむばかりの雨

石鏡

かまつかのこれが限度といふ紅蓮

石鏡

かまつかの繪手紙暫し繪のちから

暮津

幅跳の助走路に沿ひ雁来紅

ねず

雨のあと直ぐ日が射して雁来紅

宿好

一段と空深くなり葉鶏頭

燕音

葉鶏頭勢いづいて来たりけり

随笑

魂棚の賑やかしとて葉鶏頭

素抱

●夜顔の実

夜顔の実のたんと生り何と野暮

暮津

●芙蓉の実

閑日の昨日今日明日芙蓉の実

宿好

●早稲

早稲の香の沸きかへる中巡礼道

宿好

●秋の海

秋の浜

秋の浜流木を目に収むのみ

寒暑

御用邸巡查眺むる秋の海

素抱

●氷頭膾

ひずなます

独善は他にも及ぶ氷頭膾

燕音

生きあせり無くもがなとも氷頭膾

素抱

●秋刀魚

さんま 初秋刀魚

妻と吾と旬の秋刀魚を二等分

宿好

酸橘得しされど秋刀魚は旬ならず

素抱

はるばると秋刀魚は南下この刻も

石鏡

ここ残し秋刀魚の食べ方知らぬ妻

石鏡

初秋刀魚世話焼き口調殖ゆ妻と

石鏡

秋刀魚食ふ敢えて値段は聞かずにおく

暮津

秋刀魚の骨代はって外し遣りにけり

暮津

秋刀魚焼き年金暮し帳尻合ふ

暮津

●鰯

氷ごと背黒鰯を揚げて漁仕舞ひ

石鏡

●鰯雲

いわし雲天龍寺船穹駈けて
一切の小細工無用いわし雲

宿好
寒暑

●鮭 はららら

独り酌む筋子にたうたうたらりの灯
ブナ鮭の水かつたるく打ちにけり
はららごに伍してかがよふ飯の粒

さざ
ばら
ばら

鮭トバでちびりちびりと男山

素抱

●鱸

鱸跳ね天羽漁協のトロ箱に

石鏡

●鰯

鰯飛んで深川鼠の川面かな
躍る身をあびせ倒して鰯墜ちぬ
逆光の鰯の間髪入れず跳ぶ

ばら
燕音
随笑

栈橋の先に鰯跳ぶ弃天屋

随笑

朝の入江ええ恰好して鰯飛べり
残照の退く中鰯でも見にゆかん
広がる鰯の水輪のゆき着く岸

素抱
素抱
素抱

朝の川鰯の一つも跳ばぬかと

石鏡

鰯跳ばぬ川を淋しみゐたりけり

石鏡

橋渡り了ふまでに鰯跳ねたまへ

暮津

●鯨

砂蹴つて鯨の子姿くらませり

もも

だぼ鯨の無茶苦茶走りまたしたり

もも

糸を垂るそばから鯨が掛かりけり

素抱

自転車の遠乗りをして鯨の海

素抱

江ノ電の一寸走って鯨の海

石鏡

●鯨釣

鯨を釣る舟が出てゐる大日向

さざ

鯨釣の装備の一つ烏龍茶

随笑

鯨を釣る頭上を鳶の胴ながれ

石鏡

琵琶島の端にて鯨のよく釣れる

石鏡

鯨釣の君らの今日の釣果はと・・・

石鏡

釣人の呟き鯨に落としけり

石鏡

鯨は水底で釣師は岸辺で虎視眈々

石鏡

水底の冥さ帯ぶ鯨釣られたる

石鏡

●根釣

根釣人

根釣して葉山の鳶に啼かれける

素抱

草叢にラジオ響かせ根釣人

素抱

根釣人脳梗塞のことをぼつり

素抱

突堤にリハビリ兼ねて根釣人
 突堤に半日ねばる根釣人
 根釣人帰り支度の函一つ

素抱
 素抱
 素抱

● 鰻かじか

湯田人の朋もてなしの鰻揚げ
 平皿に呆と口開け揚げ鰻

素抱
 素抱

● 竹の春

嵯峨竹の春にしてなほつづく径
報国寺
 五輪塔片寄せられて竹の春

宿好
 石鏡

● 草の花

草の花氷室名残りの上り坂
 草の花鉄路のつくる三角地
 道形に風のくるなり草の花
 草の花氷河すさりし跡に充つ
 野草観察みんなほほうとシモバシラ
 草の名はそこそこ虫の名はぜんぜん
 土盛りせしそこが山頂草の花
 句作りに博識要らずイヌコウジュ
 半歩でもともかく前へ草の花
 ずるずると日の経つばかり草の花

ねず
 もも
 さざ
 ばら
 素抱
 素抱
 石鏡
 石鏡
 暮津
 暮津

● 秋海棠しゅうかいどう

精一杯立ってゐるなり秋海棠
 関節を秋海棠も持つてをり
 秋海棠思ひ至るは相田サク
 沢沿ひにのぼり満山秋海棠
 秋海棠情にほだされ易く生れ
 雨撥ねて葉ばかり大き秋海棠

素抱
 素抱
 素抱
 素抱
 素抱
 素抱
 暮津
 暮津

● 紫苑しをん

祇王寺はその紫苑の右を行け
 遠来を寺の紫苑にねぎらわれ

宿好
 素抱

● 蘭

ラン棟に舌噛みさうなランの名も
洋蘭展
 蘭展へ軽き足取り銀座まで
 妃殿下の出品の蘭とつつきに
 蘭展の蘭の招きにあづかりぬ
 洋蘭の種を明かさぬ咲かせ方
 蘭展の客層もまた見ものなる
 奇天烈も奇天烈蘭の仲間とよ
 場違ひのやうにおもへる蘭展に

鳩信
 寒暑
 寒暑
 寒暑
 寒暑
 寒暑
 寒暑
 寒暑
 寒暑
 寒暑

洋蘭展鼻が華やぎ始めけり
蘭展出で銀座通りの人となる

寒暑
寒暑

●釣舟草

釣舟草霧に溺るる女坂

もも

釣舟草水は百代の過客にて

暮津

●松虫草

風混める大谷地をゆく松虫草

燕音

木道に人影を見ず松虫草

燕音

松虫草霧来る方を知れるなり

燕音

風之道即ち松虫草の道

宿好

松虫草ひるがへるここ天界か

暮津

●吊鐘人参

吊鐘人参羽虫においでおいでせり

随笑

●竜胆

りんどう 濃竜胆

随笑

りんどうのほとり真つ黒火山弾

ばら

りんどうに霧のわいわい押し寄せぬ

ばら

サロマ湖の空冷え来たり武者りんどう

燕音

武者りんどうこぞりこぞりて砂州に咲く

燕音

監視員詰所の前の濃りんどう

随笑

八幡平
エゾオヤマリンドウ秋を告ぐ峠

寒暑

畚岳遠望りんどう咲く峠

寒暑

熔岩原のりんどうしゃしゃりこしゃんと咲き

暮津

●鳥頭

とりかぶと

鬼女祀る堂出て日暮とりかぶと

ねず

●コスモス 秋桜

形ばかり長けし子に似てコスモスは

ねず

秋さくら川を優しく曲げにけり

ねず

コスモスに須弥山見ゆる日もあらむ

もも

コスモスのそこを折れ穂高町

もも

コスモスの脇をぶると馬体過ぐ

もも

コスモスの空のあなたに祝儀あり

さざ

コスモスのやうに浮かれてゐたき日や

さざ

コスモスの縁を掴みて虻沈む

さざ

私語多きコスモスを風咎立

さざ

コスモスの汚れ下葉の縮れ気味

さざ

コスモスの横に吾が顔ぶれてゐる

さざ

祖母山の裾のコスモス高かばい

鳩信

コスモスや奥羽に廻る碧梧桐

鳩信

コスモスの人気なければ昇天す

鳩信

コスモスの佳人の如きたたずまひ

鳩信

コスモスに遠ざかりゆくをみなごゑ

鳩信

左京区の雨のコスモス高う咲く

宿好

コスモスの風にのんのん舟着場

随笑

コスモスの空へ風船離せし子

随笑

あきらめがつきコスモスの吹かれさま

随笑

なほつづくコスモス街道ナイスデイ

寒暑

コスモスの雨来ぬうちの器量佳し

石鏡

コスモスにぼろんぼろんと雨の降る

石鏡

コスモスに高原の日の乗つてをり

暮津

コスモスの上に市街地展け見ゆ

暮津

コスモスに配色といふ一語あり

暮津

● 吾亦紅 われもかう

くりくりの空があるなり吾亦紅

さざ

吾亦紅指で突くごと風の出で

ばら

吾亦紅ミロの構図を想ひをり 高峰温泉

燕音

混むでもなくまばらでもなく吾亦紅

宿好

吾亦紅霧の冥さを帯びつゝあり

随笑

吾亦紅独りごころを通す黝

随笑

● 杜鵑草 ほととぎす 油点草

杜鵑草手にし座興に啼かせみぬ

随笑

紅毛もすなる俳諧杜鵑草

暮津

陶片の出でくる畑油点草

暮津

● 雄ひじわ 雄日芝 相撲草 力草

相撲草強く吹かれて立ち直る

ねず

雄日芝の引張り返すちからかな

さざ

雄日芝にくさやのにほひ移りけり

さざ

相討ちのごとく雄日芝雨に臥せ

さざ

雌日芝は引き雄日芝は引っこ抜く

燕音

雄日芝のすれっからしの穂先

燕音

雌日芝に降り癖つきぬ野辺のそら

宿好

雌日芝を抜く寄り道の手始めに

寒暑

雄日芝はいつか芒になりたくて 飛弾国府・清峯寺

寒暑

力草円空佛見に寄らむ

素抱

雄日芝に雨透きとほり透きとほり

石鏡

雄日芝はざつくばらんを通しけり

石鏡

● 鼠の尾

頼りなき日のまだ差せる鼠の尾

さざ

● 狗尾草 えのこくぐさ

えのこくぐさ えのこ草 猫じゃらし

相俟つてゑのころ草のすがれそむ

さざ

脚力をつけんとゑのころ草の道

鳩信

ゑのころの光れる試歩は朝の内

鳩信

月祀る芒に添えてゑのころも

宿好

ゑのころはうぶで真青で澄みきるそら

随笑

えのころ 狗尾草の向きを一つに揃へたし

さざ

えのころ 狗尾草の魂たまのぬげがら枯月夜

鳩信

風が風追ひ越しゆけり狗尾草

石鏡

狗尾草も庭草の裡愛で暮らす

石鏡

狗尾草濡れぬやう穂の出来てをり

石鏡

銹錨狗尾草の穂の古りて

石鏡

擦り寄りて馴れ馴れしいぞ狗尾草

暮津

犬の名と猫の名ゆかりのゑのころ草

燕音

イヌビエとも相性のよきねこじやらし

寒暑

湯元の辺穂の真つ黒な猫じやらし

素抱

曇日のひかり押さえてねこじやらし

石鏡

除けきれぬ雨の小道の猫じやらし

石鏡

金網の外にも内にも猫じやらし

石鏡

ねこじやらし老若の穂の入り混じり

石鏡

狗尾草英語にては
英名は緑の狐のしっぽ草

燕音

えのころ草コップに挿せば茎交叉

寒暑

駆け足で雨くるアキノエノコログサ

素抱

● 風船葛 ふうせんかづら 草風船

風船かづらぼんやりと日を過ごしをり

燕音

風船かづら祖霊送りも済ませしよ

宿好

目の馴れてふうせんかづらの在りどころ

随笑

褒貶はふうせんかづらのあなたなる

随笑

ふうせんかづら唯見てゐてはつまらない

素抱

鉢植えの蕎麦屋の風船かづらかな

暮津

色古りて風船かづらにも老境

暮津

草風船いつそ昔のまゝがいい

暮津

ゆつくり枯れ草風船の風流は

暮津

● 露草 青花

眺み見る露草の露鳴りさうな

もも

青花を摘むとき露が手に当り

素抱

引く草がみんな露草なららくちん

暮津

露草がひよろりと長けて命日来

暮津

● 蕎麦の花

蕎麦の花びくくんと雨受けて

ばら

蕎麦の花はや戻りてよそよそし
 ●糸瓜へちま

十五夜の空へこそれる糸瓜加持
 揃へ脱ぐ中に長靴糸瓜加持

糸瓜吊る茎の付け根のもつこりと

来宅の途次の糸瓜の棚のこと

子規庵の屋根這ふへちま蔓八方

子規庵の糸瓜こづきて立去らむ

●瓢ひょうたん

「中原道夫俳句日記」惠送受く

ひょうたんから俳諧を出す粋なひと

●鬼灯ほほづき

酸漿

鬼灯を雨に打たせて船世帯

清方のほづきの絵のほづき鳴る

光照寺

良寛の桑門の道酢漿草より

楠木清方

ほづき揉む女の手許よく描けて

前後して友の逝くなり蟲ほほづき

市立ちて一鉢なんぼの鬼灯売る

亀虫の一団鬼灯荒らしに来

●唐辛子 鷹の爪

唐辛子ひとりよがりの癖が出て

身勝子を通してきたる唐辛子

冬兆すスパゲッティに鷹の爪

朝市の地べたを覚ます鷹の爪

万願寺とうがらしとや火恋し

●紫蘇の実

紫蘇の実を好物として食細し

●生姜

晚酌の松魚にちよんと擦り生姜

●貝割菜

貝割菜整列足踏みせるごとし

●間引菜 菜を間引く

おろしがね
 下金色の夕日に菜を間引く

おろぬきどき大根台地を抜けにけり

間引菜に昼酒の箸上げ下ろし

●隠元豆 いんげん

どぜういんげんこまめに摘んで生身魂

隠元豆摘みかか問へば婆むむと

いんげんの白花むつと曇りづめ

紅花隠元咲けば秩父に盆が来る

随笑

ねず

もも

さざ

ばら

随笑

随笑

随笑

ねず

宿好

寒暑

寒暑

寒暑

暮津

暮津

もも

さざ

随笑

素抱

石鏡

寒暑

素抱

素抱

ばら

もも

さざ

寒暑

ねず

ねず

ねず

もも

宿好

いんげんの季節の三色御飯かな

素抱

●胡麻

胡麻餡の油湿りの月餅食ふ

寒暑

●玉蜀黍 とうもろこし もろこし

ただ甘き玉蜀黍を蔑めり

随笑

茹で上がるもろこしの黄は僧衣の黄

寒暑

湯けむり上げ和賀流の里のたうもろこし

素抱

開戦シーンポップコーンの香が流れ

暮津

●葛嵐

葛あらし葛の横腹見せにけり

素抱

●稗 ひえ

稗田に交りて稗のまんめんじん

随笑

●桃

この水気みずけ頬つぺた落つこちさうな桃

燕音

福島ふくしまの桃の夕焼けどき長き

随笑

桃剥くと妻のむっちりせる上肢

暮津

香煙の立ちのぼる中匂ふ桃

暮津

●秋果

コンビニの老人向けに売る秋果

石鏡

●梨 洋梨

丸顔の多摩川梨の送り主

さざ

酒・飯・梨うまくて人間好時節

さざ

供へらる二十世紀に今日の月

さざ

そこそこの梨買うて来て褒めらるる

鳩信

二軒目の八百屋に在りぬラ・フランス

鳩信

人物評ざつくばらんに梨の味

燕音

西洋梨ごろんと一つ静物画

燕音

洋梨のおいど優しきものの一つ

宿好

梨貰ひ大きい方をのさんへ

随笑

梨を剥く皮のぶらぶら定年後

随笑

梨といふ天然ものの水の味

随笑

訃報聞く梨の皮剥く音の中

素抱

二人して食ふには大き梨折半

石鏡

梨を剥きその一片に楊子立て

石鏡

梨なんぞ剥いて無聊の手を濡らす

石鏡

洋梨の油絵掲げ洋菓子店

石鏡

梨重たけれど甘味の保証無し

暮津

洋梨の器量も含めし値段なり

暮津

●葡萄

炎帝に葡萄の種を抜かれたる
 もも
 口もとにぶだう運ぶは蟹めくも
 さざ
 くちびるに残るぶだうの皮の渋
 さざ
 ひろがれり葡萄の味の交響楽シンフォニー
 ばら
 ぶだう酒のやうに日差しの冷えて来し
 ばら
 ぶだう食ふ渋ある故の甘味なれ
 鳩信
 小粒なる葡萄摘むに千手欲し
 燕音
 ちまちまとよく抓みしよぶだうの皮
 随笑
 ぶだう食ひ見合はす顔のちよと酸っぱ
 寒暑
 黒ぶだう閻魔の舌となりにけり
 寒暑
 ぶだう一粒地球のやうな愛しさに
 暮津
 つまむ手のひつきりなしに夜のぶだう
 暮津
 このぶだう旨し笑顔を御礼とす
 暮津
 おほらかに露の凝りしが葡萄とも
 暮津
 昇天の心地ぶだうの一粒に
 暮津
 曰く言ひ難しぶだうの果肉とは
 暮津
 口皺の深々ぶだう食うべけり
 暮津
 ●木犀 金木犀
 唐突と云へば米屋の金木犀
 石鏡
 また一寸行つて金木犀の家
 石鏡
 金木犀腐くたしてふ雨なかりけり
 石鏡
 金木犀零れ土塀の瓦に跳ね
 石鏡
家人の云へる
 金木犀掃く身にもなつて下さいと
 石鏡
 日々通る靴音日々散る金木犀
 石鏡
 金木犀台無しにする雨ならめ
 暮津
 紙飛行機木犀の香によく飛べり
 ねず
 木犀のかをる出鼻を雨叩き
 ばら
 木犀の花の付き方はと見れば
 ばら
 木犀に頭すつきりする机辺
 ばら
 木犀の例へて云へば深情
 燕音
 木犀のこまごま蓄むこと一途
 宿好
 街騒に木犀零れ初めにけり
 宿好
 ご町内木犀の香のつなぐ路
 宿好
 おのが香に木犀我を忘れたり
 随笑
 降り出して木犀我に返りけり
 随笑
 木犀の家木犀の家隣
 随笑
 あり余るもの木犀の香と時間
 随笑
 木犀や同窓会に出向く道
 素抱
 木犀も記憶も薄るるばかりにて
 素抱
 くだくだしき木犀の香に突っ込みぬ
 石鏡

木犀の花屑カレー粉めく散歩
木犀を散らして夜間飛行音

石鏡
石鏡

●爽やか さやか 爽涼

デコ絵付け関羽の髭のさはやかに

ねず

栄町 阿蘭陀万才
阿蘭陀万才手書きの髭も爽やかに

燕音

初孫 美雨 誕生
飲みしやぶる爽やか赤ちゃんあくびする

燕音

船頭の地下足袋さやに舟下り

随笑

遠野民話聞きぬる両の耳さやか

寒暑

指圧爽やか突手柳手拍打叩打

素抱

屋台曳き廻し
御所車金具さやかに大八台

素抱

安達太良山別称
爽やかに土地人の云ふ乳首山

石鏡

岳父
長生きしてさやかに使ふ象牙箸

暮津

靱殻枕爽涼の声拳げにけり

暮津

風爽やかピザは高原野菜入り

暮津

●冷やか 秋冷 冷ゆる ひやつく

引声念仏畳めつぼう冷ゆるかな

ねず

屯田兵絵巻冷ゆ手をさすりつつ

ばら

ぶだう酒のやうに日差しの冷えて来し

ばら

投函の小銭ひやつく共同湯

燕音

お茶の実がしんしん冷ゆる高山寺

宿好

風冷えて蕎麦うまき日の上根岸

随笑

ひやつく日笠森おせんに逢ひそな辻

随笑

柿冷ゆるそんな季節となつてをり

随笑

冷え込みのかう強ければ鴟も来ず

随笑

ぐんと冷え今日着るものに大わらは

随笑

膝小僧冷えて来たれば酒支度

随笑

出あいがしら朝の冷え込み口にする

随笑

秋冷のさし込む膝を二タさすり

素抱

●秋の水 秋水 水の秋

林間にたまりては干ぬ秋の水

寒暑

いずるさん
出流山一足早く水の秋

素抱

水の秋石樋渡す江名子川

素抱

鯉一転秋水を遡るあり

素抱

シナノザサ秋水音もなく流る

素抱

尿管は腎臓を出て水の秋

石鏡

●水澄む 川澄む

水馬総出で水を澄ましをり

ねず

澄み澄みて水も心も方円に

宿好

青松に金閣の金ン飛ばしけり

宿好

水澄める宗猷寺町たもとほり 素抱
 古川の町貫きて川澄めり 素抱
 白樺のほとりをながれ水澄めり 素抱
 屁理屈の一つもなくて水澄める 石鏡
 山はそのあるべき姿映す水 暮津
 葦の間の方寸の水澄みあたり 暮津
 ●十月 素抱
 ■十月 素抱
 十月の日の温み程ハムスター 寒暑
 十月の日の入る後部座席占め 寒暑
 十月の催しものも全て果て 石鏡
 鳩小屋に十月の砂敷き込んで 石鏡
 ●赤い羽根 愛の羽根
 赤い羽根赤信号と向き合うて ばら
 上野駅出て直ぐ共同募金のこゑ 燕音
 赤い羽根つけて上野の森に入る 燕音
 人混みに巻き込まれゆく愛の羽根 寒暑
 ●秋の日 秋日 秋光
 料亭の一繋舟に秋日差 さざ
 虫一つ水平飛行秋日中 さざ
 秋日差し湯釜水釜涸釜に ばら
 小刻みに蠅の向き変ふ秋日中 ばら
 岳樺幹の阿修羅に秋烈日 ばら
 くわりんの実なりし秋光集むるは 燕音
 とりすます陶器のポット秋日差 燕音
 赤松に秋の陽赤と鹿苑寺 宿好
 方形に秋の日容るる石ノ庭 宿好
 化野嵯峨野の人肌ほどの秋日差 宿好
 秋の日にカキノ木ダマシといふ樹木 宿好
 秋の日にぬくむ渡しのごろた石 随笑
 片づけてはならぬ机の物に秋日 随笑
 混浴の五人に秋日あけすけに 素抱
 秋日受く額うつすら膩じみ 素抱
 栗材の台輪屋台秋日差す 素抱
 辻々に秋の日を浴み秋葉さま 素抱
 とりとめなく秋の日注ぐ草っ原 石鏡
 湯立神楽日に日に秋の日は透きて 石鏡
 二本松十萬石の秋日和 石鏡
 ユーカリにつれなく落つる秋日とも 石鏡

秋日中手をもてあます手長猿

●秋晴 秋日和

秋晴のポニーの鼻をまさぐる子

秋晴れの日の子規庵のガラガラ戸

揚げコロッケ油噴きゐる秋日和

秋晴れのヒバを降りくる猫の爪

秋晴れの天守閣より生徒のこゑ

秋晴れにちよつと自慢の出来る花

典型的秋晴れ球形ガスタンク

秋晴をだうかうもなく家に居り

●秋麗しゅうれい 秋うらら

秋うらら河童と馬コの物語

秋うらら山辺の寺の一位垣洞雲院

秋麗ら眼にせる白樺一本目

秋麗の宮司は佐野家湯立舞

●秋高し 天高し

けふ殊に天高けれど家に居む

天高く法螺貝吹けりテロ退治

天高くからくり繰れる布袋台

看取るもの看取らるるもの天高し

●秋の空 秋空 秋天

方丈に鯉の一ト跳ね秋天下

秋空に鳶の打つたる感嘆符

命蓮の法力使ふ秋天下

日田杉のずんと高むや秋の空

あっぱれの阿蘭陀万才秋天下

龍舞のくねり始めぬ秋天下

赤ん坊をあづかる秋の空のもと

最上峡秋天を抜く土湯杉

湯花咲く湯川のうへの秋の空

秋天下ポケット押え探しもの

布袋高山宵祭からくり神髓見する秋の空

秋空へ打つてこどもの鬨鶏樂

秋空にジラフ仕立てのトピアリー

秋天にかざし獣医の注射針

秋空になすりつけたるやうな雲

自転車のブレーキキュッと秋の空

●秋澄む 空澄む

ゑのころはうぶで真青で澄みきるそら

石鏡

さざ

随笑

素抱

素抱

石鏡

暮津

暮津

暮津

寒暑

素抱

素抱

石鏡

さざ

随笑

素抱

石鏡

ねず

ばら

鳩信

鳩信

燕音

燕音

燕音

随笑

随笑

寒暑

素抱

素抱

素抱

石鏡

石鏡

暮津

随笑

秋澄みて一連なりの山のいろ
空の澄み一つとつても奥会津
大鳥毛真澄みの空に投げ渡し
空澄むと旅する定年万万歳

●秋の雲 秋雲

秋雲の移るひ易く鶴ヶ城

石鏡

●山粧ふ 粧ふ山

粧はず俵藤田の唐沢山

ばら

大佛の夢のお告げに粧ふ山

鳩信

山化粧ふケシヨウヤナギも化粧して

素抱

安房峠平湯温泉 神の湯まだら模様化粧う山

素抱

●秋の野

活け込みて卓上秋の野辺とせり

素抱

雑草あつこにいちいち名あり秋の野辺

石鏡

●秋風 秋の風 秋風 色無き風

練り歩くやっこの毛臍秋の風

石鏡

苦吟してとつてつけたる秋の風

もも

二の腕の歴然とあり秋の風

鳩信

十団子の碑いしがみ秋の風招よべり

燕音

最上川舳みよしへどんと秋の風

随笑

秋の風最上川面を吹き広げ

随笑

いきさつはどうでもよけれ秋の風

寒暑

さう思ふことのたびたび秋の風

寒暑

牧牛の尾を振る他は秋の風

石鏡

鶴ヶ城櫓々に秋の風

石鏡

秋の風翳を何處かに忘れ来し

暮津

泥亀の鼻もたげゆく秋風裡

もも

秋風も紅燈趣味もそれとなく

鳩信

相模金沢六浦に三艘といふ地名ありて唐物を揚げし湊や秋風裡

鳩信

宇津山慶龍寺茲に許六秋風の吟遺しけり

燕音

秋風にひとり歩きの嘘往けり

宿好

木斛笠間稻荷に秋風の立つ大覚寺

宿好

秋風のそると笠間の石狐

随笑

秋風にだば発ちますと舟下り

随笑

秋風寛永寺が当りて上野戦争碑

随笑

秋風の吹き渡るなり酸性湖

随笑

秋風に安住敦白根山の渋い顔

随笑

秋風も戦いくもひよいと起こるもの

随笑

秋風にどんだんすすむテロと呆け

随笑

秋風を悼 飯島晴子
 秋風をこんな呼吸で詠めと逝く

履き癖をとやかく云はれ秋風裡

清流は曲つてみえなくなり秋風

秋風に釣れてひらひら海たなご

秋風が見えるが如く眼鏡拭き

鼻に通る秋風人體展出でて

秋風が攫ひに来るよ机上のもの

秋風に浮き足立てるものばかり

秋風に団子しみじみ味の味

鯛ノ浦色なき風に鯛肥ゆる

色なき風背に釈尊の出山圖

五柳先生色無き風に吹かるる圖

十団子に添えて十団子由来状

●秋思

河童が涸河童も秋思に耽るべく

河原石手にとることも一秋思

●秋興

秋興の宿のだご汁かつぽ酒

秋興の経穴ツボの名くさぐさ人体図

秋興の智恵子生家の間取りかな

●秋の声

大覚寺豊廊下の秋のこゑ

●釣瓶落し

次郎柿釣瓶落しの日つるべおとしに馴れて

犀の尻釣瓶落しの日を遠に

●秋の暮

遅れゆく一羽必死よ秋の暮

腹話術腹の底より秋の暮

子規の口吻虚子の瞑目秋の暮

あやす嬰は地藏の重さ秋の暮

蔵店末廣酒造の土間まつさきに秋の暮

秋の暮鶴ヶ城出てあらぬ方

くたくたになるまで遊ぶ秋の暮

もういいかいもういいよとて秋の暮

●秋の雨

熱泥のべっぶべっぶと秋の雨

読みかけの書に目を通す秋の雨

秋の雨大正池の砂礫打つ

秋雨に煙草臭さを抜いてをり

随笑

寒暑

素抱

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

ねず

ねず

もも

宿好

寒暑

暮津

鳩信

鳩信

素抱

石鏡

宿好

さざ

石鏡

もも

鳩信

随笑

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

鳩信

燕音

素抱

ばら

秋雨にひるむどころかあめんぼう
秋雨といふ長雨の至り方

鳩信
鳩信

包み込むやうに秋雨降り出しぬ
秋雨と云ひ陋巷に満つるもの

宿好
石鏡

秋雨が降れば抱へて取り込みもの
秋雨に時折びくんと躍れる葉

石鏡
石鏡

秋雨にガタがきてゐる前立腺
秋雨にじたばたしても締切日

暮津
暮津

秋雨に薄く広げて玉子焼
煙草の香窓より抜けば秋雨が

暮津
暮津

天帝の如雨露秋霖とぞ云うて
秋霖も京の干菓子もこまごまと

燕音
宿好

秋霖をついて朝より八目鰻漁
秋霖に家鴨も口をつつしみて

随笑
石鏡

秋霖に心さだまるすさびごと
ぐづぐづの桜の幹に秋微雨

石鏡
さざ

秋ついでに紛々天の篩より
秋微雨野草画展に長居して

ばら
寒暑

秋口に降りては埃くさき雨
一鳥も降ろさず秋の沼の雨

宿好
石鏡

●薄紅葉
何處となく色づいて来ぬ瘤櫛

宿好
寒暑

先代の苦勞咄や薄紅葉
●桜紅葉

寒暑
鳩信

水の面に桜紅葉の心ばえ
野毛山動物園

鳩信
鳩信

長雨に櫻もみぢの目減りして
桜もみぢどつちつかずの色合にて

燕音
随笑

●菌 茸 月夜茸
滑茸ののらりくらりをかつ込みり

ばら
燕音

茸の名いちいち聞いて宿夕餉
湯西川

燕音
燕音

平茸を栗茸を指す箸の先
山鳥の脂浮くなり茸汁

燕音
宿好

真つ白に明恵の咲かす茸なり
茸どき宿より出せる宅急便

宿好
寒暑

又喰うてニュースとなりし月夜茸
朝市の足下目遣れば箒茸

寒暑
素抱

茸梢猿の齒形の生々し
●茸狩 菌狩

石鏡
素抱

拾得の装いで来て菌狩

寒暑

●新米 今年米

新米に葉唐辛子を目分量

さざ

新米の穫れ高「んだな二十俵」

宿好

今年米うまかり今日に明日に処す

宿好

新米と後ほど聞いて道理とも

暮津

新米といはれ一粒灯にかざす

暮津

通販の庄内米をファックスにて

暮津

●新酒 今年酒 新走あらはしり

新走りふふみ日向に出づおもひ

ばら

願はくば生まのまま召せと新酒着く

宿好

試し飲み弥右衛門さんの今年酒

石鏡

一升瓶千本分の新酒樽

石鏡

●濁酒だくしゅ 濁り酒 どぶろく

旅仲間雪つこといふ濁り酒

鳩信

濁り酒とろつと炬燵火は赫つと

燕音

どぶろくに白川の夜を更しけり

随笑

どぶろくに酔ふて凭れる煤柱

随笑

どぶろくの上澄み雪は夜に入りて

随笑

濁り酒入っていますか酒屋さん

随笑

濁り酒銘も凛々しく「美少年」

寒暑

抱えくる五郎八といふ濁酒

暮津

●稲 稲穂 垂穂 稲実る

かそけしや垂穂を垂穂うてる音

もも

川地藏供養稲の香むせるなか

ばら

稲穂波そぞろ打ち合ふ神楽の里

鳩信

霍乱を起して倒る稲あらん

燕音

虫のこゑじんじんと稲稔る

宿好

いちめんの稲穂明りに目の馴るる

随笑

首都圏ニュース稲の作柄稍良と

随笑

途方もなき稲穂の寄する小学校

随笑

本合海渡しの向う稲の海

随笑

稲明りさし込む中や湯葉造り

寒暑

上気多の段々畑の稲の株

素抱

磐越西線稲の睡気が移りさう

石鏡

稲積みのもしや狸観世寺 黒塚の化け損ね

石鏡

●秋の蜂

いきり立つ秋の蜂見て眼が荒れる

寒暑

古川の秋の蜂ある総鎮守

素抱

●浮塵子うんか

大正池雨にもめげず浮塵子飛ぶ

素抱

●蝗いせ 稲子

道三の国の蝗の閻魔顔

ばら

これはこれは喪服にぶつかる稲子磨

素抱

佃煮の蝗の脚に突っ張られ

石鏡

●ばった

はたはた きちきち 精霊しやうりようばった

きちきちばった

跳ばむとすバツタ眼を整へて

さざ

円墳の空をバツタの脚曳きて

さざ

跳ぶ前をおんぶばったのゆうらゆら

さざ

素破こそとばかりバツタの跳べる貌

ばら

おんぶさるバツタの脚の懸け具合

ばら

葉っぱに貌ぶつつけ跳べるバツタあり

ばら

会心の音色きちきちばった翔ぶ

鳩信

飛び方が目に見ゆきちきちばった翔ぶ

鳩信

罷り出て精霊ばったの御曹司

鳩信

しよりりようばった一巡りしてわが足許

宿好

バツタ跳んで横浜未来都市のうへ

随笑

はたはた翔つさうかと云ってやりたくなる

寒暑

きちきちの一途な翅音外れず

寒暑

ぎこちなく曲りバツタの飛翔線

素抱

古里のはたはたみんな祖おやの貌

素抱

静岡静岡県 島田島田宿 大井川大井川越遺跡

石鏡

はたはたが何血迷ふて大井川

石鏡

しやくれたる貌のシヨウリヨウバツタかな

石鏡

ばった跳ぶはた迷惑な跳び方も

石鏡

飛ぶときは貌を斜めにしてバツタ

石鏡

神主のやうな顔してバツタ現る

暮津

つたなきをぬぐひきれずにゐるばった

暮津

永六輔精霊ばったの裔ならむ

暮津

●稲雀

稲雀立てりばらばらばらばらと

さざ

稲雀舞ひ降るてんでんばらばらに

さざ

稲雀上げ下げ崎の棚田かな

宿好

稲雀飛来選り取りみどりの田

随笑

稲雀何處か窃盗団に似て

随笑

山麓を横へ横へと稲雀

石鏡

稲雀何處へ飛んでも磐梯山

石鏡

転進といふ語のふつと稲雀

石鏡

●案山子かがし

案山子見る男チエツクのシャツを着て
月下にて山田の案山子なかり隙だらけ
先頃の案山子の装のモダンなる
だいぶ手を抜かれ案山子のご面相
案山子見て思いつくことほぼ同じ

●鳥威とりおとし

羅須地人協会跡地の鳥威し
鬼怒川温泉
温泉は近場がよろし鳥威

●豊年 豊の秋

豊年の糊のねばりにデコ作り
俳諧の奉行何処に豊の秋
風おさまる如く豊年踊果つ

鮭缶で二膳軽々豊の秋

出来秋杉田湯のわが体重を量る湯屋

●凶作 不作

稲不作小安峡温泉うつつたふ婆の冷夏の眼

●秋の川

乳通ちちどし七十八文川の秋

●落鮎

和賀川の鮎瘦せ瀬につく頃ならむ

●渡り鳥 鳥渡る

鳥渡る空傾けて棒倒し
渡り鳥東寺の空に懸りけり
浦のつく駅名多し渡り鳥
先達あり渡る鳥にも吾が身にも

●色鳥

ゆふいんに妻と遊べば色鳥来
色鳥の出入りゆかし御室御所
寶物に加え色鳥蔵す寺
色鳥銀閣寺のこゑを引出す梅擬
色鳥来これだけ森のもみづれば
色鳥の目も覚めやらぬ御神域
色鳥は山から来たり宗猷寺
常磐木鎌倉八幡宮おとしやまの大臣山より色鳥来

●小鳥 小鳥来る

法然院雨に紛るる小鳥こゑ
小鳥来る髻のベルツのその頭上
小鳥来る樟は見通しよき樹にて

もも

寒暑

素抱

石鏡

暮津

寒暑

寒暑

ねず

鳩信

宿好

暮津

暮津

素抱

石鏡

素抱

ねず

暮津

暮津

石鏡

鳩信

宿好

宿好

宿好

随笑

素抱

素抱

石鏡

宿好

随笑

随笑

小鳥来て中村八大ねむる墓
横浜市立 金沢動物園
 平日の動物園にくる小鳥

八幡宮ばらばら小鳥来そめけり

●朱鷺ととぎ

フエリー佐渡(赤泊)へ
 えつさ丸素木の箱に朱鷺基金

寒暑

●鶇ひよどり

ひよ

首伸ばしすくめつ鶇の花食める

もも

花乏し降られづめなる鶇に

さざ

枯幹に抱きつきさまに鶇止まる

さざ

ふくらんで風除く鶇の不格好

宿好

花どきの鶇のうわまえはね雀

随笑

鶇の花懐にかしましや

寒暑

鶇来頬にちよつぴり紅さして

石鏡

ぶるといふ音して鶇に鶇止まる

暮津

●鶇 初鶇 百舌鳥 猛り鶇 鶇日和 鶇の声

雨の鶇後姿のずんぐりと

さざ

ずぶ濡れの鶇の平気の平左かな

燕音

雨衝いて啼き出す鶇の直心ひたしこゝろ

宿好

鶇聞きて雨の一乗下り松洛北

宿好

鶇切なし雨止む気配さらさら無く

随笑

濡るる身を固く引締め雨の鶇

随笑

かう雨が続けば鶇もつらからう

随笑

強くなる雨にたまらず鶇去れり

随笑

花巻ノ雨ニモマケズ初鶇来

寒暑

雨の鶇隣へ移る諍ひごゑ

素抱

柏楨の茂み宿りの雨の鶇

素抱

中継ぎに吾が家の一樹雨の鶇

素抱

初鶇にしては早すぎでは何か

さざ

ひとしきり初鶇聞いて座につける

ばら

初鶇の喋々来意告げてをり

素抱

初鶇のキイーツとあられもなきこゑよ

石鏡

けふも亦来啼く初鶇メープルティ

石鏡

朝の鶇空気震はせもう来たか

もも

朝な朝な鶇に親しみ机拭く

随笑

自選とは由々し朝鶇けたたまし

随笑

朝の鶇切り裂きやすき大気かな

暮津

鶇の朝頭機敏に立ち働く

暮津

甲高く百舌鳥が雀を制しけりかん

もも

高齢化社会社会と百舌鳥啼けり

燕音

先手とる気概を鴉に呼び醒まされ
 鴉よりもハキハキともの言えよ君
 三十棒鴉も喰らへり坐禅堂

冷え込みのかう強ければ鴉も来ず
 鴉の昼絵本のつづきせがまれて

鴉のくる一劃青空見えてをり

物申す鴉は単刀直入に

● 鴉の贄にへ

サイカチに鴉の贄とぎ季過ぎてをり

枳殻に鴉の手仕事鴉の贄

● 鴉しぎ

背高鴉あか赤い鼻緒のじよじよ履いて

● 懸巢

氷壁を煽りて発てるブルージエイ

● 椋鳥むくどり *ブルージエイは北米産青懸巢
 椋鳥むく

漂鳥といふのだそうだその椋鳥も

椋鳥と少し汚れた鳥を指し

● 頬白

頬白のディスクジョッキー始まれり

● 蒿雀あせじ

オホーツク風いでだんまり縞蒿雀

● 鴉ひは

うすらひをつつとと鴉浄瑠璃寺

河原鴉ひよいと頭沈め餌をあさる

腋わパツと開きて河原鴉立てり

● 鴉ひたひ

黄鴉来て溪流見通しよき処

● 日雀ひがら

日雀啼き大日岳の霧霽らす

● 鵓せきれい 白鵓せきれい

背黒鵓波に驚きとと走り

鵓の遊べり石の浪人と

*後で要るであろうと思つてその辺に転がし置く石のこと

せきれいの霜の色して岩畳

せきれいの尾をうち振れば来る年か

鵓か雪の川原をすつ飛んで

白鵓せきれいとんと川原の雪醒まし

せきれいの翔び歩き又翔び歩き

鵓せきれいとただちに判る翔び方よ
 鵓せきれいもとことこ師歩きして

随笑

随笑

随笑

随笑

素抱

素抱

素抱

さざ

燕音

随笑

ばら

随笑

石鏡

ばら

燕音

ねず

さざ

さざ

さざ

素抱

ばら

燕音

燕音

随笑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

石鏡

浜金谷驛前セキレイ歩みをり

石鏡

●海桐の実

海桐の実弾けむばかり漁日和

ねず

●木賊とくさ 木賊刈る

日陰りて木賊に引立てらるゝ家

もも

青空に木賊の節を継足せる

もも

今在りし冬日の何処へ木賊刈

ばら

丈山の清貧ゆかし木賊の辺

宿好

靴の紐結び直せり木賊の辺

石鏡

●木の実

木の実拾ひみほとけの掌に眠らす

ねず

木斛の実の赤らめる書院窓

さざ

これといふにほひのなくて雑木の実

さざ

霜げたる何の木の実か赤茶けて

ばら

見夜火堂夜又倍子の実のくろぐるど

鳩信

醸造元飯桐の実のたわわなる*見夜火堂は灯明台(灯台)のこと

鳩信

木の実どき撃目を残す観世音弘明寺十一面観音立像

鳩信

木の実落つダーウィンレアは真顔にて

鳩信

多羅葉の青き実善根積めとこそ

燕音

木の実どき落葉どき過ぎ落人村

燕音

いっぽんの山毛櫨の実二萬猿漁る

宿好

榎の実のやたら打つ墓高麗屋松本幸四郎

随笑

墓所に降る木の実を聴いて露伴・文あや

随笑

木の実降るぼっくりさんの寺日向

随笑

木斛の大き実信玄戦陣訓凡そ軍勝五分を以て上と為し・

寒暑

この丘の木の実が主食縄文人

素抱

岩崎邸木斛の実のあかがね色

素抱

肝木カンボクの熟れ実は鳥に美味からず

素抱

木の実どき己が弾みで珠海歩む孫 珠海

石鏡

●林檎りんご

林檎園脚立を夕陽あたたむる

もも

皿セザンヌ展に盛るリンゴ崩るるところを描く

燕音

林檎割りことしの蜜の多寡云へり

燕音

今宵煮るべし国光といふ林檎聖夜

随笑

電話繋がりりんごの弘前観光課

寒暑

朝市の婆の勧める早生りんご

寒暑

りんごお早うお岩木お早う旅早立ち

寒暑

林檎の荷解かんと鼻唄交りかな

寒暑

林檎は駄目柿はなんとか哀ふ齒

石鏡

紅玉煮る砂糖どっさり使ひけり
林檎煮る香が厨より本を読む

石鏡
石鏡

●石榴ざくろ

実ざくろの木乃伊めく枯れ祖父の忌よ
拾得じつとくの笑ふがごとく裂け石榴

ねず

もも

不可思議光放つ石榴の暮れずあり

もも

二つ三つ爆ぜし石榴に盆地の日

さざ

麗しき石榴新作見る如し

鳩信

石榴より硬き頭のテロリスト

随笑

これ以上裂けやうもなき石榴描く

随笑

徒食の身ぶらぶら石榴にも似たり

随笑

舗道に石榴落ちなば快音放つらむ

石鏡

●榎くわりん

かりんの実 かりん酒 かりん

法要の集りよくてかりんの実

ねず

十夜僧くわりんのごとき頭をしたり

ねず

たそがれの肉眼可視星花くわりん

もも

びちびちとくわりん青実あじに雨跳ねて

もも

病閑やくわりんのおいど日を受けて

鳩信

くわりん落つ落つるとおもひみし矢先

鳩信

青くわりん既に一徹者の貌

鳩信

あまりにも人間臭きくわりんの実

鳩信

くわりんの実なりし秋光集むるは

燕音

いかつくて何處か優しき青くわりん

宿好

ぼこぼこ明恵が頭つむりくわりんの実

宿好

木も痩せて二、三箇しけたくわりんの実

宿好

悪さする虫に先んじくわりん採

宿好

くわりん酒の焼酎二升程と踏む

宿好

大きくわりんぐるり廻して斑むらなき黄

宿好

包丁の齒立たぬくわりん閉口す

宿好

くわりん皆もがれし後も黄葉して

宿好

進みあるくわりんの尻の虫腐れ

随笑

くわりんの実蟻の門渡りなかりけり

随笑

虫食いくわりんたう落ちてしまひけり

随笑

人臭きくわりんの匂ひ掌に移り

随笑

重くれるくわりんに月のまどかなり

寒暑

くわりん酒のとろり後ひく三年もの

石鏡

くわりん酒に目のなき妻のとなとろり

石鏡

やたら生ることしのくわりんだうしやう

石鏡

黄くわりんのおでこしやんしやん日を浴みて

石鏡

●柿 渋柿 熟れ柿 木守柿 きまもり 次郎柿 柿の蒂

洛北の雨は大粒柿の実に

宿好

雨の柿人間くさくもみづれり

宿好

柿は柿らしくかためを好みけり

さざ

柿好きの子規が妹にあたるこゑ

さざ

人は好きずき楸邨の柿子規の柿

宿好

柿ことごとく落ち裏山の青天井

ねず

柿落ちてたうたう一つ日の入り際

鳩信

落柿舎の庭木のそれもこれも柿

宿好

当てなき歩柿の家より楽溢れ

ねず

柿の家スウィングズビズバダバダと

鳩信

さういへば家紋に似たる柿の蒂

もも

里坊の柿の蒂見て夕暮れは

燕音

美濃柿の蒂ばかりなる旅の空

随笑

どうしてもそこへ眼のゆく柿の蒂

随笑

柿の蒂町内の空つながれり

随笑

柿の蒂つまらなさうに目を浴みて

随笑

柿の蒂夕日外れてしまひけり

随笑

柿の蒂無造作も斯く極まれば

素抱

柿の蒂つくづく年も詰まりけり

石鏡

舌先のぎうと縮める渋柿ぞ

さざ

柿渋のやうな評言貫ひけり

燕音

渋柿に妻はとほほと云ったきり

石鏡

熟れ柿の正体もなく日に酔うて

さざ

熟柿皆承知年貢の納め時

鳩信

清閑を楽しみながら柿熟るる

宿好

腫れものに触るが如く熟柿食ふ

石鏡

熟れ柿に匙が添えられゐたりけり

石鏡

安んずること木守に及ばざる

宿好

木守の余生といふは透けること

宿好

木守柿油断だんじて許されず

さざ

木守柿うからやからをもう忘れ

さざ

木守柿のやうやうおちて閑日月

ばら

まはりから徐々に片付き木守柿

鳩信

山の日のもう一押しに木守柿

宿好

子と食うぶ柿のあかさの他は欲らず

ねず

目の上のたんこぶの兄柿呉れず

ねず

隣家よりこゑ枝付きの柿貰ふ

ねず

無人店に買ひてすこぶる柿甘し

ねず

海に入る夕日見守るおけさ柿

もも

だぶだぶの身み不知柿しらずに口もてゆけり
 柿もみぢ柿に根負けして散りぬ
 次郎柿釣瓶落しの日に馴れて
 つやつやの中間色の柿剥けり
 柿の種ペルリ提督携へて
 あはててはいけない柿を滑る蜂
 柿主は小倉山下儒医去来
 生酔いの箸運びけり柿膾
 今年また生るだけの柿生りにけり
 郷土色豊かな柿が出回れり
 一つ木に集ふ鳥と柿の数
 化野の柿の下ゆき日暮道
 九度山の柿も売らるる弘法市
 楸邸の柿攻む顔がありありと
 匂づくりも柿も分別顔をして
 柿冷ゆるそんな季節となつてをり
 ほたほたの柿に手を焼く啜ちやえ
 柿ほつたほたなれば包丁役立たず
 升のぼさんは別格柿の味も亦
 手をやれば柿のつめたさ椅子の肘
 蜂屋柿高名なれど見たことなし
 ののさんに一つことしの庭の柿
 頂けり中に生傷ある柿も
 お隣お裾分けりのなかなか大きくならぬ柿
 林檎は駄目柿はなんとか衰ふ齒
 強引に柿ぶつ叩き止めぬ竿
 匙をもてべろべる柿を始末せし
 ●吊し柿 干柿
 吊し柿早うつるせと秩父の日
 干柿のこれで五つ目癩な種
 ●無花果
 かみきりにいちじく甘露用意せる
 いちじくは子供に還り食うぶもの
 追憶の熟れ無花果は蠅呼ぶ木
 ●茱萸
 茱萸の木より蛾のモスグリーンはたはたと
 茱萸をもぐ女の腕の種痘跡
 ●榎の実
 少しづゝ山は色づく榎の実
 素抱

もも

もも

さざ

さざ

さざ

鳩信

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

随笑

随笑

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

もも

もも

宿好

もも

随笑

石鏡

石鏡

ばら

石鏡

石鏡

素抱

少しづつ、暁の色貰ひ榎の実

素抱

●山葡萄 野葡萄

藤沢山野ぶだうに色のり初めぬ

燕音

野ぶだうに雑多な彩を与ふ雨

寒暑

野葡萄の不粹紅葉も興の裡

寒暑

山ぶだう酒持病直せと賜はりぬ

石鏡

野ぶだうに湯けむり流れ町宮湯

石鏡

●通草

山中の雲にあけびをあづけたる

ねず

灌木に搦めとらるる通草蔓

さざ

ひゆうと手が伸びて編み込む通草蔓

宿好

宇奈具志神社(出田の宮)
通草蔓良寛の書の筆運び

寒暑

裏磐梯
民宿の帳場あづかる通草籠

石鏡

おそろしく乱れてをりぬ通草の藪

暮津

●木天蓼

朝市
またたびの青実おまけの一掴み

素抱

またたび酒漬けゐて羽後の旅名残

素抱

試飲の顔大きくゆがめ木天蓼酒

素抱

●郁子

だんだんと見えてくるなり棚の郁子

燕音

陶器めく郁子に紫一寸入る

随笑

郁子は実はこの家の主見たこと無し

随笑

●荔枝

れいし
蔓荔枝サタンに魔法かけられし

ばら

ひやつこき雨に見舞はれ蔓荔枝

ばら

苦瓜をどうするでもなく置く机上

寒暑

苦瓜料理出され箸つけみしものの

素抱

苦瓜の洗面雨に叩かれて

石鏡

●冬瓜

とうが
冬瓜の老人食を出されけり

随笑

とうぐわんを食みし其の夜の大寝言

随笑

俳諧は肚はらでするもの冬瓜汁

寒暑

冬瓜料理病院食に何處か似て

寒暑

総体にとぼけた味の冬瓜汁

寒暑

冬瓜をもてあましをる一家族

寒暑

冬瓜汁すすまぬ箸を奨められ

素抱

冬瓜の煮方煮崩れ防止策

素抱

吝ん坊のごとく冬瓜煮てとろ火

素抱

冬瓜の銀あん下処理とは何ぞ

素抱

晩年は引き算ばかり冬瓜汁
 冬瓜にこんな食べ方あったつけ
 そこに在るまゝの冬瓜師と仰ぐ
 冬瓜の面々授々に他ならぬ

●山梔子

降り出して梔子の実に韻く雨
 山梔子の実に手をつける賜なりし
 山梔子の実に夕栄えのいつまでも
 山梔子や後悔といふ後手踏んで

●新松子 しんちぢり 松ぼくり 青松毬 かさ

けざやかに景立ててこそ青松毬
 松ぼくり大年の日を懐かしみ
五合庵
 良寛の疑団も斯くや松ぼくり
 新松子掠めて飛べるへりコプター

●山椒の実

蒲焼に呪文のごとく山椒かけ

●紫式部の実 小式部 白式部 実むらさき

小式部の才気走れる色にして
 とぎめきの色に出でたる実むらさき
 白式部孔子基督釈迦の智慧
 白式部賢者の智慧を見ることし
 実紫師系を誇るおたんこなす

●藤の実

藤の実の如く垂れなば涼しからむ

●色変へぬ松

信貴山縁起絵巻 尼公巻
 色変えぬ松をあふぎて尼の旅

●烏瓜 からすうり

快気焰あげてゐるなり烏瓜
 何故のあをべうたんのからす瓜
 この蔓の先の何処かに烏瓜
 しゃれてをり縦縞入りの烏瓜
 烏瓜残る一つも飛び去んぬ
 烏瓜ぴりっと肌を刺す大気
 烏瓜失せたる色を思ひつゝ
 烏瓜どうせ採るなら器量好し
 見栄坊の烏瓜照る村はづれ
 烏瓜からす天狗が好物の
 物音のよく通る空烏瓜
 静物画縞のオブジェの烏瓜

暮津

暮津

暮津

暮津

宿好

石鏡

石鏡

暮津

さざ

ばら

寒暑

素抱

石鏡

さざ

宿好

石鏡

石鏡

暮津

ばら

鳩信

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

ばら

鳩信

鳩信

燕音

燕音

宿好

宿好

滝なす蔓中に一つの烏瓜

随笑

烏瓜粋な青縞装ひて

寒暑

烏瓜縞を装う数寄心

寒暑

烏瓜配して備前小物売

寒暑

手の届く所には無し烏瓜

石鏡

●朝顔の実 朝顔の種

朝顔の種も採らずに嵯峨野道

宿好

朝顔は花より種子に精出して

素抱

朝顔の種こじ開けて下調べ

暮津

●数珠玉 じゆずだま ずず玉

数珠玉を過ぎてずんずん暮るゝ道

もも

ずず玉の天つ日返す地藏盆

ばら

ずず玉のつるんつるんにかえりゃんせ

ばら

ゆふいんの銀鼠ずずこ雨まみれ

鳩信

数珠玉を採りて化仏の薬壺にせむ

素抱

数珠玉や使い途なき三角地

石鏡

●松手入

手入れせる松に根気を問はるごと

もも

松手入すこし空き過ぎたかとおもふ

さざ

首尾問へばまづまづの出来松手入

燕音

その辺の呼吸呑み込み松手入

宿好

お隣りと同じ植木屋松手入

寒暑

簡単に見えてどうして松手入

暮津

軍手・莫産・脚立を用意松手入

暮津

ご近所より少し早い松手入

暮津

松手入ちよくちよく脚立据え直し

暮津

松手入脚立捧げるやうに持ち

暮津

松手入素人の域抜けてをり

暮津

山妻の見守る中の松手入

暮津

松手入新の軍手の昏れてくる

暮津

松手入あとかたづけを待つばかり

暮津

松手入済みし脚立のひやつけり

暮津

●高山曾祭

高山曾祭

布袋からくり神髓見する秋の空

素抱

布袋台金冷まじき機関樋

素抱

天高くからくり繰れる布袋台

素抱

布袋台覗けばからくりあやつり衆

素抱

秋空を金欄屋台押し移る

素抱

下三之町の宵闇屋台来る

素抱

宵祭屋台の端は神楽台はな 素抱
 高山の宵闇屋台の目白押し 素抱
 星空ゆく屋台提灯夢うつつ 素抱
 五百提灯屋台の後後から 素抱
 屋台曳かるさん法被姿かな 素抱
 星空に聳えわけても鳳凰台 素抱
 高山に思ひ知らさる月夜寒 素抱
 高山の月を歩ませ練り屋台 素抱
屋台曳き廻し
 御所車金具さやかに大八台 素抱
 栗材の台輪屋台秋日差す 素抱
 官司さま馬ではかばか御神幸ごじんこう 素抱
 秋空へ打つてこどもの鬪鶏樂 素抱
 御神幸一文字笠キツと締め 素抱
 御神幸しようごい隆と押立てて 素抱
 *しようごいは榊替わりの樹木 冬青の詠りか
 ●秋祭
 盛岡秋まつり(盛岡八幡宮)
 秋祭り山車の松前鉄之助 寒暑
 風流山車秋の八幡下りかな 寒暑
 大井神社小流れ巡らせ秋大祭 石鏡
 大井川安堵の神の秋大祭 石鏡
 ●サフラン
 さふらんや一ト日は些事の積み重ね 随笑
 サフラン買ふ客筋それとなく見をり 素抱
 サフランの一球おまけこゑ弾む 素抱
 サフランの花の馬鹿馬鹿しさに惚れ 素抱
 ●菊 菊作り 菊日和 白菊 黄菊
 お十夜の小菊嗅がれて買はれけり ねず
 菓子折の赤き紐もて菊括る ねず
 畑の菊こごえて朝を迎へけり もも
 畳屋の菊の出来栄えよかりけり もも
同僚
 白菊が机にあがる突然死 さざ
 五つ色もあろうか垣の乱れ菊 ばら
 町内の左官屋の菊三色みいろほど 鳩信
 常滑の土管色して咲く菊も 鳩信
 挿し芽してつきたる菊と聞かさるゝ 鳩信
 納棺の泪は菊の蕾ほど 鳩信
 菊花賞菊に係わりなき人出 鳩信
 かかるのは手間のみ「如何菊作り」 燕音
 菊作り答えがでると勧めをり 燕音
 和服の胸張りていそいそ菊日和 随笑

妻
検査結果遊走腎とは菊の花

白菊の月輪黄菊の日輪と

フィアンセに菊束捧ぐトピアリー

様子見の開き加減や雨の菊

盆栽菊調度の鉢も凝りに凝る

横須賀良長院下田稔の墓
稔の墓お隣りの墓菊とりどり

菊に佇つ母に一言かけたき日

こりやあびつくり菊に跨りみる螻蛄

菊日和奈良の最中を貰ひたる

強くなる雨脚を菊怖れけり

菊作り読本仕立てに難易度付し

厠にも菊の明るさ持ち込めり

黄菊咲く花菱アチャコ笑顔して

菊
ヨモギスジハモグリバエの跡か是れ

吾なりに菊の好みを云へば野趣

菊鉢を提げ新刊書小脇にす

日の翳り易きむらさき食用菊

清流を下るがごとく菊見かな

菊活けて後片づけの葉のにはふ

●菊花展

一文字咲きを支ふにボール紙

綿詰めがどうかうのかうのと一文字菊
いちもんじ

菊花展卒業式のごとくなり

大船植物園菊花展
展示日に間に合ふ菊の咲かせ方

菊花展日和と家を後にせり

東京より俳優招き菊花展
わきおせ

菊花展城の階水打って
きやほし

菊花展けふより始まる城目指す

二本松晴れの或る日を菊花展

城下まで自転車で来て菊花展

菊花展初日の菊に氣勢あり

菊花展即ち煙草慎みぬ

アンドロメダ星雲さながら懸崖菊は
けんがい

懸崖の舟型菊の五六艘

傾ける銀河系模し懸崖菊

懸崖菊花に遅速の多々あるを

懸崖菊あらまあ真つ正面にかな

煌々と厚物白菊スプーン弁

厚物の菊の顛頂に蜘蛛の子来

七本立厚物菊のこころが顔

*顔とは正面のこと

随笑

寒暑

素抱

素抱

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

石鏡

もも

燕音

燕音

宿好

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

燕音

寒暑

素抱

素抱

石鏡

燕音

宿好

宿好

- 白花瓣やっさもっさの厚物菊 石鏡
 盆栽の菊の松籟聞かむとす もも
 冬至芽の此処をと盆栽菊談義 燕音
 菊に石抱かせる術に道理あり 宿好
 片寄せられ等外の菊白ばかり ねず
 金賞を争ふ菊の目白押し もも
 福助に作れる菊に人だかり もも
 足音のびたりと止まる古典菊 さざ
 嵯峨菊は火花打ち出す燧石 ばら
 白菊の朝臣黄菊の臣・連 ばら
日比谷公園 ほぐれ初む嵯峨菊荅おひねりめく 燕音
 晴れ舞台てふ菊苗の色を聞く 燕音
 何處となう畏き菊の前に立つ 燕音
 審査員何處見て菊の出来不出来 燕音
 堅物は菊にもありて塵寄せず 燕音
 望外の受賞と云はんばかりの菊 燕音
 要するに何處どう見ればよきや菊 燕音
 菊の名も誇らか國華晴舞台 宿好
 管物の盃咲きの濃むらさき 宿好
 菊作りひとりたのしむ胸の内 宿好
 後列の一際誉れ高き菊 宿好
 嵯峨菊のかんざし挿して太夫咲き 宿好
 伊勢菊の蕾弾けて禿咲き 宿好
 七本立だるま控えぬ葎簀張り 宿好
- 菊人形 菊師**
 おん齡に始まり菊師の行脚談 石鏡
 蹲り菊師むしろに根仕事 石鏡
 気に入らぬ箇所をとことん老菊師 石鏡
 莫産いちまい引き延べ菊師一仕事 石鏡
 莫産いちまい丸め着せ替え了ふ菊師 石鏡
 老菊師修行時代を一くさり 石鏡
 見たきもの先づは菊師の仕事ぶり 石鏡
 城内の厠拝借老菊師 石鏡
 引きつけて離さぬ菊師の話っぷり 石鏡
 家苞は菊師の雑談与太咄 石鏡
 日当れり着せ替え中の菊師の背 石鏡
 老菊師少し生活のことにも触れ 石鏡
 着せながら菊師の一ト生手短に 石鏡
 菊師の談「ここに居付きて五十年」 石鏡
自ら六へる 二月月生計たつる菊師とぞ 石鏡

菊人形虻の飛び交ふ千早攻め

さざ

菊人形直衣の菊に斑ありて

さざ

菊人形池田屋騒動真つ只中

石鏡

菊人形吉良上野介平伏す

石鏡

大砲を差配の隊士菊人形

石鏡

繕ひの蘭草はヤロウ菊人形

石鏡

*ヤロウは蘭草の中でもつとも強靱なもので量などに使う

石鏡

菊人形面輪面輪に目がゆきて

石鏡

菊人形胸元疎ならず密ならず

石鏡

馬っこはいささか手抜き菊人形

石鏡

菊人形「たいしたもんだ」ところ挙がり

石鏡

在来線乗り継ぎ見ゆ菊人形

石鏡

けふ初日の面うち晴れて菊人形

石鏡

臙脂なる菊を鎧の草摺に

さざ

白菊の束帯召せり後醍醐帝

さざ

観菊の接待二本松婦人会

石鏡

独眼流正宗の菊差し替え中

石鏡

●菊臙きくなまき

内々の話にも触れ菊臙

宿好

酒注げば朗々と鳴る菊臙

宿好

菊臙のこる余生をどう使ふ

宿好

云はるるまゝ膝を崩して菊臙

宿好

●磯菊

磯菊の汐傷みして黄の名残

随笑

●海嬴廻しばい

浜っ子のべえべえ言葉海嬴廻し

ばら

●運動会

綱引のづるづる旗色悪くなる

燕音

空伝ひ町内運動会のことゑ

燕音

ちびっこの駆け足ばたばた運動会

宿好

老い進む三町内の運動会

宿好

運動会近しよブラス風に乗る

随笑

髯毛濃き運動会のお父さん

随笑

ひらがなで大きく書かれうんどうかい

石鏡

運動会みんな手を挙げゴールイン

石鏡

ちよこまかがちよこまか抜いて運動会

石鏡

徒競走シャッターチャンス一度きり

石鏡

少女等は昔ブルマー運動会

石鏡

手と脚が弾んでならぬ運動会

暮津

運動会びりつけつにも湧く拍手

暮津

一等は万歳三唱運動会

暮津

二等賞は万歳二回運動会

暮津

三等はえいえいおうの運動会

暮津

目の前で抜かれてしまふ運動会

暮津

運動会必死になる顔ならぬ顔

暮津

●芋煮会

芋煮

羽前長崎

見渡して芋煮の鍋の据えどころ

随笑

芋煮鍋そら嘖く芋をさあさらえ

随笑

鍋蓋におたまの鎮座芋煮会

随笑

芋煮会差し入れありぬ香の物

随笑

芋煮会蠅も仲間に入りたがる

随笑

●若 冲忌

若冲忌鯉に遊ばせ貰ひをり

宿好

鶏頭の駈けだしさうな若冲忌

随笑

●保己一忌

覚め際に一つ伸びせり保己一忌

燕音

●広重忌

箱根越え胸毛の馬子図広重忌

随笑

留女の藤沢宿図広重忌

随笑

●御命講 おめいかう 日蓮忌 お会式 万灯

お会式の赫つと灯の入る妙見堂

随笑

本覚寺
お会式の触れ書き杉の板塀に

随笑

龍ノ口竜口寺
堂前に靴の累々御命講

鳩信

御命講鳩の目をして祖師さまは

鳩信

両の掌を湯呑みにぬくめ御命講

随笑

お手綱のこよなき真白御命講

随笑

御命講芙蓉に洩れて医院の灯

随笑

人騒の墓域に及ぶ御命講

随笑

雀等も連れ立ち御宗祖日蓮忌

鳩信

池上本門寺 お会式
日蓮忌昼から混める池上線

随笑

風吹けば熾るがごとくお万灯

随笑

風吹けば風のいる帯ぶお万灯

随笑

万灯の傘浮き上がり浮き上がり

随笑

本門寺坂下に詰めお万灯

随笑

さきがけの万灯一つ橋渡り

随笑

万灯引く衆の白足袋白法被

随笑

万灯の提灯持はご住職

随笑

万灯引く法被に山号寺号かな

随笑

池上の万灯の湧く星のそら

随笑

万灯の花懐といふところ

随笑

万灯に子を高々とてんぐるま

随笑

夜風出づ万灯いろの綿飴に

随笑

団扇太鼓紺の腹掛けして搏てる

随笑

うち過ぎぬ団扇太鼓の二波三波

随笑

●後の月 十三夜 栗名月

庭草の二三供へて十三夜

もも

庭木より栗名月を外し見る

さざ

家人よりけふよと云はれ後の月

燕音

もう一度見てから寝ねん後の月

宿好

履物に妻の温みや後の月

石鏡

●やや寒 秋寒

やや寒の鯉にゆらりと鯉寄りて

さざ

やや寒の朝湯文人気分かな

随笑

稍寒の投函の音聞いて去る

随笑

秋小寒地魚まとめ買ひしたり

石鏡

魚にもある唇やや寒覚えけり

暮津

●うそ寒

うそ寒の毘羯羅大将より拝観

さざ

「模聞雅話」鬼の角切りうそ寒し

燕音

うそ寒の湯揉み赤帯赤湯文字

随笑

うそ寒の類つりあがる円空佛

素抱

うそ寒しプラスチックでふ手法

石鏡

佛性はここにうそ寒神経網

石鏡

うそ寒の犀に向ひてグッドバイ

石鏡

うそ寒の厨に水の吸はるゝ音

暮津

●肌寒

肌寒や雨の青どんぐりを見て

素抱

●朝寒

朝寒の神道のぼる下駄の音

もも

草津朝寒我慢比べの湯となりぬ

随笑

朝寒やまたあべこべに肌着着て

随笑

朝寒空「けふははつきりしませんね」

寒暑

旅立ちや朝寒の息弾ませて

素抱

朝寒し犬は糞るもの糞りにけり

石鏡

●夜寒

夜の寒し一枚多くはおり出づ

燕音

草津夜寒こんな湯加減殺生な

随笑

やせ我慢して入る夜寒のぐらぐら湯

随笑

高山に思ひ知らさる月夜寒

素抱

草渋のほひ抜けずよ夜寒の湯

素抱

夜寒さのがちやがちややらねば締まらぬ戸

暮津

夜寒さの暖をとるとて白湯を呑む

暮津

●冷まじすま

子規庵の素通しガラス戸冷まじや

随笑

布袋台金冷まじき機関樋

素抱

観音の千手は剣冷まじや

素抱

冷まじや地獄絵仕置の白女體

素抱

和ろうそく作り冷まじ親爺の手

素抱

スダジイの根の暴走の冷まじや

石鏡

冷まじや朶の端の毳けはだつは

暮津

冷まじや大根下ろしの山素しろし

暮津

●そぞろ寒

一室に木乃伊六體そぞろ寒

燕音

そぞろ寒誘へるものに秒針音

随笑

そぞろ寒自律神経系標本

石鏡

道中飛脚奉納燈籠そぞろ寒

石鏡

●身に入む 身に沁む

身に沁みてナイルの青の石像護符

燕音

宗達養源院の竹描の象身に沁みぬ

宿好

曲り屋の遠野民話の身に入むよ

寒暑

身に入みて湯屋閉屋の主の辞

石鏡

●火恋し

川上澄生
浜っ子の澄生のガス燈火恋し

燕音

煤けても不動明王火恋し

宿好

ブラウンシチュウ灯と火恋しき頃となり

随笑

万願寺とうがらしとや火恋し

石鏡

●雀蛤となる

雀蛤になること容易なこつちやない

鳩信

物数奇がかうじて雀蛤に

鳩信

遠からず蛤となる雀これ

燕音

雀蛤と化せる次第をつゆ知らず

随笑

旅に出て居る間に雀蛤に

素抱

蛤になれざる雀の影あそび

素抱

●露寒

露寒やるると草に潜むもの

暮津

●べつたら市

がたびしとべつたら市の屋台組む

ばら

べつたら市べつたら市と訪ひ行きぬ

燕音

もう一枚上からはおりべつたら市

燕音

べつたら市ひやつとする日続きけり

燕音

もちこたふべつたら市の空模様

燕音

角店に人のはりつくべつたら市

燕音

べつたら市麴てかてか粒立てり

燕音

あびせらるべつたら市の売口上

燕音

売ごゑの味見味見とべつたら市

石鏡

折り返しべつたら市を物色す

●落花生 ピーナッツ

薄塩に定年過ぎのピーナッツ

随笑

●馬鈴薯

馬鈴薯の宅送届く紋別産

さざ

●甘藷 藷

あかあかと藷洗ひあげ終戦日

ねず

観自在菩薩藷の蒸けたるをかんじざいぼさつ

もも

檻樓くそに云はれ折らるる蒸し藷*仏前

さざ

ふかし藷あてがはれをり留守居役

ばら

藷蔓を衾ちろの鳴けるなり

ばら

藷洗ふ笠置シツ子のブギウギに懐旧 隣家のおばさん

ばら

藷の葉に大いなる穴開けし奴敗戦日と云へば母の答へて

鳩信

疎開地の機銃掃射の藷畑

鳩信

藷堀の意を強うせる風が吹き

鳩信

雑俳と藷作っても作っても

宿好

莫迦戦争藷が主食の座につきて

随笑

いとこどりして立つ句評ふかし藷

随笑

雨降嶺晴れ藷の畝々もっこりと妻

寒暑

人前をもう憚らぬふかし藷さる人

寒暑

ふかし藷なんつたつて戦中派

寒暑

お藷蒸す土偶体形疎んずも

寒暑

これ当り藷は流行りのベニアズマ浄見寺 大岡越前守墓所

寒暑

忠相の生れ在所や藷畠

石鏡

美味けりや佳し藷の器量を云ふ勿れ

石鏡

乾燥藷焙れば月の隕石孔ルナ クレーター

暮津

ふかし藷皮の赤さの切なけれ

暮津

大学芋食うて戦争あやしまず

暮津

●自然薯 山芋 とろろ汁 山の芋 自然薯掘る 自然生

自然生

旅先の雨脚見つゝとろろ汁 燕音
 うまの合ふ夫婦となりてとろろ飯 随笑
 啜るたび爺むさくなるとろろ飯 随笑
 大盛の飯に穴開けとろろ汁 石鏡
 山芋の播粉木に鉢踊り出す 随笑
 山芋の黄葉せる道のみけり 燕音
 一家言あるべし山芋掘りとして 随笑
 根性の据はり方見ゆ山の芋 随笑
 何で臍曲げてしようた山の芋 随笑
 いち早く自然薯黄葉狐雨 ねず
 自然薯の包引つ提げ長身に もも
 とつかかる自然薯掘りの一本目 燕音
 燕音
 この山の自然薯あらかた抜かれしよ 随笑
妙本寺
 山門下自然薯掘の自転車か 随笑
三浦晴子さんより自然薯を賜る
 自然薯の偏屈を押し通す形 随笑
 自然薯のそれと知らるる長包み 随笑
 念の入る自然薯の荷を解くとせん 随笑
 自然薯とおもふ荷ほどき面白く 随笑
 自然薯の荷を解くここをかうやつて 随笑
 自然薯の包み開けば土の香す 随笑
 髯づらの自然薯蝦夷えみしの顔したり 随笑
 自然薯のかうなるまでの紆余曲折 随笑
 自然薯の汝ならではのねぢれやう 随笑
 自然薯の異形は美味の証にて 随笑
 自然薯の髯蓄ふは富貴の出 随笑
 ひようひようと風のごと来て自然薯掘る 随笑
 自然薯播る妻は大佛坐りして 随笑
 自然薯のいやに素直な栽培物 寒暑
 自然薯のすすきの褥取り外し 寒暑
 自然薯の包み方からして律義 寒暑
三浦晴子さん
 自然薯の掘り手巧者よ汝が夫は 石鏡
 お見事と云ふべき自然薯届きけり 石鏡
 一筆箋付の自然薯届きけり 石鏡
 自然薯のハナガサそこを掘れといふ 暮津
じねんじょう
 自然生 背筋一本通りたる 随笑
 横たはる様は涅槃じねんじょうの自然生 随笑
 自然生頂く果報ことしもや 石鏡
 自然生届けに長身配達夫 石鏡
 居心地のよくてかうなる自然生 石鏡
 じねんじよの花笠ひらひら駿河晴れ 暮津

じねんじよの好みの土は粘土つち
じねんじよの髭火で焙り擦り仕度

暮津
暮津

●零余子 むかじこ ぬかごこ

日表に痘痕の零余子法師かな
晩年の既に始まる揚げ零余子

ばら

随笑

むかご落つ人目届かぬ所かな

随笑

ほくと零余子噛めば中年過ぎてをり

随笑

まあなんて言おうかこの味むかご飯

寒暑

コンビニで零余子なんぞを買おうとは

寒暑

鉛筆でむかご落として一つとや

素抱

金屎かなぐその如き零余子を掌に下山

石鏡

そこそこ採れ零余子御飯に一寸足らず

暮津

零余子黄葉始まつてをり覚圓寺

暮津

●隼人瓜 はやとがり

一段と今朝は冷え込む隼人瓜

もも

もちまへの力出しきる隼人瓜

ばら

隼人瓜姿無類の冬に入る

燕音

冬に入る顔決め込んで隼人瓜

燕音

爺じいさまの口許に似て隼人瓜

燕音

隼人瓜弾けば陶の音したり

宿好

隼人瓜当世風を通しけり

石鏡

隼人瓜ポパイのつくる力瘤

石鏡

隼人瓜ポパイに敵ふものはなし

石鏡

●蕎麦

今云うたそれがよささう胡桃蕎麦

さざ

蕎麦啜る音に人品骨柄出づ

鳩信

しつちやかめつちやか団体客のわんこ蕎麦

随笑

風冷えて蕎麦うまき日の上根岸

随笑

うちまじるもの一つ無き蕎麦畑

寒暑

●芦 葦 葦原

強東風や焦げ目の残る芦の節

ねず

弁慶蟹葦の葉騒に目を上げぬ

もも

一吹きに鯉魚風葦を鳴らすなり

もも

直伝の型歴然と蘆鷺圖

鳩信

芦騒の煽りくらひてコメツキガニ

寒暑

蜘蛛の囿もあさみどり帯ぶ芦の間に

素抱

チゴ蟹の小心者に芦の風

石鏡

行々子もぐり込んだる葦っ原

暮津

葦の間の方寸の水澄みあたり

暮津

●草の穂 草の絮わた 穂絮穂絮

草の絮飛びそむ空の雲母きらずり刷に
 草の絮何時までつづく有頂天
 昼月の辺りで穂絮ついと消え
 手に取りぬ何の錆穂か判らぬを

ばら

鳩信

宿好

寒暑

萱初穂泥亀新田たりし地に

石鏡

秋草の風に打合ひ古ぶ穂よ

石鏡

穂絮の他軽んずものに植物通

石鏡

穂絮も我もいづれは消えてなくなる日

暮津

●蒲の穂絮 蒲の絮

蒲の絮飛ばす合図をそぞろ神

石鏡

●芦刈

刈り頃の芦擦りあふて湖日暮

燕音

●萱刈る

萱刈の廃る日そこに見えてをり

石鏡

●萩刈る

一頻り萩刈る音か高山寺

宿好

●葉掘る

その君が葉掘りとは爺むさい

寒暑

●破芭蕉

風体をとやかに云はれ破れ芭蕉

燕音

●敗荷

屈服の仕方まちまち破蓮

さざこ

一念にかられて来たる敗荷

ばら

敗荷を見にゆくといふ酔狂な

寒暑

敗荷より俳句授かるまで長居

寒暑

敗荷にたぶらかされてゐることし

素抱

敗荷に風のつれなくなりにつけり

素抱

敗荷の顔向けならぬ体に悄気

素抱

敗荷の無頼たること尚止めず

素抱

敗荷の全うせるものここに見き

素抱

腹藏なき敗荷となり天が下

素抱

世間体そんなものはと破蓮

石鏡

敗荷の辺に千年も居ることし

石鏡

敗荷に天下泰平たるまなざし

石鏡

物音をたてたくなりぬ敗れ蓮

暮津

●蓮の実飛ぶ 蓮の実

旅先の加賀の地酒に蓮の実

宿好

蓮の実の青き実弾抜きて見す

素抱

● 檜の実

選ぶなら檜の木食頭陀行派

三乗

随笑

● 椎の実

椎の実にづるりと滑りずでんと尻

山妻旅先等にて路傍の石を拾い集め来る癖あれば

石拾ふ要領をもて椎の実も

石鏡
石鏡

椎の実はあらかた落ちたか落ちたやう

石鏡

● まてば椎

まてば椎若葉もりもり小公園

随笑

甲斐甲斐しく若葉日を撥ね馬刀葉椎

随笑

● 栗 栗飯 みなじ 虚栗 焼栗 落栗 青栗 山栗 毬栗

栗をむく間縫ひ雑用足しに妻

さざ

栗剥けと盆と包丁置きゆけり

暮津

栗剥けば手が莫迦になり小休止

暮津

山と盛る栗をののしりののしり剥く

暮津

剥きづらき栗を手にして長丁場

暮津

引き受けし手前剥かねばならぬ栗

暮津

かうなれば意地なり栗をとことん剥く

暮津

栗剥いて見るのもいやといふ顔す

暮津

栗飯一家よく喋ること喋ること

ばら

土産の栗栗飯にしてなほ余る

寒暑

栗飯の二膳目もまたうはの空

寒暑

栗おこわ持って実家へ妻いそいそ

素抱

誕生日より栗づいて栗ご飯

石鏡

栗ご飯お焦げうれしく釜払ふ

暮津

栗飯の栗をごろんと箸に乗せ

暮津

栗飯の栗の角々灯に栄えて

暮津

転げ出て故山の匂ひ虚栗

ねず

香ばしき焼栗御説ごもつとも

燕音

平野 民宿の茶請けの栗の渋皮煮

燕音

落栗の真新しきはこれとこれ

燕音

十六夜の小腹に納む里の栗

燕音

青栗にさしもの秩父の雨上がる

宿好

栗硬きは茹で足らざるや出来悪しや

随笑

茹で栗の当りばかりと言う訳には

素抱

高山の護国神社の栗小粒

素抱

風小僧落としてゆきぬ山の栗

石鏡

毬栗の淡彩愛づる草の上

石鏡

落栗の路考茶いろ帯び幾日経し

石鏡

● 団栗 どんぐり

どんぐりも首をすくめる寒さかな

どんぐりの帽子がとれて仕舞ひけり

青どんぐり湯川高鳴り流れけり

日々鈍る足を鍛えにどんぐり山

肌寒や雨の青どんぐりを見て

青どんぐり雨明りして山の道

団栗一つ供ふ湯神の御神体

団栗の青日光澤温泉きが打ちて磐の音

野毛坂に団栗落ちて転ぶ距離

団栗落つ得たりや応と鋪道受け

水榭の実の落つなかに休憩す

また拾ふ団栗拾つてだうするの

けふの団栗加ふきのふの団栗に

団栗を莫迦云ひながら拾ひをり

登り口そこに団栗捨てゝあり

捨て団栗何故か仔細はわからぬが

●とち橡の実

萎びさす橡の実死蔵といふべきか

橡の実を呼び水にして橡餅売る

●くるみ胡桃

今云うたそれがよささう胡桃蕎麦

民宿の女将披露

胡桃割るそんなやり方あったのか

寄つてつてがんせと遠野の胡桃売り

胡桃割る小部屋のなかに控の間

サワグルミ端正な葉のみみずれり

●かや榧の実

激突の榧の実種を吐き出せる

榧の実のころころ道に辟易す

●ぎんなん銀杏

銀杏墜つつつつと葉叢中

老人に落つるぎんなんなくなりぬ

ぎんなんのへちやと土打つ音すなり

国東の仁王顔してぎんなん食む

銀杏の生る木生らぬ木思召し

家中がぎんなん臭くなり雨日

ぎんなん落つそびらにいやに大きな音

毛先までぎんなん臭さにまみれけり

ぎんなん採る通りすがりの筈なりしが

ぎんなんの光沢放つ炊き御飯

宿好

宿好

随笑

随笑

素抱

石鏡

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

暮津

寒暑

寒暑

寒暑

さざ

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

さざ

燕音

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

鳩信

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

ぎんなんを踏みつぶしゆく市宮バス
ぎんなん臭さ帯びて戻れば蚊に好かれ
ぎんなん剥きとつくに鼻が莫迦と云ふ

● 棗なつめ 棗の実

棗の実エホバのこしらえたりしもの
棗東山寺町の実想ひにいろいろあるやうに

素抱

素抱

江名子川水音棗に響かせて

素抱

川べりに棗ここだく鉄砲町

素抱

棗の木青実ここだく製麵所

素抱

飛弾人に棗の砂糖煮手ほどき受く

素抱

赤錆飛弾古川の棗も交じる川辺の木

素抱

棗の辺雨湿りして裏木戸あり

素抱

● 無患子むくろじ

施無畏印むくろじ強く地を打てり

ねず

無患子の地を打つ音を聞きに来し

もも

無患子のよく落つ頃を訪はまほし

石鏡

● 菩提子ぼだいし 菩提樹の実

日表の菩提樹の実にあふむくこゑ

さざ

菩提樹の実ほとりより発つお山入り

素抱

● 檀まゆみの実

檀の実弾け季よと湖のこゑ

さざ

● 一位いちゐの実

一位の実熱血快川果てし寺

寒暑

霧好きは一位に如かずまりしてん摩利支天岳

素抱

● 木瓜ももの実

木瓜の枝のこんがらかつて年越せり

もも

木瓜の実に小馬鹿にされてゐることし

燕音

木瓜の実の道楽息子よく肥えて

随笑

木瓜の実の一つとてつもなく大き

素抱

禅林に木瓜の青実の大知識

暮津

● 衝羽根つくばね

衝羽根に鬼籍の人と昼の酒

鳩信

● 草くさの実

葉耳おなもみの三度目にしてくつつきぬ

さざ

ぽつぽつと日の差すひよどりじようこの實

ばら

いろいろある種子の飛び方草の実展

燕音

雑草の実にもうち捨て難きもの

石鏡

● 牛膝みのかじ

みのこづち払へるこゑの大わらは

石鏡

あらぬこと言ひては払ふ牛膝

●草風くさかぜ

草風まだくつつ着かぬ穂の若し
草風はたき合ひある音のする
ホームにて振り払へるは草風

●稻刈

鬼無里晴れ稲を刈る音蕎麦刈る音
羽前山辺羽前金沢かねざわ稲刈りどき
稲刈りがもう済み虚空蔵さんの村

●稻田

稔田に交りて稗のまんめんじん
鈍行の中まで稻田の照り返し
稲田描く油絵の具を盛り上げて
列車音稲田をキタカタキタカタと

●刈田

鶴巢村刈田越しなる円空堂
スクーターとばす農道刈田晴れ

●落穂 落穂拾ひ

俳諧の落穂拾いの夜は更けて

●稲架はぎ

稲棒ほうち 稲架襖

稲架棒の取り入れ後もふんばれり
稲架棒の使ひ古しに露降りて
日差しにも奥行のある稲架襖
稲架組んで手刈りの頃の話かな
空稲架はあたかも牛の四つん這ひ
出で立ちは郷士のさまに群むれ稲棒

●粃もみ 粃殻焼く

粃を焼くうしろ鬼無里の真暗闇
粃殻の音の中なる曉蛸

●七竈ななかまじの实

ななかまじと白根百度霧流れ
乗鞍乗鞍高原のことし色悪しななかまじ

●梅檀せんだんの实

梅檀の実のまだ青き寺に寄る

●鶉もちの实

鶉の実の風味を鴟の熟知せり
鶉の実の数ほど福が来ればいい
鶉の実のあらむかぎりを鴨漁る

暮津

寒暑

石鏡

暮津

ねず

随笑

石鏡

随笑

随笑

寒暑

石鏡

素抱

素抱

寒暑

もも

さざ

鳩信

宿好

素抱

石鏡

ねず

暮津

暮津

ばら

素抱

随笑

もも

随笑

随笑

● 櫛の実 はぜ

つぶらなるなんきんはぜの実好日や

素抱

● 南天の実 実南天

実南天笑みのこぼるるばかりなり

ねず

尾長の目南天の実をズームイン

さざ

日当りに南天の実の笑初

さざ

南天は本来のいる美濃馬場 ほんば

ばら

比叡より一雨あるか実南天 坂本

燕音

● 珊瑚樹の実 さんごじゆ

珊瑚樹の実や百日をうち過ぎて

随笑

珊瑚樹の赤貧洗ふがとき実よ

随笑

珊瑚樹の実を過ぐこころうらぶれて

素抱

珊瑚樹の実やご本尊修復中

素抱

● 梅擬 つめもじぎ

ゆふいんの霧に目の慣れ梅擬

鳩信

日が当り轉りさうな梅擬 金閨寺

宿好

色鳥のこゑを引出す梅擬 銀閣寺

宿好

梅擬この粒花があんな実に

暮津

まだ青実なれどそのうち梅擬

暮津

● 蔓梅擬 つるもじぎ

爆ぜるよな朝の鳥こゑつるもじぎ

さざ

もたついてつるうめもじぎといひなほす

石鏡

● 英蓮の実 がまづみ

がまづみの實やこの谿の鳥たちに

燕音

がまづみを漁れる小鳥無我夢中

燕音

がまづみの色づく頃の山の湯に

素抱

がまづみの実の赤雫切りにけり

石鏡

● 玫瑰の実 はまなす

はまなすの実の生る頃の密航者

寒暑

● 橙 だいたい

通るたび橙の木の似合ふ家

ねず

臭橙採る畑のあなたに周防灘 かぼす

鳩信

相まみえ臭橙の里の大日如来さん だいにち

鳩信

● 朱欒 ざぼん

文旦の天然のいる出し渋る

ばら

文旦は親分その他はその子分

素抱

● 仏手柑 ぶしゆかん総領事ハリス好みの仏手柑 玉泉寺

鳩信

どれ一つ話のたねに仏手柑

石鏡

●檸檬 れもん レモン

レモン添え外食めきぬ牡蠣フライ

寒暑

●金柑

金柑のありたけ点る観音堂

寒暑

金柑を生らせ死ぬまで棲む家ぞ

素抱

金柑の笑顔そこらに振りまきて

素抱

和田浦の金柑海に照り負けず

石鏡

●酢橘 すだち

酸橘得しされど秋刀魚は旬ならず

素抱

●柚子 ゆず

長湯の子柚子もろともに掬はんか

ねず

柚子絞り酢牡蠣ほたは旬のもの

宿好

皺む柚子若年寄といふ風情

随笑

並び泛く柚子の寒山拾得と

石鏡

●柚味噌 ゆみそ

文面は至れり尽くせり柚味噌のこと

寒暑

●万年青の実 おもと

いちばんの庭の古株瘦万年青

ばら

栗田御所大玄関に万年青活け

燕音

先代は大の庭好き万年青の実

燕音

古俳諧ほどの目出度さ万年青の実

素抱

万年青の実陳ていやはや面白し

石鏡

●種瓢 たねかぶ

蕪村また大器晩成種ふくべ

随笑

かにかくに人は生きやう種ふくべ

寒暑

●種茄子

種茄子に晴れてまた降る雨のあり

もも

気紛れに落ちくる雨や種なすび

さざ

●種採

種を採る音の暫くしてあたり

寒暑

下駄履きの種採日和とはなりぬ

暮津

種採の封筒ふうと膨らませ

暮津

種採りをしたり片づけごとしたり

暮津

種採のおっとここにはいぼむしり

暮津

種採のほか用無き庭となり

暮津

もそもそと種採るほかに人気なし

暮津

二回目の種を採るとて小雨の中

暮津

種を採る蝶々夫人の唄声に

暮津

種子揉みて音にして見す枯れ具合

暮津

晩節を種採ることに安んじては

暮津

●秋寂びあきさび

秋寂びて縦一文字手術痕

鳩信

箒・塵取・秋寂ぶ板の間共同湯

随笑

大谷石佛秋寂ぶ唇に紅さして

素抱

味噌蔵蔵屋敷の土塗り引き戸秋寂びて

石鏡

●秋深しあきふか 秋闌け

「他不知思染井」に深む秋

燕音

禪寺の油土塀に秋闌けて

宿好

秋深む観音一体修復中

宿好

子規庵の見取り図秋も深まるに

随笑

●冬近しふゆちか 冬隣

「ただいま」は隣のぼうず冬隣

宿好

これ煮れば冬が近づく焼豆腐

随笑

風の日ひは湯が愉しくて冬隣

素抱

新聞の切り抜きジョリジョリ冬隣

石鏡

冬迎ふ暮しのリズムアンダンテ

石鏡

反古ひねる快感冬はもうそこに

石鏡

●紅葉もみぢ

もみぢ もみぢ葉 紅葉川 紅葉山 紅葉冷

もみづる

もみづれりオランウータンの体毛も

鳩信

手始めに山の頂もみづれり

素抱

サワグルミ端正な葉のもみづれり

素抱

メイプルのもみぢ押し葉にして機内

ばら

言葉かけ合ひ楷樹もみぢの愛好家

ばら

どうかうもなく山茱萸しじの醜もみぢ

鳩信

もみぢ葉は真言陀羅尼 義趣を秘む

宿好

諸鳥のこゑも染るやもみぢ御所

宿好

さるすべりもみぢ見ながら渡り廊

宿好

横笛滝口寺をおもひ染めたる色もみぢ

宿好

落柿舎落柿舎の虫喰いもみぢ葉とす

宿好

一葉よりもみぢ始まる曼珠院

宿好

葉末よりもみぢ始る詩仙堂

宿好

心鏡永観堂に写し参らむ照もみぢ

宿好

つまらなき色して梅のもみぢ葉は

随笑

もみぢして学問処の孔子木

寒暑

実習の指圧のいろはもみぢの手

素抱

山寄りに町は造られ朴もみぢ

素抱

赤もみぢ黄もみぢとことん愉しめり

素抱

それならと紅葉の頃の宿をとり
 随笑
 この彩に安んじ梅の紅葉せり
 随笑
 打ちつけてめりこむ魚板紅葉寺
 随笑
 山麓駅造花紅葉も酣に
 随笑
 やあ紅葉八番札所のぼっくりさん
 随笑
 ぼけ封じ肌着購ふ紅葉寺
 随笑
 おびんづるさまに前山紅葉して
 随笑
 同型の楓紅葉の全しや
 随笑
塩原高尾辞世句 寒風にもろくもくつる紅葉かな
 雪の上に高尾ゆかりの寺紅葉
 寒暑
 南部ばやし造花紅葉を稚児負ふて
 寒暑
ロープウェイ
 山麓と温度差五度の早紅葉
 寒暑
 履物のとり散らかつて紅葉宿
 寒暑
加仁湯
 団体さん今到着の紅葉宿
 寒暑
 良寛の草書さながら色葉散る
 寒暑
いろは
 紅葉沢落石すんでのところに
 寒暑
 紅葉して引湯泉質二系統
 寒暑
 乗鞍の紅葉如何と登りつめ
 素抱
繪原湖
 湖畔亭紅葉そこそこ客そこそこ
 石鏡
 ポスターに紅葉づる鎌倉始発駅
 石鏡
 これはこれだと云ひつゝ桜紅葉みる
 石鏡
 紅葉冷猛禽類は眼をつぶり
 石鏡
孫 美雨
 吾に優るもみぢ葉拾ひ来て見する
 石鏡
 雨ありて一色増しぬ山紅葉
 石鏡
鳩ノ巢溪谷
 紅葉谿手すりがありて大助かり
 石鏡
 紅葉づれる断崖秩父古成層
 石鏡
 紅葉川聞けばカヌーで下るとよ
 石鏡
 鳩ノ巢の紅葉愛でつゝ見ず知らず
 石鏡
 紅葉冷え薄着後悔してみても
 石鏡
 二つ目の吊橋こも紅葉佳し
 石鏡
 山女釣れ紅葉に腹を返しけり
 石鏡
 滝見茶屋ざつくばらんな紅葉かな
 石鏡
アフラヤン
 油漉青紅葉づる日原街道ゆく
 石鏡
 山寺の紅葉の日照時間かな
 石鏡
 明るさは桜紅葉に優る君
 石鏡
 大巖が行く手を塞ぐ紅葉川
 石鏡
 ●紅葉狩 紅葉見る
 ざざ
 紅葉狩えらい上りとなりにけり
 さざ
 紅葉狩薩摩おごじよのバスガイド
 鳩信
 紅葉狩落柿舎辺りで日が暮れて
 宿好
常寂光寺
 好事家の嵯峨野もみぢといふを見に
 宿好

週末のユリの木黄葉散り空きて
 湘南キャンパス黄葉のもとの生演奏
 零余子黄葉始まつてをり覚圓寺

素抱
 石鏡
 暮津

● 照葉

照葉して五體あられもなき岩湯

寒暑

● 雑木紅葉

金時山もこもこ雑木紅葉せり
 自転車にて近場の雑木紅葉見に

ねず
 石鏡

● 柿紅葉

柿もみぢ柿に根負けして散りぬ
 朝露のまだ干ぬ内の柿もみぢ
 しぐれては鄙ぶ高雄の柿もみぢ
 柿紅葉やっぱりよかったこの径で
 柿紅葉葉にしたき一級品
 柿もみぢ明りに何ぞ云ひたくなる

もも
 鳩信
 宿好
 石鏡
 石鏡
 石鏡

● 漆紅葉

山漆紅葉急なり滝の前

寒暑

● 櫨紅葉

ちよんちよん
 〵 〵と夏櫨紅葉したりけり
 櫨紅葉十を数えて湯壺出づ
 讚集めをり山中の櫨紅葉

さざ
 寒暑
 石鏡

● 銀杏黄葉

二大樹の銀杏黄葉の消耗戦
 銀杏黄葉落つときスイッチバックして
 大銀杏黄葉間引かれ素寒貧
 縣廳前馳すバス銀杏黄葉いろ

燕音
 宿好
 宿好
 随笑

● 錦木

錦木の錦を蔵ふ季来たり

石鏡

● 蔦紅葉

一番の冷え込みありぬ蔦紅葉
逗子市役所
 全館を覆ふに足らぬ蔦紅葉
今市
 蔦紅葉して今市の杉並木
 松のぼることたやすけれ蔦紅葉

燕音
 随笑
 寒暑
 寒暑

● 草紅葉

幼な子の見て見て見ての草もみぢ
 アスピーテライン上りの草もみぢ
 草もみぢミニチュア火山の裾野にも
 揚舟の櫓の下草もみぢして

鳩信
 寒暑
 寒暑
 石鏡

● 水草紅葉

いち早く湯川水草黄葉せり

随笑

家鴨があが云ふなか水草紅葉せり

石鏡

●野山の錦 野の錦 山の錦

飛倉は野山の錦一つ跳び

鳩信

仁丹の看板のこる野の錦

寒暑

序の口の山の錦といふべかり
奥鬼怒

寒暑

●紅葉且つ散る

紅葉且つ散りて溪流走らす

寒暑

●黄落 黄落期

黄落のいてふ男時の杜抜けて

さざ

黄落の骨うづむなら西林寺

ばら

アムール虎右往左往の黄落期

鳩信

乗鞍の巖も黄落せんとせり

素抱

黄落の泡の湯で乗る五人組
上高地乗鞍林道

素抱

大正初期植ゑしカラマツ黄落期

素抱

黄落の雨の跳ね見ゆ木道に

素抱

木道の終端黄落振返る

素抱

黄落どき葉っぱのフレイ舞ふ林

石鏡

ダイケアバス黄落に頭を振り振り来

石鏡

●鹿

蝦夷鹿のきよとんとせるに出逢ひけり

燕音

●猪 みのしし

利口者猪にまたやられけり
婆曰く

燕音

川渡りかう来し猪と事細か

石鏡

言いぐさの猪より荒く猪貶す

石鏡

余所者に聞かせて猪の悪さごと

石鏡

かうすればああ出る猪のいと憎しと

石鏡

峡住みの畑作猪と根ン比べ

石鏡

●未枯 うらがれ

未枯れの百草を刺す野路の雨

暮津

●穰 ちひ 穰田 ひつじ

ひつじ田を田螺のあるく鬼無里晴れ

ねず

ひつじ田のほとりで列車列車待つ

寒暑

ひつじ田の照る中往けば老け込みさう

石鏡

車輛音カタカタひつじの二番穂に

暮津

●文化の日

二階にて目覚まし鳴りぬ文化の日

鳩信

新聞を裏返す音文化の日

鳩信

叙勲記事相も変はらず文化の日

宿好

- とっかかり要得ぬ電話文化の日
 文化の日形状記憶シャツ干せり
 宿好
- にんにくと煙草の話文化の日
 随笑
- 眼鏡拭き浄めて拝観文化の日
 随笑
- 文化の日ふうせんとうわた活け込みて
 寒暑
- 魚食ベ骨太らしむ文化の日
 石鏡
- お年寄り許りの結社文化の日
 石鏡
- 札つきの三毛猫通る文化の日
 石鏡
- とり落とす画鋏を探す文化の日
 石鏡
- 文化の日柄の揃はぬ茶碗蒸し
 暮津
- 十一月
- 冬 冬帝 玄冬
- 玄冬の海に百の目啼鷗
 さざ
- 玄冬の地蝟粗塩すり込まれ
 さざ
- 冬帝の欠伸催しさうな日々
 さざ
- 冬將軍声を暖らして何を下知
 さざ
- 大衆魚真鱈の顔の冬親し
 燕音
- 冬景色殊にビュツフェの垂直線
 宿好
- た^{懐旧二句}たみい^{二句}わし焙る祖父の手見え冬へ
 宿好
- 雲脂飛ばす遊^{すま}びごとして冬机
 宿好
- ザトペック逝けると冬のチェコ通信
 宿好
- ポーナスのもう出ぬ冬を迎えけり
 宿好
- てのひらに移して冬の蟻這はず
 宿好
- 遣り残すことがいつしか溜りて冬
 随笑
- ファックスの吐き出す紙の徐々に冬
 寒暑
- 同床異夢冬の花火を俱に見て
 素抱
- 川風に鼻昂然と冬磧
 石鏡
- 日が入り過ぎても困る冬机
 石鏡
- 冬廁かはりばんこに席起ちて
 石鏡
- 冬帝に云はれてそこに立つてゐる
 石鏡
- 様変れど冬の子供の遊びかな
 石鏡
- 潔き起床が凡て冬百日
 暮津
- ようそろと鷗添ひ翔ぶ冬の航
 暮津
- 隣室てふ一語に冬の響きあり
 暮津
- 立冬 冬に入る 冬来る 冬立つ
- 隼人瓜姿無類の冬に入る
 燕音
- 冬に入る顔決め込んで隼人瓜
 燕音
- 立冬に要らぬ雨など降り出して
 宿好
- 立冬の床起ち羽織るもの探す
 宿好

立冬の雨止んでまた降りさうな
 立冬の雨にユスリ蚊でんてこ舞
 立冬の我がものとなる新刊書
 目につくもの皆がさついで冬は来ぬ

こめかみの辺りしゃきつと冬立てり
 経済でふからくり空回りして冬へ

ブルゾンの浅きポケット冬が来る
 けん玉の腰を屈めて冬に入る

首筋の辺りがすうと冬立つ日
 アナウンサーけふ立冬と前置きし

冬来ると櫂の聰明櫂の鈍ど
 質屋の路地小走りに冬が来て

寄せ植えの多肉植物冬に入る
 立冬と聞けば内心ああさうかと

冬に入り兀と鷺鳥の鼻の瘤
 冬が来る睫毛のいっぽんいっぽんに

●十一月
 くしゃみして十一月に入りにつけり

十一月しよっぱなの風邪貰ひけり
 義理欠くまま十一月のこゑをきく

十一月ホンドタヌキの空寝入り
 十一月こんな日和が宜しくて

何處となく尻に火がつく十一月
 スケッチす十一月の塀と坂

●初冬はつふゆ
 福助の面テ起こせる冬はじめ

コアラは初冬のユーカリの葉をよく噛んで
 一刹那初冬の鷺の影浴びぬ

性根据え大榭冬を迎へけり
 冬浅き畳にひろぐ肌着類

冬兆すスバゲッテイに鷹の爪
 三毛猫の木に爪研ぐ冬はじめ

白湯もってポットを充たす冬始め
 ●神無月かんなづき 神在月

槽底に豆腐屯す神在月
 ●神の留守

神の留守タンス預金に手をつけず
 神の留守ゴミの分別微に入り細

●十夜 十夜寺 十夜僧 十夜講 お十夜

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

随笑

随笑

寒暑

素抱

石鏡

石鏡

暮津

燕音

燕音

随笑

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

ばら

鳩信

宿好

宿好

随笑

随笑

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

下着売るお十夜の灯のらくだ色
 ねず
 十夜僧くわりんのごとき頭をしたり
 ねず
 お十夜の小菊嗅がれて買はれけり
 ねず
 十夜僧すつぽりと入る傘買へり
 もも
 十夜僧すしんずしんと廊渡る
 もも
 十夜講持味出してひとくさり
 ばら
 十夜講お婆の白河夜船かな
 随笑
 十夜寺光明寺そこ十夜聞きゆく日暮道
 随笑
 鎌倉の波おとなしき十夜かな
 随笑
 十夜法要堂を破らんばかりの鉦
 随笑
 堂抜いて心耳を洗ふ十夜鉦
 随笑
 十夜講凡夫に交り尼ごぜも
 随笑
 十夜講畳を擦りて坐につける
 随笑
 十夜僧肅と引声阿弥陀経
 随笑
 十夜法要囉す鉦方念ねぶつ仏方
 随笑
 堂上に車椅子上げ十夜講
 随笑
 婆の眼をこすりこすりつ十夜講
 随笑
 鵜の木の大くて立派十夜寺
 随笑
 潮の香す十夜参りの戻りみち
 随笑
 婆同志お十夜の灯に濡れにくる
 寒暑
 ●西とりの市いち 一の西 お西さま
 西の市 横浜真金町
 三つ目で地下鉄を降り西の市
 燕音
 真金町交番裏のお西さま
 燕音
 灯が点り枯木の間のお西さま
 燕音
 神鈴の三つは忙しお西さま
 燕音
 半月に風の納まる西の市
 燕音
 とつくりセーター人波をゆく西の市
 燕音
 射的屋の音の中抜けお西さま
 燕音
 手締めには手締めの応酬一の西
 燕音
 西の市人の流れに蹤くばかり
 燕音
 お西さま戻りの道の落葉風
 燕音
浅草西の市
 ぶつかられ躰くるりと西の市
 燕音
 もういつぽん先の道だよお西さま
 燕音
 西の市櫛落葉がすつ飛び来
 宿好
 お西さま神武景気の世は遠く
 宿好
 おかめ等が夕日呼び込む西の市
 宿好
 灯がついてよりの賑はひ西の市
 宿好
 くらがりに襟を立てゆく西の市
 宿好
 お西さま人出ぬうちの車椅子
 宿好
 起つ風に身震ひ一つ西の市
 宿好

電球も黄金光りに酉の市 宿好
 角店で酒ひっかけて酉の市 宿好
 酉の市すれ違ひさま脂粉の香 随笑
横浜 曙町 荒井屋は鋤焼き発祥の店
 酉の市見て来て牛の荒井屋に 石鏡
 バラ銭が笹に鳴り落つ酉の市 暮津

●熊手

かどはかさされて熊手ゆくごと夕日の中 もも
 新旧の熊手高々行き交へる 燕音
 熊手の値耳打ちすれば「そりや無理だ」 燕音
 値のあつて値の無き熊手よく売れる 燕音
 むにやむにやとやりて熊手に値のつきぬ 燕音
 縁起物働き者の熊手だよ 燕音
 熊手また売れたり火打ち石をちよい 燕音
 熊手買ふ気つぶのよさが身上ぞ 燕音
 大熊手売れて手締めのよよいのよい 燕音
 にぎにぎしく熊手鯛やら小判やら 燕音
 熊手売手持ちぶさたの股火鉢 燕音
 どれにせうずんと下がって熊手見る 燕音
 派手好きの御代のきらきら熊手かな 燕音
 熊手持つ拳と拳行き交へり 燕音
 手締めしてそれそれ熊手又売れた 宿好
 熊手持つ空似の人や酉の市 宿好
 熊手売使い込んだる法被着て 宿好
 お手頃の熊手は店のとつつきに 随笑
 熊手買う人を立見の人の群れ 随笑

●茶の花

温言のごとき日を載せ茶の咲けり ねず
 梅尾のお茶の実に凝る雨雫 宿好
 茶の青実曰く「阿留辺あるべき幾夜きょうわ宇和」とは 宿好
 茶が咲けば清貧一途の明恵見ゆ 宿好

●山茶花

山茶花に大きく物の割れる音 ばら
 さざんかの目を泣きはらすやうな花 ばら
 殲滅の白山茶花でありにけり 鳩信
 山茶花に毛虫一騒動ありぬ 燕音
 山茶花のうち崩るるは自刃に似て 宿好
 ズバリ散る白さざんかでありにけり 宿好
 さざんかの会心の白龍安寺 宿好
 山茶花も人もいずればガタツと来 宿好

苔解く山茶花これは明明後日しあさつて

宿好

さざんかの落胆甚だかりしかな

宿好

山茶花の花立て直す暇無く

宿好

山茶花をいたぶる霜の手をゆるめず

宿好

さざんかのはや花零す粗忽者

随笑

円覚寺 お風入れ
夕鴟のこゑの一撃さざんかに

随笑

かうなつて仕舞へばさざんか散る他ない

素抱

医師の云ふ風邪軽んぜず山茶花どき

素抱

高々とさざんか垣の壁なせり

素抱

● 柗たけの花

今朝みれば柗咲いてをりにけり

さざ

柗の小出しに咲ける角の家

さざ

柗が咲いて四五日ほど経つか

さざ

柗のこゑにならざるこゑ交す

さざ

柗の人目にふれぬ零れ方

さざ

柗の徒ならぬ花の数

宿好

柗の潰えし花の埃じみ

宿好

柗や人を評すに言葉揺れ

随笑

柗の銀漢なせる葉叢中

石鏡

肌身には感ぜぬ余震柗に

石鏡

柗は気が付く前に散つてゐる

石鏡

● 八手やっぺの花 花八つ手 八つ手咲く

蠅が脚長く使へり花八つ手

さざ

蠅が来て蠅追ひ払ふ花八つ手

ばら

はきはきと答へてをりぬ花八つ手

ばら

めいっばい時間をつかふ花八つ手

ばら

歩かぬは万病の因もと花八つ手

鳩信

そもさん
作麼生と実さくる問ひ掛けくるごとし

鳩信

花八つ手瞬くやうに朝が来て

鳩信

掛かりつけ大田医院の八つ手咲く

燕音

首筋の辺りすうすう花八つ手

宿好

はつらつと通りすがりの花八つ手

宿好

八つ手咲き板塀が反る日向路

宿好

花八つ手気安く詠めて貧乏性

随笑

改めて妻の冷え性花八つ手

随笑

花八つ手晦日払ひの世のはるか

随笑

花八つ手敵の母艦が潜む庭懐旧

随笑

この路地の日照時間花八つ手

石鏡

● 石路いっしよの花

石路日和

石路の花誰も来ぬ日と決めてぬし
 ねず
 自転車に空気を入るる石路日和
 ねず
 家に居ることにおちつく石路の花
 もも
 庭に出て点呼取りたき石路の花
 さざ
 屹きつとして瑞鹿山の石路咲けり
 さざ
 そこまでと云ひて出で来ぬ石路日和
 さざ
 古障子色の日差しが花石路に
 ばら
 参道の両側に石路呼応して
 ばら
 石路浄土金シのくしゃみをしたりけり
 鳩信
 郷土史に明るき人と石路をみる
 鳩信
 石路の花世間話をせるごとく
 燕音
 虻去るとはつかに石路の独り言
 宿好
 仏壇の鉦の色もて石路が咲く
 宿好
 いっこうに何も起らぬ石路の日々
 宿好
 咲き出せる石路に阿弥陀の頬ゆるめ
 宿好
 石路蓄む虻の翅音にあやされて
 宿好
 二階鎌倉 大巧寺にて謡ひの稽古石路日和
 随笑
 石路日和とところでこれから何處へ行こ
 随笑
 石路綻ぶその数好日とや云はん
 素抱
 褒貶は成り行き任せ石路の花
 素抱
 一団の黒の礼服石路日和
 素抱
 安穩に馴らされゆく身石路の花
 素抱
 送金を了へたる安堵石路の前
 素抱
 雲脂光り衣をまろび落つ石路日和
 石鏡
 ●七五三 袴着 千歳飴
 ねず
 繰上げて海晴るる日の七五三
紅葉坂 伊勢山皇代神宮
 鳩信
 七五三あつさり組と凝り組と
 鳩信
 もどかしく磴を登るも七五三
 鳩信
 おねだりの僕は僕はの七五三
 鳩信
 ぽっくりのしゃんしゃん歩き七五三
 鳩信
 日の差しておべべぼかぼか七五三
 鳩信
 略服に済ますもよけれ七五三
 燕音
 七五三辺り走れる櫂の根
 宿好
 三世代みんなめかして七五三
 随笑
 七五三着くずれ直し処あり
 寒暑
 七五三気ばつてあげるお賽銭
 寒暑
 神の鳩そこ退けそこ退け七五三
 石鏡
 袴着のそのままく目つむるなよ
 さざ
 袴着のとんとんのぼる五十段
 さざ
 隣席の袴着袴こそつかす
 ばら

油断して地を擦るまいぞ千歳飴
千歳飴一寸持たせて貰ひけり

鳩信
寒暑

●髪置

簪やりボンや髪置迎える子

寒暑

●落鱸おちすずき はらふと

落鱸はらふと漁東京湾のとば口に

石鏡

●蕎麦刈

鬼無里晴れ稲を刈る音蕎麦刈る音

ねず

●麦蒔

秋つこと土地人の云ふそのみどり

素抱

●大根 大根畑 すぐしろ

*秋つこは秋蒔小麦

もも

大根の形よき葉に旭さし

もも

二股のすすしろ涅槃し給へる

ばら

葉先まで綺麗に蘿蔔黄葉して

ばら

頤おとがひに大根台地の風鳴れり

鳩信

大根の清せいさん水の流れ見て

随笑

大根台地葉っぱが眩し眩しとも

随笑

大根を洗ふ機械か人気なし

素抱

大根畑西風に雀の顔細め

石鏡

大根下ろし辛しと老いの舌曲る

暮津

●大根引

軽トラック横付けにして大根引

石鏡

光降る大根台地の大根引

石鏡

大根台地涯はたてに狂ふ沖つ波

石鏡

覆る白涛を背に大根引

石鏡

潮けむり大根台地のどん詰り

石鏡

背をどつく新木の風や大根引

石鏡

天つ日と風を糧とし岬大根

石鏡

崎人に白群青びやくぐんの空大根引く

石鏡

●切干 割干

切干に午後から波の納まりぬ

鳩信

切干は紐に跨り相模灘

鳩信

割干に日の経ち方といふがあり

鳩信

鏡風切干は痩せ細りけり

石鏡

割干の辺下田稔兄の雑談が最期となり

石鏡

●浅漬 べったら漬

市初日べったら漬の値踏みせり

燕音

べったら漬色白女将の腕ほど

燕音

宮内庁御用のべったら漬も売る

燕音

●蒟蒻掘るここんにぎく

こんにやくの茎しげしげと見て秩父

宿好

●蓮根掘る 蓮掘

蓮掘のここぞと力入るゝ顔

もも

蓮根の連れ子つぎつぎ現はるゝ

随笑

蓮根の穴のあなたに黄泉路見ゆ

随笑

●竹瓮たつべ

最上川あきつの止まる破れ竹瓮

随笑

最上川べりに捨てられ古竹瓮

暮津

●颯いたち

ぎつくり腰悪寒は颯のやうにくる

寒暑

●綿虫

清浄光寺、一ツ火 七句

ねず

綿虫を割つて総本山に入る

石鏡

●小春 小春日

鴟の目ついと流れて安房小春

さざ

小春日に水栽培の根が出たか

鳩信

小春日に犀の短軀を横たへぬ

宿好

ポプコーン抛り込むとき小春雲

宿好

小春日に大滝秀治の話術冴え

随笑

痴呆すすむ母と小春のメープルティ

石鏡

小春日の声が先づして猫がゐる

石鏡

●冬日和

冬日和忘れぬ裡に用を足す

素抱

●冬麗ふゆうらら 冬麗とうれい

湧水の冬麗の日を織り込めり

ばら

冬麗の砂零しては初老の手

宿好

冬麗の石蓴浄土を踏みゆけり

随笑

流木に冬麗の砂零しみぬ

随笑

冬麗の砂山一つ作り去る

暮津

●冬暖ふゆあたたか 暖冬 冬あたたか

冬暖の家鴨日和となりにけり

さざ

暖冬のいたづらに梅騙されて

石鏡

冬あたたかシルバー料金映画にも

石鏡

●帰り花 返り花

水面を押しくる風や返り花

さざ

二度咲きの一つこつきり小米花

ばら

ごたごたがやつと片付き帰り花

ばら

ため息を一つつくごと帰り花

鳩信

ちよつとしたことでいさかひ返り花

おいそれと返事も出来ず帰り花

わだかまりとある日解けて返り花

疎遠また致し方なし帰り花

水の上に返り咲くもの日曜日

散歩道こんどは何の返り花

授かれる名案に似て返り花

●冬紅葉

石山の石壇々と冬紅葉

冬紅葉西教寺俗塵払ふ麓寺

松蔭の教へしところ冬紅葉

●紅葉散る 散る紅葉

祇王寺の寵ちよと音なしてちるもみぢ

●落葉 落葉掃く 落葉揺く 落葉焚 落葉風

落葉どき

掃けば飛ぶ落葉始末に悪き日や

落葉掃くことめんだうな目つきして

躰なまらぬ程度にざつと落葉掃く

編みシューズ落葉の匂ひ掻きたてて

百段かみの上から落葉搔始む

背負籠より十歩が程の落葉搔く

落葉搔き朝から母の甲斐甲斐し

とある日の氏子総出の落葉搔

落葉搔石畳より手をつけむ

落葉搔櫂大樹にとりかかる

落葉搔櫂の根っこをガリガリと

植物園大船植物園リヤカー持ち出し落葉搔

西の衛士詰所の前の落葉搔

公園の搔き出し落葉だう使ふ

落葉焚午後の落葉を加へけり

くんと鼻鳴らして落葉焚きみたり

青き葉も意気のがらぬ落葉焚

落葉風かさと賓度びんどろ羅跋ばつたじや羅惰だじや闇に

お西さま戻りの道の落葉風

醉漢の背を押す夜の落葉風

遅ればせながら駈け出す落葉あり

一二枚落葉扱める葉水仙

落葉径はやり小さき流行の犬つれて

日にまどろむ幹かみにぶつかる落葉あり

鳩信

宿好

宿好

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

宿好

落葉風

落葉どき

さざ

随笑

暮津

燕音

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

随笑

石鏡

石鏡

石鏡

ねず

さざ

さざ

ばら

さざ

燕音

石鏡

もも

もも

さざ

さざ

弔ひに落葉臭さを持ち込みぬ

随笑

落葉の中踏み当つ走り根の撓み

素抱

日時計は落葉に埋もれ時刻む

素抱

図書館へ雨のユリの木落葉踏み

素抱

寐溜めせるバクに落葉のはらはらと

石鏡

苑の芝桜落葉の突つ立てる

石鏡

縣廳前落葉と市バス駆け抜けて

石鏡

陸続と落葉降る中市バス来る

石鏡

落葉臭き街歩き来て天井

石鏡

鈴懸散る一寸だらしない木々で

石鏡

踏み鳴らし甲斐ある鈴懸落葉とも

石鏡

練兵場たりし跡地を落葉馳せ

石鏡

東京の落葉こそつく通院日

石鏡

落葉踏みしだく韻きの新世界

石鏡

滑り台欠伸してゐる落葉どき

石鏡

てのひらに桜落葉の移り香す

石鏡

走り根を入れて落葉の吹き溜り

石鏡

菓局の前を転べる落葉かな

石鏡

腐葉土作り大学構内落葉もて

暮津

● 朽葉

溪間の朽葉の八寒地獄かな

さざ

山清水鳴れり朽葉を潜り出て

鳩信

朽葉どき蓮台野より化野へ

燕音

道迷ふ朴の朽葉の幽界に

燕音

切通し落葉朽葉を踏み付けに

宿好

田の底の朽葉に蝌蚪の身を寄せて

石鏡

● 朴落葉

朴落葉山の暦日重ねけり

ねず

拾ひあぐ落葉に朴の木の遠し

ねず

朴落葉掃くといふより片づけぬ

石鏡

ほうほうと云ひて拾へる朴落葉

燕音

靴先で朴の落葉を返すべく

宿好

片づけて片づけきれぬ杜落葉

石鏡

否応なく踏むべくありぬ朴落葉

石鏡

● 銀杏落葉 銀杏散る

葉を落しずんとあかるき銀杏の樹

もも

いちどきに散るを好めるいてふとも

もも

中国語あやつるやうにいてふ散る

さざ

散るあとの手間弁へずいてふちる

さざ

一両日中に散り尽くいてふとも
 たんたと昼のいてふの散るばかり
 皆散るは文無しに似て大いてふ
 いてふ散る輪舞に吾等瞬きづめ
 強いられて大銀杏葉を落としそむ

●柿落葉

ざつと見ていちいちは見ぬ柿落葉

●枯葉

滅燈会枯葉の精も加はれる
 胸中に枯葉降らせる高英男
 からたちの棘の挟める一枯葉
 蝙蝠のやうに下りて枯るゝ葉あり

●木の葉 木の葉散る 木の葉時雨

いつまでも隣家へ木の葉降らせる木
 散る木の葉とよ十に一つは急降下
 女郎蜘蛛木の葉外しにかかりけり
 タンバリンもつて木の葉は舞はずべし
 枝つ先吹きもがれずに櫟の葉

川向ふ今しも木の葉時雨かな

次々降る山の木の葉と歩を一に

枯れ木路線バスつ葉臭き湯町の子が乗り来

網目キリンに木の葉旋回して落ちぬ

木の葉高手降るお品嘉助の山墓に

青空に飛距離を申し散る木の葉

青空に木の葉一枚吸はれゆく

木の葉ひゅうと飛ばして山の風わ走る

セーターの試着好みの木の葉いろ

木の葉相搏つ音やがて無くならむ

すべてこれ泰山木より落つ木の葉

木を離る木の葉くらりと露伴墓

大磐が目隠し露天湯ヤチダモ散る

木の葉舞ひ象はステップ踏むごとし

木の葉散りぶつかる市バス系統図

木の葉時雨今しもグッドタイミング

木の葉時雨股旅姿の吾を想ひ

街路樹の木の葉舞へるやマネキンに

水底の木の葉にも年巡り来て

●木の葉髪

木葉髪拾ひ外来患者のわれ

さざ

さざ

宿好

宿好

宿好

宿好

ねず

さざ

ばら

燕音

ねず

さざ

ばら

ばら

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

燕音

宿好

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

素抱

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

暮津

さざ

木の葉髪諾否ふんぎりつかぬまま

ばら

木の葉髪視力が落ちて堅き本

ばら

木の葉髪妻愛読のサザエさん

ばら

木の葉髪そろそろ気になる前立腺

宿好

木の葉髪搔いて訴ふ忘れ物

宿好

木の葉髪妻居てけふも本を読む

宿好

採血の針見ぬやうに木の葉髪

宿好

生返事たしなめらるゝ木の葉髪

宿好

きな臭きものには倚らず木の葉髪

随笑

人の言気にしてゐては木の葉髪

随笑

無駄骨をおる事嫌ひ木の葉髪

随笑

蓬髪分け方問はる木の葉髪

随笑

木の葉髪とどのつまりは年経たり

随笑

横文字を車中に拵げ木の葉髪

石鏡

先生になかなか呼ばれぬ木の葉髪

石鏡

木の葉髪刈られ仕上げに耳の毛も

石鏡

● 凧 こがらし 木枯

木枯の夜間働く温水器

宿好

一遍像 凧に杖を進むる捨聖

随笑

読みさして聴ける凧挿話めき

随笑

凧に乗馬倶楽部の看板鳴る

石鏡

● 時雨 しぐれ しぐるる

空ら拭きの机にひびくしぐれかな

ねず

多羅葉日吉大社に一時雨あり日吉造ひえ

燕音

うしろより躓き来る嵯峨の夕しぐれ

燕音

時ならぬこれは時雨ぞ一乗寺

燕音

総門の白蛙股時雨けり

燕音

去来の墓いかにも時雨来さうな空

燕音

しぐるるや黒みてここに去来の墓

燕音

しぐれ聞きちりめん山椒一トつまみ

宿好

しぐれ避け北山杉の見ゆる簷

宿好

しぐれては鄙ぶ高雄の柿もみぢ

宿好

川砂西明寺を敷きて時雨の通る庭

宿好

つつつと蕪村棕櫚図にしぐれ馳せ

宿好

● 風入れ お風入れ

風入れの案内当山方丈にて

さざ

風入や軸物入れの箱いろいろ

さざ

背合せに吊らる軸物お風入れ

さざ

経櫃の参之内参お風入れ

さざ

お香々こうこと酒あれば佳し桂郎忌

寒暑

■十二月

何事も先手取るべし十二月

鳩信

書きとめてそれ清書して十二月

鳩信

蟪蛄の翅まだ青き十二月

燕音

「その内」はもう目の前に十二月

宿好

十二月八日の薄きおみおつけ

随笑

松隆と樟隆々と十二月

随笑

一円玉邪険にされて十二月

随笑

喜んでピザ生地を伸す十二月

素抱

チンゲン菜油を飛ばす十二月

素抱

振り込みの控隠しに十二月

素抱

旧く狭く深き地下鉄十二月

石鏡

十二月八日無風の横須賀港

石鏡

探偵社の車内広告十二月

石鏡

トンカチはリズムと心得十二月

石鏡

渡り蟹の食べ殻を捨つ十二月

暮津

●寒波

寒波来桜は樹皮につつまれて

さざ

●短日 日短

短日のバスのおでこが見えて来ぬ

随笑

麵抱えゆく本牧の日短か

随笑

短日のぬいぐるみ置く心臓外科

随笑

マネキンに更に短くなる日差し

石鏡

●冬の日

何よりも冬日が馳走仏日庵

さざ

冬日差烏山椒の枝を研げる

さざ

冬の日に駱駝の鼻先白っぽく

鳩信

唐突に冬の日暮れて犀の尻

随笑

●冬日ふゆび 冬日向 冬日差

足柄古道よぎる蜥蜴の貌に冬日

もも

根方まで冬日が当り気さくな木

もも

瘤擽すんなり擽冬日浴ぶ

ばら

冬日宙湧水八重にひらきけり

ばら

今在りし冬日の何処へ木賊刈

ばら

机塚あたじけなしの冬日差し

鳩信

愛着の古着のやうな冬日差し

燕音

糞る犬のすまなさうなる貌に冬日

宿好

赤松に冬日押し照る豪徳寺
冬日向渡り歩いて病院へ

宿好
宿好

冬日消ゆオコジョのやうにすばしこく
冬日輪古佛の笑まふ如くなり

寒暑
素抱

何もせねば木石の類枯日向
段取りをさらってをりぬ冬日向

素抱
素抱

手狭なる机の上の冬日差
渡船待つ仁右衛門島の冬日向

素抱
石鏡

そこ起てば冬の日に透く部屋の塵
庭木にも庭木の晩年冬日差

石鏡
石鏡

雲間よりスポットライトめく冬日
●冬の朝 寒暁 冬曙

石鏡
石鏡

寒暁を聞きしに勝る利尿剤
寒暁の国道をゆく貌つんつる

燕音
宿好

寒暁の光の痛棒啖ひけり
寒暁の矢面に立つわが瘦軀

石鏡
石鏡

曙光に射し貫かれ地の一切
寒暁のその光ゲ徐々に白を増し

石鏡
石鏡

寒暁の強き新聞掌こわに重る
冬曙何としたこと尿あやまつ

暮津
暮津

●冬の暮
冬の暮切羽詰まって翔つ羽音

石鏡

●冬の雲 冬雲
禅林の冬雲動く潦

随笑
随笑

坐禅堂上を肅々冬の雲
冬雲のおもおもも水平線迄覆ふ

随笑
石鏡

●冬靄 冬の靄
冬靄の和気あいあいの川景色

燕音
石鏡

冬の靄東京湾は事もなげ
●冬夕焼 寒苗

石鏡

寒苗浴びゆく赤肉団しゃくにくだんじやう上に
冬夕焼会社勤めも大詰めに

さざ
宿好

妻の云ふ冬夕焼けをどれどれと
寒苗けふの一切了はらせて

石鏡
暮津

●冬の虹
詩は言語道断冬の虹立つも

さざ
随笑

みなとみらい二丁目で見ると冬の虹
冬の虹のこのこ蟹が這ひ出して
横濱ベイブリッジのハイカラ橋に冬の虹

石鏡
石鏡
石鏡

●冬の空 冬天 冬空 冬青空

髪刈って頭の頼りなき冬青空
ザトペック冬天を馳す蹻音す
世間体一つ外せば冬青空

冬青空歩きたくなる日を歩く

冬空を仰いでけふの雲の多寡

冬青空噴水勢ひ取り戻す

●冬の鳥 寒禽

頭を掠め空林に入る冬の禽

寒禽の潜めり護良親王廟

●冬の鴞 冬鴞

冬鴞のぎうと落柿舎暮れにけり

目端利く冬の鴞とはなりゐたり

冬の鴞素寒貧とはなりにけり

●鼻 縞鼻 ふくろふ

後生楽な縞ふくろふの貌のぞく

ふくろふの目蓋まなぶた開けて吾を見る

ふくろふの振るつたことをいふごとし

鼻の貌立て直す真暗がり

吸ひ込まるふくろふの目のレモン色

鼻の魔法仕掛けのこゑ出せり

鼻の真に受けし貌そこにあり

鼻好きピカソピカソ展(陶板)の遊びごころの壺

文鎮の鼻の貌夜も更けた

とんでもなき縞鼻の胸の内

顔立てゝ鼻勿体ぶつた様

鼻を師とせるおもひなくもがな

鼻にはぐらかされて帰るのみ

もんもんのもんを破れず縞鼻

●木菟みみづく 木菟づく

みみづくの雨は苦手と見ゆ素振り

俳諧は破格破格と木菟の云ふ

●水鳥

水鳥の日がなびしやびしややつてをり

水鳥の水破る音夕間暮

日当りて鳥羽の水鳥真珠粒

水鳥に水の一年明けにけり

水鳥の幽紋あたり暮れかかる

水鳥の羽搏ちこたへのある寒暮

燕音

宿好

素抱

石鏡

石鏡

暮津

暮津

燕音

暮津

燕音

随笑

随笑

寒暑

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

ばら

宿好

随笑

随笑

随笑

随笑

随笑

随笑

石鏡

さざ

さざ

燕音

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

燕音

随笑

随笑

水鳥の睡りに徹す直心ひたしこころ

随笑

水鳥の行方追ひある鼻に風

寒暑

水鳥の羽ばたくことの終に無し

石鏡

●浮寝鳥

浮寝にはすこし間のある日向鳥

さざ

いざこざのなき隔たりに浮寝鳥

ばら

浮寝とはゆかざる鳥羽のゆりかもめ

燕音

痩せ杭の彼方に一つ浮寝鳥

宿好

旧軍港浮寝の鳥もなかりけり

宿好

●鴨

鴨を見に常連さんの身拵へ

さざ

手前より杭・葭・鴨の睡る水

さざ

鴨の水脈家鴨の水脈を打ち消して

さざ

汀る鴨うづくまる鴨雪降れり

さざ

先口の鴨かもなん南蛮忘れ居らぬかや

ばら

風上へリズムをとりにて鴨の首

ばら

割り込ませてもらひますよと鴨のこゑ

ばら

首猶も前へ前へと鴨助走

ばら

派手好きな鴨の二三羽交じりみし

ばら

鴨の水ばかりとらへて遠眼鏡

ばら

鴨の首振って大きな波を越ゆ

ばら

川端の鴨の口々雪来ると

鳩信

鴨着水ざんぶとやってみせにけり

鳩信

鴨の名にいやに詳しき女ゐて

鳩信

湖上に降り鴨の比良組比叡組

鳩信

百千の鴨の一つとなり湖上

鳩信

尻振りて玩具めく鴨近寄り来

燕音

人を見て寄り来る鴨の日和貌

宿好

哲学の道沿ひ鴨も散歩する

宿好

鴨を見て京の五条の橋の上

宿好

観察小屋窓を覗けば鴨ばかり

宿好

くにやくにやと嘴広鴨の影曳きて

宿好

くつくつと鴨も寒さを諾へり

随笑

納税期鴨は汽水に遊びをり

随笑

風少し吹いて真鴨のよろけ縞

随笑

花の間鴨千鳥ヶ淵広がりて広がりて

随笑

鴨群るゝは寄合に似て池の央

随笑

茶のベスト着込み鴨見と洒落込まむ

随笑

鴨池を発たんとやっさもっさして

随笑

一団の鴨を脇見の鴨一団 随笑
 夜の鴨に騒さわぎのありぬ納りぬ 随笑
 おのづから一団を為し鴨すすむ 随笑
 鴨群るゝ日向つづきに家鴨ゐて 随笑
 がやがやと鴨ゐて池を凍らせず 随笑
 箒川鴨横向きに流されて 寒暑
 これとても着水の裡鴨滑る 寒暑
 雑談の合間に鴨の移りをり 寒暑
 税務署の窓越しに見る鴨の池 寒暑
 確定申告済ませ鴨見て帰らなん 寒暑
 被写体とするには動き過ぎる鴨 寒暑
 底冷えに遇ひたる鴨の真顔かな 寒暑
 鴨の陣崩してしまふさあ知らぬ 寒暑
 鴨蹴つて水裏返る春なりし 素抱
 風きつく崩れ出したり鴨の陣 素抱
 これは粹キンクロハジロ小さきちよん髻ある鴨で 素抱
 称名寺鴨も花見と洒落にけり 素抱
 花啄まむと鴨身をひねり 素抱
 広がりに氷らぬものに鴨の水脈 石鏡
 鴨急ぐ方面白きことあらむ 石鏡
 鴨すいすい日曜画家の視野よぎり 石鏡
 ハイカラな瑠璃首立てゝ鴨巡る 石鏡
 分隊の鴨本隊に合流す 石鏡
 掛茶屋に鴨見て風のひやつきぬ 石鏡
 泛く原理鴨と同じや軍艦は 石鏡
 口鉄砲あまりに鴨の多ければ 石鏡
 くいくいと鴨鳴く蓮の池之端 暮津
 ● 鴛鴦せしどり をし 暮津
 鴛鴦は分に過ぎたる晴着被て 随笑
 塵一つなき禅林の鴛鴦の水 寒暑
 映るもの枯れ一色や鴛鴦の水 素抱
 鴛鴦装う晴着は大正浪漫風 素抱
大岡川 颯桜
 おしどりに吹雪ける花の余り風 素抱
 鴛鴦がゐる増水の梓川 素抱
 一塵も止めぬ鴛鴦の身だしなみ 暮津
 鴛鴦映す水の最も美しき季 暮津
 ● 鳩かいつぶり かいつぶりにほにほ鳥 暮津
 鳩に跳んでみせたる沼の稚魚 さざ
 水音にきよとんきよとんと鳩 さざ

鳩は潜水精進吾は句精進

鳩信

練達の士なり堅田のほ鳥は

燕音

瀬田唐橋くぐり遊びの鳩一つ

燕音

かいつぶり潜り出でたる比良面

燕音

比良夕風赤襟鳩の尻押せり

燕音

覚め際のこゑ一つしてかいつぶり

燕音

水破る音も夕づくかいつぶり

燕音

かいつぶり素潜り芸の荒削り

随笑

鳩人を面白さうに見る

随笑

● 鶴 丹頂

丹頂に日本の色極まれり

鳩信

姿見の在らばとおもふ丹頂に

寒暑

羽搏ちては凍ることなき夫婦鶴

暮津

● 白鳥 はくちょう

白鳥が来るやうになり本埜村

寒暑

白鳥の青空目がけ翔つ十字

寒暑

白鳥の飛来足掛け十五年

寒暑

白鳥をかぞふる頭揺れみたり

寒暑

白鳥のために屑菜を切つて遣る

寒暑

押麦浜頓別を白鳥に撒く作業員

素抱

白鳥のあれゆく浜頓別のそら

素抱

皆若く白鳥撮りのテレビクルー

素抱

白鳥の録音係こゑ拾ふ

素抱

白鳥の放送中継風の音

素抱

目の子算ざつと一万コハクチョウ

素抱

白鳥の来る村の地理電話にて

石鏡

● 初雪 新雪

新さくらの雪踏み来て宋代禅講座

さざ

初雪のそれがこんなに降ろうとは

随笑

丹沢山系新らの雪置きだるま市

寒暑

初雪をはたけり鳥の発つやうに

暮津

● 初氷

手にとりて畳平の初氷

素抱

● 寒し 寒さ 寒気

くわんのんの手の厚かりき寒さくる

ねず

蹟男鹿半島、戸賀に沿ひあゆむ寒さも本格的

もも

顔寒くこんこの如く目覚めけり

もも

*こんこはコンペイトウ科の魚、体形は球形。腹鳍は吸盤をなし、

吸物等にして食す

前以て寒さ強調しておきぬ さざ
 風募るうへに寒さも見合はせり さざ
 滑り込むシート寒さも底打って ばら
 心臓の鼠鳴きする寒さかな 鳩信
 疾うに鴉目覚めて居りぬ堅田寒 燕音
琵琶湖
 大津繪の弁慶かざす薙刀寒 燕音
なきた
 心臓が縮まるけさは寒いねえ 宿好
 玻璃越しに雀を覗く寒がり屋 宿好
 寒がりには内弁慶に似て家居 宿好
 どんぐりも首をすくめる寒さかな 宿好
 寒くなりけふも饅飩の昼餉かな 宿好
 シベリアよりどんと吹き込む寒気団 宿好
 天気図に明日の横這い寒気団 宿好
 煙草屋の婆ちやん健在寒いねえ 宿好
 投函の意を削がれたるこの寒気 宿好
懐旧
 通勤の鼻を尖らす寒さかな 宿好
 くつくつと鴨も寒さを諾へり 随笑
 寒ければ一直線に進むのみ 素抱
 潦それみよと云ふ寒さかな 素抱
 まだ顔の寒き日向を歩みけり 素抱
 寒ム空は承知只々歩くのみ 暮津
 おお寒むと躰こすりて起き出しぬ 暮津
 膝さすり寒さをこそぎ落とす妻 暮津
 ●冷たし 底冷え
 黒ずめる連翹の芽に雨つめた もも
 冷え性の本土キツネとおもひけり さざ
 杉戸絵に京の底冷え極まりぬ 燕音
 手をやれば柿のつめたさ椅子の肘 随笑
 底冷えに遇ひたる鴨の真顔かな 寒暑
 白話草真つこと冷たかりけるよ 素抱
 湯屋を出づ縁のつめたき洗面器 暮津
 ●息白し 白息
 棒のごとき白息何もかもこぼむ ねず
 わらわらと白息称名起りけり ねず
 白熊の公爵白き息つけり ばら
 息白し根本中堂常闇に 燕音
 白息を吐きつ一体馬と騎手 石鏡
 躍動する馬と女とその白息 石鏡
 白息の一条やがて透明に 暮津

●冬木

B棟の患者見下ろす一冬木

さざ

そそり立つ一冬木見て職引く身

宿好

一冬木仰ぐ心もささくれて

宿好

瘤隆と立寄り易き一冬木

宿好

●枯木 枯枝 枯木星 枯木風 裸木

入り組めるいてふの枯枝枯枝に日

もも

枯枝折り隣家葬りの仕度かな

さざ

サンザシに巣と見えしもの枯枝なる

さざ

また一つ家毀たれて枯木星

鳩信

いま暮れて今年が終る枯木星

随笑

枯木風日に三便のバス待てり

燕音

ブエノスアイレス負け犬に吹く枯木風

燕音

痩せぼつちのキリストを吹く枯木風

燕音

裸木となりてさくらはそこらの木

ねず

裸木となりて櫂の鬘鑠たり

ねず

裸木の蕊の白さをおもひけり

もも

すずかけの裸木季しゆきと申すべき

もも

裸木の光と蔭の部分かな

燕音

裸木の櫂の如菩薩仏菩薩

宿好

裸木と紅葉半々山手線

宿好

蹲る鳩を裸木見下ろせり

宿好

丸腰の裸木なれば寄り易し

宿好

裸木の無心が心憎き日や

随笑

裸木の走り根の先ここまでよ

随笑

裸木のこよなき艶がすべてなり

素抱

裸木となりて歴然瘤櫂

石鏡

そそけだち自暴自棄めく一枯木

もも

閲覧室そそけ枯木の見ゆる席

もも

枯木道脇挟む本ぬくとかり

もも

滝桜見るに枯木に手をつきて

さざ

一渉り池のほとりの枯木見て

さざ

頭上なる枯木の何かこそつける

さざ

シヤガールの月にビュツフェの一枯木

さざ

枯幹に抱きつきざまに鶴止まる

さざ

枯木打ち晦日の雨の至りけり

ばら

枯木越し円空さんの寺が見え

ばら

残る葉の幾枚枯木のプ・ラ・タ・ナ・ス

鳩信

町内に枯木と月と銭湯と

燕音

街ダリエンソの木は枯れてタンゴの鼻濁音

バンドネオンに翼枯木の宙を舞ふ

街路樹の枯木のパントマイムかな

行き来して句作り算段枯木中

柿の木のへうへうとイっつ枯れてイっつ

鏡なす空に枯木の物狂ひ

脱帽といふ他はなき枯木瘤

枯木攀ずあの猫金魚盗った猫

怪人二十面相枯木の合間より

けんちん汁伝はる寺の総枯木

ボウボウと枯れ木国産マツチ創始者 清水誠の碑産マツチの碑

● 枯鶏頭

断乎たる枯鶏頭の大頭つむじり

● 冬枯 枯るる

枯月夜燭入りて堂膨らむよ

実ざくろの木乃伊めく枯れ祖父の忌よ

不整脈薬で押へ枯るる中

枯るる頭を潜望鏡のやうにリス

枯れに入るもの一つに床擦れも

鈴懸の尾羽うち枯らすまでのこと

一山の枯れ清水の舞台お圧す

枯篠にひねもす東京湾の照り

冬枯れ野毛山動物園に長寿の象のハマ子さん

枯るる身に熱湯をこそ湯西川

枯るる夜をジーラジーラと唄い出す

口許が割れて洩れだす夜のタンゴ

ジョーカーの裏でくすりと夜の笑ふ

バイオリンずいこずいこと「颱風」ひく

鈴懸の意地といふ他なき枯れ瘤

枯れてをりウツボカズラの壺半分

枝先に合歓の枯れ莢ひいふうみい

つくねんと柿の木いっぽん枯月夜

青空のまま昏れ柿の帯月夜

枯るる夜を飛行機サンテグジュペリ野郎の本を読む

枯るる身に探りを入るる聴診器

島の鳶こゑ逆落とし篠枯らす

不細工よ牡丹ガクの木の枯れざまは

映るもの枯れ一色や鴛鴦の水

年寄り素抱は平屋を好む枯十賊

燕音

燕音

宿好

宿好

随笑

随笑

石鏡

暮津

暮津

暮津

暮津

さざ

さざ

ねず

ねず

ねず

さざ

ばら

鳩信

鳩信

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

素抱

素抱

素抱

枯るゝ夜をダイナマイトの綾戸智絵
鼻毛まで枯れてゐるとは壁鏡
一芝居搏つてやろうか枯月夜

石鏡
石鏡
石鏡

●冬ざれ 冬ざるる

ひざら貝冬ざるる身を張り詰めて
冬ざれの天道虫は能く歩く

鳩信

●枯草

錆鏝アロエ枯草部落の端

石鏡

●枯蔓

がむしやらの姿とどめて枯蔓は

さざ

枯蔓の零し損ねし実の二三

ばら

枯蔓の乱脈透きて日の差せり

ばら

枯蔓のずるずる引けて土埃

鳩信

枯蔓のやみくもをまのあたりかな

鳩信

枯蔓の嘗ての一途なべて見ゆ

鳩信

ターザンが目をつけさうな枯蔓も

鳩信

枯蔓に巻かれ混迷深める木

燕音

枯蔓の横暴極まりなき立木

燕音

枯蔓の末路を晒す川つぶち

燕音

枯蔓の幹に食い込む馬鹿力

燕音

ざうざうと山の枯蔓滝なせり

宿好

枯蒿の系図を横に拡げけり

素抱

●枯葎

素浪人風に立ち枯れ棒葎

石鏡

●枯尾花 芒枯る

駈け巡る夢のほとりに枯尾花

燕音

捌けたる人のごとくに芒枯れ

随笑

●枯萱

枯萱に磧のただっぴろき空

寒暑

●枯芦 枯芦原 芦枯る

たまさかに日当るは贅枯芦原

燕音

枯芦の日に眩くを俳言と

燕音

枯芦に対す先師に対すごと

燕音

枯芦の水路は鮒の通りみち

燕音

枯芦の葉屑浮く水動きをり

燕音

枯芦の明るさあふみに来た甲斐あり

燕音

横十間川に日が射し芦枯らす

暮津

●枯蓮

鳴がやがや云うて蓮葉枯らすなり

随笑

● 枯柏 かれかしは

枯柏青天井の何処か鳴る
 悴める掌のかたちして枯柏
 枯柏風打ち勝って飛ばしけり
 枯柏つひに強情通しけり
 びんぴんに空張りにけり枯柏

ねず

もも

ばら

ばら

宿好

● 冬木の桜 枯桜

枯桜突つかへ棒が利いてをり

さざ

● 枯櫟 冬櫟

根方よりずいと見上げぬ冬櫟
 生真面目な木と誰もいふ冬櫟
 銅鐸のごとき手ざはり冬櫟
 宿木を寄せぬ櫟でありにけり
 立姿どこをおしても冬櫟
 寛容と厳格同居冬櫟
 力みなき冬の櫟と見てゐてる
 戻れば肅然として冬けやき
 櫟今すつぽんぽんに気負ひなし

ねず

さざ

さざ

さざ

ばら

宿好

随笑

素抱

石鏡

● 枯銀杏

入り組めるいてふの枯枝枯枝に日
 大往生遂げむばかりの枯公孫樹
 青天に米点打ちて公孫樹枯る
 枝ぶりのどうしてかうなる枯いてふ
 いてふの木枯れて素性といふが見ゆ

もも

さざ

さざ

さざ

鳩信

● 枯櫟

枯櫟日和小枝の山繭に

さざ

● 枯芭蕉

建長興国禅寺破格の枯芭蕉
 破れ着の大燈国師めく芭蕉
 枯れ三昧一人愉しみ居る芭蕉
 全うの一語に尽きぬ枯芭蕉

燕音

燕音

燕音

燕音

● 女貞の実 ねずみもち

掃き了へて夕凍みねずみもちの実に
 ねずみもちくすみ初めたる実に夕日
 この黝きをねずみの糞とはよう云ふた

ねず

さざ

随笑

● 冬林檎

大将が蜜をうんぬん冬林檎
 哲学の一つも持てと冬林檎

石鏡

石鏡

● 枇杷の花

枇杷咲く

新薬の効き目追ひ追ひ枇杷の花

さざ

枇杷の花海に陰謀あるごとし

さざ

吟行のわれら老いたり枇杷の花

さざ

昼からの余りある日や枇杷の花

ばら

枇杷の花われらかうしてまた会へて

ばら

枇杷の花そこはかとなく癒ゆる傷

鳩信

本郷の学生寮の枇杷咲けり

鳩信

養生のその後は如何に枇杷の花

燕音

野暮ったき枇杷の咲き出す頃もよき

宿好

この家には犬が居る筈枇杷の花

随笑

定かなり得難き人と枇杷の花

寒暑

有難味薄るゝ旗日枇杷の咲く

石鏡

度忘れは人ごとでなし枇杷の花

石鏡

●冬萌 冬芽 冬木の芽

餅腹にもくれむの芽を見に出づる

ねず

辛うじて木五倍子と判る程の芽が

さざ

枝先にかけて冬芽の間詰り

ばら

山歩き煤け木五倍子の芽に出会ふ

宿好

なあるほどこれが冬芽の付き方か

宿好

冬木の芽篤くと見て其処離れけり

宿好

もくれんの蠢立つ冬芽こんなにも

素抱

陽気まだどつちつかずの冬木の芽

石鏡

●寅彦忌

拔書きの反古をかかえて寅彦忌

寒暑

●雑炊 おじや

職引いて雑炊好きな母のそば

随笑

昼は雑炊夜はシチューに風邪寄せず

随笑

おじやして一息つける雨の昼

素抱

利尻メカブおじやうましょ当店は

素抱

●葱

祖父の忌の雨たつぷりと葱畠

ねず

月光のあまねく葱に性根入る

もも

野菜涅槃葱の高足侍りけり

燕音

歳末商戦泥つき長葱もってゆけ

宿好

下仁田葱煮ゆる前から崩れさう

石鏡

葱の管後生大事に何封じ

石鏡

暇人の覗いて不思議葱の管

石鏡

●冬菜

冬菜沿ひずんずん下りて一乗寺

宿好

●白菜

白菜をどかと仏へ飛鳥人

ねず

白菜干す御天道様に尻向けて

随笑

●カリフラワー　ブロッコリー

ブロッコリー茄でて数へ日籠らふか

ねず

カリフラワー剪られ空なる空を抱き

ねず

●人参　胡蘿蔔

人参の葉っぱのやうなやつはアネモネ

ばら

人参も余さず食ふぞ新患者

鳩信

松前漬先づ人参の歯当りよ

随笑

さういつた訳で胡蘿蔔喰はぬ訳

随笑

人参は三月のいろ煮て和えて

素抱

人参を撰らねば生活習慣病

素抱

吾がかぶり振る人参を妻買へり

素抱

●セロリ

義父は慶應ボーイにて初期アイスホッケー選手なれば
ハイカラで明治生まれでセロリ好き

暮津

●蜜柑

六郎の絵の中の子もみかん剥く

ねず

みかんの皮二つ重ねて暇乞ふ

ねず

二つ目の蜜柑の臍のずれてをり

もも

師走妻剥きかけみかん置いて起つ

宿好

デザートのみかんに灯影殺到す

宿好

炊事了へ一息つけり蜜柑のまへ

随笑

蜜柑置きよいしよと妻の割り込める

随笑

冷凍みかん齧り旅路の汽車ぽつぽ

寒暑

めでたかり蜜柑に種子のあることも

素抱

晩生なる蜜柑に当り外れなし

素抱

蜜柑まだ酸きものと手を控えをり

素抱

朝日影海より根府川蜜柑かな

石鏡

なんだこれ皮のぶかぶか蜜柑なる

石鏡

飴・蜜柑など物色し船待つ間

石鏡

長谷柑生さんよりみかん贈られて
紀州より蜜柑文左の心つけ

石鏡

留守居して残り福めくみかん剥く

暮津

●ぼんかん　デコポン

デコポンに瀬戸の夕日の大きこと

寒暑

先づ以てデコポンのこのデコボコ感

素抱

●燕　かぶらな

聖護院かぶらな漬の送りどき

ばら

水切りてキューピーの頭の赤燕

ばら

禅画展 かぶらな
 むまさうな 蕪 に似て円相圖
 蕪の禅画禅味の風吹かす
 朝市の味見くさぐさ赤蕪 かぶら

●納豆

納豆菌掲げて健康食品売る
 熊蟬が朝から納豆粘り出す

納豆のやっかいな糸朝ぐもり

●巻織汁 けんちんじる けんちん

あつあつのけんちん汁に風邪抜かん
 けんちん汁伝はる寺の総枯木

●ちり鍋 鱈ちり

鱈ちりの箸を落としてもう酔ふや
 鱈ちりが冷めて話のちぐはぐに

●塩汁鍋 しよつるなべ しよつる

上つぱり脱いでしよつる招ばれけり
 これやこの男鹿のしよつる賞味せむ
 しよつる鍋煮えて飛び交ふ秋田弁

●すき焼 牛鍋 鋤焼

浅草の師走に遊び牛鍋屋
 鋤焼がご馳走世代玉子割る
 鋤焼を漁り尽くして鍋残る

牛鍋を待つ間マフラ―横に置き

牛鍋を堪能しましたモウと立ち

牛鍋屋ぎうとベルトを締めて出づ

鋤焼をつつくに淋し頭数

鋤焼の煮えてぐつぐつしか言はぬ

鋤焼の鉄鍋大方漁り了へ

●桜鍋

生前の話となりて桜鍋

●鍋焼

鍋焼の鳴門の渦も煮え立ちぬ

●おでん おでん酒

おでん酒当を得ているその見方
 高飛車に決め付けらるるおでん酒
 おでん種臼の大根をたばさみぬ
 選り惑ふ箸にぶつかるおでん種
 言外にくみとれるものおでん酒

●焼鳥

焼鳥やカワ・ネギ・ハツと声とんで

随笑

随笑

素抱

素抱

素抱

暮津

暮津

鳩信

暮津

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

もも

もも

もも

もも

燕音

随笑

随笑

随笑

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

随笑

随笑

ばら

ばら

ばら

ばら

ばら

宿好

宿好

石鏡

ばら

- 焼鳥の串まで焦げて酔迅し
素抱
- きなくさき戦が間近焼鳥シシカバウ
素抱
- パチンコの勝組のゐる焼鳥屋
石鏡
- 横丁に屯し立喰ひ焼鳥屋
石鏡
- 焼鳥の串を数へて扱てなんぼ
石鏡
- 焼鳥の釣銭脂ぎる掌に
石鏡
- 焼鳥屋提灯一つ椅子七つ
石鏡
- 焼箸
寒暑
- 焼蕎麦屋まだまだ遠しやきもきす
石鏡
- 部屋に一人焼蕎麦の香と漂へる
石鏡
- 一区切りつけんか焼蕎麦など食してを
石鏡
- 湯豆腐
鳩信
- 火がとほって来たと湯豆腐動きけり
随笑
- 湯豆腐に微塵の脂泛きにけり
随笑
- 湯豆腐のしかじか是を叙したとて
石鏡
- 蕎麦湯
さざ
- 蕎麦湯のみたうたう降り出しきやがったか
さざ
- 葛湯
さざ
- 葛湯とく呪文唱ふるこちして
さざ
- 葛湯溶き年金ぐらし長丁場
随笑
- ホットドリンクス ホットレモン
石鏡
- 注射あと何處かだるくてホットレモン
石鏡
- ポンジュースなどに温もり冬籠
石鏡
- *ポンジュースは夏みかん汁入りの砂糖湯
石鏡
- 湯気上げて祖母の世の味ポンジュース
石鏡
- 熱爛 爛熱し 爛酒
もも
- 熱爛を一気に呷り口火切る
もも
- 熱爛こんな夜はに限る限ると注ぎ合ふも
もも
- 熱爛党麦酒党相半ばして
さざ
- 二本目の熱爛持ちちてさあさあと
さざ
- 熱爛の余勢をかつて人物評
さざ
- 熱爛に林火一辺倒の人
さざ
- 従つて云ひたきは何爛熱し
さざ
- 熱爛に酔うて全く何をいふ
さざ
- 熱爛をすすむるときは汝が声音
ばら
- 爛熱し日和見主義をとつちめむ
ばら
- 熱爛にてやんでえばかやろめが
ばら
- すこたんのへったくれのと爛熱し
ばら
- 其の段になると熱爛ほすばかり
ばら
- 爛酒にさようさようと応ず人
鳩信

爛熱し当節流行らぬこと云ふな
 熱爛もここまでといふ自覚あり
 怖れ入る君の一言爛熱し

爛熱し泣かされましたよあんたには
 熱爛や出逢へるひとを大切に

熱爛やこの徳利と幾星霜

爛熱し弁明する気さらさら無し

●玉子酒

志ん生の呂律恐ろし玉子酒

●神楽 神遊び 庭燎

稲穂波そぞろ打ち合ふ神楽の里

囃子方庭燎にわびに浮かび上がりけり

神楽笛火の粉が先に舞ひにけり

神真似て神の遊びを巫女の舞

神楽歌和すに和琴わじんの蛙かまこゑ

楽人は埴輪のごとし神遊び

神々の遊びを三日月見そなはず

神遊び笛はしゃかりき中天へ

笛颯颯和琴涼涼神楽歌

笛走り和琴は転び神遊び

●夜神楽

夜神楽や些細なことを大仰に

●鯨 勇魚

大南風勇魚いさなの息をつくやうに

何笑うて波間に消へし鯨の目

シーボルト挿し絵に遺す鯨曳

おくんちのカラクリ鯨潮を吹く

繰り出すは屋台鯨の親爺舟

お使ひはさらし鯨よ爺ちゃん子

ラバウルへ南下勇魚のシャリアピン

絵看板潮噴く鯨が泳いじよる

和田浦に遊んで鯨のステーキを

●熊 熊

白熊の公爵白き息つけり

押し迫る青嶺や罷棲息地

村宮バス揺るたび熊除け鈴鳴れり

夏川ほつし湯田のここらが熊の通り道

熊ことし荒れて在所に出るニュース

麻酔銃もて撃ち山に戻す熊

随笑

随笑

随笑

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

随笑

鳩信

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

随笑

ばら

ばら

燕音

燕音

燕音

宿好

随笑

寒暑

石鏡

ばら

燕音

寒暑

素抱

石鏡

石鏡

●熊祭 伊藤久夫
肺活量大き歌手にて熊祭

寒暑

●狩 猪狩 猟犬

猪撃ちに取り憑かれたる脂顔

ばら

猪撃ちの口鉄砲をつづけをり

ばら

猪撃ちの黙殺に遇ふ峠道

ばら

●猪鍋 ししなべ
猟犬のごとく切り込み初ゴール

暮津

●狐
猪鍋のもう煮えたらうまだ煮えぬ

ばら

●狸
冷え性の本土キツネとおもひけり

さざ

夜長咄狐が人を騙す型 かた

鳩信

檻隣りホンドキツネのお忙氏

鳩信

大名行列白狐にたぶらかされゐる圖

燕音

●狸
行列の狐のあねさんかぶりかな

素抱

●狸
おはじきを二つ並べし狸の目

ばら

十一月ホンドタヌキの空寝入り

寒暑

●獾 あなぐま
朝鮮唐棉たんたん狸のふぐりぞな

素抱

●冬鶯 ふゆう
何とこの日本獾 目まぐるし

さざ

●兔
アナグマに落葉臭さと尿くささ

鳩信

●冬鶯 ふゆう
兎出づ村に小さな浅間さん せんげん

ばら

●冬鶯 ふゆう
秋草を鳥羽絵の兎高掲げ かた

宿好

●冬鶯 ふゆう
動物園園児の点呼うさぎの前 まへ

寒暑

●冬鶯 ふゆう
しかと笹鳴瑞鹿山田覚寺

ねず

島の地理頭に入れをれば笹鳴けり

さざ

●冬鶯 ふゆう
笹鳴いて洗濯物の脇抜けぬ わき

さざ

●冬鶯 ふゆう
笹鳴のそつちへ行けば島の端 はな

石鏡

●冬鶯 ふゆう
降る雪に弾み付ききし夕笹子

ねず

●冬鶯 ふゆう
笹子来と云へば目白と正さるる

ねず

●冬鶯 ふゆう
目を皿のやうにして追ふ夕笹子

もも

●冬鶯 ふゆう
冬鶯吸ひ付くやうに梅が枝に

宿好

●冬鶯 ふゆう
ニユアンスを変へて小藪の笹子鳴く

宿好

●冬鶯 ふゆう
笹子来て島の竹藪こそつかす

石鏡

●冬鶯 ふゆう
谷戸尽し鎌倉に聞く笹子かな

暮津

● 鷓鴣 みそさざい みそさざい

みそさざい白に囲まれ白を剝る
裏山より年を届けにみそさざい
凍むこゑに電光石火みそさざい
物音を立てぬ向ひ家みそさざい
みそさざい寝床ばなれも潔く

● 都鳥 百合鷗

百合鷗浜より翔ちて伊勢の方
橋越へて水もしたたる都鳥
その昔膳所で越年都鳥
浮寝とはゆかざる鳥羽のゆりかもめ
ゆりかもめ女顔をすいと寄せてくる
下積みのあくせく知らぬ都鳥

● 冬鷗

冬鷗キツと長谷川一夫の眼
冬鷗素数の如くとびとびに
横腹に知多の朝日よ冬鷗
半田運河昔日
酔を運ぶ舟の往来冬鷗
葉山行
風に乗る手際宜しも冬鷗
風筋を掴み滑空冬鷗

● 千鳥 良寛堂

格好いい川崎洋は冬鷗
腋の下締めて降り立つ冬鷗

● 冬の波 冬浪

石廊崎沖ターナーの冬白浪
冬浪の白起つばかり鯨望荘
冬浪の彼方鷗の千里眼

● 鮫 鱻 さめ

離陸機の鱻のやうなる胴露けし
執刀はノコギリ鮫の某教授
ボンネットヘッドシャークの涼気過ぐ
土佐鶴に鱻の湯晒し春の雨
チヨウ鮫が鰐の顔して冬休

● 海馬 とじ

指圧教室海馬のごときを稽古台

● 河豚 ふぐ

箱河豚に酌みて無月の泊りかな

ねず

ねず

もも

ばら

寒暑

鳩信

鳩信

燕音

燕音

素抱

さざ

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

石鏡

暮津

寒暑

寒暑

鳩信

燕音

燕音

さざ

鳩信

燕音

寒暑

寒暑

素抱

ねず

虎河豚に三段腹はなかりけり
 河豚の吻つき嘘ばつかしといふごとし
 草河豚のどうにかこうにか喰へる奴
 見つめられ居りて箱河豚ぽつとせり

● たらば蟹

たらば蟹ずばと包丁入れにけり

さざ

● ずわい蟹 松葉蟹

こうばく蟹波陸削る夜なりけり

さざ

ずわい蟹両腕組んで豪のもの

ばら

酒やれば風が募りて松葉蟹

鳩信

せいこ蟹蟹井にして唐錦

寒暑

● 鮫鱈 あんかう

あんかう

鮫鱈煮え巧言令色鮮矣仁

ばら

昼行燈鮫鱈向きを変へにけり

ばら

鮫鱈の毀れし貌が競られけり

宿好

鮫鱈の強つくばりの口許よ

随笑

あんかうは癖のなき魚箸伸ばす

寒暑

● 鮎

奨めらる鮎の三味線・潜水板

石鏡

● 鮎 はたはた

これが彼の秋田音頭の男鹿雷子

もも

● 鱈

大衆魚真鱈の顔の冬親し

燕音

● 鰯 ぶり

鰯の口この一年をしめくくる

ばら

炬燵して飛騨鰯談義一頻り

随笑

妻は鰯わたしは平目熱帯夜

暮津

● 金目鯛

金目鯛よく見る為の大きな目

鳩信

金目漁さうさな八丈島辺りまで

燕音

● 鰯 ひいめ

一政の上目使ひの鰯かな

鳩信

夕べは鰯の煮付けに一家満ち足りぬ

燕音

煮凝の半信半疑鰯の目

随笑

● 八目鰻 やつめ

八目鰻捕る川の向かうの頑固爺

随笑

秋霖をついて朝より八目鰻漁

随笑

寒八ツ目吸ひ付くものを選ばざり

随笑

● 潤目鯛 うるめいわし

うるめ

随笑

潤目^{うるめ}鰯干す美しく干す波切^{なぎり}の婆
 眼が生きて佐島の潤目^{うるめ}鰯活魚店
 むかしから肥れぬ質^{たち}よ干潤目^{うるめ}鰯

●海鼠^{なまこ} なまこ

なまこ噛む音こめかみに伝はりて

海鼠なり風邪こじらせて臥せる身は
病床^二句

寝て覚めて脈をとらるゝ病ミなまこ

ふつつかな海鼠物云ふ患者食

人づてに聞けり海鼠の不料簡

一通り聞きて入院梅雨海鼠

術後十日重湯すすりて病ミ海鼠

一病を持ちちて海鼠の類ひなる

風向きがガラリと変り海鼠突

もう一つ呑み込めないでゐる海鼠

海鼠拾ふ相州の浜その昔

あづまえびす
 東夷でよろし海鼠が大好きな

心配はご無用顔の海鼠とも

味はうて間石翁の海鼠の句

海鼠の句大いにうけて羽振りよき

これちようだい まつくろ黒助凍てなまこ

海鼠噛むその眼返事を保留して

孫と瞻てナマコ忍者の黒装束

潮水に海鼠生かして風鳴る日

晩酌に海鼠おだぶつする夕べ

海鼠に髻あらば弁士にうってつけ

海鼠に小便そんな愚行もしてみたく

頭搔く海鼠なんぞも見てみまし

海鼠食ふときは鳩尾暗くして

指さしてこれが海鼠の中の首領^{ドン}

海鼠噛む顔を四角に三角に

海鼠噛む歯がまだありて好々爺

海鼠酔に漬ける殺生いたしけり

硬直の酔のもの海鼠勘弁な

酔海鼠に錆つく顎を使ひけり

これやこの身につまさるゝ海鼠の腸

酔海鼠に顎の運動いちにつきん

このところ海鼠倣うて黙しをり

大海鼠無理難題のごと置かれ

裏返し海鼠の何だこの突起

海鼠の脚あらかた疣に退化して

燕音

石鏡

暮津

もも

さざ

ばら

ばら

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

寒暑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

優海鼠何を付度して寸評

石鏡

何やかや云ひては海鼠に手を出しぬ

暮津

豊饒の海を海鼠の語りぐさ

暮津

●牡蠣 牡蠣

牡蠣食うて夜風にあたるダウンタウン

ばら

塗箸がはたまた牡蠣が滑るのか

宿好

ひろびろと酔牡蠣味はふ舌があり

宿好

旬も旬旬の酔牡蠣に若くはなし

宿好

柚子絞り酔牡蠣ほたほた旬のもの

宿好

お手本と云へれば云へる牡蠣の意地

随笑

吸はる牡蠣舌同類と思ひけり

寒暑

レモン添え外食めきぬ牡蠣フライ

寒暑

牡蠣啜へこれから喉の滑り台

寒暑

橋脚にへばりつく牡蠣歳晩へ

石鏡

●冬の蠅

膝小僧へ海辺育ちの冬の蠅

鳩信

捨て積みの焼酎瓶に冬の蠅

鳩信

冬の蠅小さき翅を折り畳み

燕音

顔洗ふ仕草幾たび冬の蠅

燕音

飽食の日々を共にす冬蠅と

宿好

冬の蠅発着ふとんの飛行場

宿好

青空へ飛び去る冬の蠅の音

宿好

めちやくちやな翅音愉しむ冬の蠅

宿好

おっとり大柄にして冬の蠅

宿好

冬の蠅頭がだんだん澄んで来ぬ

宿好

冬の蠅球の軀をぶん廻し

宿好

飽食は冬の蠅にもヤツと発つ

随笑

冬の蠅見直す素早き翅使ひ

暮津

●枯蠅螂

其の斧に歯こぼれなかり枯蠅螂

宿好

日向好き枯蠅螂の妙好人

随笑

枯蠅螂一太刀手合はせ願います

石鏡

必殺の機を窺ふや枯蠅螂

石鏡

●冬籠 冬籠る

冬籠動かざること鰐のごと

宿好

職引きて冬籠る図は鰐のうたた寝

宿好

買ひ置き焼栗つまみ冬籠

宿好

埃じむ眼鏡磨きて冬籠

宿好

冬籠葉袋を身ほとりに

宿好

暖房の音みしみしと試し焚き

鳩信

手をこすりつゝ云ふ暖房入れやうか

随笑

暖房がどかんと入るにぎっくり腰

寒暑

暖房音せはしく朝が始まりぬ

寒暑

暖房を焚けばあぶれ蚊のこのこと

石鏡

暖房音どすんと耳から温もれる

石鏡

くすくすして漫画に魅入る暖房車

石鏡

あたたかく家族をつつむ暖房音

石鏡

●ストーブ

電気すとうぶせつせと部屋を暖めをり

さざ

山小屋はヴォイラー焚いて昨日まで

素抱

●石炭

大井鐵道
汽車走らす石炭一屯水七屯

石鏡

●煉炭

道後公園
貸し練炭貸し莫産夜桜真つ盛り

寒暑

●炭団

魂抜けし炭団法師と年越せり

もも

●炬燵

置炬燵 行火
炬燵して芋銭の狐隊行圖

もも

炬燵して絵本の蟻の穴倉図

さざ

炬燵火に脛を焙りて「安愚楽鍋」

さざ

なまぬるき炬燵のやうな年なりき

ばら

置炬燵出てがさ市の客相手

鳩信

宿炬燵山の夜長を如何にせん

燕音

山宿の炬燵の酔ひがまはりけり

燕音

濁り酒とろつと炬燵火は赫つと

燕音

炬燵火をいっそう強くまたぎ宿

燕音

炬燵して飛騨談義一頻り

随笑

茶碗蒸し腹に行火を入るること

随笑

炬燵一つ真ん中に置く間取かな

寒暑

●火鉢

長火鉢 火桶
それはまたそれでけっこう長火鉢

鳩信

熊手売手持ちぶさたの股火鉢

燕音

乾燥芋焙り上手よ婆ちゃん子

宿好

ぜいたくなもんや火鉢が懐しき

随笑

火桶より火桶の見ゆる牡丹園

暮津

三箇所に火桶設え牡丹園

暮津

遠近の牡丹に目遣り火桶に手

暮津

●懐炉

紙懐炉

それではともものは試しの紙懐炉

紙懐炉そんな齡では無けれども

地震襲ふその轍忘れ紙懐炉

懐炉などみつともないが取り敢えず

●手焙り

手焙に五指峙すはだてて牡丹見る

●湯たんぽ

もてなしに大き湯婆年の宿

●湯気立て

もうもうと湯気立て蒸籠の朝ばたらき

●風邪 鼻風邪 風邪神 流行風邪はやり

鼻風邪を追出す手だてなかりけり

鼻風邪の鼻にかかりし頼み事

鼻風邪の妻に味見を頼まれぬ

鼻風邪の妻の言つて事細か

鼻風邪の寝付きよければ直るべし

鼻風邪の昼餉を問へる鼻濁音

鼻風邪のやる気なき身に鞭入るる

鼻風邪を温存するにはあらねども

鼻風邪に愚図る頭を整理せむ

鼻風邪を直す呪文のもしあらば

鼻風邪の鼻がむずむず直るらし

鼻風邪を引いてずぼらな仕事ぶり

鼻風邪を紛らすための根仕事こんじし

鼻風邪にだうだう巡りの考えごと

温泉三昧はたして鼻風邪心地かな

風邪神の有無を云はさず擦り寄れる

風邪神に煙草の味を抜かれけり

風邪神のもう四五日と居直りて

風邪神のけふ打晴れて御出立

腰だるしさでは取り憑く風邪の神

風邪に臥す一日梅の光りさま

大仏に見下されみて風邪貰ふ

売れのこる芒みみづく風邪引くな

梅林をざつと見て来ぬ鼻つ風邪

鳥のごと眼つむり風邪の床に臥す

片付けてをると風邪ごゑ返しけり

海鼠なり風邪こじらせて臥せる身は

風邪貰ふ妻は何でも欲しがり屋

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

さざ

ねず

随笑

燕音

燕音

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

随笑

随笑

随笑

寒暑

宿好

宿好

宿好

宿好

暮津

ねず

ねず

ねず

もも

さざ

さざ

さざ

鳩信

流行風邪吾が屋台骨揺らすなり 鳩信
 あつあつのけんちん汁に風邪抜かん 鳩信
 こんなにも朝昼晩の風邪薬 鳩信
 居直れる風邪を追い出す粉薬 鳩信
 山妻に風邪移りたる移したる 鳩信
 襲はれてあいたた筋肉痛の風邪 燕音
 こたびは喉イタイタイルス引当てし 燕音
 こたびは胸ムカムカウイルス引当てし 燕音
 一日を臥して風邪寝の薄まぶた 燕音
 風邪抜けの目鼻外気に心地よし 燕音
 春先の風邪こじらせてああしんど 燕音
 十一月しよっぱなの風邪貰ひけり 燕音
 心臓の薬に加へ風邪薬 燕音
 予防注射したもののさあどうなんだ インフルエンザ 宿好
 風邪引いて床に打ち臥す凶は平目 宿好
 風邪の身の海月さながら廁まで 宿好
 はやり風邪お鉢が廻り来て臥せぬ 宿好
 大舟に乗った気にして風邪の身は 宿好
 風邪ごゑのうだうだ云うて茶を所望 宿好
 心臓の薬の後に風邪薬 宿好
 昼は雑炊夜はシチューに風邪寄せず 随笑
 風邪引いてだうにもならない頭です 随笑
 風邪引かぬことが取り柄と湯治人 寒暑
 風邪薬もつたいなくも剩りけり 素抱
 あれこれと今年の風邪の諸症状 素抱
 医師の云ふ風邪軽んぜず山茶花どき 素抱
 もうそんな季節か風邪のコマーシャル 石鏡
 蜂の巣の容が風邪の熱の眼に 石鏡
 風邪の身の何處かひくひく起ち上がる 暮津
 鼻紙を使ふ妻見てさては風邪 暮津
 風邪抜けずひとりくよくよしてゐては 暮津
 ●咳 咳く ねず
 白道の左右より咳御滅燈 ねず
 咳こだまりヨウメンシダの林にて ささ
 咳き込めば臍腑七転八倒す 鳩信
 ほうほうの体で逃げ出す咳地獄 鳩信
 咳をする奴は不埒といふ目付 鳩信
 てのひらで押さへて咳の震源地 鳩信
 壁いちまい抜け来る咳に力あり 鳩信
 立て込んで検尿 採血 咳患者 鳩信

咳き込んで地球踏みつけ止まぬなり
 燕音
 咳をしてコンコンチキノコンチキノ
 燕音
 外来の患者持ち込む咳いろいろ
 宿好
 ぎっくり腰咳く図は曾呂利新左衛門
 寒暑
 内科B外来咳を持ち込んで
 石鏡
 えらさうに聞こゆる咳が出てしまふ
 暮津
 日本晴れ咳の一つもしたくなり
 暮津
 ●くぐさめ 嚏くぐさめ くつさめ くしゃみ
 ばら
 これきりと思ふくつさめ飛ばしけり
 燕音
 中興の蝶夢法師の嚏堂
 燕音
 黄表紙のうがち欠けたる世とくしゃみ
 燕音
 くしゃみして十一月に入りにつけり
 燕音
 太陽も軌道を外れん大嚏
 宿好
 「へくしょん」の大盤振る舞ひ致しけり
 宿好
 こらへゐる嚏怖しぎっくり腰
 寒暑
 大河内伝次郎くしゃみして冒頭
 寒暑
 慣れっこなつてしまひぬ大嚏
 石鏡
 新聞でくつさめ一つ困ひけり
 暮津
 ●みづばな 水洩みづばな 水つ洩
 燕音
クラス会
 水洩の皆相だな悪漢ばかり
 燕音
 句を敲き敲き歩きぬ水つ洩
 暮津
 大塔宮を目指せる水つ洩
 暮津
 左義長を渚に待てる水つ洩
 暮津
 ●ふとん 布団ふとん 干布団 蒲団
 ねず
 気の遠くなるまで蒲団干されけり
 暮津
 墓地に向き花柄蒲団干せる家
 暮津
 こんもりと妻の蒲団の山かたち
 さざ
 干蒲団日和と妻に謂はれをり
 さざ
 蒲団のずれ直し呉れる妻をうつつ
 ばら
 干蒲団富士の白妙差しにけり
 鳩信
 けふの段取り朝の蒲団の中にあて
 鳩信
 またも来て猫の寝そべる干し布団
 随笑
 日溜りの布団のやうにうちとけて
 随笑
 干蒲団日和や吾の出番あり
 随笑
 日はあらぬ方へ布団の蒼ざめる
 随笑
 干布団広げて夫婦二人分
 随笑
 布団皺直して布団干せる妻
 随笑
 家内うちよりこゑそこらの布団取り込めと
 随笑
 布団取り込むは一ト日を蔵ふごと
 随笑

蒲団ハシーウオーク出て月面歩行のぎっくり腰
 干蒲団取り込めといふ例のこゑ
 あさつての方に日移り干蒲団
 衣食足り団地布団の満艦飾
 マンションのおねしよの布団あつかんべえ

●毛布 電気毛布

電気毛布なんぞと云ひて取合はぬ
 寝支度の電気毛布をぬくめに行く
 もうそろそろなどと話して毛布のこと

毛布など一枚足して寝る夜かな

あらよつと電気毛布に滑り込む

電気毛布先づ強そのあと適温に

古電気毛布温度に斑のあり

電気毛布妻に勤めて受け入れられ

●襦袍どてら

平熱懐古と体温計を振る襦袍

襦袍被てぎっくり腰の言ひなりに

●綿入 綿子

綿入に行方不明の本やあーい

角力好き患者綿子にくるまれて

●ちゃんちゃんこ

ちゃんちゃんこ着て神頼み長かりき

日曜は読書に当ててちゃんちゃんこ

職退きて只の親爺のちゃんちゃんこ

常着にして見苦しからぬちゃんちゃんこ

煙草買ひにちゃんちゃんこではおかしいか

●ねんね

ねんねこに当つて跳ねる鬼の豆

ねんねこに肌着乗つけぬ脱衣籠

●毛衣けしころも 裘かはころも

鎌倉の日向をあるく 裘かはころも

裘裘見て振り返る

毛衣の試着鏡よ鏡よと

裘匂ふ女と相席す

頭から見下ろされゐる裘

裘女だてらに腕組みす

毛衣の品定めする旅車中

裘似合ふ大柄スタイリスト

●毛皮

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

もも

鳩信

燕音

寒暑

素抱

暮津

暮津

暮津

宿好

宿好

寒暑

ばら

ばら

ばら

もも

もも

さざ

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

ばら

鳩信

もも

もも

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

石鏡

毛皮臭き御仁と同車東京まで

暮津

●重ね着 厚着

厚着よりもこと手を出し仏撫づ

もも

コアラ見るコアラ色なる厚着の子

さざ

強く吹く日なりその分厚着せり

ばら

厚着して俳句はこの眼この脚で

鳩信

心電図厚着を脱いで楽にして

随笑

厚着もそもそ腕まくりして注射かな

石鏡

思考力鈍る厚着はせんでおい

暮津

湯屋板間厚着剥がすにてこずれり

暮津

●着ぶくれ

かまきりの巣と云ふを見る着膨れて

もも

着膨れて遅参の弁をこもごもと

もも

着膨れて後部座席を占めにけり

もも

着膨れの過ぎし上着を手にならり

さざ

着膨れてゐてはごたつく句ばかり出来

ばら

着膨れて心臓外科に繋がれぬ

ばら

着膨れて解説雪村鼻頂かな

鳩信

着膨れて山王さんに頼み事

燕音

着膨れて唯唯診察待つばかり

宿好

着膨れてじつと一日家の中

宿好

着膨れ聞くこむら返りの直し方

宿好

着膨れのもたもた脱いで診察室

宿好

着膨るゝ人を見上ぐる鯉の目見まみ

宿好

着膨れて財布まさぐる一患者

宿好

患者皆着膨れ病院狭くする

随笑

着膨れたやうな俳句の道具立

素抱

着膨れて身につくものは唯ものぐさ

石鏡

着膨れ妻よると手貸せば「だいじょうぶ」

石鏡

着膨れて福神漬を零しけり

石鏡

著ぶくれてこの一着に終止せり

石鏡

●セーター

セーター出すそんなきのふが過ぎてけふ

燕音

着古しのセーターはおり古本市

燕音

とつくりセーター人波をゆく酉の市

燕音

セーターの試着好みの木の葉いろ

宿好

一張羅カシミヤセーター来て参拜

随笑

●股引ハカマヒ
股引をもう手放せぬ太郎月

素抱

股引を履いてゆけとよ事事し

素抱

●ジャンパー

乗り合はず電車にぼつぼつ皮ジャンパー

石鏡

●冬服 冬着

冬物を著るといふより身を容るる

鳩信

冬物の出し入れに妻余念なし

燕音

冬服の右ポケットの底の塵

宿好

冬ものの洗濯鼻唄バズデンボー

宿好

中年には中年の冬服のいろ

随笑

散歩途上出合ひし犬も冬着著て

寒暑

壁際につんつるてんの冬着垂れ

暮津

●冬帽 冬帽子

一列車遅れて着きぬ冬帽子

ばら

建前をとらずにずばり冬帽子

燕音

毛糸帽うるさくなりて取り捨つる

燕音

クイと啼き鴟冬帽掠めゆき

石鏡

野毛飲屋街に繰り出す冬帽子

石鏡

●頬被

頬被正月ものの覗突漁みつきりよう

鳩信

●耳袋

宿木にほうと佇む耳袋

鳩信

●襟巻えりまき

マフラー

花冷えのコンドル無垢の襟巻す動物園

随笑

手に取りぬただ何となくこのマフラー

石鏡

首筋にマフラー絡めカーフェリー

石鏡

●マスク

大マスクとつて白子の味見せり

ねず

よく喋る女マスクで蓋をせん

鳩信

マスクして蛙めき来ることのおもしろ

燕音

マスクしておのづからなる女の目

燕音

マスクして疾うに観念してゐる目

燕音

会場にマスクの市松模様かな

素抱

肝心な話はマスクとつてせむ

素抱

マスクして歩行の何處かしゃちこぼる

石鏡

●手袋

手袋の布地薄れし処かな

さざ

手袋をしてゐてうっかり落し物

宿好

手袋の片方拾ふてみたものの

素抱

●足袋

万灯引く衆の白足袋白法被

随笑

●外套 オーバー

首筋のすうすうオーバー羽織り初め
小平町
親方の漁場差配の赤毛套あかけつとう

鳩信

素抱

●懐手

懐手する手の無くて大櫛

ねず

こんなこと似合はざれども懐手

素抱

●日向ぼこ 日向ぼここ

まなうらに駱駝の現るる日向ぼこ

もも

籠りきり日向ぼこのやうな日々

さざ

日向ぼこ鳥の死に処に思ひ馳せ

さざ

日向ぼこ頭の抽出より挿話

燕音

目つむれば宙に浮く吾日向ぼこ

宿好

日向ぼこするにも何處か気の引けて

随笑

日向ぼこ猫に去られてしまひけり

随笑

日向ぼこめく一年がもう仕舞

随笑

日向ぼこ年内といふ柵の内

随笑

日向ぼこするコンドルに成り下がり

寒暑

おでこよりふらふらと起つ日向ぼこ

石鏡

身に芯のごときものあり日向ぼこ

石鏡

日向ぼこ吾を脱け出て吾を瞻る吾

石鏡

昇天をまぬがれみたり日向ぼこ

暮津

日向ぼこ長身瘦軀折り畳み

暮津

日向ぼこよいしよと起てば目がさまよひ

暮津

●紙漉

紙を漉く技も曾ての武蔵紙

ばら

●北風

荒神松買ふにがま口北風晒し

ねず

ユリの木のまばらなる葉を北風鳴らす

さざ

喜多方ラーメンずと啜れば北風ひゅう

随笑

甲板に出づれば北風に面張られ

石鏡

SOUVENIR SHOPスカジャン北風に吊り

石鏡

●べっとう べっとう時化

べっとう時化鳶大胆に急降下

鳩信

改札にべっとう時化の欠航札

石鏡

●空風 空つ風

吹き寄せられてゆく東京の空つ風に

ねず

空つ風どんと吾が家を衝きにけり

さざ

すがれたる蔓の蔓打つ空つ風

ばら

百獣の王寝てばかり空つ風
空風や鎖骨に触るゝ主治医の手
空風にガサツな歩き方通す

●隙間風

隙間風どのみち立て付け直す家

●霜 霜晴 朝霜 霜旦 霜の声

清異 聖アンデレ教会

霜旦のイエスに通す緋毛氈

啖呵切るごとく大空霜晴れて

霜の朝一路軌道の如くあり

燃えさしの一つ一つに霜降りて

霜げたる何の木の実か赤茶けて

恐らくは霜バリバリの朝ならむ

朝日さす霜の空林空山に

共同湯霜にこはばる身をほぐす

せきれいの霜の色して岩畳

人間機関車全力疾走終ゆ霜旦

山茶花をいたぶる霜の手をゆるめず

満目の霜に一步を踏み出せる

草津町 共同湯巡り
霜の日の朝湯うめてもうめてもや

予報士が雲を動かし霜予報

霜旦の大地蹠音返すなり

硬直し国道ゆけば霜の声

消灯の紐の音霜でも踏むやうに

●霜柱

踏んつぶしをるなり甲斐の霜柱

霜柱意志を通して阿らず

●敷松葉

クレッシェンド、デクレッシェンドの散松葉

●雪吊

雪吊の手持ち無沙汰といふべかり

雪吊りて陣屋等伯ぶりの松

●藪巻

藪巻に雪まじり雨比叡より

●冬の雨 冬雨

冬雨といふ物音の今四辺

冬の雨明け方一度降ったきり

●震

夕霰光琳笹を鳴らし過ぐ

たかはしおでんやしものがり
高橋阿伝夜刃 譚 震る夜に

寒暑

寒暑

寒暑

宿好

ねず

さざ

ばら

ばら

ばら

ばら

燕音

燕音

燕音

宿好

宿好

随笑

随笑

石鏡

石鏡

暮津

暮津

ばら

ばら

素抱

さざ

ばら

随笑

燕音

石鏡

石鏡

ねず

さざ

みぞれるといふこゑありて霽れけり
霽にも雪にもならず唯の雨

燕音
宿好

植込みにしやらんしやらんと初みぞれ

暮津

●冬の水

冬の洗面真水を顔に打ちつけて

暮津

●冬の泉 冬泉

雉子の目のやうな水輪を冬泉

ばら

●水涵る 涵川

涵川の涵れ灌木に移りけり

鳩信

●冬景色

近景に巨岩を配す冬景色

鳩信

●火事 小火

鶏頭の小火出す火の見櫓下

燕音

火の用心命用心寒最中

宿好

火の見の下槍鶏頭の小火ありぬ

随笑

てつきりもみづる筈の漆が小火程度

石鏡

火の用心ポスターに「火はおこりんぼ」

石鏡

●冬の夜 寒夜

暴君の腰痛なだめ寝る寒夜

寒暑

●冬銀河

冬銀河何處ぞとあふぐ千鳥足

随笑

●冬の月 冬満月

町内に湯屋が健在冬の月

寒暑

寺寶なき寺こそよけれ冬満月

石鏡

●冬至

気泡湯にもんどり打ちて冬至柚子

暮津

●柚湯 冬至湯 冬至風呂 柚子湯

妙案の浮かべるごとく柚子湯の柚

宿好

かさつける五體にじんわり冬至の湯

宿好

柚子湯して柚子より軽く浮ける身の

宿好

冬至湯に絆創膏も浸りみて

宿好

冬至湯の湯気まうまうを纏ひ出づ

随笑

冬至風呂上面うめたぐらいでは

随笑

下履きをボタンと冬至の湯屋を出づ

随笑

手に足に掛け湯じんじん冬至風呂

石鏡

柚湯の柚鎖骨の辺りに寄り着きて

石鏡

こすりてもおちぬ柚の煤冬至風呂

石鏡

杉田湯の槽かたの柚の数半端でなし

暮津

冬至湯の柚子にこゑかけ上りけり

暮津

冬至湯にざぶと一物沈めけり

●一茶忌

一茶忌の小遣い少なくなりけり

暮津
随笑

一茶忌の福神漬を噛み鳴らし

随笑

●鉄齋忌

手強さと手強さ違ふ鉄齋忌

さざ

●青畝忌

青畝迎へ俳人協会黄泉路支部

さざ

●白隠忌

鳥ごゑの弾ける如し白隠忌

鳩信

●ポインセチア 狸々木

リア王読むポインセチアを足許に

ねず

ギフトカードにポインセチアのカットかな

さざ

並びゐるポインセチアと消火器と

さざ

ニナリツチコーナーのポインセチアかな

ばら

唐突の真紅がよけれ狸々木

鳩信

ポインセチア飾り立てつつ「主は来ませり」

鳩信

おだてには乗ってみるもの狸々木

鳩信

ポインセチア十鉢並べて景気付

鳩信

内祝ポインセチアを買うて来ぬ

燕音

早々とポインセチアの囲み記事

宿好

フルーツパーラーポインセチアに隣る席

宿好

●蝦古葉仙人掌

手のこんだ咲き方をする蟹さぼてん

随笑

シヤコバサボテン咲くと泡立つやうに云ふ

石鏡

●クリスマス 聖樹 聖夜 七面鳥 サンタ イヴ

おもちゃ屋のお猿ブンチャカクリスマス

宿好

紅玉の皮煮崩れずクリスマス

石鏡

クリスマス嘉す発光ダイオード

石鏡

クリスマスセールにMILIOの軍服も

石鏡

クリスマスカード日系三世より

暮津

うる覚えの聖歌ミッシェンスクール出

素抱

駅前木のそこかしこ聖樹の灯

燕音

おもちゃ屋の聖樹ちやかぴか景気付け

宿好

幾たびも使へる聖樹飾り立て

宿好

聖樹の種証せば発光ダイオード

素抱

シーサイド・マリーナ聖樹の辺のデート

素抱

そのうち皆聖樹に伊勢佐木町並木

石鏡

駅前の木の五、六本聖樹とし

石鏡

待ち合はすその眼に聖樹とハチ公と
世は進み飾る聖樹は新素材グラスファイバー

石鏡

助っ人に聖樹歳末商店街

石鏡

毎年のごとよ聖樹の新趣向

石鏡

聖樹置きどぶ板通りの福引所

石鏡

七面鳥ぼろぼろの声発しけり

ねず

鮮紅のサーモン切身聖夜くる

宿好

茶房の窓スプレー描きのサンタかな

石鏡

イヴの電飾庭木をうまく使ひけり

石鏡

サンタも出て歳末商戦巻き返し

石鏡

電飾の仕掛け昼にてあらはな樹

石鏡

イヴ近き街ゆくブルゾンポッケに手

石鏡

●師走 師走空 町師走

長梯子何処へ掛けても師走空

ねず

前輪を後輪追へる街師走

もも

心電図師走の波形出でをらむ

さざ

黄金狂時代抜け出し師走妻

さざ

マカダミアナッツ師走の船便にて

ばら

目前の師走手帳に走り書き

ばら

師走妻うしろをよぎり前よぎり

ばら

梅鶯の南部坂聴き早や師走

鳩信

じたばたのじたの師走のちんどん屋

鳩信

僕キツネ私タヌキの店師走

燕音

浅草の師走に遊び牛鍋屋

燕音

雷門脇の日向の師走猫

燕音

師走妻剥きかけみかん置いて起つ

宿好

師走てふ物入り月が目の前に

随笑

自転車のベルに追い立てられ師走

随笑

師走妻算盤はじく眼をしたり

随笑

鶺鴒もところこ師走歩きして

石鏡

郵便貯金記帳の音もはや師走

石鏡

師走妻少しは休めここに坐せ

石鏡

千両にいい値がついて街師走

石鏡

●極月

極月の蛇屋の壇の蛇覗く

さざ

掌を組んで目つむる車中極月へ

鳩信

極月のちよろちよろ動くおもちゃかな

燕音

極月の火に煽られて中華鍋

燕音

極月の趣常の日差しさえ

随笑

海ほたる
極月の東京湾に船ごちやごちや

極月の針跳なはり ALMA TANGIERA

*ALMA TANGIERA II タンゴを踊る人の心

極月の魚佐次に魚漁りをり

● 賀状書く

試し刷り龍の賀状をおしゃやかにす

あと五枚だうにかかうにか賀状書

● 古曆

瘦せ瘦せて閉じ金現るる古曆がね

古曆太田とあるは通院日

● ボーナス 賞与

賞与の日そら豆が出て湯も沸いて

ボーナスでよろしがさうは云ふものの

ボーナスのもう出ぬ冬を迎えけり

● 年用意

錆止めをあかあか塗りて年用意

愛車さる家のポルシェびしょびしょにして年用意

年用意年々妻は手を抜けり

● 枝打 枝下ろす

青空より枝下ろされてユリ並木

● ぼろ市

ボロ市や衣の厚きトンカツ屋

ボロ市や枝に引っかけ箆を売る

ボロ市の湯呑み茶碗を爪弾き

ベトナムの竹の鳥籠ボロ市に

ボロ市のビルマヒスイと言ふけれど

ボロ市の包みと包みぶつかれる

ボロ市のやかん頭の骨董屋

ボロ市に選ぶ和服の裾つまみ

ボロ市の戻り足腰くったくた

● 年の市 がさ市

がさ市の山と荷積まれ立て掛けられ

年の市海山の幸積み上げて

がさ市の風素つとんで来たりけり

置炬燵出てがさ市の客相手

ガサ市のけふを強気に吹く風よ

● 羽子板市

傾城も手玉に取られ羽子板市羽子板市

売り顔も商ひの内羽子板市

一生もの羽子板なりと売り口上

寒暑

石鏡

石鏡

宿好

石鏡

石鏡

石鏡

ねず

ばら

宿好

随笑

石鏡

石鏡

寒暑

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

さざ

さざ

ばら

鳩信

随笑

鳩信

鳩信

鳩信

志ん朝の買札付きぬ羽子板市

鳩信

横顔の誰ぞに空似羽子板市

鳩信

羽子板市東都ツアーに組み込まれ

鳩信

ちよつくら前ごめんなすって羽子板市

鳩信

二代目も笑顔で対す羽子板市

鳩信

灯が点いて寝ずの商ひ羽子板市

鳩信

一回りして元の店羽子板市

鳩信

角店の助六よかり羽子板市

鳩信

羽子板の値踏み群がる頭越し

鳩信

ねずみ小僧見得切る羽子板それがよし

鳩信

新仲見世仲見世抜けて羽子板市

燕音

●飾売

飾売だいたい値をいいかげん

さざ

人集まる集まるところに飾売

石鏡

飾り買ふ高齢同士言交はし

石鏡

●門松立つ 松飾る

時節柄小ぶりな松を飾りけり

宿好

松立てゝひとり眩くこれでよし

随笑

●注連飾る

日の在る内購ひおかむ注連飾

さざ

注連飾り手っ取り早く済ませけり

燕音

●煤払 煤籠 煤の日 煤逃げ 煤湯

煤払ひどうにもならぬ本そのまま

さざ

本の塵本に舞ひ降る煤払

さざ

ほかならぬ妻の頼みの煤払ひ

鳩信

新刊書二三手にして煤籠

宿好

煤掃了ゆ不_レ服と云へば本の位置

随笑

煤の日の片づけ本の拾ひ読み

随笑

出番なき古事類苑の煤払ひ

随笑

これは観たことある映画煤籠

随笑

煤の日の妻の届かぬところを拭く

随笑

ビーフシチュー煮詰めておいて煤払

随笑

煤逃げも小遣錢でゆける処

随笑

晦日つごもりの風出て空の煤払ひ

寒暑

煤の湯に新しき創古き創

石鏡

煤の湯に冬もすててこサと脱げり

石鏡

煤の日をふぐり突き上ぐ気泡湯に

暮津

●冬休

チヨウ鮫が鰐の顔して冬休

寒暑

鉛筆削りごりごりと冬休

暮津

●歳暮

お歳暮に庄助さんの國の酒

随笑

●御用納 仕事仕舞

屋上に御用納めの日の鴉

さざ

東京に出でゆく御用納の日

ばら

人ごとの御用納の日となれり
職引いて

随笑

畳屋の畳のしごき納めかな

石鏡

カーフェリー渡り納めの水脈太し

石鏡

頓挫して御用納の日のクレーン

暮津

●納の水天宮

海軍の街に納の水天宮

石鏡

●年忘 忘年会

ぞろぞろと二階へ通され年忘

もも

忘年の駅乗り過ていたらくごす為て体

さざ

年忘れ一本杉の唄が出て

ばら

同人会忘年会と金嵩む

鳩信

へべれけのお手を拝借年忘れ

鳩信

さそひには口を濁して年忘れ

鳩信

酒量落つ話さらりと年忘

燕音

新橋の奥の細道年忘れ

宿好

それぞれの星に名のあり年忘れ

宿好

忘年会妻にはありて吾になし

随笑

御勝手にお唄ひなされ年忘

随笑

岡晴夫オカツバレたうたう出たか年忘

石鏡

亡き人の十八番を唄ふ年忘
下田稔兄

石鏡

熱唱に六十余州年忘れ

暮津

●餅

餅腹にもくれむの芽を見に出づる

ねず

餅腹に昼過ぎの空展けたる

さざ

餅焙り一病息災冥利かな

ばら

餅腹に相模の海のにほふかな

ばら

黄粉餅喰ふたる顔の撫で掃除

随笑

餅腹を暫し伸ばして貉の湯

素抱

年祝ぎの餅召せ井戸神厨神

石鏡

餅に飽きバリリとやりぬクラッカー

暮津

●年の暮 歳末 年の瀬 年詰る 歳晩

歳末商戦泥つき長葱もつてゆけ

宿好

一体に年寄りじみる歳末吟

石鏡

サンタも出て歳末商戦巻き返し
 石鏡
 紙角力とんとん年の詰るかな
 ねず
 天井の海老のいい色年詰る
 宿好
 職引きし年も詰りてやれ一年
 宿好
 目の粗き脱衣籠年詰りたり
 随笑
 柿の蒂つくづく年も詰まりけり
 石鏡
 修理費てふ伏兵に遭ふ年の暮
 宿好
 臨時出費あれこれ出でくる年の暮
 宿好
 年の瀬に打ち上げられてゐるごとし
 さざ
 年の瀬の煤ばむ顔を剃られをり
 宿好
 年の瀬は露天湯なんぞ願はくば
 随笑
 年の瀬の散髪待つ間の漫画本
 随笑
 年の瀬の裏番組も鍋料理
 随笑
テロ元年
 年の瀬の何と云つても紐育
 随笑
下田稔さん
 年の瀬の黄泉にも句会あるならむ
 随笑
 流されてゆかむそのまゝ年の瀬へ
 石鏡
 年の瀬の渡しにゐたりそぞろ神
 石鏡
懐旧
 年の瀬の柱に凭れ虎造節
 石鏡
 膠釜あたたかく年送るかな
 ねず
 隣席に日の射し込める年の旅
 ねず
 第九歌ふ誰も明眸瞳きて
 宿好
 出す出さぬ一悶着あり暮の金
かね
 宿好
 氷川丸年の湊に繋がれて
 石鏡
 緞帳が下りて来さうな暮れの空
 石鏡
自販機の原理は
 つり銭出すオートマトンといふ学問
 石鏡
 散髪屋覗き一声「こりや駄目だ」
 石鏡
 橋脚にへばりつく牡蠣歳晩へ
 石鏡
 気のつけば財布も持たず暮の町
 石鏡
 くるぶしを暮れにぶっつけ大しくじり
 石鏡
 努めゐて努め足らざる今年もや
 石鏡
 暮の海一光芒を遺しけり
 暮津
 ●年の内 年内
 もも
 床の間に積み置く本も年の内
 さざ
 本に本寄りかかりをり年の内
 燕音
 年内に片づけるもの抜書きす
 ●数へ日
 ねず
 ブロッコリ茹でて数へ日籠らふか
 ねず
 数へ日の日にまどろめるさるすべり
 ねず
 数へ日のスイッチひねればチャプリン出で
 さざ

数へ日の雑用買つて出ることも 鳩信
 数え日のもつさり顔が応対に 燕音
 数え日の本にも倦めば何とせう 宿好
 目につきし佳句反芻して数え日 宿好
 数え日の眠気もたらず車窓の日 宿好
 数え日の小遣いはたき買へる本 随笑
 数え日の蓬莱島に亀眠り 随笑
 数え日をタイムスリップして邦画 随笑
 数え日の力が入る硝子拭 随笑
 数え日の猫も私も日をよるべ 随笑
 数え日の日の入る部屋で耳掃除 随笑
 数へ日を亀の正字の部首調べ 随笑
 数へ日の朝の日に舞ふ綿ぼこり 寒暑
 潜水艦繋がれ数へ日の入江 素抱
 東京湾数へ日の日を敷き詰めぬ 石鏡
 数へ日の銭湯に四肢伸ばしけり 暮津
 ●行年 ゆくとし 年逝く 年送る 逝く年 暮津
 行年のアチャコ笑うてみせ呉れても ざざ
 行年の湯屋に遊んで高天井 暮津
 臍の緒のごとき句を溜め年逝かす ねず
 やどり木に逝く年の眼を止めをり ねず
 千両の実付きのわるき年逝かす もも
 逝く年のぼそと暮れゆく男鹿の空 もも
 鳥の名を二三覚えし年逝ける さざ
 逝く年を括るに大き鍵括弧 ばら
 銭湯の逝く年映す大鏡 鳩信
 逝く年の背をとんと突き鐘一打 随笑
 ややこしきは皆先送り年逝かす 随笑
物故俳人
 巨人逝く年そこここに大き穴 素抱
 浪曲に魂揺たますられて逝く年か 石鏡
 意地境地そんなもの無く年逝かす 石鏡
 逝く年の片棒担ぎゆくごとし 石鏡
 東奔も西走もなく年逝かす 石鏡
 心しておくと答えて年逝かす 石鏡
 暖房は茫々と逝く年の音ぞ 石鏡
 薄ら日のやうな一ト年振返る さざ
 やれやれと云うてまた年送りけり 随笑
 俳句莫迦通す一年亦過ぎて 随笑
 この年を締めくくる顔吾もしたり 随笑
 この年を評すに釦の掛け違ひ 石鏡

年乗り切る術の一つに宝籤

唯年を送る無策でありしかな

●大年おほとし

大年のむらさきだちし夕櫛

大年の日を載せ豊屈託なし

松ぼくり大年の日を懐かしみ

大年の空見渡して引つ込みぬ

大年の空窺へば鳶の居る

大年の雨のこのまゝ上がらぬか

●小晦日こつごもり

こりこりと何を剥きぬる小晦日

鉢物に土を足しやる小晦日

踏台によるけつつ立つ小晦日こつごもり

用足しつつ用思ひつく小晦日

圧力鍋奮闘続く小晦日

小晦日買ひ足すものはメモにして

●大晦日おほみそか

木々にあり大つごもりの三時の日

じたばたのばたの大つごもりなるよ

銭湯が未だあり大つごもり月夜

がちやちゃんと大つごもりのレジの音

締切日大つごもりと別にある

その内が来年となり大つごもり

いま暮れて今年が終る枯木星

大つごもり飛行機音のこもる空

屑籠の影が伸び来ぬ大三十日

大三十日昼過ぎたうたう降って来ぬ

大晦日まだ起きてゐて隣の灯

●年惜しむ

物価高の一年杉箸割り損ず

●掃納 年の塵

夫婦して磨く玻璃戸の年の塵

●晦日蕎麦みそかそば

年越蕎麦鯁臭さが顔にくる

年越蕎麦鯁の小骨もてあます母・妻・吾

年越蕎麦終の数なるこの三人みたり

●年越

木瓜の枝のこんがらかって年越せり

一病と年の関越す膝栗毛

石鏡

ねず

ねず

ばら

宿好

暮津

暮津

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

宿好

暮津

ねず

鳩信

燕音

燕音

随笑

随笑

随笑

石鏡

石鏡

暮津

暮津

燕音

随笑

随笑

暮津

暮津

暮津

暮津

もも

もも

もも

もも

年を越す鉢の金魚に被せ物

さざ

ぎくしゃくとしたまま年を越しにけり

随笑

し残したこと年越してやればよい

随笑

●年取

赤城山一つ年取る面構え

寒暑

●年守る

その時はその時と年送り来ぬ

宿好

●年の火

浄闇に年の火爆ぜぬたて続け

随笑

年の火にかざすパパの手こどもの手

寒暑

背焙れば叩くが如し年の火は

暮津

年の火の櫓の芯から爆ぜにけり

暮津

●年の湯

河内山宗俊もどきが年の湯に

随笑

年の湯にしづしづと臍沈めけり

宿好

●年の夜

年の夜を更かす蜜柑の皮積み上げ

暮津

●年の宿

もてなしに大き湯婆年の宿

ねず

●年の旅

男鹿年越吟行

男鹿線に乗りてことこと年の旅

もも

●除夜

簡単に了はらぬ年よ除夜も雪

暮津

鳴り物入り日蓮さんの寺の除夜

暮津

●年越詣 除夜詣

除夜詣飴玉なんぞ振る舞はれ

寒暑

勢ふもの身ぬちに満ちて除夜詣

寒暑

除夜詣雨にうるほふ地を踏みしめ

暮津

参道の歴然とあり除夜篝

暮津

除夜篝火の粉の竜を放ちけり

暮津

鈴しゃんと太鼓はどんと除夜詣

暮津

●除夜の鐘

黄泉にても鐘百八ツ聴こえをらむ

石鏡

年の鐘撞く音色にも人間味

暮津

年の外に追ひ遣らるごと除夜の鐘

暮津

除夜の鐘浅く撞きたる若夫婦

暮津

除夜の鐘撞いていささか誇らしげ

暮津

鳥籠を日向にサトウハチロー忌
 ゆりの木の花たふたと海風に
 ねず
 呆けし実を三つ四つ残しやぶめうが
 もも
 ユスリ蚊と正体知れてはしやぐもの
 さぎ
 ユスリ蚊のかいぐり遊びはじまりぬ
 さぎ
 蕨手の上よつきり南洋リュウビンタイ
 さぎ
 何か実のやうな花付けポポーの木
 さぎ
果実温室
 結実中カカオ色なるカカオの実
 さぎ
 すがれても姥百合背筋びんしゃんと
 ぱら
 へコアユのきんぴらごぼうめくが揺れ
 ぱら
 大海馬しるしばかりの背鰭振り
 ぱら
 毒針を何処に仕込めるミノカサゴ
 ぱら
 マンボウのプロポーションに見とれをり
 ぱら
 大海馬眼をしょぼつかせゐたりけり
 ぱら
 カゴカキダイカゴカキダイに追いつきぬ
 ぱら
 サギフエの乙姫さまへご注進
 ぱら
 カーニバルサンバにのりてミノカサゴ
 ぱら
植物園
 カンガルーポーの木の花飛交うて
 ぱら
 ベニヒモの木とやぼおつとして来たり
 ぱら
 覗くさへミミカキグサのこそばゆし
 ぱら
下田 石廊崎行
 奥石廊アロエ畑の中に村
 鳩信
浅草寺厄除け
 病床に妻もたらしぬ厄除護符
 鳩信
葛西臨海水族館
 車輪梅海匂ふとき匂はぬとき
 鳩信
 ヒブダイの佳人とりわけ歯が見事
 燕音
 竜宮の森を散策大海馬
 燕音
 ふなばたを這ひて房ぼうしゅうぼうら州法螺貝の脚
 燕音
 衣食足り何の平成俳句哉
 燕音
香月泰男 涅槃
 シベリアが叩き込む黒埋葬図
 燕音
 黒き顔黒き手眠るツンドラに
 燕音
 ツンドラの軍隊毛布を抜け霊魂
 燕音
 函を負ふ黒きフォルムは運ぶ人
 燕音
レイモンド・ベイン美術館
 牛蒡サラダに軽井沢風コッペパン
 燕音
 饅頭に押す紅しかと国慶節
 燕音
 じゃんじゃらじゃん双十節の獅子現れぬ
 燕音
 中華獅子おどけ瞬きしたりけり
 燕音
 青龍の胴空を切る双十節
 燕音

達谷窟えみしに睨み利かず寺 宿好
 毘沙門天蝦夷えみしに蝶々ミヤコ逝く 宿好
 蝶々に浪花をんなの粹見たり 宿好
 お薬師東寺の広庭借りて弘法市 宿好
 弘法さんの縁日みたらし団子焼く 宿好
 ユスリ蚊に伴奏添えてやらまほし 宿好
 鉄の肺二十世紀を駈け抜けり 随笑
 あかがねの亀とおもへば首動く 随笑
 ピーマンのやうにむくれて距離置く妻 随笑
 青森檜葉半島の背をなしにけり 随笑
 恐山黄泉の下見にあらねども 随笑
 椰子の間百葉箱のやうな家 随笑
 露天湯に靈芝れいしのごとき老いの尻 随笑
 宿木を見つけしこゑの高弾み 随笑
 聴診器こんどは背中初検診 随笑
 護謨の木にぎっくり腰の愚痴零す 寒暑
 湿布して氷河期迎ふぎっくり腰 寒暑
 腰痛に利く温泉があらば天竺まで 寒暑
 腰痛に竜の落し子めく歩行 寒暑
 腰痛の一撃脳天真つ白に 寒暑
 花摘みの鉄曇れり花洪に 寒暑
 山下清入ってゐさうな道後の湯 寒暑
 木村家の庭に雨乾ぬ車輪梅 寒暑
 朝の舟揺りつ浦人銀葉草搔く 寒暑
 宿の膳ちまきこんがり焼きの黒ハチメ 寒暑
*ハチメはあこう 赤魚
 腸妻によき献立牛蒡一点張り 寒暑
 赤レンガ驛より阿房列車発ち 寒暑
 ここ迄が咄のさはり幽霊譚 寒暑
 「かもしか」の運転席のいと高し 寒暑
 鯛生簀由良のきんちやく入江かな 寒暑
 豚汁の豚とんを浚へる煮立汁 素抱
 春節や人波の上の朝陽門 素抱
 春節や銅鑼の巨濤に呑まる路地 素抱
 春節の飯店気前よき盛り付け 素抱
 春節の関羽煙たげ支那線香 素抱
 春節の円卓ぐるりぐるりかな 素抱
 豚饅頭ぶたまんを山積み春節セールなり 素抱
 魚団子スープの湯気に春節来 素抱
 驚きのテップウエビの衝撃波 素抱
 大海馬背びれひらひら昇天す 素抱
 リーフィードラゴン遊歩の迷彩服 素抱

カガミ貝縄文人も化粧ひけむ
 素抱
 昼食に煮付礼文の黒がしら
 素抱
*黒がしらは鱈のこと
 釣り上げしねずっぽ三匹缶からに
 素抱
 ピーマンに日は差しながら雨の降る
 素抱
 ピーマンを多めに妻の手製ピザ
 素抱
 七節蟲の単なる棒があるき出す
 素抱
 混浴の慈母観音に目の遣り場
 素抱
 朝市にミズの瘤買ふ旅の者
 素抱
 醤油瓶昔磨けりブラシの花
 素抱
 くさぐさの碑の中スッポン感謝之塔
 素抱
 旅先の飛弾に酌めるや薦豆腐
 素抱
 さうですか食べられますか野かんぞう
 石鏡
 揭示して句会の予告湯治棟
 石鏡
人体の不思議展 東京国際フォーラム
 タブー視の垣の払はれ人體展
 石鏡
 北鎌倉始めての路敷めうが
 石鏡
二〇〇四年十一月一日発行
 新札の樋口一葉長居せよ
 石鏡
 マイペース崩さずにゆく皮ブーツ
 石鏡
 靴音も路も単調皮ブーツ
 石鏡
 皮ブーツ一直線に路は伸び
 石鏡
 皮ブーツ肩に手をかけ試し履き
 石鏡
 花アロエ漁師臭さの脱けきらず
 石鏡
 燈台の足下からすのゑんどう咲く
 暮津
 パンパスの旗指物を雨急襲
 暮津
 ポーチュラカ何處かとぼけしその響き
 暮津
 ちゃんちゃんと火焰樹の花咲き継げり
 暮津
 網走の市にて初見オオカミウオ
 暮津
 句に触れて何を申すか昼行燈
 暮津

青松毬	青葡萄	青花	青葉	青葉木菟	青嶺	青饅	青梅雨	青蔦	青大将	青田風	青田	青簾	青芒	蒿雀	青芝	青山椒	青鷺	石蓴	青栗	青胡桃	梧桐	青桐	青きを踏む	青木の実	青柿	青梅	葵	青嵐	アイリス	愛の羽根	あいの風	鮎並	愛鳥週間	アイステイ	アイスクリーム	青麦
296	167	275	145	144	168	52	117	149	148	158	158	154	134	290	149	167	151	26	309	212	142	142	55	24	212	125	115	143	112	280	120	52	96	179	180	85
秋燕	秋薔雨	秋津	あきつ	秋立つ	秋蘭け	秋高し	秋空	秋澄む	秋簾	秋湿り	秋桜	秋雨	秋寒	秋寂び	秋曇り	秋草	秋来る	秋風	秋翳り	秋扇	秋うらら	秋袷	秋暑し	秋茜	秋	秋隣	秋近し	アカンサス	赤裸	赤のまんま	赤のまま	赤蜻蛉	赤椿	赤い羽根	青林檎	青麦
268	283	263	263	226	315	281	281	282	266	246	273	283	303	315	246	248	226	282	246	266	281	266	237	237	225	223	223	202	242	242	237	53	280	212	85	
秋夕焼	秋めく	秋祭	秋深し	秋日和	秋日	秋旱	秋彼岸	秋晴	秋場所	秋の雷	秋の夜	秋の水	秋の蛇	秋の日	秋の燈	秋の昼	秋の浜	秋の初風	秋の蜂	秋の初め	秋の蠅	秋の野	秋の虹	秋の蝶	秋の空	秋の蟬	秋の声	秋の暮	秋の麒麟草	秋の川	秋の風	秋の蚊	秋の海	秋の雨	秋に入る	秋づく
246	237	298	315	281	280	237	266	281	234	238	246	279	268	280	248	246	270	237	285	227	265	282	246	265	281	236	283	283	241	287	282	265	270	283	226	237
芦原	芦枯る	芦刈	葦	葎	芦	馬酔木の花	明日葉	海豹	薊の花	朝の虫	朝露	浅漬	朝霜	朝寒	朝霧	朝顔の実	朝顔の種	薺	朝顔	麻	浅蜷掘	浅蜷搔く	浅蜷	朝焼	朝寝	朝蟬	浅沙の花	朝桜	朝曇	朝顔蒔く	揚花火	揚羽蝶	明易し	通草	通草の花	暁蝸
307	344	308	307	307	307	90	91	49	93	253	252	328	365	303	261	297	240	240	220	79	79	79	192	88	194	132	71	187	91	210	146	112	295	91	236	

鮎 133	あやめ 112	水馬 130	雨名月 260	雨虎 133	あめふらし 133	網戸 154	天の川 228	あまにう 219	海女 207	アマリス 128	甘野老の花 148	甘茶仏 83	甘茶 83	雨乞 194	あぶれ蚊 265	油虫 138	油照 189	油蟬 194	虻 89	油菜 85	アネモネ 82	穴まどひ 268	穴子 109	あなぐま 351	あとずさり 139	敦盛草 105	暑し 151	暑さ 151	厚着 362	熱爛 349	暖か 48	遊び舟 203	蛙青む 45	汗ばむ 174	汗 174	アスパラガス 54	鱒刺 143	鱒 133	紫陽花 114
毬栗 309	いかづち 159	藺 134	伊予柑 54	いぬふぐり 41	糸桜 47	凍滝 18	互つ 17	凍つ 17	一八 112	一の午 32	一月 3	虎杖 58	いたちはぜ 64	磯遊び 78	伊勢海老 8	烏賊 110	いかのぼり 88	〔い〕	行灯海月 205	杏子 125	杏の花 63	安居 111	あんかう 353	鮫鱈 353	行火 357	泡盛 182	鮑 110	泡立草 241	阿波踊 231	アロハシャツ 153	蟻地獄 139	蟻穴を出づ 43	霰 18	荒布 207	新走 285	荒梅雨 117	あらせいとう 82	洗臉 183	鮎鷹 143
芋煮 302	芋煮会 302	芋 260	いぼむしり 256	イヴ 367	猪 320	牛膝 312	稲実る 285	稲刈 312	稲 285	稲つるみ 238	犬枇杷 145	犬蓼 242	稲穂 285	稲光 238	稲田 312	稲妻 238	稲雀 286	稲子 286	蝗 286	いとど 255	竈馬 255	糸蜻蛉 135	一遍忌 248	一茶忌 367	一葉忌 334	银杏黄葉 319	银杏散る 331	银杏落葉 331	一の酉 323	無花果 294	莓 148	一位の実 311	鼬 328	磯菊 301	十六夜 261	藺座布団 154	勇魚 350	生身魂 228	息白し 341
うまづらはぎ 109	苜蓿 57	卵の花腐し 109	卵の花 108	雲丹 81	海胆 81	卵浪 96	鰻 120	独活 53	鸞替 14	薄氷 33	雨水 31	牛の角突き 42	牛角力 42	牛蛙 92	牛合せ 42	海髪 81	鶯餅 61	鶯 39	浮葉 131	萍 131	鶉飼 133	魚氷に上る 31	植田 127	植木市 54	〔う〕	いんげん 276	隠元豆 276	岩魚 169	岩燕 144	岩煙草 219	鰯雲 271	鰯 270	岩牡蠣 206	岩鏡 219	色無き風 282	色鳥 287	色変へぬ松 296	藪 305	芋の露 260

黴	蟹	要の花	門松	蝌蚪	松魚	鯉	蝸牛	片栗の花	堅香子	かたかご	数の子	霞立つ	霞草	霞	河鹿	悴む	柏餅	飾焚く	飾海老	飾	風花	陽炎	柿若葉	柿の花	杜若	垣繕ふ	書初	鏡餅	鏡開	帰る雁	かひもちかき	海棠	開帳	買初	蚕	海芋	カーネーション	おんべ	
120	121	126	8	67	133	133	123	35	35	35	8	55	81	55	124	18	98	15	8		18	55	103	113	112	55	10	9	13	47	130	90	47	10	92	105	100	15	
寒燈	寒釣	寒椿	寒潮	寒卵	萱草の花	寒雀	寒蜆	寒桜	寒鯉	寒紅梅	寒菊	寒鴉	寒泳	寒明	寒明く	寒	寒晴	寒の入	皮剥	川蜻蛉	蛙の目借時	蛙合戦	翡翠	蛙	軽覺の子	歌留多	くわりんの花	雁帰る	空梅雨	枸橘の花	烏の子	蚊帳吊草	髭草	亀の子	亀鳴く	紙風船	紙雛	蟻螂の子	南瓜の花
23	14	28	23	13	116	24	24	27	14	27	25	24	13	31	31	6	13	6	109	135	92	135	92	130	9	91	47	120	66	126	116	86	121	67	88	42	135	117	
火事	搗布	鰻	樗の実	飾売	重ね着	籠枕	懸巢	神楽	夏曉	牡蛎	柿紅葉	柿の蒂	柿落葉	柿	夏期講習会	夏期講座	鏡絵	案山子	返り花	帰り花	貝割菜	懐炉	蚊いぶし	かいつぶり	鳩	海水浴	海水着	海紅豆	蚊	寒戻る	寒牡丹	寒木瓜	寒暮	灌仏	寒緋桜	観梅	寒梅	寒海苔	寒の水
366	207	272	309	370	362	175	290	350	157	355	319	293	332	293	208	227	287	328	328	276	358	141	340	340	204	205	221	139	33	24	28	23	83	27	38	27	26	13	
天牛	髪切虫	紙懷炉	髪置	神在月	髪洗ふ	神遊び	かまどうま	かまつか	かまきり	南瓜	かぼす	かぶらな	蕪	甲虫	兜虫	蚊柱	鹿子百合	蚊の姥	鉦叩	かなぶん	かなかな	門松立つ	門火焚く	門火	門涼み	蚊蜻蛉	河童忌	郭公	勝相撲	酢漿草	片蔭道	片蔭	数へ日	風邪神	風邪	風の盆	風死す	風薫る	風入れ
166	166	358	327	322	177	350	255	269	256	241	313	348	348	167	167	139	156	141	256	166	236	370	229	176	141	208	144	234	147	192	192	373	358	358	244	193	143	333	

冴返る 33	冴え 18	歳末 372	歳晚 372	サイネリア 82	サイダー 181	歳旦 4	サーファー 204	[x]	ごんずい 34	鮓 121	御用納 371	ごめ 143	胡麻 277	ごまめ 8	胡麻の花 212	午睡 190	御正忌 334	極暑 193	極月 368	極寒 26	ごきぶり 138	ごきかぶり 138	五月 95	御開帳 47	94	ゴールデンウィーク	ごうな 80	豪雪 18	昆布 207	昆布刈る 207	蒟蒻掘る 328	更衣 97	衣更ふ 97	濃竜胆 273	小雪 18	駒草 219	駒返る草 85	辛夷 63	小判草 147
鮫 352	寒し 340	寒さ 340	五月雨 120	仙人掌 216	サフラン 298	鯖 110	実朝忌 41	早苗 127	早苗月 111	里芋 260	五月富士 155	五月晴 151	皐月 111	サッカー 23	挿木 51	山茶花 324	栄螺 80	笹鳴 351	笹子 351	ささげ 242	鮭 271	さくらんぼ 124	桜紅葉 284	桜見 75	桜の実 124	桜鍋 348	桜草 81	桜薬降る 74	桜狩 75	桜うぐひ 78	桜 71	桜守 71	桜餅 62	桜時 71	左義長 15	榊の花 114	佐保姫 55	轉る 84	轉 84
塩辛蜻蛉 263	潮浴 204	椎若葉 103	椎の実 309	椎の花 113	[し]	残雪 33	残暑 237	残寒 33	ざりがに 109	朱欒 313	座禅草 92	石榴 292	石榴の花 113	秋刀魚 270	三伏 193	サンタ 367	三社祭 100	三尺寝 190	三色堇 82	山椒の芽 52	山椒の実 296	山椒魚 121	三春 29	山茱萸の花 39	珊瑚樹の実 313	サングラス 165	三鬼忌 62	三ケ日 12	三月 41	三寒 18	三寒四温 18	爽やか 279	サルビア 149	百日紅 221	さるをがせ 220	細魚 34	冴ゆ 18	冴ゆる 18	さやか 279
渋柿 293	死人花 268	紫薇 221	シネラリア 82	しづり雪 18	七面鳥 367	七変化 114	七福神詣 7	七五三 326	七月 155	枝垂桜 47	齒朶 9	下萌 41	滴り 171	紫蘇の実 276	紫蘇 125	蜆蝶 265	蜆 45	猪鍋 351	猪狩 351	獅子頭 185	鹿踊 231	仕事仕舞 371	茂 145	しぐれ 333	時雨 333	しぐるる 333	シクラメン 82	鳴 290	鳴焼 215	敷松葉 365	子規忌 261	四月馬鹿 61	四月尽 94	鹿 320	紫苑 272	四温 18	潮吹 80	汐干狩 78	汐干 78

七夕	炭団	蓼の花	竹瓮	立佞武多	立葵	田芹	蛸	凧	猛り鴟	竹の春	筍飯	筍	竹の秋	竹煮草	竹散る	竹落葉	竹植う	田草月	焚火	滝壺	滝	田亀	たかなな	田蛙	宝船	高山宵祭	たかべ	鷹の爪	43	鷹化して鳩と為る	田植	台風	大暑	待春	泰山木の花	〔た〕	雑煮	雑炊	雑木紅葉
228	357	242	328	227	115	56	110	88	288	272	104	104	85	219	150	150	109	111	356	170	170	130	104	92	12	297	134	276		127	245	193	28	107	8	346	319		
大師講	大根引	大根	大根の花	大根畑	大寒	蒲公英	探梅	丹頂	誕生仏	短日	端午	俵麦	太郎月	垂穂	鱈	たらば蟹	たらの芽	鱈ちり	田村草	魂迎	魂祭	玉の汗	玉葱	玉椿	魂棚	玉すだれ	玉子酒	足袋	旅始	煙草の花	種物	種蒔	種袋	種瓢	種茄子	種採	種漬花	狸	田螺
334	327	327	86	327	26	57	27	340	83	335	98	147	3	285	353	353	52	348	243	230	230	174	126	53	230	243	350	364	11	242	50	91	50	314	314	314	86	351	45
月見草	使ひ初	梅雨入	追儼	〔こ〕	ちんぐるま	散る紅葉	散る花	ちり鍋	朝鮮朝顔	蝶	丁字	チューリップ	仲秋	中元	ちやんちやんこ	茶の花	茶摘	ちやつきらこ	茅の輪	千鳥	千歳飴	ちちる虫	父の日	縮布	遅日	蒿苳	竹酔日	竹秋	力草	〔ち〕	煖房	暖冬	達磨市	ダリヤ	獺祭忌	ダチュラ	山車	濁酒	橙
156	10	117	29		220	329	76	348	222	87	63	81	243	228	361	324	92	16	155	352	326	255	128	173	60	86	109	85	274	357	328	7	216	261	222	100	285	313	
露	梅雨晴	梅雨湿り	梅雨明	梅雨	梅雨の入り	冷たし	摘草	壺焼	燕の巢	燕来る	燕帰る	乙鳥	燕	茅花	つばくろ	つばくら	椿餅	椿咲く	椿	躑躅	霾	蔦若葉	蔦紅葉	蔦の芽	黄楊の花	造り滝	衝羽根	つくつくし	つくつくし	土筆摘む	土筆	接木	月を待つ	月夜茸	月夜	月見	月祭る	月の出	月
252	117	117	157	117	341	56	80	84	49	268	49	49	58	49	49	62	53	53	93	47	92	319	50	66	175	311	236	236	56	54	259	284	257	259	259	257	257	257	

でんでんむし	電気毛布	出目金	出水	ででむし	出初	デコポン	出開帳	デージー	天道虫	天高し	天草取	照葉	テラス	手毬	手袋	手火花	鉄線	鉄線花	鉄斎忌	手焙り		木菟	石露日和	石露の花	鶴	蔓荔枝	つるもどき	釣瓶落し	吊し柿	蔓梅擬	釣舟草	吊忍	釣忍	吊鐘人参	氷柱	露の世	露寒	露けし	露草		
123	361	185	120	123	13	347	47	35	165	281	207	319	165	9	363	210	106	106	367	358		337	326	326	340	295	313	283	294	313	273	185	185	273	22	252	304	252	275		
年送る	年改まる	年明くる	登山靴	登山	土佐みづき	心太	常節	時計草	木賊刈る	木賊	朱鷺	常磐木落葉	時の日	時の記念日	蛭蛸	通し鴨	十日戎	蠟螂	燈籠	蠟螂生る	冬麗	玉蜀黍	遠火花	冬天	冬帝	踏青	とうすみ	冬至	冬至湯	冬至風呂	灯心蜻蛉	闘牛	とうがん	冬瓜汁	冬瓜	唐辛子	燈火親し	籐椅子			
373	4	4	168	168	58	182	79	112	291	291	288	104	124	124	148	130	14	256	231	135	328	277	210	337	321	55	135	366	366	366	135	42	295	295	276	248	155				
鳥帰る	鳥威	寅彦忌	虎尾草	豊の秋	蕃茄	トマト	海桐の実	海桐の花	飛魚	海馬	橡の実	橡の花	屠蘇	年忘	年用意	年逝く	年迎ふ	年守る	年の夜	年の湯	年の宿	年の豆	年の火	年の塵	年の旅	年の瀬	年の暮	年の内	年の市	年取	歳徳神	年詰る	年玉	年立つ	年越詣	年越	年越蕎麦	年神	年惜しむ		
47	287	346	150	287	215	215	291	157	110	352	310	108	8	371	369	373	4	375	375	375	375	29	375	374	375	372	372	372	369	375	7	372	7	4	375		374	374			
薺の花	薺	なすび	茄子汁	茄子漬	茄子	茄子苗	梨	名越の祓	泣初	ながむし	長火鉢	流し雛	長き夜	永き日	長芋	苗札	苗木売	苗木植う	苗木市		どんど	団栗	土用浪	土用鰻	土用	どぶろく	襦袍	泥鱸鍋	泥鱸	独立祭	どくだみ	蜻蛉	とんど	とろろ汁	鳥渡る	鳥の巢	酉の市	鳥雲に	鳥頭		
57	14	215	215	216	215	100	277	155	9	148	357	42	247	59	260	51	54	54	54		15	310	208	209	208	361	183	183	211	116	263	15	306	287	84	323	47	273			

夏の灯	158	夏の日	158	夏の果	224	夏の露	157	夏の月	158	夏の海	203	夏の雨	194	夏の朝	157	夏野	146	夏の蝶	146	夏の空	132	夏の川	132	夏に入る	95	夏手袋	154	夏椿	221	132	夏空	203	夏潮	154	夏座敷	163	夏座敷	187	夏衣	153	夏草	146	夏霧	162	夏着	153	夏木	144	夏来る	95	夏枯	194	夏掛	154	夏川	132	夏風邪	210	夏牡蠣	206	夏終る	224	夏落葉	222	夏惜しむ	224	夏暁	157	夏94	夏近し	92	納豆	348	刀豆	260				
蛭螭	123	波乗り	204	生節	120	生ビール	181	なまはげ	16	鯨	121	なまこ	354	海鼠	354	鍋焼	348	菜の花	85	七草	14	七種	14	ななかまど	312	七竈の実	312	夏行く	224	夏ゆふべ	177	夏山	168	夏瘦	209	夏休み	207	夏の实	311	棗	311	夏めく	99	夏見舞	208	夏蜜柑	99	夏祭	100	夏負け	209	夏帽	153	夏帽子	153	夏布団	154	夏富士	155	夏服	153	夏深し	223	夏ばて	209	夏はじめ	96	夏始まる	95	夏萩	221	夏の夜	178	夏の夕	177	夏の山	168	夏の虫	158
蒜	54	忍冬の花	106	胡蘿蔔	347	人参	347	庭燎	350	接骨木の花	66	郁李の花	65	二輪草	81	葎の花	213	入梅	117	入道雲	158	入学試験	45	蝮の道	45	蝮	45	日射病	210	日光黄菅	222	日蓮忌	302	虹	162	西日	192	錦鯉	175	錦木	319	濁り酒	285	煮凝	23	逃水	90	二月尽	32	二月	31	苦瓜	295	二科展	267	にほ鳥	340	にほ	340	にいにい蟬	194	南畝の忌	111	南風	142	南天の実	313	菜を間引く	276	鳴神	159	菜飯	52	なめくじり	123				
納税期	44	野遊	55	ねんねこ	361	年内	372	年頭	4	年酒	8	年賀状	7	年賀	7	根雪	18	眠草	157	合飲の花	157	ねぶた	227	佞武多	227	ねぶた	227	寝冷	209	涅槃吹	46	涅槃西風	46	涅槃図	46	涅槃会	46	涅槃	46	根釣人	271	根釣	271	熱帯夜	191	熱帯魚	154	根芹	56	ねずみもちの実	345	女貞の実	345	女貞の花	149	鼠の尾	274	振花	105	猫柳	35	猫の恋	34	猫じゃらし	275	葱	346	葱坊主	91	願の糸	228	ネーブル	54	ぬかご	307				

袴着	墓参	墓洗ふ	南風	蠅虎	蠅取紙	蠅帳	蠅叩	蠅	蠅の子	蠅生る	ハイビスカス	敗戦日	羽蟻	〔は〕	野分晴	野分あと	野分	海苔拾ふ	海苔	乗初	野山の錦	野焼く	幟	野葡萄	野蒜摘む	野蒜	野火	ノハナシヨウブ	野の錦	のどけし	長閑	後の月	残る雪	残る蟬	残る鴨	鋸草	納涼	のうぜん	凌霄花
326	231	231	142	140	141	141	135	135	89	89	222	233	138		246	246	246	36	36	6	320	34	98	295	54	34	112	320	61	61	303	33	236	47	115	176	217	217	
鱒	はたはた	はたはた	羽太	巴旦杏	壺紅葉	壺の実	鯊釣	鯊	はずみ玉	蓮掘	蓮の実	蓮の実飛ぶ	蓮根掘る	蓮	蓮の浮葉	走り梅雨	梯子乗	端居	稲架襖	稲架	葉桜	羽子板市	箱眼鏡	はこべ	葉鶏頭	白露	はくれん	白木蓮	白牡丹	白鳥	白鶺鴒	薄暑光	薄暑	白菜	白雨	白隠忌	萩刈る	萩	掃納
353	286	159	134	125	319	313	271	271	26	328	308	308	328	214	131	117	13	176	312	97	370	204	57	269	252	64	64	96	340	290	99	99	347	160	367	308	251	374	
初天神	初刷	初燕	初筑波	初蝶	初旅	初雀	初芝居	初座敷	初桜	初秋刀魚	初山河	初氷	初東風	初声	初景色	初句会	初吟行	初鴉	初鏡	初閻魔	初戎	初売	初午	初伊勢	初嵐	初秋	初商	初明り	はったい	蜂の巣	八月尽	八月十五日	八月	蜂	跣足	跣	肌寒	裸木	裸
27	8	49	6	48	11	5	11	11	61	270	6	340	6	5	6	11	11	5	11	15	14	10	32	11	238	227	10	6	183	90	243	226	90	202	202	303	342	202	
花通草	花明り	花	花林檎	花桃	花ミモザ	花三椏	花木瓜	花貝母	花種蒔く	紫荊	花辛夷	花木五倍子	葉月	初漁	初夢	初湯殿	初雪	初湯	初社	初鴟	初詣	初昔	初三十日	初弁天	初冬	初富士	初飛脚	初比叡	初日	初晴	初春	初寝覚	初荷	初波	初夏	初泣	初寅	初燈	初電車
91	68	68	63	62	58	63	65	59	50	65	63	58	243	10	12	10	340	10	7	288	7	5	15	322	6	11	6	6	3	12	10	6	96	9	15	11	6		

花守	花筵	花御堂	花水木	花見客	花見	花吹雪	花火	花人	花冷	花野	花の山	花の昼	花の鳥	花の塵	花の風	花合歓	花菜	花時	花とべら	花堤	花疲	花散る	花大根	花煙草	花橘	花蘇鉄	花芒	花菖蒲	花棕櫚	花椎	花氷	花曇	花胡桃	花屑	花桐	花南瓜	鼻風邪	花卯木	花筏
71	75	83	108	75	75	76	210	76	71	248	68	68	68	76	68	157	85	71	157	68	76	76	86	242	113	216	249	112	106	113	187	78	108	76	107	117	358	108	76
春子	春來る	春霞	春風	春落葉	春惜む	春一	春一番	春荒	春嵐	春浅し	春	春待つ	春隣	春遠し	春近し	春小袖	春著	春着	針供養	針納	はららご	はらふと	流行風邪	隼人瓜	浜木綿	破魔矢	浜昼顔	はまなすの実	はまなす	浜大根の花	蛤	浜おもと	葉牡丹	母の日	帚木	羽子	羽抜鶏	羽抜鳥	花八つ手
45	31	55	87	76	94	34	34	46	46	32	29	28	28	28	28	9	9	32	32	271	327	358	307	207	7	147	218	218	86	79	25	100	220	9	151	151	325		
春の夜	春の宵	春の雪	春の夕焼	春の山	春の鴟	春の水	春の星	春の服	春の昼	春の日	春の雹	春の蠅	春の波	春の鳥	春の土	春の月	春の埃	春の筍	春の潮	春の駒	春の暮	春の雲	春の草	春の蚊	春の川	春の鴨	春の海	春の雨	春の曙	春灯	春大根	春立つ	春闌く	春シヨール	春驟雨	春椎茸	春雨	春寒	春さき
66	66	43	67	44	84	44	67	44	66	59	43	89	78	84	50	67	47	91	78	84	66	60	84	89	45	47	78	49	66	66	61	31	92	44	49	45	49	33	31
パイナップル	万緑	晩涼	晩蟬	万愚節	晩夏	馬鈴薯植う	バルコニー	薔薇	バナナ	ばった	芭蕉林	芭蕉	芭蕉巻葉	芭蕉の花	芭蕉青葉	爆竹	曝書	馬珂貝	馬鹿貝	梅林	貝母の花	海羸廻し	バードウィーク	ハンモック	斑猫	半ズボン	反魂草	半夏	半夏生	ハンカチ	ハンカチーフ	春行く	春休み	春めく	春深し	春日	春場所	春疾風	春の雷
178	145	171	194	61	223	50	165	108	178	286	243	243	100	220	100	15	208	80	80	36	59	301	96	165	165	153	243	156	156	175	175	93	45	32	92	59	46	46	43

ひっじ	未草	干鱒	鵜	飛雪	氷頭脰	鹿尾菜	避暑	日盛	瓢の花	緋鯉	藁	火恋し	蝸	罌	蟾	弾初	墓	彼岸詣	彼岸花	彼岸団子	彼岸入	彼岸	彼岸	日雀	干潟	日傘	日雷	飛花	避寒	火桶	射子	稗	柊の花	日脚伸ぶ	〔ひ〕	パンジー	巴里祭	パリ祭	パイヤ	パセリ
320	213	52	290	18	270	81	207	188	212	175	85	304	236	350	124	11	124	47	268	47	47	47	290	78	165	159	76	23	357	220	277	325	27	82	173	173	178	126		
日向水木	冷奴	冷やか	ひやつく	冷索麵	ヒヤシンス	冷し酒	冷酒	日焼	百日草	百日紅	緋桃	氷面鏡	姫始め	姫女苑	日短	向日葵	緋牡丹	雲雀	火鉢	日の盛り	雛流す	雛壇	日向ぼっこ	日向ぼこ	雛罌粟	日永人	日永し	日永	雛飾る	雛あられ	雛	雛菊	火取虫	海星	人手	一ツ火	単衣	早星	早	
58	183	279	279	179	82	182	203	218	221	62	22	10	106	335	216	96	48	357	188	42	42	364	364	106	59	59	59	42	42	42	35	206	206	334	153	193	193			
瓢	福達磨	福寿草	福笹	落	落の臺	葺替	鱻	風露草	風鈴	風蘭	風船葛	風船	〔ふ〕	ピーナツ	枇杷の花	枇杷咲く	枇杷	屏風	ビヤガーデン	美術の秋	麦酒	ビール	鶺鴒	広重忌	昼の虫	昼寝覚	昼寝	昼顔	蛭	昼蛙	鯉	ひよ	鴨	鴨花	氷点下	瓢箪	氷河	氷菓	冷ゆる	
276	7	9	14	104	36	55	352	219	184	217	275	88		305	346	346	126	356	267	181	181	290	302	253	190	190	147	130	92	353	288	288	239	22	276	169	180	279		
冬暖	冬浅し	冬曙	冬青空	冬	冬牡丹	冬深し	冬の草	冬燈	冬隣	冬近し	冬薔薇	冬雀	冬潮	冬桜	冬珊瑚	冬草	冬菊	冬青草	文月	吹雪	船虫	船遊び	蒲団	布団	懐手	太藺	筆始	二日	襖	藤の実	藤の花	藤棚	藤	不作	河豚	福は内	ふくらふ	梟	ふくら雀	
328	322	336	337	321	24	18	26	23	315	315	25	24	23	27	24	26	25	26	226	18	206	203	360	360	364	134	10	9	356	296	93	93	93	287	353	29	337	337	24	

冬の靄	冬の鴟	冬の水	冬の日	冬の蠅	冬の虹	冬の波	冬の鳥	冬の月	冬の空	冬の暮	冬の雲	冬の泉	冬の雨	冬の朝	冬に入る	冬浪	冬菜	冬立つ	冬空	冬ざれ	冬ざるる	冬雨	冬籠る	冬籠	冬景色	冬樺	冬雲	冬銀河	冬着	冬木の芽	冬木の桜	冬木	冬来る	冬枯	冬鷗	冬麗	冬鶯	冬泉	冬あたたか
336	337	366	335	355	336	352	337	366	337	336	336	366	365	336	321	352	347	321	337	344	344	365	355	355	366	345	336	363	366	346	345	342	321	343	352	328	351	366	328
碧梧桐忌	〔へ〕	プール	ぶんぶん	文旦	文化の日	ブロッコリー	鰯	ぶらんこ	葡萄	蝸	仏桑花	仏生会	仏手柑	噴水	古簾	古巢	古曆	古草	ふらここ	芙蓉の実	芙蓉	冬林檎	冬夕焼	冬休	冬靄	冬紅葉	冬賜	冬萌	冬芽	冬満月	冬帽子	冬帽	冬服	冬日	冬日和	冬日向	冬日差	冬初め	冬の夜
41		204	166	313	320	347	353	88	278	139	222	83	313	176	154	84	369	85	88	270	238	345	336	371	336	329	337	346	346	366	363	363	335	328	335	335	322	366	
千柿	ほくり	保己一忌	朴の花	鬼灯市	酸漿	鬼灯	頬白	頬被	朴落葉	ほうれん草	菠薐草	豊年	宝鐸草の花	鳳仙花	法師蟬	帚草	報恩講	〔ほ〕	ぺんぺん草	ペチュニア	弁慶草	べら	紅牡丹	紅芙蓉	紅椿	紅支垂	べつとう時化	べつとう	べつたら漬	べつたら市	遍路	蛇の衣	蛇穴に入る	蛇	蛇	放屁虫	糸瓜	糸瓜忌	へくそかづら
294	35	302	107	167	276	276	290	363	331	35	35	287	219	239	236	220	334		57	218	241	109	96	238	53	47	364	364	328	305	61	148	148	148	257	276	261	220	
盆波	ぼろ市	鱈	鯛	小火	稲棒	菩提樹の実	菩提子	牡丹	牡丹雪	暮雪	暮春	墓参	木瓜の実	木瓜の花	ポーナス	防風	忘年会	ぼうたん	防災日	穂絮	海鞘	杜鵑草	時鳥	布袋草	ホットレモン	349	ホットドリンクス	ほつけ	捕虫網	櫓	螢見	螢袋	螢火	螢狩	螢	帆立貝	穂芒	星祭	干布団
229	369	271	271	366	312	311	311	96	18	18	94	231	311	65	369	57	371	244	308	206	274	144	213	349	349	52	202	356	130	150	128	130	128	110	249	228	360		

夜盗虫	ヨット	四日	粧ふ山	夜蟬	夜濯	葭切	夜桜	夜寒	夜霧	余寒	夜神楽	洋梨	養花天	宵待草	宵の年	[よ]	百合鷗	百合	柚味噌	湯豆腐	油点草	ユッカ	ゆだち	湯たんぼ	柚子湯	柚湯	柚子	櫟	山桜桃	ゆすらうめ	湯気立て	行春
138	203	12	282	194	178	135	71	303	261	33	350	277	78	156	5		352	156	314	349	274	216	160	358	366	366	314	9	125	358	93	
竜のひげ	竜の玉	流燈	流星	立冬	立春	立秋	立夏	[り]	蘭	蘭鑄	ラムネ	ラベンダー	喇叭水仙	辣蕪	落花生	落花	[ぶ]	夜の虫	夜の秋	夜顔の実	夜顔	蓬	嫁菜	夜宮	読初	夜店	呼子鳥	四葩	夜なべ	夜長人	夜長し	夜長
147	26	234	238	321	31	226	95		272	185	181	218	58	126	305	76		253	223	270	212	56	56	100	10	178	84	114	248	247	247	247
炉	ロベリア	露台	六月	臘梅	老鶯	[ろ]	煉炭	連翹	レモン	檸檬	レタス	冷房	冷蔵庫	麗日	荔枝	冷酒	冷夏	[れ]	瑠璃	[る]	りんどう	竜胆	林檎	林檎の花	林火忌	緑雨の忌	緑蔭	良夜	漁始	獵犬	涼気	竜淵に潜む
356	106	165	111	27	144		357	64	314	314	86	184	187	61	295	182	157	144			273	273	291	63	235	83	259	10	351	171	267	
をみなへし	をし	[を]	吾亦紅	割干	蕨	笑初	侘助	渡り鳥	綿虫	綿菅	綿子	綿入	早稲	山葵の花	山葵田	山葵漬	山葵	分葱	病葉	若布汁	若布	若緑	若葉曇り	若葉風	若葉雨	若葉	若竹	輪飾	若牛蒡	若駒	若楓	[わ]
250	339		274	327	56	9	28	287	328	219	361	361	270	61	59	59	59	54	223	41	41	93	102	102	102	150	8	215	84	101		

俳句を始めて三十六年になる。俳句は(覇気ある裡が華くと気張って作句して来たが、「こ」らで
一服と振り返ってみたくなった。これ迄の句業をつづめてみれば、十二句集。

この内、4句集が既刊であり、残り8句集が未刊行分である。

収録句は多く、緩選と云はれるかもしれないが、どの一句をとっても、自分史上痛くも痒くも
あるわが分身の一部である。

それを快く読んで頂きたくと編んだ一集である。

入稿はインターネット経由でPDF (Portable Document Format) 形式で行い、費用軽減を計
た。

尚、当集とは別に、十二句集を時系列的に並べ収録した「高澤良一全句集」を同時刊行した。

二〇二二年七月十六日(七十二歳誕生日)

高澤良一

高澤良一（たかざわ・よしかず）

昭和十五年七月十六日横浜市本牧に生まる。

関東学院六浦中学校・高等学校を経て昭和三十九年三月日本大学理工学部数学科卒。

日本電気（株）に入社。国内および東南アジアの官庁関係部門へのコンピュータ導入

・システムサポートを担当。平成十二年七月定年退職。

俳句は昭和五十一年俳句結社「濱」に入会。大野林火先生に師事。昭和五十七年「濱」賞受賞。師林火逝去につき松崎鉄之介先生に師事。昭和五十八年「濱」同人。俳人協会会員。

著書には「ねずみのこまくら」「ももすずめ」「さざなみやつこ」「ぱらりとせ」「鳩信」「燕音」「宿好」「随笑」「寒暑」「素抱」「石鏡」「暮津」がある。

インターネットにて平成九年自分のホームページを開設し俳句作品等を発表し始む。平成十一年インターネット句会を開設、平成十二年「俳句検索データベース」を構築・公開し一般の利用に供する。同様に平成十七年「俳句例句データベース」を構築・公開した。

病歴として心臓病 僧帽弁閉鎖不全を患い平成九年慈恵会医科大学にて「弁形成」手術を実施。以後 平成二十一年葉山ハートセンターにて「弁置換（機械弁）」を実施した。

現住所 〒二三六〇〇一四 横浜市金沢区寺前二―二―二〇